

尊き記憶の
長老パイシイ・スヴィャトゴレッツ
言葉

第IV巻
家庭生活

目次:

序文	4
人生の岐路に立つ若者たち	7
家庭生活も修道生活も、どちらも祝福されています	7
若者が選んだ道に進むことへの不安	8
私たちは、若者たちが自分の天職に従えるよう手助けしなければならない	9
人生の進路を選ぶという決断	10
若者たちの学業と、自ら選んだ道への歩み	12
選んだ道を正しく歩み始めるための最大の前提は、霊的生活である	14
第1部。 強い家族を築くには	16
第1章。 調和のとれた家族について	16
家庭生活の良き始まり	16
性格の違いの中にこそ、神の御心による調和が宿っているのです	17
夫婦間の尊敬	19
夫婦の愛	20
第2章。 忍耐こそが家族を崩壊から守るということ	22
忍耐は、人を神の恵みで満たす	23
忠実な妻	24
崩壊した家庭の子どもたち	26
夫婦生活における「正しい」と「悪い」	27
第2部。 親とその責務について	29
第1章。 子供の誕生について	29
聖ヨアキムと聖アンナ——最も無私の夫婦	29
結婚生活における節制	30
子どもの誕生に関する神の御心についての、人間の論理	31
出産に関する困難	33
夫婦の不妊	35
多子家庭	36
中絶は恐ろしい罪である	38
第2章。 子育てにおける母親の役割について	39
母の愛	39
子供を持たないことに対する正しい考え方	40
母としての忍耐力	42
妊娠と授乳	43
働く母親	44
主婦としての生活と母親の霊的生活	44
第3章。 子育てにおける親の責任について	47

親は子供たちを神に委ねなければならない	47
子供たちの霊的再生	48
親の模範	49
実家では、子供たちは優しさと愛に満ち溢れているべきです	50
親のせいで子供たちがどれほど苦しんでいるか	51
環境が子どもに与える影響	53
兄弟姉妹間の愛	53
企業は子供たちに多大な影響を与えています	54
正しい道から外れてしまった子どもたちへの助け	55
子どもを叱るべき時と褒めるべき時	56
子どもに強制することは、決して良いことではありません	57
分別を欠いた過度な親の愛情	59
遺産の分配	61
第3部。 子供たちとその責任	61
第1章。 子どもたち、その喜びと困難について	62
乳幼児期	62
守護天使は小さな子供たちを見守っている	63
聖なる洗礼	64
孤児たち	66
子どもたちが十分な年齢に達するまでは、彼らに制限を設ける必要がある	67
学習中の子どもたちが直面する困難	68
第2章。 子どもたちの親への敬意と愛情について	69
子どもたちの親や年長者への敬意	69
子どもたちは、自分たちが自分の家庭を築いた後、どのようにして親を愛し続ければよいのでしょうか	71
老いは人を謙虚にする	72
老人介護の報い	73
親の祝福	75
第4部。 霊的生活	76
第1章。 家庭における霊的生活について	76
人は不平を言うほど、自分自身を破壊していく	76
神に私たちの人生を委ねましょう	77
隣人の苦しみに心を痛めることが、家族を支える	78
家庭における美德の涵養	80
家庭での祈り	81
夫婦の霊的生活	82
子供と霊的生活	83
家族や友人との関係	85
祝日の誘惑	86
第2章。 仕事と精神生活	86
労働は祝福である	87
職業選び	88
仕事への愛	89
誰もが、自分に与えられた賜物を霊的に活用すべきである	90
仕事と心の不安	90
労働の聖化	91
職業が人を人たらしめるわけではない	92
第3章。 日常生活における節制について	94
禁欲によって、人は無形の天使たちのようになる	94
子どもの断食	96
好奇心あふれる投稿	97
お腹がすっきりする喜び	99
第5部。 人生における試練について	100
第1章。 「火と水をくぐり抜けて.....」	101
試練の十字架	101

試練は、人が立ち直る助けとなる.....	101
私たちが苦しんでいるとき、キリストが私たちを訪ねてくださるのです.....	102
「主は愛する者を懲らしめられる.....」.....	103
神は、人々が味わっている苦しみを見て心を痛めている.....	104
悲しみの時、神は人々に真の慰めを与えてくださる.....	105
神の御許しによる試練と苦難.....	106
神の愛に対する恩知らず.....	108
私たち自身の小さな試練と、身近な人々が直面する大きな試練.....	109
人々から受ける苦しみ.....	109
第2章。 病気について	110
病気は人々を助ける.....	110
病気に対する天の報い.....	111
苦痛に耐えること.....	113
痛みに対する態度.....	114
他者の苦しみへの共感を示すこと.....	116
患者のケア.....	118
病人の苦しみと神への信頼.....	119
病気の子供たち.....	121
病人が健康になるためには、ある程度の犠牲を払わなければならない.....	122
病人のための祈り.....	123
第3章。 身体の障害は神の祝福であること	125
身体の障害に対する正しい態度.....	125
身体障害に対する天の報い.....	126
知的障害のある子どもたち.....	127
精神疾患.....	128
子どもの障害に対する親の正しい姿勢.....	130
第4章。 霊的法則について	131
霊的法則はどのように作用するのか.....	131
神の尊い子供たち.....	131
霊的な法則と神の愛.....	133
第6部。 死と来世について	135
第1章。 死に対する態度について	135
死すべき記憶.....	135
死にたいと思っても、死ねないものだ.....	137
死の床にある患者たち.....	138
自殺.....	141
第2章。 「他の希望を持たない者たちのように、悲しむな」	142
子供たちの死.....	142
悲しむ者への慰め.....	143
死——ほんの数年の別れ.....	146
第3章。 死後の世界について	146
裁きを受けた死者たち.....	146
故人のための祈りと追悼の礼拝.....	147
故人を偲ぶ最善の方法.....	150
義人たちの神への大胆な祈り.....	150
来るべき最後の審判.....	151
来世.....	152

序文

第4巻は、至福の長老パイシオスの『言葉』の刊行を継続するものです。本書には、家族について、そして現代において家族が直面する危機によって人がさらされる試練について、長老が説いた教えがまとめられています。長老は、家庭生活に問題を抱える人々から最も多くの手紙を受け取っていたと語り、これらの問題の原因は、人々が神から遠ざかり、自己愛に囚われていることにありと強調していました。「昔は」と彼は語った。「生活はより穏やかで、人々は忍耐強かった。しかし今日では、誰を取ってもまるでライターのようなだ。[火花を散らし、]一言も我慢できない。そして、その後に自動的に離婚が待っているのだ。」

ごく幼い頃から教会の偉大な家族の一員として、熱心な信徒として加わった長老は、もはや自分の小さな[肉親の]家族には属していないと感じていました。神の愛を授かった彼は、神の子となり、それゆえにすべての人を自分の兄弟姉妹として感じ、一人ひとりを「イエス・キリストの体の一部」として愛した（フィリピ1:8）。「年配の方を見ると——」と長老は私たちに語った。「私は心の中で、この方は私の父だと言います。年老いた女性を見ると、この方は私の母だと言います。子供に出会くと、自分の小さな甥のように見えます。私はすべての人を愛しています。ある人たちのことを思うと喜びを感じ、他の人たちのことを思うと胸が痛みます。あなたにも、そのような心境は馴染みがあるだろうか？」しかし、長老ご自身も、それぞれの具体的な場面において、あらゆる人にとって息子であり、兄弟であり、父であり、祖父となっていた。この偽りのない愛は、長老と親しくなった人が良い方向へと変わり、神の御言葉を受け入れて、それに従って生きる助けとなった。キリストの体の一員として、長老は家庭生活に困難を抱える人々のために心を痛めながら祈るだけでなく、彼らの願いに応えて、言葉でも助けを与えました。彼は、修道士として自らも苦行の生活を送っていたにもかかわらず、家庭生活における最もデリケートな問題でさえも、人々を助けていたのです。

誘惑という試練の炎にさらされ、1947年から1994年に亡くなるまで様々な形で彼を襲った病の試練に鍛え上げられた長老は、苦しむすべての人々に深い憐れみを寄せ、痛みを抱える人々のために心を痛めながら祈りを捧げた。自身の健康については、自分自身を養い、訪ねてくる人々を助けるのに必要な範囲でしか気かけませんでした。彼は、もし誰かが自身の痛みを目を向けず、他の病人のために祈るならば、それは神の心を動かして、神はそのような祈りを聞き入れてくださると信じていました。しかし、長老は病める人々に、まずは人間として可能な限りの治療のための努力を尽くし、人間の力を超えることは神に委ねるよう助言していた。同時に、彼は人々の信仰を強め、彼らが自分の病を神への希望を持って受け止め、この地上での生涯において私たち全員が「旅人であり、寄留者」であることを忘れず（参照：ペトロの手紙一 2:11）、永遠の命に備えるよう導いた。

本書は、我らが大牧者であるカサンドリアのニコディム大主教閣下の御許しを得て刊行される。本書は序章と6つの部から構成されている。質問の多くは、修道院長や当修道院の姉妹たちから長老に寄せられたものです。長老は、霊的な助けを求める人々を霊的指導者に紹介するよう私たちに祝福を与えてくださいましたが、修道院長や年長の姉妹たちとの会話の中で、人々は悩みを打ち明け、助言を求めることがよくありました。時には、ある深刻な、あるいは複雑な質問に対して私たちが正しく答えたかどうかを確かめるために、私たちは長老に相談し、長老は私たちに、その問題を神の御心にかなう

方法で解決する方法を教えてください。しかし、長老ご自身も、修道院の全体集会やシスターたちとの個人的な会話の中で、私たちの修道院共同生活における何らかの出来事や、私たちが投げかけた質問をきっかけとして、世俗のクリスチャンが直面する困難について語ることがよくありました。それは、私たちが世のために切に祈るようになるためでした。さらに、長老は、修道士たちが持つような恵まれた霊的な環境には恵まれなかったにもかかわらず、聖なる生活を送った父や母たちの実例を挙げていました。このようにして、パイシイ神父は私たちに、より大きな熱意をもって霊的闘いに励むよう促していたのです。長老の回答の中には、その手紙の抜粋が盛り込まれているものもあり、それらは、宛先となった聖職者や敬虔な信徒たちを通じて、私たちに伝えられたものです。

この本は、「人生の岐路に立つ若者たち」という序章で始まります。この章は、人生の進路選びに迷っている若者たちを助けることを目的としています。この章では、私たちの教会が示す二つの道、すなわち家庭生活と修道生活の両方が、祝福されたものであることが特に強調されています。若者たちは、自らの召命、能力、そして愛の心に応じて、いずれかの道を選ばなければなりません。それは、誰かからの「後押し」に左右されることなく、神への信頼をもって行うべきです。若者たちの貞潔で霊的な生活は、修道生活であれ家庭生活であれ、選んだ道で成功するための基本的な前提条件です。

本書の全6章のうち、第1章では、家族を支える基盤、すなわち夫婦間の高潔で寛大な愛と尊敬について述べられている。困難に直面した際の忍耐と祈りが、家族の崩壊を防ぐのである。

第2部では、子どもを正しく育てるための親の義務と責任について論じられており、特に親の模範、すなわち親が子どもに与える「言葉なき教え」の重要性、そして家庭における母親の役割が強調されている。長老はまた、親の優しさや子どもへの愛こそが、子どもたちの自然で健全な成長のための基本的な前提条件であることも強調している。

本書の第3部は子供たちに捧げられています。そこでは、子供たちの喜びや困難、そして親に対する義務について語られています。子供たちが親に対して抱く敬意と愛情は、子供時代だけでなく成人してからも、彼らが神の祝福を受けるための保証となるのです。

第4部では、家庭における霊的生活について、長老によるシンプルで実践的な助言が紹介されています。これらの助言は、子どもや親が、自宅にいても職場にいても、日々、体験を通じて福音を生き抜く助けとなります。長老はまた、人が従事する仕事は、絶え間ない心の不安に苛まれるものであってはならず、むしろその人の霊的な完成に寄与すべきであるとも語っています。

第5部は、人々が人生において直面するさまざまな試練について論じている。長老は、人々が自分に与えられた試練を単に耐えるだけでなく、それに対して神を賛美するとき、神がどれほど[大きな]慰めと力を与えてくださるかを強調している。病気、障害、中傷——これらは、人生の最も深い意味を悟った人にとっては祝福なのです。人は、経験する苦しみを通じて、自らの罪の代償を支払うか、あるいは天の報いを獲得するのです。

最後に、第6部では、死をどのように正しく受け止め、どのように備えるべきかという問いに対する長老の回答がまとめられている。長老は、愛する人を失って悲しむ人々にとっての真の慰めとは何であるかを解き明かし、故人の安息を願って行われる追悼の

儀式、祈り、施しが、故人にとってどれほど助けになるかを強調しています。長老は、未来の最後の審判と永遠の命の姿を、平易かつ比喻を交えて描いています。

本書に収められた長老の教えは、一方で、精進する信徒たちが、深い忠実さをもって自らの「善き戦い」（参照：テモテへの手紙I 6:12）を続ける助けとなるでしょう。他方、それらは、神から遠く離れて苦しんでいる人々の良心を呼び覚まし、教会の一員として自覚を持ち、家族という小さな共同体の中で、霊的な生活をもたらす平安を喜ぶよう、彼らの心に願いを灯すことができるでしょう。同時に、長老は、結婚生活においては、神のすべての戒めを守る必要があることを強調しています。それらの戒めは「重荷ではない」（Iヨハネ5:3）とされている。例えば、夫婦の一方が自らの意志を犠牲にして相手に従う場合、その人は愛からそうしているのだから、抑圧されているとは感じず、むしろ甘美な慰めを味わうのである。

現代社会の「緩んだ法律」に慣れきった現代人にとって、長老パイシオスのいくつかの見解は、過激で実現不可能なものに見えるかもしれない。しかし、福音の光に照らして長老の言葉を眺めれば、読者はそれらが福音の正確かつ妥協のない表現であることを確信するだろう。長老が常に目指しているのは、キリストにおける完全さである。しかし、神の啓示を受けたその牧会活動は、人間の弱さを忍耐強く受け入れ、教父たちの「経済（エコノミア）」¹を用いている。もちろん、その際、罪との妥協に陥ることはない。昔の人々の生きた事例を通じて、長老は現代人が、神こそが生ける神であり、「すべての人の中ですべてを行われる方」（Iコリント12:6）であることを理解できるよう助けてくれる。神は来世において報いの与え手としてだけでなく、現世においても——優しく、愛に満ちた父として——働かれるのである。しかし、人は自らの善意を示し、ささやかな努力を払わなければなりません。少しの労力を費やすことで、私たちは多くの恵みを受け取ることができます。このささやかな労力を払うことは、神が多くの神聖な助けをもってその人生に「介入する権利」を得られるようにするために、人にとって不可欠なのです。

本書の出版に先立ち、原稿をお読みいただき、敬意を込めてご意見を寄せ、本書をより良いものにするお手伝いをしてくださった皆様に感謝申し上げます。

長老の言葉が、特に現代において、神の戒めが忘れ去られたり踏みにじられたりすることによって苦しんでいる家族が、正教会の深みの中で自らの真の使命を見出し、親も子もこの世のうちにすでに楽園のような生活を送れるようになることを、心から祈ります。アーメン。

2002年9月16日

聖大殉教者エウフィミアの記念日

聖使徒・福音記者ヨハネ・神学者修道院の修道院長、フィロフェイア修道女と、キリストにある姉妹たち

子供を産み、その肉体を与える親は、可能な限り、子供たちの霊的な再生を助けるべきである。親が子供のために自分たちだけでは成し得ないことは、後に教師たちに委ねる

¹ 正教会の神学において、「エコノミア」とは、例外的な場合において、聖カノンの厳密な意味から、その実践的な適用において逸脱することを指す。教会は、神の言い表せない寛容と人間愛に倣ってエコノミアを行使しており、その適用目的は、人間の霊的な益と救いにある。（以下、ギリシャ語版の編集者による注釈は出典を明記せずに引用する。）

べきである。それゆえ、私たちの教会は「親と教師たちのために」祈るのである。しかし、肉親の父以外にも、霊的な父たちがいる。霊的な父たちは、人々の霊的な再生に尽力し、子供たちの育成により効果的に貢献している。

人生の岐路に立つ若者たち

家庭生活も修道生活も、どちらも祝福されています

— ゲロンダ、修道生活は家庭生活よりも尊いものなのかと尋ねてくる若者たちには、どう答えるべきでしょうか？

— まず第一に、人間の使命とは何か、そして人生の意義とは何かを彼らに理解させるべきです。次に、私たちの教会が示す二つの道はどちらも祝福されていることを若者たちに説明すべきです。なぜなら、それらを選んだ人々が神に従って生きるならば、どちらの道も樂園へと導くことができるからです。例えば、二人の人が巡礼の旅に出るとしましょう。一人はよく踏まれた大通りを歩き、もう一人は小道を歩きます。しかし、歩く二人とも目的は同じです。神は前者を楽しんでおられ、後者を愛しておられます。問題となるのは、小道を歩く人が心の中で大通りを歩く人を非難したり、その逆のことが起きたりする場合だけです。

さて、修道生活を考えている若者たちには、修道士の使命が非常に偉大であることを知っておいてほしい。修道士の使命とは、天使になることにある。「来世、すなわち天国では、私たちは天使のように生きるでしょう」と、キリストはサドカイ派の人々に語られました。² そのため、非常に信心深い若者たちは修道士となり、この地上での生活においてすでに天使のような生き方を始めているのです。

しかし、修道院に入る者全員が、単に修道士になったというだけで救われると考えるべきではない。一人ひとりが、自ら選んだ人生を聖なるものにしたかどうかについて、神に答えなければならない。どのような人生においても、勤勉さは不可欠である。神は、成功や失敗が予め定められているような人間を創造されることはない。愛の心を持たない者は、どのような道を選んだとしても、自ら成功することはできない。一方、愛の心を持つ人は、どこにしようとも成功する。なぜなら、神の恵みがその人と共にあるからである。一部の家庭人は、非常に徳高く生き、聖化されています。もし一家の主が神を愛し、神聖な導きに惹かれているならば、霊的に大いに成功することができます。さらに、そのような人は子供たちに美德を授け、良き家庭を築き、神から二倍の報いを受けるのです。

したがって、すべての若者は、次のような目標を掲げるべきである。すなわち、愛に満ち、心の不安を抱くことなく、自ら選んだ人生を聖なるものとするために尽力することである。結婚したいと思うのか？ それなら結婚すればよい。ただし、良き一家の親となり、聖なる生活を送るよう熱心に努めるべきである。修道生活を送りたいと思うのか？ 修道院に入ればよい。ただし、立派な修道士になるよう懸命に努力すべきだ。自分の力量を見極め、自分にふさわしい生き方を試してみて、その結論に従って選んだ道を歩むべきである。例えば、ある若い女性が、修道女になるだけの力が自分には足りないと感じたなら、謙虚に神にこう祈るべきです。「神よ、私は弱い人間であり、修道女

² マタイ 22:30を参照。

として生きることはできません。私を助けてくれる人を送ってください〔、私たちが結婚し〕、私が良き家庭を築き、霊的に生きることができるよう。』 そうすれば、神は彼女を見捨てたりはしないでしょう。もし、結婚して良き家庭を築き、福音に従って生きるならば、神は彼女にこれ以上何も求めたりはしないでしょう。

もちろん、神がそれほど多くを求めない若者たちもいます。しかし、彼らは愛の心から多くの偉業を自ら引き受け、修道生活を選ぶことで、神が彼らに期待する以上のものを神に捧げます。そのような人々は、二重の冠を授かるのです。つまり、家庭生活に向いている人が、深い愛からすべてを犠牲にして修道生活への道を歩もうと望むならば、それは神を深く感動させる。しかし、そのような人は、その動機が極めて清らかであることを注意深く見極めるべきである。つまり、傲慢からそうしてはならないのである。もし人がこの条件を守れば、神はその人のあらゆる困難を取り除いてくださる。

若者が選んだ道に進むことへの不安

— ゲロンダ、もし青年や少女が結婚や修道院への入山について不安を抱いているとしたら、その原因は彼らの不信仰にあるのでしょうか？

— 必ずしもそうとは限りません。多くの若者は、選んだ道にどう踏み出し、常に神と共に歩んでいくべきかを考え、そのことで心を悩ませることがよくあります。これは〔精神的な〕健全さの表れです。もし若者が、選んだ道に進むことについて考えもせず、気にも留めないなら、それは何よりもまず、その人が無関心な人間であることを示しており、その結果として、当然ながら成功することもないだろう。しかし、結婚や修道生活に関する心配が過度にならないよう注意しなければならない。なぜなら、悪魔はこの心配を歪め、それを心の不安へと変え、若者たちの心を絶えず動揺させ続けようとするからである。

心の平安を保つためには、若者たちは自分自身を神に委ねるべきです。なぜなら、慈愛に満ちた神は、優しい父として、私たちが人間としてもはや何もできないような状況でも働いてくださるからです。若者たちは、どの道を進むかについて、焦って未熟な決断を下すべきではありません。私は、非常に不安を抱え、自分の問題をすべて一度に解決しようとしてしまう若者たちを知っています。結局、彼らは混乱してしまい、学業を放棄してしまいます。例えば、大学を卒業すべき時期なのに、家庭を築くことや修道院に入ることを過度に気にしてしまうのです。その結果、学業に遅れを取り、さらに混乱を深めてしまいます。すべてを一度に成し遂げることはできず、そのようには問題は解決しません。自分自身を助けるためには、自分の内面をしっかりと整理し、物事を一つひとつ整理整頓する必要があります。まずは学位を取得し、それから仕事を見つける必要があります（若い男性の場合は、さらに兵役も果たさなければなりません）。そして、その後に初めて、成熟した人間として決断を下し、神の助けを借りて、結婚して良き家庭を築くか、あるいは修道生活を選んだのであれば、自分が選んだ修道院に入るのです。

ですから、学業に励みながら同様の不安を抱えている若者たちには、どの道を選ぶべきかという決断がまだ固まっていない以上、学業を続けることをお勧めします。私は、彼らが後々熟考を重ね、心から納得できる決断を下すことを勧めます。もし彼らが善良な心持ちであれば、神の助けを借りて、結婚するか独身でいるか、あるいは修道院に

入るかといった生き方を少しずつ見極めていくうちに、心の平安を感じられるようになるでしょう。

私たちは、若者たちが自分の天職に従えるよう手助けしなければならない

一人ひとりにそれぞれの天職があります。慈愛に満ちた神は、人間を自由な存在として創造されました。神は高潔であり、人間の自由を尊重し、誰もが自分の心にかなう道を自由に歩むことを許しておられます。神は、兵営の規律のように、すべての人を同じ列に並ばせるようなことはされません。ですから、若者たちは、神の自由がもたらす霊的な空間の中で、自分自身の自由を保ち続けてほしいのです。もし彼らが、ある人が選んだ生き方や、ある人が選んだ生き方を模倣しようとするなら、それは彼らにとって何の益にもなりません。人生の道を選ぶにあたり、人はいかなる影響にも左右されてはなりません。

親、精神的な指導者、教育者は、若者に圧力をかけたり、過度に干渉したりすることなく、その若者が自分に合った人生を選び、自らの天職に従うことができるよう手助けすべきです。人生の道を選ぶという決断は、若者自身が行うべきものです。 私たち——それ以外のすべての人々——は、単に自分の意見を述べるにとどめるべきです。私たちに許されているのは、若者たちの魂が[自ら]自分の道を見つけられるよう手助けすることだけです。

人生の進路選びに迷っている若者たちと話をしていると、彼らがどちらの方向に傾いているかがわかることがあります。彼らの選択に影響を与えないよう、そのことは口に出しません。 私が心がけているのはただ一つ、彼らができる限り正しい道と内なる平安を見出せるよう手助けすることだ。彼らが好むものの中から、有害なものはすべて取り除き、善きもの、聖なるものだけを残すよう努めている。そうすることで、この世のうちに神と共に喜びに満ちた人生を送り、永遠の命においてさらに大きな喜びを得られるようにするためである。 心から申し上げますが、私の知る若者たちがどのような人生を選ぼうとも、私はいずれにせよ喜ぶでしょう。彼がキリストと共にあり、教会の中で生きる限り、私は等しくその魂の救いを気にかけるでしょう。そのような人は、私たちの母なる教会の子供であるからこそ、私は彼を兄弟のように感じるのです。

もちろん、私は特に、修道者の道に進む若者たちを心から喜ばしく思います。何しろ、この天使のような生き方を実践する人は、まさに賢明な人だからです。なぜなら、その人は、世の誘惑を餌にされた悪魔の罠にはかからないからです。 しかし、すべての人を同じ物差しで測ることはできません。なぜなら、キリストもまた、すべての人々に重い荷を負わせることを望まなかったため、修道生活が完全さへの道であるにもかかわらず、すべての人に修道に関する戒めを与えなかったからです。 それゆえ、福音書に登場する若者がキリストに「どうすれば救われるか」と尋ねたとき、³ キリストは彼にこう答えられた。「戒めを守りなさい。」⁴ 若者がキリストに、自分は戒めを守っていると告げ、「まだ何が足りないのですか」と尋ねたとき、⁵ —キリストは答えて言われた。「ただ一つ、まだ欠けていることがある⁶：もし完全になりたいのなら、行って、持っている

³ マタイ 19:16、マルコ 10:17、ルカ 18:18 を参照。

⁴ マタイ 19:17。マルコ 10:19 および ルカ 18:20 も参照。

⁵ マタイ 19:20。

⁶ マルコによる福音書 10章21節。

ものをすべて売り払い……そして、私に従って来なさい……」⁷ つまり、キリストはその人が高潔であることを見抜いて、完全さについて語ったが、人々を無理やり[完全さへと]引きずり込もうとはしなかった。キリストは修道生活についても教えなかった。なぜなら、そうすることで人々の心を煽ることになり、多くの人が軽率に修道士になろうと急ぐ可能性があり、それは悪を招くことになろうからである。キリストはただ（完全な生活という）火花を蒔いただけであり、時機が熟したとき、修道生活が現れたのである。

それと同じように、私たちにも他人を強要する権利はありません。自分自身の行動を律する権利はありますが、それも理性を働かせて行わなければなりません。私はこれまで、どの若者に対しても「結婚しなさい」とか「修道院に入りなさい」と明確に言ったことはありません。もし誰かが、どの道を選ぶべきかと私に尋ねてきたら、私はこう答えます。「キリストと共にいる限り、自分の心にかなうように行動しなさい」。そして、もしその若者が「世俗の生活は自分の心に合わない」と答えたなら、私はその人が自分の道を見つけられるよう手助けするために、修道生活について話します。

人生の進路を選ぶという決断

年月はあっという間に過ぎていく。若者は、岐路に立って長く迷い続けることのないほうがよい。召命と愛に従って、自らの十字架——二つの道のうちの一つ——を選び、キリストを信頼してその道を歩んでいくべきである。もしキリストの復活の喜びを味わいたいのであれば、十字架への道でキリストに従うべきです。家庭生活においても、修道生活においても、それぞれの苦しみはありますが、もし人が神と共に生きるならば、その苦しみは「甘きイエス」によって和らげられるのです。

30歳を過ぎてから人生の道を選ぶのは、もはや容易なことではない。そして、人が歩んできた年月が長ければ長いほど、直面する困難も大きくなる。若者は、結婚であれ修道生活であれ、選んだ生き方に順応しやすい。何しろ、大人はすべてを常識という尺度で測り、見極めようとするからだ。その性格はすでに固まっており、まるで打ち固められたコンクリート構造物のようで、そう簡単に変えることはできない。見てごらん：若い頃に家庭生活や修道生活という道を歩み始めた人々は、老いるまで子供のような純真さを保ち続けている。私は、若い頃に結婚した夫婦を知っていた。妻は、話し方や振る舞いなど、あらゆる点で夫に似ていた。若くして結婚したため、夫婦の片方がもう片方の習慣をすべて取り入れたのだ。話し方にも、振る舞い方にも。しかし、互いに馴染み合うのも、彼らにとっては「遅く結婚した人たちに比べて」容易だった。

「若いうちに結婚するか、若いうちに修道に入るか」という諺がある。女性にとって、25歳になる前に人生の進路を決めることは特に重要だ。25歳を過ぎると、結婚したり修道院に入ったりすることはそれほど簡単ではなくなる。なぜなら、女性は他人の意志に従わなければならないことを考え始めるからだ。女性が年を重ねるほど、気まぐれやわがママが増えていく。そんな彼女を、一体誰が望むだろうか？そして、もし歳月を無駄にしてしまったなら、彼女はもはや家族を築くためではなく、主に誰かの保護や世話の下にいたいという理由で結婚を望むようになるのだ。

若い男女が結婚を「後回し」にし続けていると、年月が経った後、パートナーを探しても見つからないという現象が見られる。若い頃は自分たちで選んでいたのに、年月が経つと、今度は他人に選ばれる立場になってしまうのです。だからこそ、家庭を築く

⁷ マタイ19:21およびルカ18:22。

には、時には少しの無鉄砲さが必要だと言うのです。些細なことは目をつぶるべきです。なぜなら、すべてが自分の思い通りになることなど、あり得ないからです。

ある日、雨が降り出し、山間の川の川床を水が流れ始めた。川岸には二人が立っており、彼ら是对岸へ渡らなければならなかった。一人はとても賢く、もう一人はおバカさんだった。「雨が止めば——」と賢い方は考え込んだ。「水も引くし、そうすれば対岸へ渡れるだろう。」しかし、おバカさんは待たずに——水に飛び込み、川を歩いて渡ってしまった。もちろん、服はびしょ濡れになったが、彼は行きたかった場所へたどり着くことができた。一方、雨は止むどころか、ますます激しく降り続いた。流れは荒れ狂い、水量も増していった。そして結局、賢い男は自分の岸に立ち尽くしたままだった——川を渡るのはすでに危険になっていたからだ。

一部の人々は誇り高く、利己的であるため、神は彼らを助けてくださらない。毎年アフォン山を訪れ、私のカリヴァに来ては、「神は私に何を求めておられるのでしょうか、神父様？」と尋ねる若者たちがいる。まるで神が彼らを必要としているかのような言い方だ！ 彼らは修道士にもならなかったし、家庭も築けなかった。まるで自分たちが金であり、まるでただの鉄くずのように、どこかの鉄筋コンクリート構造物に利用されるのを恐れているかのようだ！ また、私にこう尋ねてくる者もいる。「ゲロンダ、私はどうすればいいのでしょうか。修道士になるべきか、それとも結婚すべきか？ 私の天職は何なのか、教えてください。」「あなた自身はどちらを望んでいるのですか？」と私は尋ねる。「結婚もしたいし、修道士にもなりたい」と彼らは答える。つまり、彼らは両方とも望んでいるのだ！ しかし、もし私が、例えば「君の天職は家庭生活だから結婚しなさい」と助言し、彼らが結婚したものの、家庭生活が気に入らなかった場合、後で彼らは私のところに来て、「この道を選べと言ったのはあなたなのに、今、私は苦しんでいる！」と不満をぶつけてくることになるでしょう。

—ゲロンダ、どうしてそんなことが起こるのでしょうか？

—さて、ある若者の天職が家庭生活であると仮定しよう。しかし、彼は修道生活についても考えている。もし結婚した後、彼が不注意で良い家庭を築けず、問題が生じた際に、それを霊的な方法で解決できなければ、悪霊が彼に対して悪意に満ちた考えを吹き込むだろう。「お前の天職は修道生活だったのだ」と、敵は彼に言い始めるだろう。「だが、結婚した以上、自業自得だ」。つまり、敵は昼夜を問わず、そのような人を決して放っておかないのである。

また、自分が何を望んでいるのか自分でもわからない人もいます。数年前、ある若い女性がここを訪れ、私にこう話し始めました。「ゲロンダ、どの生き方を選ぶべきか決められません。結婚したいのですが、修道生活も考えています。どうすればいいのでしょうか？」「よく考えてみてごらん」と私は彼女に答えました。「どちらの道が、あなた自身の心に響くかを見極めて、それを選んでください。」「わからないんです……」と彼女は言いました。「時々、結婚の方に心が傾いているような気がするんです。お願いです、ゲロンダ、どうすべきか、あなたご自身で教えてください。」「そうか」と私は彼女に助言した。「結婚の方に心が傾いているのなら、結婚したほうがいい。神様があなたの人生を導いてくださるだろう。」「ゲロンダ、あなたの祝福を仰いで——」と彼女は答えた。「その通りにします。」そして今日、彼女はまた訪ねてきた。「ゲロンダ、」と彼女は言った。「私、結婚しました。船乗りの人と。良い人ですよ、神に感謝します。文句のつけようがありません。でも、すごく辛いんです。6ヶ月一緒に暮らして

、6ヶ月離れて暮らすなんて、これって苦しみじゃないでしょうか？ 彼が航海に出ると、半年間も姿が見えないんです。」 「祝福された魂よ！」と私は彼女に答えました。「家庭生活も修道生活も、どちらもあなたの心に合うと私に話したのはあなたではありませんか？ さあ、ほら、今あなたは両方を手に入れているのです。なぜ、神様があなたの人生をこのように整えてくださったことを、神を賛美しないのですか？」

— ゲロンダ、しかし今日、私たちは厳しい時代を生きているため、一部の若者たちは家庭を築くことに踏み切れずにいます。

— いいえ、それは間違った問い方です。もし彼らがキリストを信頼しているのなら、恐れることは何もないはずです。迫害の時代は？ あれが楽だったというのですか？ しかし、あの時代、キリスト教徒たちは結婚もせず、家庭も築かなかったというのでしょうか？ [むしろ]、私たちの教会には、子供や配偶者と共に殉教した聖人がどれほど多くいることか！

若者たちの学業と、自ら選んだ道への歩み

— ゲロンダ、多くの若者たちは、どのような人生の道を選ぶべきか決めかねており、まともに学業に打ち込むことができません。この問題が常に彼らの心を悩ませ、学業に集中できないのです。

— 若い人がこうした悩みを抱えているとき、私はこう言います。「大きな現代的な冷蔵庫を見たことはあるかい？ それなら、その冷蔵庫に自分の悩みを放り込んで、学業が終わるまでそこに置いておこう。もちろん、気になっていることを一切考えないようと言っているわけではない。いいえ、教育を修了するまでは、それらすべてを冷蔵庫にしまっておきなさい。もし今、自分の教育や学業に無関心でいると、友人たちは卒業して人生の居場所を見つけ、落ち着いてから、君も人生の居場所を見つけられるよう、数珠を数えながら祈ることになるだろう。」 若者たちは非常に注意深くなければならない。なぜなら、そのような不安は敵の策略であり、それによって敵は若者たちを惑わせ、注意を散漫にさせるからだ。

— ゲロンダ、私がある女の子にこうアドバイスしたんです。「結婚するつもりなら、勉強なんてする必要はないよ」と。

— でも、彼女が結婚するまでは、何をさせればいいんだ？ キャンディを売らせるのか？ それなら、大学を卒業するか、何か専門的なスキルを身につけたほうがいい。人生で予期せぬことが起きたとき、得た知識や職業が役に立つかもしれないから。ある少女が、かつて私にこう言ったことがある。「修道女になることを考えているんだけど、いつも気が変わってしまうの。」「今、何年生なの？」と私が尋ねると、「リセの2年生よ、⁸」と彼女は答えた。「でも、これ以上勉強するのは嫌だわ。」「勉強したくないの？」と私は言った。「それなら、お父さんに、ヤギと牧羊犬、そして笛を買ってもらうように言うておくよ。犬が群れを守り、君は笛を吹いて羊の世話をすればいい。どう、気に入った？ そうだ、大学に進学するか、何か実用的な専門技能を身につけるよう努力してみたらどうかな。」「それなら、ゲロンダ、」と彼女は答えた。「修道院に入るか結婚するか決めるまで、謙遜の術を学ぶために、見習い修道女候補として修道院で暮らせてください。」「まあ、その『謙遜の術』くらいなら——」と私は答えた。「実家で学ぶこともできるよ。もし、家族が言うことを喜んで受け入れるならね。だから、こ

⁸ ロシアの中等学校11年生に相当する。——訳者注

うしょう。まずは学校を卒業し、それから大学の入試を受けて、大学を卒業したら、その先どうするか考えよう。」「ゲロンダ、5年なんて——」と彼女は答えた。「長すぎませんか?」「長いよ」と私は言った。「でも、君がまだ最終的な決断を下していない以上、他にどうすればいいんだ?」「それは私の気まぐれな性格のせいですか?」と彼女は尋ねた。「いいえ」と私は言った。「ただ、君の[霊的な]天秤は、まだどちらの側にも傾いていないだけだ。」

このような場合、私たちは若者たちに、注意深くあり、無為に時間を浪費しないよう助言すべきです。学業に励む間、彼らは可能な限り霊的な生活を送り、(必要な)学位をできるだけ早く取得するよう努めれば、その後は神がすべてを整えてくださいます。学業中は、修道生活や家庭生活に対する表面的な熱狂を避け、絶望に陥らないよう助けてくれる、良き霊的指導者を見つける必要があります。学業を終えるまでは、辛抱強く待ち続けましょう。

それを終え、すでに成熟した大人となった彼らは、ある種の人生を送るための素地を身につけているだろう。その時にこそ、人生の道を選ぶ決断を下し、自分たちが最善だと考えることを、神の栄光のために成し遂げてほしい。

今日の世界は、人生の道を選ぶ決断をすればするほど、成熟しているほど良いという状況にまで至っています。どんな不愉快な出来事が起こるか、ご存知ですか? 人は非常に注意深くあり、未熟な決断を下さないようにしなければなりません——特に、熱狂的になりやすく、何かに夢中になりがちな人はなおさらです。

— ゲロンダ、一部の若者たちは、霊的な読書や祈りを優先するため、授業をさぼっています。

— いいえ、授業を始める必要はありません。霊的な活力を保つために、教科書と並行して聖父たちの書物の一節を読み、少し祈りを捧げ、数回お辞儀をさせればよい。また、勉強や読書で忙しくなる時は、自分たちで休憩時間を設け、その間にイエスの祈りを唱えたり、教会の賛美歌を歌ったりしてもよい。というのも、もし勉強中に、彼らが(より高次の)霊的な行い——将来取り組むことになるかもしれないような——をしようとしても、授業や勉強のことを考えている限り、その霊的な行いを適切に行うことはできず、学業でも成果を上げることができないからです。結局、彼らは何も成し遂げられないでしょう。しかし、読書や授業に励めば、すぐに卒業証書を取得でき、その後は自分のやりたいことをできるようになります。私は病院に入院していた時、⁹数日間、数珠も、礼拝も、断食もすべて中断し、出されたものを食べていました。「今は——と自分に言い聞かせました——医師たちに少し協力して、彼らにも私の回復を手助けしてもらわなければならない。そしてその後、やりたいことをやるのだ。」

何人かの生徒が私のところに来て、親が常に監視して、宿題をやるよう強要していると愚痴をこぼす。もし私もその子たちのそばに張り付いていたら、彼らにとって何の役にも立たないだろう。勉強を疎かにしてはいけないと理解してもらうために、私は彼らに、勉強を怠った結果、すべてがうまくいかなくなってしまった同年代の子供たちの例や、勉強に真面目に取り組んだおかげで成功した子供たちの例を挙げて説明する。こんな出来事を覚えています。ある隣町で、二人の少年が育っていました。一人は非常に頭の回転が速く、宿題もすぐに片付けてしまい、低学年から中学年にかけては常に「5プラス」の成績を取っていました。もう一人はそれほど頭が良くなかったため、前者に

⁹ 1966年、長老は病院に入院しており、気管支拡張症を患っていたため、肺の手術を受けていた。

ついていくには多大な努力が必要でした。高校に進学してからは、優等生だった少年はたった1年しか通わず、悪い仲間とつるむようになり、学校を中退し、結局、ある企業の清掃員として働くことを余儀なくされた。彼はすでに結婚しており、2人の子供を養いながら、かろうじて生計を立てていた。一方、彼の隣人は法学部を卒業した後、さらにヨーロッパで学び、経営学の学位を取得していた。ある日、かつての優等生が清掃員として働いていた企業に、新しい支配人が赴任することになった。皆、その人物が素晴らしい教養の持ち主だと口々に言っていた。新しい支配人が到着すると、清掃員はすぐに彼がかつての同級生だと気づいた。その清掃員は絶望に深く苛まれ、何度か自殺を図ったほどだった。ある人が彼に、聖なる山に来て私と会うよう勧めた。彼が自分の人生について話しているとき、思わずこう叫んでしまった。「見てよ、あのろくでなしが俺の支配人になったんだ！」うわっ、私は彼をこっぴどく叱りつけた！「おい、お前、」と私は言った。「なんてこった！ お前はあいつより上を目指せばはずだ！ そうすれば、お前自身も豊かに暮らせたし、子供たちも困ることなく、善行も積めたはずだ！ お前のせいで家族が苦しんでいるだけでは足りないのか？ 今さら自殺して、家族を完全に打ちのめし、子供たちを孤児にしようというのか？ お前自身には同情しない。今、自分の愚かさの代償を払っているのだから。だが、お前の子供たちには同情する。わかるか？ どうか忍耐強く待ってほしい。そうすれば、神の御加護により、新しい支配人もお前を優しく扱ってくれるだろう。彼は、お前を以前より良い別の役職に異動させてくれるかもしれない。もし万が一、この会社での仕事が気に入らないようなことがあれば、別の仕事を探しなさい。子供たちを路頭に迷わせるようなことだけは、絶対に避けてほしい。」そう言われた後、彼はようやく正気に戻った。

つまり、学生時代 **properly** 勉強に励めば、多少疲れることはあっても、単位の未履修は生じず、スムーズに卒業でき、将来的に後悔することもないということになる。在学中にさまざまな科目で単位不足を抱えていた学生たちは、大学を卒業して就職した後も、あちこちで借金を抱え続け、多くの問題を抱えているのが見て取れます。

— ゲロンダ、もし大学生の青年が大学で女性と知り合い、その関係から結婚に至る可能性がある場合、学業を終える前に結婚する意味はあるのでしょうか？

— どんなに素晴らしく、心温まる出会いだったとしても、それは学業の妨げになると思います。学生が結婚すれば、たとえその相手が最高の生涯の伴侶であったとしても、その結婚は妻や子供たちを苦しめることになるでしょう。そのような若者には、教育を受け、無理をせずに大学を卒業することに、心身の力を集中させるほうがよい。そして、その後で私生活を整えていけばよい。何しろ、力が分散されてしまえば、彼は常に心身ともに疲弊した状態に陥ってしまうだろうから。

選んだ道を正しく歩み始めるための最大の前提は、霊的生活である

— ゲロンダ、修道生活を考えているとあなたに話したあの若い女性を覚えていますか？ 彼女は、同級生が「なぜ映画を見に行かないのか」「なぜ男の子と遊びに行かないのか」と執拗に問い詰めてきたと私に話していました。彼女は彼にどう答えるべきだったのでしょうか？

— 「『そんな質問、実の兄ですらないわよ！ まさかあなたが私にそんなこと聞くつもり？』って言うべきだったわ」

— それから数日後、彼はまた大学の近くで彼女に出くわし、肩をつかんだ。彼女はただ「やあ」とだけ言うと、すぐに建物の中へ入っていった。

— いいえ、彼女の対応は間違っていました！あの状況では、彼にきっぱりと断るべきでした。彼女の振る舞いでは、まるで彼のふざけた行動を気に入っているかのような印象を与えてしまい、また同じことを繰り返してしまうでしょう。彼女は今、少し厄介な年頃ですから、もし若い男性たちと付き合い始めれば、彼女にとって良いことにはなりません。また、彼らを助けるという名目で彼らと話し合う必要も彼女にはない。もし彼女が、善良で良い青年と知り合い、結婚を決意したなら、そのことを両親に知らせるべきだ。両親が、その青年が幸せな家庭を築くために必要な資質を備えているかどうかを見極めるだろう。しかし、今の彼女は、まだどの人生を歩むか決めていないのだから、若者たちと語り合うことは彼女にとって得にならない。それは単に彼女の頭を混乱させ、心の安らぎを失わせてしまうだけだからだ。この点に無頓着な不幸な若者たちは、非常に不安定な状態にあり、常に動揺し、安らぎを得ることができません。不安や焦りが彼らの顔に刻まれ、その目に映し出されています。

女性が男性に惹かれ、男性が女性に惹かれることは、人間の本性に根ざしたものです。しかし、その少女には「今はその時期ではない」と伝えてください。まずは学業に専念するよう促しましょう。幼い頃から異性への想いを育んできた少年や少女たちは、そのための適切な時期が来るのを待たずに「ボタンを押してしまう」のです。そして、やがて好機が訪れたとき、彼らの「ボタン」はすでに押されてしまっており、不適切な時期に先にその喜びを味わってしまったがゆえに、その喜びを再び味わうことができないのだ。一方、この点において自分自身に注意を払っている若者たちは、好機を待ちわびて、より大きな喜びを味わうことができ、その時が来るまでは心の平安を保っている。結婚前に貞節を守って生きてきた母親たちを見てごらん。彼女たちは、山のような雑事に追われているにもかかわらず、心穏やかだ。

私は常々、結婚前の若者は、可能な限り精神的な生活を送り、二重の健康をもたらす貞操を保つよう努めるべきだと強調しています。精神的な生活は、家庭生活にとっても修道生活にとっても、基本的な前提条件なのです。今の世の中は、小麦が蒔かれた畑に似ています。小麦は穂を出し始めていましたが、豚が畑に入り込み、それをすべて踏み荒らし、掘り起こしてしまいました。そして今、その畑はこんな様子です。耕された草や土、泥に踏みつけられた穂、そして所々、端っこにだけ手つかずの小麦の穂がそびえ立っているのです。

若き日に精神的な修行に深く打ち込めば打ち込むほど、その後、どのような人生を選んだとしても、その人はより楽に生きられるようになる。戦いに臨む前にしっかりと武装し、準備を整えておけば、周囲で弾丸が飛び交い、爆弾が炸裂する戦いの最中でも、その人はより楽に戦えるだろう。少女が、修道女になるか、それとも善良で優しい母親になるかを決めるまでは、貞潔に暮らす必要がある。だからこそ、今は可能な限り、学業に全力を注ぐよう努めなければならない。

もし彼女が視覚や聴覚に気を配り、邪な考えを追い払うならば、後になって自分の中から追い出さなければならないものは、気を配らなかった場合よりも少なくて済むだろう。あるいは、例えば美しい少女に出会った青年は、善意の考えを働かせるよう努めなければならない。彼は彼女を、ある聖人の生きた姿として見なければならない。そして、放蕩な少女に出会ったときは、彼女を自分の妹のように見なければならない。私た

ちは皆、アダムの子供である。彼は、もし自分の実の妹がそのような状態に陥ってしまったら悲しむのと同じように、彼女を憐れまなければならない。

— ゲロンダ、しかし今日、大学やその他の教育機関では、若者たちを待ち受ける誘惑が数多くあります。

— 互いに助け合い、霊的な雰囲気以身を置くために、霊的に生きる若者たちと親しくなるべきです。事態を大げさに捉える必要はありません。私は、大学に通いながら貞潔に暮らす多くの若者を知っています。彼らは、自分なりのささやかな努力と、神の大きな助けによって、それを実現しているのです。

第1部。 強い家族を築くには

「夫婦は、可能な限り愛という美德を育むべきである。そうすることで、二人は常に一つとなり、彼らと共に、第三の者——私たちの最も愛すべきキリスト——が常に共にいてくださるようになるのである」

第1章。 調和のとれた家族について

家庭生活の良き始まり

— ゲロンダ、家庭生活の道を歩むことを決意したある青年が、どのようにして正しく家庭生活を始めるべきか、私に尋ねてきました。

— 何よりもまず、彼の心に響く良い女性を見つけるよう努めるべきです。なぜなら、人の心はそれぞれ異なる方法で人に惹かれるものだからです。ある人はある人に好意を抱き、ある人は別の人に好意を抱きます。花嫁が裕福で美しいかどうかではなく、何よりもまず、彼女が素朴で謙虚であるかどうか注目すべきです。つまり、将来の妻となる女性の外見よりも、内面の美しさにこそ注目すべきなのです。もしその女性が信頼できる人物であり、女性としての気質に必要な範囲内で勇気を持っているなら、それは将来の夫にとって、あらゆる困難の中で彼女と完全な相互理解に達し、頭を悩ませることなくやっていく上で大いに役立つでしょう。もし彼女に神への畏敬の念と謙虚ささえあれば、二人は手を取り合って、この世という邪悪な川の対岸へと渡ることができるでしょう。

もし若い男性が、ある女性を将来の妻として真剣に考えているのであれば、まずは身近な人を通じて、その女性の両親にそのことを伝えるのがよいと思います。その後、彼自身が直接、その女性の両親や彼女本人と、自分の意図について話し合う必要があります。その後、二人が婚約し、婚約式を挙げた後は——婚約から結婚式までの期間が長くなりすぎないように心がけるのが望ましいですが——彼は花嫁を自分の妹のように見なし、敬意を持って接すべきです。もし新郎新婦が共に貞潔を重んじ、結婚式のまで全力

を尽くして処女性を守ろうと努めるならば、結婚の秘跡において、司祭が二人に冠を授ける際、彼らは神の恵みを豊かに受けることになるでしょう。なぜなら、聖ヨハネス・クラマティオスが言うように、結婚の秘跡の冠は、快樂に対する勝利の象徴だからである。¹⁰

その後、夫婦は、可能な限り愛という美德を育み、二人が常に一つに結ばれ、そして彼らと共に「第三の者」——私たちの最も愛すべきキリスト——が共にいてくださるよう努めなければなりません。もちろん、新婚夫婦の家庭生活が軌道に乗り、互いを十分に理解し合うようになるまでは、多少の困難に直面することもあるでしょう。どんなことでも、最初はそうなるものです。数日前、私は一羽の雛鳥を観察していました。その子は初めて巣から飛び立ち、餌を探しに出かけました。かわいそうなことに、その雛は昆虫を捕まえる術を知らず、地面すれすれを飛び回り、ようやく何かの虫を捕まえるまでに丸一時間も費やしてしまいました。その小鳥を見ながら、私はどんなことでも始めるのは簡単ではないのだと深く考えさせられました。大学を卒業し、学位を取得して働き始めたばかりの人も、最初の頃は困難に直面します。修道院の見習いも、修道生活を始めると最初は苦勞するものだ。そして、結婚したばかりの若者も、最初の頃は苦勞することになるだろう。

—ゲロンダ、花嫁が花婿より年上であることは許されるのでしょうか？

—教会には、女性が男性より2歳、3歳、あるいは5歳年上であるからといって、二人が結婚してはならないという規則はありません。

性格の違いの中にこそ、神の御心による調和が宿っているのです

ある日、ある男が私の小屋を訪ねてきて、妻との絶え間ない意見の相違にひどく落ち込んでいると愚痴をこぼした。しかし、私は彼と妻の間に、本当に深刻な問題など何もないと気づいた。この男には男なりの「節」や「こぶ」があり、妻にも妻なりのそれがある。だからこそ、二人は互いに折り合いがつかないのだ。[双方とも]少し「削る」必要がある。削っていない板を二枚用意してみよう。一方の板にはある場所に節があり、もう一方の板には別の場所に節がある。もしそれらをそのまま、削っていない状態で接合しようとすれば、その間に隙間が残ってしまう。しかし、最初の板をある場所で少し削り、2枚目の板を別の場所で少し削れば、それらはすぐにぴったりと合うようになる。ただ、削る際は同じ鉋を使わなければならない。¹¹

「妻とは全く気が合わない！」——そう私に愚痴をこぼす夫たちがいます。「性格がまったく違うんです！ 彼女は私とは全く異なる気質の人間です。どうして神様は、こんな理不尽なことを許されるのでしょうか？ 夫婦の性格を同じにして、靈的に生きられるようにしてくださることができなかったのでしょうか？」 「あなた方は理解していないのですか」と私は答えます。「性格の違いの中にこそ、神聖な調和が秘められているということを。異なる性格が調和を生み出すのです。もしあなたと奥さんが同じ性格だったとしたら、どうなるか想像してみてください！ とんでもない！ 例えば、あな

¹⁰ 「花冠は新郎新婦の頭に戴かれ、勝利を象徴している——すなわち、敗北することなく婚姻の床に就くこと、また、快樂に打ち勝ったことを示している」。聖ヨハネス・クリソストモス。『テモテへの第一の手紙』への注解、説教第9篇。PG 62、col. 546。

¹¹ 長老が念頭に置いているのは、夫婦に対する靈的指導者の働きである。この働きは、夫と妻が同じ靈的指導者を持つ場合、すなわち彼らの「節」や「こぶ」が同じ「鉋」で削り取られる場合に、実を結ぶのである。

たも奥さんもすぐに腹を立ててしまう性格だったとしたら、どうなるか想像してみてください。家の中を石一つ残らずめちゃくちゃにしてしまうでしょう！ では、もし夫婦二人とも同じように穏やかで柔和な性格だったら？ それなら、歩きながら寝てしまうことになりかねません！ もしあなたも奥さんも、冬に雪を降らせることさえできなかったとしたら——もちろん、お互いに歩み寄ることはあったでしょうが、二人とも地獄の苦しみに陥っていたことでしょう。もし二人とも浪費家だったら？ 果たして家計をやりくりできたでしょうか？ 財産をすべて浪費してしまい、子供たちは野宿を余儀なくされていたでしょう。」

もし、気難しくてわがままな男が、自分に見合った妻——たとえ頭に杭を打ち込んでも、自分のやり方を貫くような女性——を見つけたなら、もちろん二人は互いに相性が合うだろう。そうではないでしょうか？ しかし、一緒に暮らし始めて一日も経たないうちに、二人は互いの髪を引きちぎるほどに争うことになるでしょう！ だからこそ、神がすべてをいかにうまく整えておられるかを見てください。神は、善良で優しい人が気難しい人と結婚するように仕向け、そうすることで、もともと善良な心を持っていたものの、若い頃に悪の道に迷い込んでしまった配偶者が、助けを得られるようにしておられるのです。

夫婦の性格にわずかな違いがあることは、互いが補い合うことで調和のとれた家庭を築く助けとなります。自動車には、走るためのアクセルと、適切なタイミングで停止するためのブレーキの、両方のペダルが必要です。もし車にブレーキが一つしかなかったら、その場から動けず、アクセルしかなかったら、止まることができないだろう。「お二人はまるで片足で立っているようなものです」と私はある夫婦に言った。「だからこそ、お互いに合わないのです！」この二人はどちらも非常に感情的な人だった。家で何かが起こると、二人は手綱を放り出して嘆き始めた。「ああ、なんて災難が私たちに降りかかったんだ！」と夫は嘆く。「ああ、なんて苦い悲しみなんだろう！」と妻はすすり泣く。つまり、片方の配偶者がもう片方をさらに深い絶望へと「追い込む」のです！ 夫は妻を励まして、「ちょっと待って、私たちに起きたことなんて、それほど大したことじゃないよ」と言うことができません。私は多くの家庭でこのような光景を目にしました。

性格の異なる夫婦は、子育てにおいてもより大きな成果を上げることができる。片方が子供たちを少し抑えようとする一方で、もう片方は「子供たちに少しは自由を与えてあげなさい」と言うだろう。もし夫も妻も子供たちに厳しくしすぎれば、子供たちを失ってしまうことになる。しかし、二人とも子供に好き放題にさせてしまう場合も、やはり子供を見失うことになる。一方、母親と父親の性格が異なっていれば、子供たちはバランスを保つことができるのだ。

私が言いたいのは、[家族においては]すべてが必要だということです。もちろん、夫婦は互いの性格の特性を過度に強調しすぎてはいけませんが、それぞれの性格に合わせて、互いに助け合うべきです。例えば、とても甘いものを食べると、何か塩気のあるものが食べたくなるものです。ブドウを食べた後は、その甘さを中和するためにチーズをひと切れ食べたくなるものです。野菜も同様で、苦味が強すぎると食べられませんが、ほんのり苦味や酸味があるものは、美味しく、かつ体に良いのです。しかし、もし「酸っぱい」気質の人が、他の皆も同じように「酸っぱい」になるべきだと言い出し、苦い

気質の人が皆に「苦い」になるよう呼びかけ、さらに「塩辛い」気質の人が皆が「塩辛い」になることを主張し始めたら、彼らは決して相互理解には至らないだろう。

夫婦間の尊敬

神はすべてを英知をもって定められました。神は男性にはある才能を、女性には別の才能を授けられました。神は、男性が困難な状況から抜け出すため、そして女性が彼に従うために、男性に勇気を与えられたのです。もし神が女性にも同じ勇気を与えていたなら、家族は成り立たなかったでしょう。

エピロス地方では、¹²、一帯の恐怖の的だったある女性についての話が語り継がれていました！彼女は長い白いシャツを着ており、腰帯には常にヤタガン¹³を差していました。¹³ 強盗たちは彼女を仕事へ連れて行ったのです！想像してみてください：山賊の一味に女性が混じっているなんて！ある時、彼女は自分の村から徒歩で数時間離れた人里離れた村を訪れ、あるヴァラシュ人の少年を連れ去って、自分の娘と結婚させようとしたのです。少年が抵抗し始めたため、彼女は彼を組み伏せ、肩に担いで自分の村へ引きずり込んだのです！とはいえ、こうした事例は例外に過ぎない。女性たちを軍に徴兵し、女性中隊を結成してみなさい。そして、スカウトの制服を着た十人ほどの十代の若者たちを連れてきて、遠くから女戦士たちの前に姿を現させるのだ。そうすれば、中隊全体が即座に逃げ出すだろう！敵が攻めてくると思い込むに違いない！

聖書によれば、夫は「妻の頭」であるとあります。¹⁴ つまり、神は夫が妻を支配するように定められたのです。妻が夫を支配することは、神への冒瀆です。神はまずアダムを創造され、アダムは妻についてこう言いました。「見よ、これは今や、わたしの骨からの骨、わたしの肉からの肉である。」¹⁵ 福音書によれば、妻は夫を畏れるべきである——つまり、夫を敬わなければならない。そして夫は妻を愛さなければならない。¹⁶ 愛には敬意が含まれている。敬意には愛が含まれている。私が愛するものは、同時に敬うものでもある。私が敬うものは、愛するものである。つまり、愛と敬意は別物ではない。これらは同じものである。

しかし、人々は神のこの調和から逸脱し、福音の言葉の意味を理解していない。こうして夫は、福音を曲解して妻にこう言うのだ。「お前は俺を恐れるべきだ！」なんて奇妙な男だろう。もし彼女があなたを恐れていたら、そもそもあなたと結婚などしなかったはずだ！一方、一部の女性はこう言い返す。「なぜ妻が夫を恐れる必要があるの？いいえ、そんなことは受け入れられない。一体どんな宗教なんだ？差別だ！」しかし、聖書が何と言っているか見てください。「知恵の初めは、主を畏れることである。」¹⁷ 神を畏れるとは、神への敬意、畏敬の念、霊的な謙虚さのことです。この畏れは、あなたを畏敬の念に満ちた戦慄へと導き、それは神聖なものです。

一部の女性が目指す男性との平等は、ある程度の範囲内でのみ正当化されるものである。今日、女性は男性と同様に働き、選挙にも参加している。そのため、彼女たちはある種の不健全な気風に染まり、男性と（あらゆる面で）対等であると考えてしまっ

¹² エピロス——ギリシャ西部の地域。——訳者注

¹³ ヤタガン——大きな湾曲したトルコの短剣。——訳者注

¹⁴ エフェソの信徒への手紙 5章23節。

¹⁵ 創世記 2:23。

¹⁶ エフェソの信徒への手紙 5章33節を参照。

¹⁷ 箴言 1:7。

いる。もちろん、男性と女性の魂は同じである。しかし、夫が妻を愛さず、妻が夫を敬わなければ、家庭に不和が生じる。昔は、妻が夫に口答えをするなど、到底許されないことだとされていた。ところが今では、厚かましい、奔放な気風が現れてしまった。あの頃はなんて素晴らしかったことか！私はある夫婦を知っていた。夫は小柄で地味な男でしたが、妻は背が高く、まるで力持ちのような体格でした！彼女はたった一人で、馬車から1ツェントナーの穀物を軽々と降ろしていたのです！ある時、ある労働者——彼もまた屈強な男でしたが——が彼女に絡んできたところ、彼女は彼を掴んで、マッチ棒のように数メートルも横へ放り飛ばしてしまったのです！しかし、もしあなたが、この女性が夫にどれほど従順で、どれほど夫を敬っていたかを見たら、きっと驚くでしょう！このようにしてこそ、家族は強固で、決して崩れることのないものになるのです。そうでなければ、家族は持ちこたえられないのです。

夫婦の愛

「さて、お母様、結婚するディミトリへの祝いの言葉は書けましたか？」

— 書きましたよ、ゲロンダ。

— そののがきをくれ。私がこう書き足してやるよ。「キリストと至聖なる聖母マリアがあなた方と共におられますように！ディミトリ、お前には、マリアを除く全世界と口論してもいいという祝福を与える！マリアにも同じ祝福を：誰とでも口論していいが、お前とは口論してはいけない！」さて、彼らが私の言わんとしていることを理解してくれるかどうか、見てみよう。ある人が私に尋ねた。「ゲロンダ、夫と妻を最も結びつけるものは何ですか？」私は「感謝だ」と答えた。人は、相手が自分に与えてくれるもののために、その人を愛するのだ。妻は夫に信頼、献身、従順を捧げる。夫は妻に、自分が夫の庇護と保護の下にあるという確信を与える。妻は家の女主人であると同時に、その家の一番の召使いでもある。夫は家の支配者であると同時に、その重荷を担う者でもある。

夫婦の間には、互いに清らかな愛がなければならない——そうして初めて、互いに慰め合い、それぞれの霊的な義務を果たすことができるのだ。調和のうちに生きるためには、何よりもまず、生活の基盤として愛を据えなければならない——それは、霊的な高潔さや犠牲の精神に根ざした尊い愛であり、偽りの、世俗的な、肉欲的な愛ではない。愛と犠牲の精神があれば、一方は常に相手の立場に立ち、相手を理解し、相手の痛みを自分のことのように感じる。そして、苦しむ心に隣人を受け入れるとき、人はその心にキリストを受け入れ、キリストは再び、言葉では言い表せない喜びをもってその心を満たしてくださるのです。

夫婦の一方がもう一方を愛しているなら、たとえ離れていても——状況がそう求めるのであれば——それでも心は近くにあるでしょう。なぜなら、キリストの愛には距離など存在しないからです。しかし、もし——神よ、どうかそのようなことはありませんように——夫婦の間に愛がないならば、たとえ隣り合わせにいても、実質的には互いに遠く離れていることになるかもしれません。だからこそ、夫婦の双方は、生涯を通じて相手への愛を保ち続け、相手のために自らを犠牲にしようと努めなければならないのです。

肉欲的な愛は、世俗的な人々を表面上結びつけるが、それは彼らが[そのような肉欲的な愛に必要な]世俗的な資質を備えている間だけである。これらの世俗的な資質が

失われると、肉欲的な愛は人々を引き離し、彼らは破滅へと転落していく。しかし、夫婦の間に真に尊い霊的な愛があるならば、たとえ片方が世俗的な資質を失ったとしても、それは二人を引き離すどころか、かえってより強く結びつけることになる。もし肉欲的な愛しかなかったとしたら、例えば妻は、人生の伴侶が他の女性をじっと見つめたことを知ると、彼の目に硫酸を浴びせて視力を奪ってしまうだろう。しかし、もし彼女が純粋な愛で彼を愛しているなら、彼のためにさらに大きな痛みを感じ、繊細かつ丁寧に、彼を再び正しい道へと導こうと努めるでしょう。こうして、神の恵みがもたらされるのです。

ある日、ギリシャ系のアメリカ人医師が私のカリヴァを訪ねてきました。彼の肌が色白であることに気づき、私は彼の生い立ちについて丁寧に尋ねてみました。「神父様」と彼は私に言いました。「私は正教会のキリスト教徒ですが、つい最近まで断食も守らず、教会にもめったに足を運んでいませんでした。ある夜、自分の部屋でひざまずき、ある重要な問題について神に助けを求めたところ、部屋が何とも甘美な光で満たされたのです。それはかなり長い間続きました。私は光以外は何も見えず、自分の中に言葉では言い表せないような平安を感じていました。」私は衝撃を受けました。この人が「非被造の光」を拝見する栄誉に浴したのだと悟ったからです。そこで、その出来事に先立って何が起きたのか、彼に話してもらうよう頼みました。「神父様」と彼は語り始めた。「私は既婚者で、3人の子供がいます。結婚生活の始まりは順調でした。しかしその後、妻は家事や子育てに耐えられなくなり、彼女の友人たちと一緒に遊びに行こうと私にせがむようになりました。私は彼女の要求を聞き入れました。時が経つと、彼女は『女友達と二人きりで遊びに行きたい』と言い出しました。私はそれにも諦めて受け入れ、代わりに自分で子供たちの世話をするようになりました。その後、彼女は私と休暇に行く気がなくなり、一人で休暇に行くためのお金を私にせがむようになりました。さらに、彼女のために別のアパートを借りてほしいと頼んできました。私もそれにも応じた。しかし、彼女はそのアパートに愛人たちを呼び寄せていた。その間ずっと、私は様々な方法——助言や説得——で、彼女が子供たちのことを思い直してくれるよう助けようとした。だが、彼女はどんな助言も聞き入れなかった。結局、私から多額の金を受け取ると、彼女は姿を消してしまった。私は彼女を探し、ありとあらゆる場所で彼女のことを尋ね回ったが、すべて徒労に終わり、彼女の行方さえも分からなくなってしまった。そしてある日、彼女がここギリシャに来て、ある淫らな売春宿で体を売っているという情報を得た。彼女の哀れな転落に対する、私を襲ったその悲しみは、言葉では言い表せないほどだった。悲しみに打ちひしがれ、私はひざまずいて祈り始めた。「神よ——と私は懇願した——彼女を見つけられるよう助けてください。そうすれば、彼女が魂を滅ぼさないよう、私にできることは何でもします。彼女が堕ちてしまったその状態を、私は耐えられないのです。」するとその時、その光が私を包み込み、私の心は平安で満たされた。」——「兄弟よ！」と私は彼に言った。「神はあなたの忍耐、悪意のなさ、そして愛をご覧になり、あなたにこの慰めを与えてくださったのです。」

だからこそ、私は「一般の人々が私たちを裁くことになる」と言っているのです。お分かりでしょうか？ アメリカのどこかにいるある医師は、あのような妻を持ち、あのような環境や周囲に囲まれているにもかかわらず——それなのに、一体どんな扱いを受けたことか！

第2章。 忍耐こそが家族を崩壊から守ること

「お姉さんはお元気ですか？ ご主人とはうまくいっていますか？」

— ゲロンダ、彼らの間にはうまくいないという噂が私の耳にも入っています。しかし、彼女は耐え忍んでおり、必要な時には一人で重荷を背負って頑張っています。

— そういうこともあるものよ。もし二頭の雄牛が同じ軛に繋がられていて、そのうちの1頭が弱かったり怠け者だったりすると、もう1頭の牛はより強く力を入れ、ある意味でその牛を引っ張って、先導していくものよ。ほら、見てごらん。世間の人たちは、自分磨きに励んでいるのに。それなのに、あなたたちはここでは相変わらずお姫様気取りだ！ 想像してみてほしい。4人の子供を持つ母親がいるとしよう。1人は知的障害があり、もう1人は精神疾患を患い、3人目はサラセミアを患い、¹⁸ 4人目は夜になるとどこへ行くのか分からないほど徘徊し、夫との生活でもその母親は苦しんでいる。彼女は一体どれほど多くのことを耐え忍ばなければならないことか！ たとえ声を限りに叫びたくなっても、自分の苦しみを誰にも打ち明けることなどできない。なぜなら、家族の中で起きていることの中には、家の外では決して話せないものもあるからだ。例えば、夫は完全に孤立した生活を送っていて、彼女には全く関心を向けていないかもしれない。この不幸な女性は家賃を払うお金さえなく、家から追い出されようとしています。彼女は仕事を求めざるを得ず、様々な危険にさらされながら、あなたにこう懇願しています。「せめてこれらの危険から私を救ってくださるよう、お祈りください！」

あるいは、夫が酒を飲み、仕事をせず、彼女が一人で働かざるを得ない場合もある。例えば、高層マンションの階段を掃除する仕事などだ。一方、夫は酒場を転々とし、真夜中を過ぎて酔っ払って帰宅し、彼女を殴り、金を要求したり、さらには彼女の上りのところへ自ら出向いて、彼女が稼いだ給料を奪い取ったりすることさえある。ああ、なんて辛いことだろう！

ある女性たちについてはすべてが明白だ——彼女たちには何らかの罪があり、そのように苦しむことで、その罪の代償を払っているのだ。しかし、一方で、そのような罪を持たない女性たちもいる。後者の女性たちは、今経験している苦しみに対して、正当な報いを受けることになるだろう。私はある母親を知っている。彼女は子供の頃、まるで天使のようだった！ とても優しい心持ちで、家族の中で一番おとなしい子だった。それなのに、なんと恐ろしい喧嘩っ早い男と結婚してしまったことか！ 彼女の家族はなんて見当違いだったのだろう！ 彼女は、子供の頃から悪名高い悪ガキだった酒飲みと結婚してしまった。彼の父親は酒飲みで、彼もまたその悪い癖を受け継いでしまったのだ。そして今、この不幸な女性は、他人の家を猫背で歩き回り、仕事で身を粉にして働いているのに、夫は彼女を殴り、ナイフで脅している。「お前を刺し殺してやる！」と、彼は何度叫んだことか。そして彼女は、彼が本当に自分を刺し殺してしまうのではないかと恐れている！ 彼女はまさに苦しみ抜いているのだ！ それなのに、彼女には4人の子供がいる。この不幸な女性の親族たちは、もはや彼女に離婚するよう勧めるほどになっているが、彼女は「まだ我慢してみるつもり」と答える。そして我慢し続けている。あなた

¹⁸ サラセミア——地中海諸国に広く見られる、グロビンタンパク質の合成障害を伴う遺伝性溶血性貧血。この病気は、進行性の貧血、肝臓や脾臓の肥大、黄疸などを引き起こす。——訳者注

にはそれが理解できるだろうか？この女性は『教訓集』も聖人の伝記も読んだことがないのに、それでも我慢しているのだ！「なるほど」と、私はある時彼女に言った。「でも、あなたの子供たちは、この状況を目の当たりにして、なぜ介入しないの？」「彼らはまだ15、16歳なんです」と彼女は答えた。「まずは軍隊で兵役を済ませさせて、戻ってきたら、お父さんをちょっと懲らしめてやるわ！」つまり、彼らが兵役を終えるまでは、彼女は暴力を耐え忍ばなければならないということだ！

忍耐は、人を神の恵みで満たす

— ゲロンダ、人が苛立ったり、興奮したりしているとき、どのように接すればよいでしょうか？

— 忍耐をもって接しなさい。

— もし私に忍耐がない場合はどうすればよいのでしょうか？

— 買いに行かなきゃ！スーパーで売ってるよ！……ほら、人が怒りに燃えているときは、何を言っても無駄なんだ。そんな時は黙って、イエスの祈りを唱えるのが一番だ。祈りによって相手は落ち着き、穏やかになり、それからお互いに理解し合えるようになるんだ。ほら、海が荒れているときは、漁師たちだって漁に出ないでしょう。彼らは天気が落ち着くまで辛抱強く待っているのです。

— ゲロンダ、人々の焦りは何に起因するのでしょうか？

— それは、彼らの内には非常に多くの……「平和」があるからです！神は、人々の救いをその忍耐にかけられました。「最後まで耐え忍ぶ者は、救われる」¹⁹ と、福音書には記されています。神は、人々が忍耐に熟達するようと、困難や様々な試練を与えられるのです。

忍耐は愛から始まります。人を忍耐強く受け入れるためには、その人のことを心から気遣わなければなりません。「忍耐は家族を崩壊から救います。私は、野獣が子羊のように穏やかになるのを目にしました。神を信頼すれば、あらゆる問題は円滑かつ霊的に解決されます。かつて、ストミオン修道院に住んでいた頃、コニツァで²⁰ 顔に輝きを宿した女性に出会った。彼女は5人の子供の母親だった。その後、彼女のことを思い出した。彼女の夫は大工で、よく私の師匠と一緒に仕事をしていた。²¹ 依頼主がこの男に、例えば「ヤニスさん、これ、こうやってみませんか？」といった些細な指摘をすると、彼は間違いなくキレてしまう。「お前が俺に指図するつもりか！？」と叫び、道具を壊して隅に投げ捨て、立ち去ってしまうのだ。他人の家ですらあれほど物を壊していたのだから、自分の家では一体どんなことをしていたか、想像に難くないだろう！この男とは一日たりとも一緒に過ごすことなど不可能だったが、彼の妻は長年彼と暮らしていた。彼女は毎日苦しみながらも、すべてに深い優しさをもって接し、忍耐強くすべてを包み込んでいた。私は彼らの家で何が起きているか知っていたので、彼女に会うたびにこう尋ねた。「ヤニスさんはお元気ですか？ 仕事はされていますか？」「えーと……」と彼女は答えた。「仕事をする時もあるし、ちょっと座って休んでいる時もあるわ！」「ご家庭の様子はいかがですか？」と私は再び尋ねた。「とても順調ですよ、神父様

¹⁹ マタイによる福音書 10章22節。

²⁰ コニツァ——ギリシャ西部の小さな町。長老はそこで幼少期から青年期を過ごした。1958年から1960年にかけて、福者パイスイ長老はコニツァの近くにあるストミオン修道院で修行に励んだ。——訳者注

²¹ 若き日、長老パイシイは大工の技術を習得した。

！」と彼女は答えた。そして、それは心の底からの言葉だった。彼女は、夫が自分の楽器——それも高価な楽器を！——壊してしまうことなど全く気に留めていなかった。そのため、かわいそうな彼女は、家族の生計を立てるために、他人の家で働きに出ざるを得なかったのだ。ご覧の通り、彼女はすべてに対してどれほど忍耐強く、どれほど慈愛と高潔さをもって接していたことか！ 彼女は夫を少しも非難することさえなかったのだ！ だからこそ、神は彼女に恵みを注ぎ、彼女の顔は輝いていた。彼女は五人の子供を育て上げ、その五人全員が実に立派な人間に成長したのだ。

—ゲロンダ、彼女はどのようにして夫を擁護していたのですか？

「善意からだろう。『だって、この人は私の夫なのだから』と彼女は思った。『まあいいわ、少しは叱られても構わない。もしかすると、私が彼の立場だったら、同じように振る舞っていたかもしれない。』この女性は福音書を自分の生活に当てはめていたからこそ、神は彼女に神の恵みを授けてくださったのだ。世俗の人々でさえ耐え忍び、恵みに満たされるのなら、霊的生活を送るためのあらゆる条件を備えている私たち修道士は、どれほどもっと耐え忍ばなければならないことか！

私の理解する限り、最大のスキャンダル——それは家庭内だけでなく、国家の運営においても——は、些細なことから生じている。家庭においては、配偶者の一方がもう一方に謙虚な態度を示すべきであり、相手の美德を見習うだけでなく、その気まぐれにも耐えなければならない。こうした出来事に対してこのように向き合う上で、キリストが私たちの罪のためにご自身を犠牲にされたこと、そして、罪のない御方が私たち全員——何十億もの人々——を忍んでくださっているのに対し、私たちは他人の気まぐれに苦しめられながら、自らの罪の代償を償っているのだ、と考えることが大いに助けとなります。慈愛に満ちた神は、人が才能を持っていれば他者を助け、欠点があればその前に謙虚になるよう、すべてをそう定められました。何しろ、誰にでもそれぞれの才能があるからです。しかし、誰にでも欠点はあるものであり、それを断ち切るために努力しなければなりません。

ある男を、私は思い切り叱り飛ばした！ 彼の妻が、多くの能力や才能に恵まれているにもかかわらず、どれほど彼に従順であるか、あなたにも見てほしかった。のそばにいと、彼はまるで幼子のようなものだ。そして、この女性は夫に従うことで絶えず神の恵みを受け入れ、それを自分の霊的な貯金として積み立てている。一方、夫は自分の利己心によって絶えず神の恵みを遠ざけ、ますます空虚になっていく。結局、誰が得をするのだろうか？ お分かりでしょう。その秘密はすべて「謙遜」にあるのです。そこにすべての基盤があります。従順、謙遜。もしこの人が自分の弱さを認め、神に助けを求めていたなら、彼にも神の恵みが訪れたことでしょう。

忠実な妻

—ゲロンダ、ある女性が、どうすべきか私に助言を求めてきました。夫は彼女を捨て、子供を連れ去り、他の二人の女性と関係を持っています。

—彼女に、できる限り忍耐強くあり、祈りを捧げ、夫に対して親切に振る舞うよう伝えてください。待つ、自分から離婚を申し出ないようにさせてください。ある男性は妻を軽蔑し、殴り、傷つけましたが、妻はこれらすべてに忍耐と優しさをもって接し、比較的若いうちに亡くなりました。彼女の死後数年が経ち、遺骨を墓から掘り出した

とき、皆が芳香を感じた。²² その場に居合わせた人々は驚いた。ご覧の通り、この女性はすべてに忍耐強く接したからこそ、来世においてその行いが報われたのである。

もう一つ、似たような事例があった。世俗的な生活を送っていた若者が、霊的な生活を送っていた少女に想いを寄せるようになった。少女にその想いを報いてもらうため、彼もまた霊的な生活を送ろうと努め、教会に通うようになった。二人は結婚した。しかし、年月が経つにつれ、彼は以前の世俗的な生活に戻ってしまった。彼らにはすでに成人した子供たちがいた——長男は大学に通い、一人の娘はリセに、もう一人の娘はギムナジウムに通っていた。しかし、何があっても、この男は放蕩な生活を続けた。彼は大金を稼いでいたが、そのほとんどを自分の放蕩な生活に費やしていた。不幸な妻の儉約ぶりが家計の破綻を防ぎ、彼女の助言によって子供たちは正しい道を歩み続けることができた。彼女は、子供たちが父親に嫌悪感を抱いたり心の傷を負ったりしないように、また、彼が送っていたような生活様式に子供たちが影響を受けないように、父親を非難することはなかった。夫が深夜に帰宅したときは、子供たちに「仕事が忙しいから」と説明して、比較的容易に彼を擁護することができた。しかし、真昼間に愛人を連れて家に現れたとき、彼女に何と言えよよかったというのか？この神を恐れない男が、一体何をしていたかご存知だろうか？とはいえ、彼には人間らしさが全く欠けていたため、人間と呼ぶに値する存在ですらなかった。彼は妻に電話をかけて様々な料理を注文しておきながら、昼には愛人の一人と昼食を食べにやって来た。不運な母親は、子供たちを邪な考えから守りたいと願い、彼女たちを温かく迎え入れた。彼女は、夫の愛人をあたかも自分の友人であるかのように装い、夫は「友人」の家に立ち寄って、車で彼女を自宅へ連れてくるのだと説明していた。子供たちが不適切な場面を目撃しないよう、彼女は子供たちを別の部屋へ送り、宿題をさせようとした。というのも、夫は子供たちの存在を全く気にせず、子供たちの目の前でも下品な振る舞いを平然としていたからだ。これは毎日繰り返されていた。夫は次から次へと新しい愛人を連れて帰ってきた。ついには、子供たちが彼女に「ママ、友達って一体何人いるの？」と尋ねるようになった。「あら、ただの古い知り合いよ！」と彼女は答えた。それだけでなく、夫は彼女をメイドのように、いやそれ以下のように扱っていた。彼は彼女に対して非常に残酷で非人道的な振る舞いをした。この女性が、毎日、自分の家を不名誉で汚す二人の獣のような男たちに仕えながら、子供たちに常に善意を植え付けようとしていたことを、想像してみしてほしい！しかも、彼女にはこの苦難がいつか終わるという見込みすらなく、「、もう少し我慢しよう」と自分に言い聞かせて慰めることさえできなかった。この悪夢は数年も続いた。しかし、この忌まわしい男は悪魔に自分に対する多くの権限を与えてしまったため、恐ろしい悪魔的な影響を受け始めた。彼は狂人のように振る舞い始め、自制心を失い、あらゆる人や物事を責め立てた。そしてある日、肉欲の酩酊に酔いしれた彼は、車を猛スピードで走らせていたところ、断崖から転落してしまった。車は粉々に砕け散り、彼自身も非常に重傷を負った。彼は病院に運ばれ、医師たちはできる限りの処置を施した後、彼を自宅に帰した。彼は不自由な身となってしまった。愛人の誰一人として見舞いに来なかった。彼にはもはや大金もなく、顔もひどく傷ついていたからだ。しかし、優しい妻は、彼の放蕩な過去を一切持ち出さずに、献身的に彼の世話をした。彼は深く動揺し、それが彼の精神を改めさせた。彼は心から悔い改め、司祭を呼ぶよう頼み

²² ギリシャでは、故人の遺体は死後3～4年を経て墓から取り出され、清められてから特別な納骨堂に安置される。もし遺体が腐敗していなければ、再び墓に埋葬され、故人の安息を祈る祈りがさらに深められる。——訳者注

、懺悔を行い、数年間は内なる平安を保ちながらキリスト教徒として生き、主のもとで安らかに息を引き取った。彼の死後、長男が事業を引き継ぎ、家族を養った。この男性の子供たちは、母親から善良な生き方を受け継いでいたため、とても仲良く暮らしていた。この女性は、まさに英雄的な母親である。家族が崩壊するのを防ぎ、子供たちを深い悲しみから救うために、彼女は自らその苦難を背負った。彼女は家族の崩壊を防ぎ、夫を救い、そして自ら天の報いを得た。神は、この女性に天国で最高の場所を与えてくださるだろう。

崩壊した家庭の子どもたち

— ゲロンダ、もしある家庭で、夫が何らかの情欲を抱き、自分の過ちを認め、懺悔したものの、依然としてその情欲の影響を受け続け、妻に「私はあなたや子供たちを苦しめている。私が家を出て、あなたたちから離れて暮らし、あなたがたが苦しむことがないように金を送ったほうがよい」と言った場合、その妻はどうすべきでしょうか？

— もし夫が本当に自分の言っていることを本心から感じているのなら、それは彼が愛情深い証拠であり、妻はそれを耐え忍ぶべきだ。とはいえ、妻は聞いたことをすぐに鵜呑みにしないほうがよい。妻は、その本質をもっと深く見極めるべきだ。というのも、時にはこんなこともあるからだ。夫は、一見高潔なふりをして「あなたを苦しめないために去る」と言うが、実際には他の女性と関係を持ってしまい、逃げ出したいだけという場合もあるのだ。

結婚は、今日、私たちが目にするような状況に至り、その意味を失ってしまった。家族は、何の理由もなく崩壊している。数日前、私のカリヴァに、すっかり頭がおかしくなった男がやって来た。最初は、ある愛人との間に2人の子供がいた。その後、彼は別の愛人のもとへ去った。その女性は彼との間に子供を産んだが、彼は彼女と離婚した。その後、彼は3度目の結婚をした。3人目の妻も離婚歴があり、3人の子供を連れていた。最初の結婚で2人、婚外子として1人だ。この女性との間にも、さらに2人の子供が生まれた。「ちょっと待って、待って」と、私はその話を聞きながら彼を止めた。「これらの子供たちは、一体何人の母親から、そして何人の父親から生まれたんだ？」

こうして、哀れな子供たちは命を落としていく。中でも、感受性が鋭く、身に降りかかった不幸による動揺を乗り越えられない子供たちは絶望に陥り、中には自殺で命を絶つ者さえいる。また、現実逃避のために酒に手を出す者もいる。また、薬物に手を出す者もいる。一体どこから、これらすべてのお金を工面しているのだろうか？ヘロインの最小用量は4,000ドラクマだ。大容量なら6,000か7,000ドラクマになる。²³

これこそが、前の世代の自由奔放で放任された子供たちだ。では、自動離婚法によって両親が離婚した子供たちは、一体どうなってしまうのだろうか？この夏、私のカリヴァを通り過ぎた薬物使用の若者は、いったいどれほどいたことか！こうした不幸な若者たちの大半は、家庭が崩壊した家庭の子供たちだ。ある青年は27歳なのに、絶望の淵にあり、助けを求めてくる！知ってるか、家庭が崩壊した子供たちは、遠くからでも一目でわかるんだ。私のカリヴァのそばのベンチには、ルクムが入った瓶が置いてある。そんな若者たちがやってくると、瓶からルクムをひと口取り出して食べ始める。そして、私がカリヴァからポーチに出てくるのを見ると、まだお菓子を食べ終わっていないの

²³ 1990年に発表された。4000ギリシャ・ドラクマは、およそ12米ドルに相当する。——訳者注

に、すぐに駆け寄ってきて、私にキスをしようとするのだ。彼らの手はルクムの粉砂糖でベタベタなのに、私をすっかりベタベタにしてしまうのです！ これらの子供たちは、愛や優しさに恵まれていません。彼らにとって、両親がいるかないかは全く違いがありません。父親が家に帰ってくるか、出て行くか、一緒に暮らしているか、そうでないか——この不幸な子供たちにとっては、何も変わらないのです。

夫婦生活における「正しい」と「悪い」

私は、妻と不和な生活を送っている夫たちに対して、一部の告解司祭がこう言うことに気づきました。「我慢なさい。それがあなたに課せられた十字架なのです。どうしようもないことはありませんか？ その忍耐に対して、神は報いを与えてくださるだろう」と言うことに気づきました。その後、妻たちもその司祭のもとを訪れ、司祭は彼女たちにも同じことを言います。「耐えなさい、耐えなさい。そうすれば神から報いを受けられるから。」つまり、夫婦の双方が非がある場合でも、司祭は二人とも耐えるよう説得するのです。あるいは、夫婦の片方に非がある場合でも、告解司祭はその人に「我慢なさい、我慢なさい」と言う。こうして、家庭に平和がないことの原因となっている配偶者は、自分は相手に対して我慢しているかのように思い込み、自分の心をなだめているが、実際には毎日相手を苦しめているのである。

ある日、ある男が私の小屋を訪ねてきて、妻との生活がうまくいっていないと愚痴をこぼし始めた。彼らの家庭は離婚の気配が漂っていた。彼も妻も、お互いの顔を見るのも嫌だった。二人はともに教師で、子供は二人いた。家では決して一緒に食事をとらなかった。夫は授業が終わるとあるレストランへ、妻は別のレストランへ昼食を食べに行っていた。子供たちには適当なサンドイッチを買ってあげるだけだったが、かわいそうな子供たちは、両親が帰宅すると、パパとママが何を持って帰ってきたのか見ようと、ポケットやバッグを漁っていたのだ！ 子供たちは大きなドラマを味わっていたのだ！ その他にも、この男性は教会で歌っていたが、彼が歌っていたその教会には妻は通っていなかった——彼女は別の教会に通っていたのだ。それほどまでに、二人の間の反目は深かったのだ！ 「どうしようもないですね、神父様」と彼は私に言った。「私は大きな十字架を背負っています。とても大きなものです。うちでは毎日、大喧嘩が起きています。」「霊的指導者のところには行きましたか？」と私は彼に尋ねた。「はい、行きました」と彼は答えた。「霊的指導者は私にこう言いました。『耐えなさい、耐えなさい。あなたは大きな十字架を背負っているのです』と。」「さあ、」と私はその時彼に言った。「今こそ、誰が大きな十字架を背負っているのか見てみよう。最初から話を始めよう。結婚した当初も、これほど喧嘩していたのか？」「いいえ」と彼は答えた。「8年間、私たちはとても仲良く暮らしていました。私は妻を心から愛していました！ 神よりも彼女を崇拝していたほどです！ ところが、彼女は別人のようになってしまった！ 愚痴や小言、奇妙な振る舞いで私を苦しめ始めた……」聞いてくれ、一体どういうことなんだ！ 彼は神よりも妻を崇拝していたんだ！ 「さあ、」と私は言った。「こっちへおいで、君！ つまり、君は神よりも妻を崇拝していたということか？ じゃあ、君たちがこんな状態になってしまったのは、誰のせいなんだ？ 君か、それとも彼女か？ 神が君の妻から恵みを取り上げたのは、君のせいだ。」それから私は彼に尋ねた。「さて、これからどうするつもりだ？」「たぶん、離婚することになるだろう」と彼は言った。「もしかして」と私は尋ねた。「他に愛人がいるのか？」「ああ」と彼は答えた。「ある女性のところへ逃げようと思っているんだ。」「正気か！ と私は言った。「我に返れ！ すべ

ては自分自身のせいだと、本当にわからないのか？　まず何よりも、神よりも妻を崇拜してしまったことについて、神に許しを請わなければならない。それから妻のところへ行き、彼女に許しを請うのだ。『許してくれ。私たちの関係がこんな状態になってしまったこと、そして今、子供たちが苦しんでいること、すべては私のせいだ』と彼女に伝えなさい。それから、懺悔に行きなさい——そして、神を神として畏敬し、妻を妻として愛しなさい。そうすれば、すべてがうまくいくことがわかるでしょう。」私の叱責は彼にとって良い刺激となった。彼は泣き出し、私の助言に従うと約束した。　ほどなくして、彼は再び私のところへやって来た。その時はもう嬉しそうな様子で、「ありがとうございます、神父様。あなたは私たちの家族を救ってくださいました。私たち夫婦も、子供たちも、すべてが順調です」と言った。ほら、どうだ？　すべては自分自身のせいなのに、そのくせ「とても大きな十字架を背負っている」と思い込んでいるのだ！

そして、修道院にやって来て夫の愚痴をこぼす女性たちを、決して擁護してはいけません。私はそのような場合、夫も妻も擁護しません。それどころか、双方に深く考えさせるようにしています。　例えば、ある女性がこう愚痴り始める。「夫は酒を飲み、夜遅くに帰宅し、汚い言葉を使うの……」。「ねえ、」と私は彼女に助言する。「彼が夜、酔っ払って帰宅したときは、優しく接してあげて。　もし不機嫌な顔で出迎えて、『なんでこんなに遅いんだ？』『こんな時間に帰ってくるなんてあり得ないじゃない？』『いつになったら変わってくれるの？』『一体この苦しみは何なの？』『もう一日や二日じゃないんだから！』『一体いつまでこれを我慢し続けなきゃいけないの？』と小言を言い立てれば、悪魔は彼にこう囁くでしょう。「お前、頭がおかしいんじゃないか？　どうしてこの馬鹿女と別れないんだ？　どこかへ行って、他の誰かと楽しく過ごした方がましじゃないか？」つまり、あなたの言うことは正しいかもしれませんが、悪魔は別の角度から彼を誘惑するのです。　しかし、もしあなたが彼に優しく接し、今起きていることを少し我慢して、彼に不満をぶつけずに祈るなら、あなたから少しの温かさや光を感じた彼は、考え直し、改心するでしょう。」

すると、夫が帰ってきて、またいつもの文句を言い始める。「妻が俺を小言で責め立て、愚痴でうんざりさせるんだ……」。「ああ、あなたって本当に——」と私は言う。「恥知らずね！　子供たちや、苦勞の絶えない奥さんが真夜中まであなたを心待ちにしているのに、あなたは酔っ払って家に転がり込み、悪態をつき始めるなんて！　恥を知れ！　まさか、家族を苦しめるために結婚したわけじゃないだろう？」

しかし、夫も妻もどちらも正しい場合がある。ある時、巡礼者の一団が私のところへやって来て、私は彼らに、マクリアニスがどれほど貞潔な人物であったかを話した。²⁴ 彼は肉体的にも精神的にも清らかな人物だった。　それを聞いた聴衆の一人が飛び上がって叫んだ。「まさか、マクリアニスを聖人扱いするなんてありえない！」「なぜ、ありえないのですか？」と私が尋ねると、「彼は妻を殴っていたからです」と彼は答えた。「聞いてくれ」と私は言った。「彼と妻の間に何があったのか、説明してやろう。マクリアニスのポケットに少しのお金が入り、子供連れの未亡人が彼を訪ねてくると、彼はその女性に金を渡していた。彼の不運な妻は不平を漏らし、彼を責め立て始めた。『あなたには自分の子供がいるじゃない。なぜあの人に金を渡したの？』すると彼は彼女を

²⁴ マクリアニス・イオアニス（1797-1864）——少将、エラダの国民的英雄。ギリシャ革命（1821-1830）の時代、トルコに対する最も献身的な闘士の一人。革命と解放闘争に関する『回想録』の著者。イ・マクリアニスの生涯は、神、隣人、そして祖国に対する、犠牲的なキリスト教的愛の素晴らしい模範である。——訳者注

平手打ちし、『君には、君を養ってくれる夫がいる。でも、この可哀想な人には夫がない。誰が彼女の面倒を見るんだ？』と言った。つまり、マクリアニスも、彼の妻も、どちらも正しかったのだ。」

さらに、もし夫婦の一方が霊的な生活を送っているならば、たとえその人が正しいとしても、正しいと主張する「権利」はない。なぜなら、霊的な人間である以上、その人は不正に対して霊的な態度で臨まなければならないからだ。つまり、神の正義が求める通りに、あらゆる事柄に対処しなければならない。その人は、相手に安らぎをもたらすことを目指すべきである。なぜなら、もし誰かが弱さゆえに過ちを犯したとしても、その人には罪を軽減する事情があるからだ。しかし、もう一方——より優れた霊的な状態にあるにもかかわらず、前者に対して理解を示さず、歩み寄ろうともしない者——は、はるかに大きな罪を犯していることになる。たとえ霊的な人々が、すべてを世俗的な視点——世俗的かつ人間的な正義の立場——から捉えるようになったとしても、それは何をもたらすだろうか？ それは、彼らが絶えず世俗の裁判所を駆け回るようになるということだ。人々が苦しんでいるのは、まさにこのためである。

第2部。 親とその責務について

「子どもを産み、その肉体を与える親は、可能な限り、その精神的な再生をも助けるべきである」

第1章。 子供の誕生について

聖ヨアキムと聖アンナ——最も無私の夫婦

— ゲロンダ、聖アンナと聖ヨアキム、すなわち神の父たちについて、何かお話してください。以前、一度、彼らについて話し始められたことがありましたね……

— 幼い頃から、私は聖なる神の両親に対して深い敬意を抱いていました。修道生活に入る際、ヨアキムという名を与えられるよう願いさえしました。私たちは彼らにどれほど多くの恩義を負っていることでしょう！ 聖ヨアキムと聖アンナは、かつて存在した中で最も無私の夫婦でした。彼らには世俗的な思惑が微塵もありませんでした。

まさにそのように、神は人間を創造された。そして神は、人々も同様に——情熱を排して——生まれることを望まれていた。しかし、墮落の後、男女の関係に情熱が生まれた。そして、神が人間を創造された通り、また神の御計画において人間の誕生が本来あるべき姿であるような、情熱のない夫婦が現れるやいなや、聖母マリア——この清らかな被造物——が誕生し、その後、彼女からキリストが受肉されたのである。私の思い

では、もし聖ヨアキムと聖アンナのような、清く貞潔な夫婦がもっと早くこの世に現れていたなら、キリストはもっと早くこの世に来られたのではないかと。

ローマ・カトリック教徒たちは迷信に陥っている。彼らは、敬虔さゆえに、神の母が原罪を持たずに生まれたと信じている。しかし、彼女は原罪から解放されたわけではなく、創造の後、神が人々に望まれた通りの方法で生まれたのである。聖母が「全き清き方（All-Pure）」、すなわち「無原罪の御母（²⁵）」であったのは、その受胎が性的行為なしに行われたからである。聖なる神の父たちは、神に子供を授けてくださるよう熱心に祈った。そして、その祈りの後、彼らは「夫婦として」結ばれた——肉欲によるのではなく、神への従順によるものであった。私はシナイ山で体験したある奇跡的な出来事を通じて、このことを確信した。²⁶

結婚生活における節制

神は「すべての良いものを極めて多く造られた」。²⁷ 男性は女性に対して、女性は男性に対して、自然な惹かれ合いを感じる。もしこの惹かれ合いがなければ、誰も家族を築こうとは決して思わなかっただろう。人々は、その後家庭で待ち受ける困難、子育てやその他の家庭の事柄に関連する困難について考え、それゆえ結婚に踏み切ることができなかっただろう。

原初の人々が墮落した後、ある人々は世俗的な思索を5パーセントほど持ち、またある人々は10パーセント、30パーセントと、その割合は様々である。しかし、今日、世俗的な思慮がわずか5パーセントしかない人々——つまり、純粹で清らかな思慮を持つ人々——をどこで見つけられるだろうか！ とはいえ、いずれにせよ、すべての人には、神から無執着に達する機会が与えられている——もし彼らが誠実な努力を払うならば。

家庭生活という道を選んだからといって、既婚者が「人間は肉体だけではなく、霊でもある」という事実を忘れてよいという言い訳にはなりません。このことを忘れて、自分自身〔、自分の情欲〕を抑制せずに放任してはならない。²⁸ 夫婦は、肉体を霊に従

²⁵ 聖母マリアの受胎と降誕は、処女懐胎ではなく、自然なものでした。「彼女は『全き清き方』であった」のは、聖ヨハネス・ダマスコスが『我らの主なる聖母マリア、永遠の処女の降誕に関する説教』の中で述べているように、彼女が「貞潔に」受胎したからに他なりません。しかし、彼女ご自身も、その修行によって両親から受け継いだ聖性をさらに高め、「あらゆる余分な、そして魂を傷つけるような思いが、それを味わう前に」それを退けていたのです（PG 96, 669 A, 676 B 参照）。

²⁶ 1962年から1964年にかけて、長老パイシイはシナイ山にある聖エピステイミオスと聖ガラクティオンの修道院で修行に励んだ。彼が言及したその奇跡的な出来事がどのようなものであったかについては、彼は私たちに明かさなかった。

²⁷ 創世記1章31節を参照。

²⁸ 長老パイシイは、ある手紙の中で夫婦関係について次のように記している。「あなたは、既婚の司祭や信徒の夫婦関係について私に尋ねている。聖なる教父たちは、こうした関係がどのように築かれるべきかについて、明確な定義を示していない。これは、すべての人々が同じ型にはまって生きることができないため、夫婦関係というテーマは明確に定義できないことを意味する。夫婦関係という問題は、教父たちによって、各人の判断、愛の心、霊的な感受性、そして力に委ねられているのだ。より分かりやすくするために、献身的に信仰生活を送る人々——既婚の司祭や信徒——の生活例を挙げてみたい。これらの人々は今も健在であり、私は彼らと面識がある。その中には、家庭を築き、夫婦の親密な関係を持ち、1人、2人、あるいは3人の子供をもうけた後、貞潔な生活を送っている者もいる。また、子供を授かるために年に一度だけ夫婦の親密な関係を持ち、それ以外の期間は兄弟姉妹のように生活している人々もいます。さらに、断食期間中は夫婦の関係を控え、その後で親密な関係を持つ人々もいます。そして、これらさえも守ることができない人々もいます。週の半ばに夫婦の交わりを持つ夫婦もあり、聖体拝領の3日前から3日後まで清らかな状態を保つためである。しかし、この点でつまづく者もいる。それゆえ、復活後、使徒たちの前に現れたキリストは、彼らに罪を赦す権能を与えた際、まずこう言われた。「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたが

わせるために奮闘しなければならない。もし夫婦が霊的指導者の導きのもとで霊的に生きようと努めるならば、次第に彼らはより高次の喜び——霊的な、天上の喜び——を味わうようになるだろう。もはや肉欲的な喜びを求めることはなくなるだろう。夫婦は、肉欲的な情熱を子供たちに受け継がせないよう、節制に励まなければならない。もし両親が極めて肉欲的な思惑に囚われているならば、その子供は幼い頃から同様の傾向を示すことになる。これは、子供が両親から肉欲的な思惑を受け継ぐためである。当初、親から受け継いだあらゆる情欲と同様に、肉欲的な思考もまだ穏やかで、柔らかく、まるで火傷をさせない若いイラクサのようで、その葉を簡単に手に取ることができる。しかし、成長するにつれて、その葉は刺すような痛みを伴うようになる。肉欲的な思索も同様で、最初は分別のある良き霊的指導者によって癒やされるかもしれない。しかし、若いうちに世俗的な思索を切り捨てなければ、大人になった時には、それを断ち切るために並大抵ではない努力が必要となるだろう。

子どもの誕生に関する神の御心についての、人間の論理

私のもとを訪れる夫婦は、しばしば子供を持つことに関する不安を打ち明け、私の意見を尋ねてきます。1人か2人の子供を持ちたいと考える夫婦もいれば、大家族を築きたいと願う夫婦もいます。しかし、子供を持つという問題を神に委ねるのが最善です。夫婦は、自分たちの生活を神の摂理に委ね、自分たちで計画を立ててはなりません。天の鳥さえも顧みてくださる神が、自分たちの子供たちに対しては、はるかに大きな配慮を示してくださると信じるべきです。18歳の時に結婚したある船乗りのことを覚えてい

たを遣わす……聖霊を受けなさい。あなたがたが誰の罪でも赦せば、その罪は赦され、あなたがたが誰の罪でも留めておけば、その罪は留められる」。その目的は、各人が自分の霊的な力に応じて、分別と愛をもって精進することにある。もちろん、最初は若さが妨げとなります。しかし、時が経つにつれて肉体は衰え、霊が支配的な立場を占めるようになります。そして、それが起こると、既婚者でさえも、神の喜びをわずかながら味わうようになります。彼らは自然な道筋をたどり、もはや全く取るに足らないものと見なすようになった肉欲の喜びから離れていくのです。こうして、結婚生活を送る人々は、ある意味で清められ、軽やかで緩やかでうねるような小道を登りながら、樂園へと至る。一方、修道士たちは、岩場をよじ登るように、垂直にまっすぐ進みながら樂園へと昇っていくのである。また、夫婦関係の問題はあなただけの問題ではなく、あなた一人でこの問題を決定する権利はないということ、そして使徒パウロが書いているように、「互いの合意のもとで」解決すべきであることも心に留めておくべきだ。しかし、夫婦が「互いの合意のもとで」この[節制]に取り組む場合でも、注意が必要である。強い方の配偶者は、弱い方の立場に立って考えるべきです。よくあることですが、片方が相手を悲しませないために禁欲に同意するものの、内心では苦しんでいるのです。こうしたことは、ある程度神を畏れる心を持っているものの、肉欲に翻弄されてしまう女性によく見られます。また、思慮に欠ける敬虔な夫の中には、妻から同意の言葉を聞いただけで、軽率にも長期間にわたり夫婦の関係を控えてしまう人が少なくありません。その場合、妻たちは苦しみ、神経衰弱などでその鬱憤を晴らそうとする。夫たちは、妻たちが徳を積んでより清らかに生きたいと願い、より長い期間を空けて親密な関係を持つようになっているのだと考える。そしてやがて妻たちは誘惑に駆られ、外部の相手を探そうとするようになる。過ちを犯してしまうと、妻たちは良心の呵責に苛まれるようになるが、夫たちは、妻が（夫婦関係に）乗り気ではないのを見て、さらに清らかな生活を送ろうと努める。彼らは、妻たちが精神的に成長し、肉体的関係を望んでいないのだと考えているのだ。もちろん、これらすべての原因は、説明のつかない女性の利己心と、自分に欠点があると感じて抱く嫉妬にある。夫が精神的な生活を送ろうとしているのを見て、妻は夫に追いつこうと、自分を追い詰めてしまうのだ。他人の領域に踏み込んでしまい、申し訳ありません。修道士の仕事は数珠を数えることであって、このような話題を扱うことではないからです。しかし、あなたを悲しませないために、私は（遠くから知っていることではありませんが）このことについて少し書くことを余儀なくされました。それは、世俗にいる私たちの兄弟姉妹を苦しめ、敵に（彼らに対して）行動する機会を与えている問題についてです。夫婦が気質や性格において互いに似ているかどうかは、非常に重要な意味を持ちます。夫婦の一方が穏やかな人であり、もう一方が活発でエネルギッシュな人である場合、より強い方が弱い方のために自分を犠牲にしなければなりません。そうして徐々に、強い方の助けによって、弱い方も健全になっていく。そして、健全になった二人は共に前進していかなければならない。」（D. タツイス著『ゲロンタス・パイシオス』コニツァ、1995年、176—178頁より。）

ます。彼自身も貧しく、相手も貧しい家庭の娘でした。二人はある地下室を借りて、そこでひっそりと暮らしていました。妻も低賃金の仕事しかなく、二人は非常に質素な生活を送っていました。想像してみてください。彼らの家には食卓の代わりに、たまたま運よく買えた桃の箱が置かれていたのです！その後、子供たちが生まれました。子供たちを育てるために、二人は食うや食わずの生活を送りました。しかし、次第に彼らは裕福になり、豊かな生活を送るようになったのです。

まず他のあらゆる問題を整理しようと努め、その後ようやく子供のことを考え始める夫婦がいます。そのような人々は、神の存在をまったく考慮に入れていません。一方、別の夫婦はこう言います。「今の生活は楽じゃない。子供は一人だけで十分だ。たった一人を育てるだけでも大変なのに！」と言って、それ以上子供を産みません。こうした人々は、神を信頼せずにそのような考えを持つことが、どれほど罪深いことなのか理解していません。神は「憐れみ深い」お方です。もし夫婦が子供を育てる力がもうないとお見受けになれば、神は容易に彼らに子供を与えなくなるでしょう。

多くの人が、子供を産み、キリスト教の精神に基づいて育てることこそが「夫婦生活の」目的であるべきだということを考えもせずに、結婚を望んでいます。人々は、手間がかかるのを避けるために多くの子供を持つことを望まず、その一方で、自分のアパートで犬や猫を飼っています。最近、アメリカでは²⁹ 犬のかわりに、非常に高価な品種の豚を家で飼っている人がいると聞いた。これらの豚は小さく育ち、大きくならない。アパートで飼えるように、特別に品種改良されたものだ。人々は、子供を洗ったり世話をしたりするのが面倒だから、子供を持ちたがらない。では、子豚は洗わないというのか？犬ならまだしも——少なくとも番犬にはなる。だが、家の中で豚を飼うなんて！恐ろしい話だ！オーストラリアにいた時、³⁰ 犬や猫のための「老人ホーム」を見ました。そこには動物用の墓地まであったのです！このままいけば、人々は猫に与えるためにネズミを飼育して缶詰にし、犬に与えるためにウサギや野ウサギを飼育して缶詰にするようになるでしょう！その一方で、他の人々は飢えで死んでいくことになるでしょう。そして考えてみてください。もし誰かが犬を殺したら、人間を殺した場合よりも高い罰金を科される可能性さえあります（もちろん、その犬が誰の所有物だったかにもよりますが）。一体、私たちはどこまで来てしまったのでしょうか！... 現代では、人間の命は犬の命よりも安くなっている。私は、一部の霊的指導者たちが口にする言葉に驚かされる。ある時、巡礼者たちが私のカリヴァを訪れ、こう尋ねてきた。「ゲロンダ、聖ヨハネス・クラマトリオスは、夫婦は子供を産んではならないとどこかに書いているのですか？」「一体、何を言っているのですか？」と私は驚いた。「どこでそんな話を聞いたのですか？」「ええ、あの神父さんが私たちにそう言ったんです」と彼らは言いました。その神父に会った際、私は彼に尋ねました。「まさか、本当にそんなことを言ったのですか？」「はい」と彼は答えました。「一体どこでそんなことを読んだんだ？」——「聖ヨハネス・クラマトルスは、その『貞潔に関する説教』の中でそう述べている」と彼は答えた。「ちょっと待ってくれ」と私は彼に言った。「私は聖ヨハネス・クラマトルスの著作でそんなことは読んだことがないが、聖人がそんなことを言うはずがない。聖

²⁹ 1990年11月に語られた。

³⁰ 1977年、教会の招きにより、長老はオーストラリアを訪れ、そこに住む正教会のギリシャ人たちに霊的な助けを与えた。

人は別のことを意味しているに違いない。その本を持ってきて、そこに何が書かれているか見てみよう。」彼は本を持ってきて、その箇所を指し示した。読み始めると、聖人は次のように書いているのがわかった。「今や人口は増え、あなた方にも貞潔に生きる機会がある。これは、かつて人々が子孫を残さなければならなかった時代とは異なる。」³¹ つまり、聖人は「子供を産んではいけない」とは言っていません。しかし、この神父は自分の主張を譲りませんでした。神学の教育を受けた司祭でありながら、こんな戯言を吐くとは！彼は、博識な人物であるかのように見せかけ、自分がヨハネス・クラマティオスの神学的遺産の研究者であることをアピールし、人々に自分を立派な霊的指導者だと認めさせたいのです。自分の心を落ち着かせたいと願う人々に、こうした歪んだ解釈がどれほどの害をもたらすか、お分かりでしょうか？

世俗的な生き方をしている多くの人々にとって、今日の家族には意味が見出せない。そのため、そうした人々は結婚しないか、あるいは結婚しても子作りを避けたり、中絶によって子供を殺したりして、こうして自らその血筋を絶やしている。つまり、人々を滅ぼしているのは神ではなく、人々自身が自らを滅ぼしているのだ。一方、信仰を持ち、神の戒めを守る人々は、神の恵みを受け入れています。なぜなら、神は——そう表現しても差し支えないならば——私たちが経験しているこの困難な時代において、彼らを助ける義務を負っているからです。私たちは、家族を持ち、神がどれほど多くの子供を授けても、その子供たちを神への畏れをもって育てているクリスチャンたちを見ます。そして、[そのような親の]子供たちは皆、心のバランスが取れており、喜びに満ちています。これらの子供たちは神の祝福そのものです。彼らは善良で勤勉な人間に成長していきます。私たちはいつも「この世界はどうなってしまうのか」と言っていますが、同時に、神の恵みによって、今まさに力をつけ、成長しつつある善良な世代を目の当たりにしています。悪魔はすべてを破壊しようと努めていますが、慈愛に満ちた神もまた、御業をなしておられます。神は、私たちの民が地上の面から消え去ることを決して許されません。

出産に関する困難

— ゲロンダ、正教徒ではない女性が子供に恵まれていない場合、彼女が願い出れば、聖アルセニオス・カッパドキアスの聖遺物に十字架の形に当てて祝福した帯を、祝福として彼女に与えることは許されるでしょうか？³²

— 彼女は聖人の力を信じているのでしょうか、それとも魔術的な方法で助けを得たいと思っているのでしょうか？ もし信じているのであれば、そのような帯を身につけても構いません。

不妊に悩む女性の中には、結婚すべき時期に結婚しなかった人もおり、そのため現在、彼女たちには霊的な法則が働いている。³³ 気難しい女性の中には、結婚相手を選ぶ際に「いや、この人は好きじゃない、あの人も好みじゃない」と言い出す人もいます。ある男性に結婚を約束しておきながら、そのような女性は同時に別の男性にも目を向け、

³¹ 参照：聖ヨハネス・クラマトルス『貞潔について』17、PG 48、546。

³² カッパドキアの聖アルセニオスの伝記には、不妊の場合、聖人がある紐を祝福し、それを不妊の女性に与えて腰に巻かせ、それによって不妊が解消されたと記されている。長老は、そのような場合、聖アルセニオスの聖遺物にリボン状の帯を十字の形に当て、それを不妊の女性に渡し、身につけてもらうようにと語っていた。

³³ 霊的な法則については、本書第5部第4章を参照のこと。

その後最初の男性に「ノー」と言う。すると彼は自殺を図ろうとするが、結婚する前、少なくとも結婚した後ではなく、彼女が自分を騙してくれたことを祝福と捉えるべきなのに。 えーと、そんな女性がどんな家庭を築くのでしょうか？ また、若い頃に無節操で罪深い生活を送ったために不妊になってしまった女性もいます。さらに、多くの食品には大量の化学物質やホルモンが含まれているため、不妊の原因が不適切な食事にあるというケースもあります。

結婚するとすぐに子供を持ちたいと願う夫婦もいます。そして、子供の誕生が遅れると、彼らは不安や心配を抱き始めます。 しかし、自分たちが不安や心の動揺に満ちている状態で、どうやって子供を授かることができるのでしょうか？ 不安や心の動揺を自分の中から追い払い、人生を正しい精神的な軌道に乗せたとき、初めて子供を授かることができるのです。

時には、神は意図的に時間をかけ、ある夫婦に子供を授けないことがあります。考えてみてください。聖なる神の父ヨアキムとアンナ、そして聖なる預言者ザカリアとエリサベトにも、神は人々の救いという永遠の御計画を成就させるために、老いてから子供を授けられたのです。

夫婦は常に、神の御心を自分の人生に受け入れる準備をしておかなければなりません。神は、信頼して自分自身を神に委ねる人を決して見捨てません。私たちは何もしていないのに、神は私たちのためにどれほど多くのことをしてくださるでしょう！ 神はどれほど深い愛と寛大さをもって、私たちにすべてを与えてくださるのでしょうか！ 神にとって不可能なことなど、果たしてあるのでしょうか。ある夫婦には5人の子供がいましたが、子供たちは成人すると、それぞれ自分の家庭を築き、親元を離れていきました。父と母は二人きりになりました。そこで二人は、老後にそばにいてくれるようにと、もう一人子供をもうけることに決めました。 妻はすでに妊娠が不可能な年齢であり、人間的に見ればその願いは叶うはずがないように思えました。しかし、それにもかかわらず、夫婦は神への深い信仰を持ち続け、やがて息子を授かりました。その子は、老後の彼らにとっての慰めとなりました。そして、その子もまた、彼らは立派に育て上げ、社会で自立できるように導いたのです。

子供の誕生は、人間だけによるものではありません。それは神にもよるのです。子供を授かることに困難を抱える夫婦に謙虚さを見いだしたとき、神は彼らに子供を授けるだけでなく、多くの子供に恵まれるようにしてくださることもあります。 しかし、夫婦に執拗さや利己心が見られる場合〔神は彼らの願いを叶えられません。なぜなら〕、子供を授かるという願いを叶えてしまえば、彼らの執拗さや利己心を助長することになってしまうからです。 夫婦は全身全霊で神に身を委ねなければなりません。彼らはこう言うべきです。「わが神よ、あなたは私たちの幸福を願っておられます。『御心が行われますように』」³⁴。そうすれば、彼らの願いは叶うでしょう。 なぜなら、神の御心は、私たちが「御心が行われますように」と言い、神への信頼をもって自分自身を神に委ねるときに実現するからです。しかし、私たちは「御心が行われますように」と言いながらも、同時に自分の意志を押し通そうとしています。それでは、このような場合、神は私たちのために何をしてくださるのでしょうか？

³⁴ マタイによる福音書 6章10節。

夫婦の不妊

— ゲロンダ、ある夫婦が私たちに相談に来ました。夫も妻も、潜在的なサラセミアの症状を持っています。この夫婦は、子供を持つべきかどうかを尋ねてきました。私たちは、彼らの霊的指導者に相談するよう勧めました。

— 霊的指導者は、そのような夫婦に子供を持つことを禁じることはできません。霊的指導者は、そのような夫婦に貞潔の心を育み、彼らが節制に励むよう導かなければなりません。そして、理にかなった判断のもと、彼らに対して寛容であるべきです。

— ゲロンダ、非常に霊的な生活を送り、子供を授かりたいと願っているにもかかわらず、それが叶わない夫婦がいます。

— 神は多くの人々に子供を与えないことがあります。それは、その人々が世界中の子供たちを自分の子供のように愛し、彼らの霊的な再生を助けるためなのです。ある男性には子供がいなかったのですが、彼が家を出ると、近所の子供たちが駆け寄ってきて、愛情を込めて彼を取り囲みました。子供たちは、彼が仕事に行くのを許そうとしました。お分かりでしょう。神はこの人に自分の子供を与えなかったが、近所の子供たちが皆、彼を父親のように愛し、彼が独自の方法で子供たちの霊的な成長を助けるという祝福を与えたのです。神の裁きは計り知れない深みです。

また、他のケースでは、神は夫婦に子供を与えず、代わりに孤児を引き取らせることもあります。私は、ある心優しいクリスチャンの弁護士と知り合いました。ある時、彼が住んでいたの街を訪れた際、彼の家を訪ねました。彼はとても温かく迎えてくれ、私は一晩、彼の家に泊まらせてもらいました。私は彼の奥さんとも知り合った。彼女は徳の点で夫に似ていた。彼女からは、夫がどのような霊的な生活を送っているかを聞き、夫からは、妻がどのような霊的な状態にあるかを聞いた。

その後、私は、彼らを知っており、彼らから様々な恩恵を受けていた他のクリスチャンたちから、この人々のことを知りました。この神の人は、誠実に弁護士業に従事していました。被告人が実際に詐欺師であることを見抜くと、彼はその弁護を引き受けるどころか、彼を正気に戻すために厳しく非難したのです。その人が有罪ではあるものの悔い改めの心を持っていると分かると、彼はその事件を和解に導こうとしたり、より軽い判決が下されるよう尽力したりした。ある貧しい人に対して不当な告発が向けられているのを見ると、彼は完全に無償でその人の弁護に立ち、法廷でその不幸な人を無罪にしようと努めた。この人は非常に質素に暮らしていたため、稼いだわずかなお金で生活費を賄うだけでなく、貧しい家族を助ける余裕さえあった。この信仰深い弁護士の家は、彼が住んでいた街という〔精神的な〕サハラ砂漠の中で、まさに精神的なオアシスだった。そこには、苦しむ人々、貧しい人々、失業者が集まり、家庭に問題を抱えた人々も訪れていた。そして彼は、こうした不幸な人々すべてを助け、慈愛に満ちた父親のように彼らを支えた。この男性には、要職に就いている知人がいた。彼らは彼を愛し、尊敬していたため、彼が貧しい人の何らかの問題や病気の手助けをするために、その高位の知人に電話をかけると、誰も断ることはなかった。彼の妻も同様に尽力していました。彼女は、学費を工面できない貧しい子供たちや若者たちを助けていました。彼女は彼らにとって、まるで実の母親のような存在でした。しかし、私との会話の中で、この女性はふとこう漏らしました。「結婚する前、神父様、私は高校で教えていました。結婚直後に、良い母親になろうと決心して仕事を辞めました。私はキリストに、たとえ二十人でも構わないからたくさんの子供を授けてくださるようお願いしましたが、残念ながら、

一人も授かりませんでした。」そこで私は彼女にこう答えました。「あなたには、姉妹よ、五百人以上の子供たちがいます。それなのに、まだ不満を言うのですか？ キリストはあなたの善意を見抜いておられます。そして、その善意に対して報いてくださるでしょう。今、これほど多くの子供たちの霊的再生を助けているあなたは、他の多くの母親よりも優れた母親なのです。あなたは、子供をたくさん持つ母親たちさえも凌駕しているのです！ そして、あなたが受け取る報いも、はるかに大きなものとなるでしょう。なぜなら、霊的に再生された子供たちは、永遠の命における自らの未来を霊的に確かなものにしているからです。」その他にも、この夫婦はある少女を養女として迎え、自分たちの全財産をその少女の名義に譲り渡しました。養女は、彼らの老後の世話をし、彼らを葬った後、修道院に入りました。しかし、この人々の家も、まさに修道院そのものでした！ そこではあらゆる教会の礼拝が行われていました。晩課や晩祷では、キリストにある他の兄弟姉妹たちも彼らと共に祈り、深夜の祈りと早課は三人で唱えていました。この祝福された人々は、多くの苦しむ人々を助けました。神が彼らの魂をも安らかにしてくださいますように。

だからこそ、私はこう言うのです。最も素晴らしく、最も多くの子供を持つ父親とは、霊的に再生し、世界中の子供たちが天国で魂の未来を確かなものにするために、彼らの霊的な再生を助ける人なのです。

— ゲロンダ、不妊に悩む夫婦の中には、赤ちゃんを養子に迎えることを考えている人もいます。

— はい、そのような人々は子供を養子に迎えるほうがよいでしょう。自分の子供を産みたいという願望に「利己的に」固執する必要はありません。人の願いと神の御心は、必ずしも一致するとは限りません。

— ゲロンダ、養親は、子供が一定の年齢に達した際、その子に自分が養子として迎えられたことを伝えるべきでしょうか？

— 子どもがもう少し大きくなってから、そのことを伝えるのが良いでしょう。しかし、何よりも大切なのは、養親がその子を深く、そして正しく愛することです。実の父親や母親よりも、見知らぬ人をより愛してしまう子どもたちがいます。それは、実の親から愛を受けていないからです。

多子家庭

神は特に多子家庭を愛しておられます。神はそうした家庭に特別な配慮を注いでおられます。大家族では、親が正しく子育てをするという条件のもと、子供たちが健やかに成長するための多くの好機が与えられます。多子家庭では、一人の子供が別の子供を助けます。長女は母親を手伝い、次子は末っ子の面倒を見る、といった具合です。つまり、こうした子供たちは互いに献身し合い、犠牲と愛に満ちた雰囲気の中で暮らしています。末っ子は年上の兄弟を愛し、尊敬します。愛と尊敬は、多子家庭において自然に育まれていくのです。

したがって、家族に子供が1人か2人しかいない場合、親は子育ての仕方に細心の注意を払う必要があります。通常、[こうした子供の少ない家庭では]、親は子供たちが何不自由なく過ごせるよう努めます。そのような子供たちは望むものは何でも手に入れ、その結果、何事にも適応できないまま成長してしまいます。例えば、裕福な両親のひとり娘を例に挙げてみましょう。彼女にはメイドがいて、食事の支度をしたり、部屋を片付

けたり、必要な家事をすべてこなしてくれます。メイドはその仕事に対して報酬を受け取るが、同時に他者に役立っているため、[徳]を磨いている。一方、彼女に仕えられているその娘は、いかなる犠牲の精神も学ばないまま、「切り株」のような、未開の人間として留まってしまう。私は若者たちに、多子家庭の娘と結婚するよう勧める。なぜなら、貧しい環境で育った子供たちは、犠牲を払うことに慣れ、常に両親をどう助けるかを考えているからだ。一方、何不自由なく育った子供たちには、そのようなことはめったに起こらない。

しかし、多子家庭では子供たちだけでなく、親たちも心優しいのです。占領下³⁵、近所の家の一つで、ある幼い子が完全な孤児になってしまったことを覚えています。10人の子供を抱える貧しい一家の家長は、その不運な孤児を憐れみ、自分の家に引き取り、実の子供たちと一緒に育て上げました。そして、その後、神様がこの人にどれほどの祝福をお与えになったか、ご存じでしょうか！これほど慈愛に満ちた人を、神様が助けずに放っておくことなどあり得るでしょうか？

子供が多い人は、最初は困難に直面することもあるでしょう。しかし、神はそのような人を見捨てたりはしません。ある出来事についてお話ししましょう。ある時、6人の子供を持つ一家の父親が、自分が借りている家の大家の心を和らげ、路頭に迷わされないよう、私に祈ってほしいと頼んできました。残念ながら、2人家族で、家の中や周辺に排泄物を散らかす犬や猫を5匹も飼っているような人々に家を貸している大家の多くは、子供たちが自分の家を台無しにするのではないかと恐れて、多子家庭には家を貸したがりません。そして、この不幸な多子家庭の父親は、もはや疲れ果ててしまった。ある大家は彼を家から追い出し、別の大家はそもそも部屋を貸すことを拒否したため、彼は子供たちや荷物を抱えて家から家へと転々とするしかなかった。家族を養うために、この男性は休む間もなく働いていた。家賃について大家と値切り交渉をすることもなかった——大家がただ数年間その家に住むことを許し、絶え間ない引っ越しから一息つけるだけで、彼にとっては十分だったのだ。その話を聞いたとき、私は彼のことを思うと胸が痛んだ。「落ち込まないで」と私は彼に言った。「神様はあなたの子供たちのことも見守ってくださっている。何しろ神様は、子供たちに最も大切なもの——魂——を与えてくださる創造主だ。一方、あなたと奥さんは、神様の共同創造者として、子供たちに肉体を与えている。したがって、神様はあなたたち自身よりも、もっと子供たちのことを気にかけておられるのだ。」2、3ヶ月も経たないうちに、その男性は嬉しそうに再び私のところへやって来て、こう言いました。「神に感謝します。神様が私に家を授けてくださり、お金もたくさん残っています。」私は彼に何が起きたのか尋ねると、彼は次のように話してくれました。「自分の村へ帰る途中、バス停でバスを待っていました。すると、宝くじの売り子が近づいてきて、宝くじを買わないかと勧めてきました。私はクリスチャンなので、宝くじは買わないという原則を貫いています。ですから、断りました。しかし、彼が立ち去ろうとするのを見て、もしかするとこの人は切実に困っているのかもしれない、と考えた。そこで、私は再び彼を呼び止め、宝くじ1枚分の代金を支払おうとお金を取り出したが、実際にはそのくじ自体は受け取らないつもりだった。ところが、その売り手は正直な人だったため、ただで金を受け取ることを拒んだ。そこで私もがっかりし、彼を助けたいと思い、こう言った。「まあ、いいや、1枚くれ。もしかしたら、俺が必要になるかもしれないから。」「この人に少しでも喜びを与えてあ

³⁵ 1941年から1944年にかけてのギリシャのドイツ、イタリア、ブルガリアによる占領。——訳者注

げよう——と私は思った——まあ、自分の『ティピコン』を破って、少しがっかりしたとしても、大したことじゃない。」そして、私が買ったその宝くじは当選した。私は大金を当てて家を購入し、さらに子供たちを育てるための資金も残った。そして、その宝くじ売り場の店主がどこに住んでいるかを知ると、私はこっそりと彼の家を訪れ、郵便受けに多額の現金が入った封筒を置いてきた。もしこのお金を直接手渡していたら、彼は受け取らなかっただろうと分かっていたのです。」誠実な人々の中で、神の愛がいかに働くかというのは、実に驚くべきことです！

中絶は恐ろしい罪である

— ゲロンダ、40歳の女性で、成人した子供を持つ母親が妊娠し、現在すでに妊娠3ヶ月です。彼女の夫は中絶を強く求め、そうしなければ離婚すると脅しています。

— もし彼女が中絶をすれば、その代償を払うのは彼女の他の子供たちであり、病気や事故という形で現れるだろう。今日、親たちは中絶によって自分の子供たちを殺し、神の祝福を失っている。昔なら、病気の赤ん坊が生まれたとしても、洗礼を授けられ、天使のように安らかに息を引き取っていたものだ。そして、その子の死後の行方を心配する理由などなかった。両親には他の——丈夫な——子供たちが残され、それとともに神の祝福も両親と共にあった。しかし今では、両親は丈夫な子供たちを中絶によって殺し、病気の子供たちを無理やりこの世に留めようとしている。両親は、病気の子供たちを治すためにイギリスやアメリカを駆け回っている。こうして、世代を重ねるごとに、子供たちはますます不健康な状態で生まれてくる。なぜなら、たとえ両親が子供たちを治し、彼らが死なずに結婚したとしても、その子供たちもまた病気を抱えている可能性があるからだ。この状況が何を意味するか、お分かりでしょうか？もし両親が一人ではなく、数人の子供を産んでいれば、病気の子供の命を延ばすために、医師を転々とし、海外を駆け回るような苦勞をする必要はなかったでしょう。病気の子供は神のもとへ旅立つでしょう。そして、天使のように神のもとへ旅立つのです。

— ゲロンダ、どこかで読んだのですが、世界中で毎年5,000万件の中絶が行われており、³⁶ そのうち20万人の女性が命を落としているそうです。

— 子供たちが殺されるのは、人口が増えれば、よく言われるように、生きている人々に食べるものがなくなり、生活必需品が不足してしまうからだ。しかし、これほど多くの土地や森林が放置されているのに、現代の技術を使えば、それらを例えばオリーブ畑へと素早く転換し、貧しい人々に分配することも可能です。しかも、森林の伐採によって酸素が不足する危険性はありません。なぜなら、野生の木の代わりに栽培用の木が植えられるからです。アメリカでは小麦を焼却処分しているが、ここギリシャでは、果物やその他の農産物を（価格が下落しないように）地中に埋められている。その一方で、アフリカでは人々が飢餓で死んでいる。アビシニアで恐ろしい干ばつが発生し、人々が衰弱して死んでいく中、私は、こうした状況で人々を助ける知人の船主に対し、果物や野菜を地中に埋めている人々に「 」と訴え、飢えた人々に届けるために、それらを無料で船に積み込んでくれるよう頼んでほしいと依頼した。しかし、彼がいくら頼んでも、彼らはそれを断った。

³⁶ 1989年に発表された。——訳者注。2001年の公式統計によると、ロシアでは190万件の中絶が行われた。実際にはこの数字ははるかに多い。——編集者注。

毎日、何千もの人間の胎児が殺されているのだ！中絶は恐ろしい罪である。中絶は殺人であり、単なる殺人ではなく、非常に重い罪である。なぜなら、洗礼を受けていない子供たちを殺しているからだ。親たちは、人間の命は受胎の瞬間から始まるということを理解しなければならない。

ある夜、神の御心により、私は恐ろしい幻を体験することになりました。その出来事を経て、私は中絶とは何かを悟ったのです！それは復活節の火曜日の夜のことでした。いつものように、私はろうそくを二本灯し、二つの缶詰の瓶に立てました。通常、これらのろうそくは私が眠っている間も燃え続けています。私は、心身ともに苦しんでいる人々のためにこれらを灯しています——そこには、生きている人も、亡くなった人も含まれます。そして真夜中の12時、イエスの祈りを捧げていると、石の塀で囲まれた広大な畑が見えた。畑には小麦が蒔かれており、芽がようやく伸び始めたばかりだった。私は塀の向こう側に立ち、亡き人々のためにろうそくに火を灯し、石の壁の上に置いた。左側には、水もなければ実りのない土地が見えた——岩と石だらけの断崖ばかりだった。その一帯は、何千もの胸が張り裂けるような、心を抉るような叫びが混じり合う激しい轟音によって、絶え間なく震えていた。どんなに冷酷な人間でも、これを聞けば無関心ではいられようがない。その叫び声に苦しみ、何が起きているのか理解できないまま、私はある声を聞いた。「まだ穂を出していない小麦が蒔かれた畑は、復活する死者の魂の眠る場所だ。その悲痛な叫び声で揺れ動き、震えている場所には、中絶によって殺された子供たちの魂がいるのだ。」このような体験をした後、私は、これらの子供たちの魂のために感じたあの計り知れない痛みから、もはや立ち直ることができなかった。そして、とても疲れていたにもかかわらず、横になって休むことさえできなかった。

— ゲロンダ、中絶を合法化する法律を廃止するために、何かできることはありますか？

— 可能ですが、そのためには国家や教会が動き出し、人々が少子化がもたらす結果について知る必要があります。司祭たちは、中絶に関する法律が福音の戒めに反することを人々に説明しなければなりません。医師たちは、中絶を行う女性がさらされる危険性について語らなければなりません。考えてみてください。礼儀作法という文化を持っていたヨーロッパの人々は、それを子供たちに受け継がせました。一方、かつては神への畏れを持っていた私たちは、それを失い、次世代に何も残せませんでした。だからこそ、今、私たちは中絶を容認し、事実婚を合法化しているのです……

もし一人の人が福音の戒めに背くならば、その責任は彼一人に帰する。しかし、もし福音の戒めに反するものが国の法律となった場合、神の怒りは国民全体に下る——それは国民を戒めるためである。

第2章。

子育てにおける母親の役割について

母の愛

——ゲロンダ、以前、あなたは私たちに、「愛によって人は成長し、成熟する」とおっしゃいました。

— ただ誰かを愛するだけではまだ足りない。自分よりもその人を愛さなければならぬ。母親は自分の子供たちを自分以上に愛している。子供たちに食べさせるために、彼女は空腹のままになる。しかし、彼女を感じる喜びは、子供たちが感じる喜びよりも大きい。子供たちは肉体的に栄養を摂るが、母親は精神的に栄養を摂る。子供たちは食べ物の感覚的な味を楽しむ一方で、母親は精神的な喜びを感じているのだ。

ある娘は、結婚するまでは午前10時まで寝ていられ、それでもなお、母親が朝食のミルクを温めてくれることを期待している。そんな娘は、何か仕事をするのが面倒くさい。すべてが用意された状態で暮らしたいのだ。誰かにすべて世話をしてもらいたいと思っている。母親にも不満、父親にも不満を言いながら、自分だけは怠惰な日々を満喫している。彼女（女性）の本性には愛があるにもかかわらず、それが育たないのは、母親や父親、兄弟姉妹からの助けや祝福をただ受け入れているからである。しかし、自ら母親になると、彼女はまるで自己充電式の装置のようになる。仕事に励めば励むほど、より多くのエネルギーを蓄えていく——なぜなら、彼女の中で愛が絶え間なく働いているからだ。以前は、何か汚れたものに触れると嫌悪感を抱き、香りのよい石鹸で入念に手を洗っていた。ところが今、赤ちゃんがオムツを汚して洗濯しなければならない時、まるでマーマレードキャンディを手にとったかのような感覚を覚えるのだ！嫌悪感は微塵もない。以前は、起こされると、邪魔されたことに対して大声で不満を漏らしていた。今、赤ちゃんが泣いても、彼女は一晩中起きていても、それを苦には感じない。彼女は自分の赤ちゃんの世話をし、喜びを感じている。なぜだろうか？それは、彼女がもはや子供ではなくなったからだ。彼女は母親となり、犠牲の精神と愛を身につけたのだ。

また、母親は父親よりも深い愛と犠牲の精神に達すると言える。というのも、父親には自分自身を犠牲にするような好機がそれほど与えられていないからだ。母親は子供たちのために苦勞し、父親よりも多くの手間をかけて世話をするが、同時に子供たちから「エネルギーを充電」し、自分のすべてを子供たちに捧げているのだ。一方、父親は母親ほど子供たちのために苦勞することはないが、子供たちから「エネルギーを補給」することもないため、その愛は母親の愛ほど大きくはないのである。

どれほど多くの母親たちが涙を流しながら私のところへやって来て、「神父様、私の子供のために祈ってください」と頼んでくることか。彼女たちがどれほど心を痛めているか、ご存じでしょうか！「私の子供が道を踏み外してしまったので、祈ってください」と頼む男性はごくわずかです。さて、今日だって、8人の子供を連れたある母親がやって来ました。このかわいそうな母親は、どれほど緊張しながら子供たちを前に押し出し、全員が祝福を受けられるように一列に並ばせていたことか。このように振る舞う父親は、極めて稀だ。そしてロシアは、母親たちのおかげで持ちこたえてきたのだ。父親の抱擁——そこに神の恵みがなければ——は乾いている。一方、母の抱擁は——たとえ神がいなくとも——その中に乳を含んでいる。子供は父親を愛し、尊敬している。しかし、その父親への愛さえも、母の愛の優しさと温もりによってさらに深まるのだ。

子供を持たないことに対する正しい考え方

子供のない女性が自分の境遇を精神的に受け止められないと、苦しむことになる。私は、ある子供のない女性と、どれほど苦勞したことか！その不幸な女性の夫は高い地位に就いていた。彼女には数軒の家があり、それらを貸し出していた。さらに、二人が住んでいた大きな家もあった。夫はかつて彼女からかなりの持参金を受け取っていたの

だ。しかし、彼女にとってはすべてが重荷だった。市場へ出かけるのも、食事を作るのも……。それに、彼女は料理もできなかった。家に座ったままレストランに電話をかけ、そこから出来合いの料理を届けてもらっていた。彼女にはすべてが揃っていたが、何にも喜びを感じられず、心が苛まれていた。一日中家に座り込み、あれもこれも気に入らないと文句を言っていた。一つのことをするのは退屈で、別のことは重荷で……。やがて、暗い考えに苛まれ始め、彼女は薬を飲むことを余儀なくされた。夫は彼女を元気づけるために在宅の仕事を引き受けていたが、彼女は時間をどう潰せばいいかわからず、夫のシャワーを浴びている横で立ち尽くしていた。もちろん、彼女はこの可哀想な夫をうんざりさせてしまった。何しろ、他のことはさておき、彼は仕事をこなさなければならなかったのだから！ 彼女に会った時、私はこうアドバイスした。「一日中家に閉じこもらないで！ そうしているといっそう錆びついてしまうよ！ 病院に行って、病人を見舞ってきなさい……」「でも、神父様、私がそんなところに行けるわけがないでしょう？ そんなこと、私には到底無理ですよ！」と彼女は答えた。「それなら」と私は言った。「——こうしなさい。第一時間を読む時間になったらそれを読み、その後、自分の時間になって第三時間を読み、そのように続けていくのです。³⁷。お辞儀も一つや二つ加えなさい……」「できません」と彼女は答えた。「ああ」と私は言った。「それなら、聖人の伝記を読んでみなさい。」私は彼女に、聖人となったすべての女性の伝記を読むよう命じた。読んだ内容のうち何かが彼女の心に深く刻まれ、助けになることを願ったのことだ。大変な苦勞の末、ようやく彼女を正常な軌道に戻すことができ、精神病院行きを免れることができた。この女性は自分自身を完全に台無しにしてしまった。強力なエンジンだが、その中のオイルが固まってしまったようなものだ。

これらすべてを通じて私が言いたいのは、女性の本質に備わっている愛が表に出る場を見出せなければ、その女性の心は枯れてしまうということだ。考えてみてください。ある女性は、5人、6人、あるいは8人もの子供を育てているかもしれません。その不幸な女性は、一文無しであっても、それでも喜びを感じています。彼女には、高潔な寛大さと、男らしい不屈の精神があります。なぜでしょうか？ それは、彼女が自分の生きがいを見つけたからです。

ある出来事が私の記憶に深く刻まれています。私の知人には二人の姉妹がいました。一人はとても若い頃に結婚し、たくさんの子供を産みました。この女性は自分を犠牲にしていました。とりわけ、仕立て屋として服を縫い、その収入で貧しい人々に施しをしていました。ところが先日、彼女が訪ねてきて、私にこう言ったのです。「私、もう孫までできたのよ！」そのとき、彼女の心は喜びで高鳴っていました。一方、もう一人の姉妹は結婚しませんでした。しかし、その気楽な境遇から精神的な恩恵を得ることもできませんでした。彼女は一体、どのような状態にあったことか！ 彼女がどのように暮らしていたか——聞かないほうがよいほどです……。彼女は年老いた母親に世話をしてもらうのを待ち、それどころか、母親が十分に熱心に行っていないと文句まで言っていたのです。お分かりでしょうか？ 彼女は母親にならなかつたため、内面は何も変わらなかったのです。しかし、困っている人々を助けることで、女性の本質にすでに備わってい

³⁷ 時課とは、一日の礼拝サイクルを構成する簡潔な礼拝の儀式である。特定の時間に執り行われる時課は、ローマ時代に一日が区分されていた各時間を聖別するものである。第一時の読経時間は午前6時頃、第三時は午前9時頃、第六時は正午頃、第九時は午後3時頃である。

る愛を活かし、そこから益を得ることができたはずですが。しかし、彼女はそうしませんでした。

だからこそ、私は女性には自分を犠牲にすることが必要だと言うのです。男性は——たとえ自分の中に愛を育まなくても——特に不利益を被ることはない。しかし、女性は、自分の中に愛を持ちながらそれを正しい方向へ導かないと、原料がないまま稼働している機械のようになり、空回りして自ら震え、他の人々をも揺さぶってしまうのだ。

母としての忍耐力

— ゲロンダ、聖ネクタリオス・エギノスは、修道女たちへの手紙の一つの中で、自分たちが女性であることを忘れず、敬虔な男性たちではなく、敬虔な女性たちを見習うよう呼びかけています。³⁸ なぜ聖人はそうおっしゃるのでしょうか？ もしかすると、女性には忍耐力が足りないからでしょうか？

— 誰のこと？ あの女性たちに持久力が足りないなんて？ いや、むしろ彼女たちの持久力にはただただ驚かされるばかりだ！ 彼女たちは七筋の力を持っているのだから！ 女性の体は男性よりも弱いかもしれないが、彼女には[強い]心があり、その心で働くことで、男性の力を凌ぐほどの持久力を備えているのだ。確かに、男性には肉体的な力があるが、女性のような心は彼にはない。ある時、子猫たちを連れて私の小屋にやって来た一匹の猫を観察していた。やせ細って、肋骨が数えられるほどだった。ある日、大きな猟犬が私の庭に駆け込んできた。クルド——その猫の名前だった——は逃げ出したが、その雌猫は戦いの構えを取り、背中を弓のように反らせて威嚇の姿勢を見せ、犬に飛びかかる準備をしていた。私はただただ驚いた。一体どこからそんな勇気が出てきたのだろう！ ほら、彼女は自分の子猫たちを守っていたのだ。

母は苦勞し、疲れ果てているが、その一方で痛みも疲れも感じていない。彼女は自分を奮い立たせて[仕事]に取り組んでいるが、子供たちを愛し、自分の家を愛しているからこそ、すべてを喜びをもってこなしている。一日中横になっている人の方が、彼女よりもずっと疲れてしまうだろう。私たちが幼かった頃、母は遠くから水を運ばなければならなかった上、料理やパン焼き、洗濯、さらには畑仕事までこなしていたのを覚えています。それなのに、私たち子供たちは母を休ませる暇も与えませんでした。私たちが互いに喧嘩をすると、母の数え切れないほどの仕事や雑事に、仲裁役の役目まで加わってしまったのです！ それでも母はこう言っていました。「これは私の義務よ。私はこれらすべてを、文句を言わずにやらなければならないの」。母はその言葉に優しい意味を込めていたのです。母は家庭を愛し、子供たちを愛し、仕事や心配事に疲れ果てることはありませんでした。母はすべてを心を込めて、喜びを持ってこなしていたのです。

そして、年月が経てば経つほど、母は家を愛する気持ちが強くなる。彼女の年齢はもはやかつてのようではないが、それにもかかわらず、孫たちを育てるために、ますます自分を犠牲にしている。彼女の体力はますます衰えていくが、彼女は心を込めてすべての義務を果たしており、その力は夫の力さえも、そして彼女自身が若かった頃の力さえも凌駕している。

³⁸ 聖ネクタリオス、ペンタポリス主教。『35の牧会書簡』、第26書簡。アウパコエ出版。アテネ、1993年。12頁。

— ご存知でしょうか、ゲロンダ、女性は病気のと看でさえ、男性よりもはるかに冷静さを保っているものです。

— ねえ、ここでのポイントは何か分かる？ 母親は自分の子供が病気になるという経験を何度も重ねてきたから、病気とはそもそも何なのかをよく知っていて、その点では豊富な経験を持っているの。自分の子供が何度熱を出し、何度熱が下がったかを覚えている。彼女は様々な場面を目にしてきた。例えば、息苦しそうにしていたり意識を失いかけていた子どもが、頬を軽く叩くだけで正気に戻る様子などだ。男性はこうした光景を目にすることもなく、そのような経験ありません。そのため、子供が熱を出したり顔色が悪くなったりしたことを知ると、男性はパニックに陥り、神経質になり始めます。「子供が死んでしまう！ これからどうすればいいんだ？ さあ、急いで医者に電話しよう！」

妊娠と授乳

子どものしつけは妊娠の段階から始まります。お腹に子どもを宿した母親が不安になったり動揺したりすると、その胎内の胎児もまた不安を感じます。一方、母親が祈りを捧げ、霊的な生活を送れば、その胎内の赤ちゃんは聖別される。それゆえ、妊娠中の女性は、イエスの祈りを捧げ、福音書の一節を読み、教会の賛美歌を歌い、心を乱さないようにすべきである。しかし、身近な人々もまた、彼女を動揺させないよう気を配らなければなりません。そうすれば、生まれた子は聖なる子となり、両親は、その子が幼い間も、成長した後も、その子に関して苦勞することはないでしょう。

そして、赤ちゃんが生まれたら、母親は母乳で育てなければなりません。期間は長ければ長いほど良いのです。母乳は赤ちゃんに健康をもたらします。母乳を飲むことで、赤ちゃんはミルクだけでなく、愛情、優しさ、安らぎ、安心感も吸収し、それによって強い精神を持った人間へと成長していくのです。しかし、それだけでなく、母乳育児は母親自身にも役立ちます。もし母親が子どもに母乳を与えないと、女性の体内に異常が生じ、それが[がん]や乳房の切除につながる可能性があります。

昔は、母親に母乳があれば、自分の赤ちゃんだけでなく、近所の赤ちゃんにも授乳することができました。しかし今では、多くの母親にとって、自分の子供にさえ母乳を与えるのが難しい状況です。何もしないで怠けており、子供に母乳を与えない母親は、その怠惰や無為の「菌」を子供にも移してしまいます。かつては、練乳の缶には赤ちゃんを抱きしめる母親が描かれていましたが、今では練乳の缶には、花束を手を持つ「お母さん」が描かれています！ 母親たちは子どもに母乳を与えないため、子どもたちは慰めを得ることなく育ってしまいます。誰が彼らに優しさと愛を与えてくれるのでしょうか？ 牛のミルクが入った缶でしょうか？ 赤ちゃんたちは、「冷たい」ガラス瓶に取り付けられたおしゃぶりをしゃぶり、その心もまた凍りついてしまいます。そして、成長すると、彼らもまた瓶——つまり酒場——に慰めを求めるようになります。心の不安を忘れようと、彼らは酒を飲み始め、アルコール依存症になってしまう。もし子供たちが自ら優しさを受け取らなければ、自分の子供たちにそれを伝えるだけの優しさも持てなくなる。こうして、一つのことが次へと連鎖していく。そして、母親たちがやって来てこう懇願し始める。「神父様、お祈りください！ 私の子供を失いそうです。」

働く母親

— ゲロンダ、女性は働くべきでしょうか？

— 夫はそれについてどうおっしゃっていますか？

— 夫はそれを妻の選択に任せています。

— 結婚前に教育を受けた女性にとって、仕事を辞めて子育てに専念するのは簡単なことではありません。一方、教育を受けておらず、単純な仕事をしている女性なら、難なく仕事を辞めることができるでしょう。

— ゲロンダ、子どもがいない女性にとっては、働くことは有益だと思います。

— では、あなたの考えでは、子供がいなければ、女性は必ず仕事に出なければならないということになるのですか？ 彼女には他にもやれることがたくさんあるはずです。もちろん、子供がいるなら、家にいるほうが良いでしょう。そうでなければ、どうやって子供たちの世話をできるのでしょうか？

— ゲロンダ、多くの女性は、生活費が足りなくて仕方なく働かざるを得ないと言っています。

— 彼らは、テレビやビデオデッキ、自家用車などを手に入れたがために、生活が苦しく、やりくりが追いつかない。そのため働かざるを得ず、その結果、自分の子供たちの世話を怠り、子供たちを失ってしまうことになる。もし父親だけが働き、家族が質素な生活に満足していれば、そのような問題は生じない。しかし、夫も妻も——お金が足りないからという名目で——働いているせいで、家族はバラバラになり、本来の意義を失ってしまう。そうなってしまって、子供たちは一体どうすればいいのだろうか？ もし母親たちがもっと質素に暮らしていれば、彼女たち自身も疲れ果てることはなく、子供たちも幸せに過ごせたはずだ。ある男性は7カ国語を話せたが、その妻は4カ国語を習得するために並々ならぬ努力を重ねていた。さらに彼女は家庭教師もしており、仕事モードを維持するために薬に頼って生活していた。この夫婦の子供たちは健康に生まれたが、成長するにつれて精神疾患を患うようになった。その後、彼らは精神分析医の「助け」を借りるようになった…… だからこそ、私は母親たちに、自分の生活を簡素化し、自分を必要としている子供たちにもっと時間を割けるようにすることを勧めます。ただし、母親が家で、子供の世さに疲れたときに切り替えられるような何かの用事がある場合は別です。家にいながら、母親は子供たちの様子を見守りつつ、他の用事をこなすことができます。これは、家族が多くのトラブルを避けるのに役立ちます。

今日、子供たちは母親の愛情の欠如によって「飢え」に苦しんでいる。しかし、母親が一日中仕事で不在で、子供たちを他人——多くの場合、外国人女性——の世話に任せているため、彼らは母国語さえも習得できていない。孤児院の子供たちは、キリスト教の修道会に所属し、独身誓願を立てた女性が保育士としていて、彼らにほんの少しの優しさを見せてくれるような場所であれば、金銭を受け取って子供たちの世話を任されている女性たちに預けられる子供たちよりも、千倍も恵まれた状況にあるのです！ ところで、これが結局何につながるかご存知ですか？ それは、子どもに母親が一人いなくても、代わりに大勢の「乳母」がいるということなのです！

主婦としての生活と母親の霊的生活

— ゲロンダ、主婦はどのように家事や雑事を整理すれば、祈りの時間も確保できるのでしょうか？ 仕事と祈りのバランスはどのように取るべきでしょうか？

— 女性はたいてい、物事に節度がない。自分の仕事や心配事に、次から次へと新しいものを加え続けたいくなるのだ。寛大な心を持つ女性なら、自分の魂という「家庭」を非常にうまく切り盛りできるはずなのに、その代わりに、些細なことに心を浪費してしまうのだ。例えば、美しい模様や縞模様などで飾られたグラスがあると想像してみてください。もしその縞模様がなくても、そのグラスが本来の目的を果たすことに何ら支障はありません。しかし、女性たちは店に来て、店員にこう言い始めるのです。「いいえ、いいえ、ストライプはここまでで、描き方もこうじゃなくて、こうにしてほしいの」。ましてやそこに花が描かれていれば、彼女たちの心はただただ躍り出すのです！このようにして、女性は自分の可能性をすべて無駄にしてしまうのです。こうしたことに気を配る男性に巡り会うことはめったにありません。例えば、彼のデスクランプが茶色や黒色だったとしても、男性はそれに気づきもしないでしょう。一方、女性は「それとは対照的に」——美しいものを求め、喜び、その美しさに心の片隅を捧げます。別の「美しいもの」にはまた別の心の片隅を捧げますが、それではキリストのために何が残るのでしょうか？ 祈りの最中のあくびや疲れ。女性の心が美しいものから遠ざかれれば遠ざかるほど、キリストに近づいていくのです。そして、もし心がキリストに捧げられているなら、その心は偉大な力を宿しているのです！先日、私は自分自身を神に完全に委ねている女性に出会いました。彼女の中に、ある種の甘美な炎が燃え上がっているのがはっきりと見て取れました！どんなことにも情熱を持って取り組んでいます。以前、この女性は完全に世俗的な人でしたが、心根は優しく、ある時、彼女の魂に火花が飛び散ったのです。彼女は自分の金の装飾品や豪華な服をすべて捨てました。今、彼女は驚くほど質素に暮らしています！精進し、自分自身に対して霊的な働きを捧げています。彼女の行いは、なんと犠牲の精神に満ちていることでしょう！彼女は聖人たちに対して——良い意味での——「嫉妬」や「羨望」を抱くようになりました。彼女が祈りの際にどれだけの数珠を数え、どのような断食を行い、詩篇の朗読にどれだけの時間を費やしているか、ご存知でしょうか！...驚くべきことです！今や、修行こそが彼女の糧となっているのです。

— ゲロンダ、ある母親が私にこう言いました。「私は体が弱くて、とても疲れやすいんです。自分の用事もこなせませんし、祈る時間も残っていません。」

— 祈りの時間を確保するためには、母親は生活を簡素化すべきです。簡素さによって、母親は大きな成果を上げることができます。もし母親が生活を簡素化し、単に子供が多いという理由だけで多くの労力を費やしているのであれば、「疲れた」と言う権利があります。しかし、もし彼女が、見知らぬ人たちに自分の家が立派に見えるようにと努めるあまり、時間を無駄にしているのなら、一体何と言えようか？家の中のあらゆる物が美しく所定の位置に置かれていることを望むあまり、子供たちが椅子やクッションを少し動かすことさえ許さず、子供たちを圧迫し、「息苦しく」させている母親もいる。彼女たちは子供たちに兵営のような規律に従って生活するよう強いるため、本来は正常に生まれた子供たちも、残念ながら、成長するにつれて完全に正常とは言えなくなってしまうのだ。もし賢明な人が、子供が多い家庭であらゆる物が所定の位置に整然と置かれているのを見たら、ここにいる子供たちは知的障害があるか、あるいは母親が冷酷で専制的な性格ゆえに、子供たちに軍隊式の規律を強いているかのどちらかと結論づけるだろう。後者の場合、子供たちの心には恐怖が棲みついており、その恐怖ゆえに彼らは規律正しく振る舞っているのだ。ある時、私は多くの子供たちがいる家を訪れた。子供たちの無邪気な悪戯が、世間の「物はすべて所定の場所に」という秩序を打ち砕く

様子に、私はどれほど心を躍らせたことか。この「秩序」こそが最大の無秩序であり、現代人の活力を著しく奪っているのだ。

昔は霊的な書物がなく、母親たちは読書に没頭して心を落ち着かせたり、自分自身を励ましたりすることができませんでした。現在では、教父たちの著作が膨大な数出版されており、その多くは現代語に翻訳されていますが、残念ながら、大多数の母親たちは「この豊かな財産を素通りして」、つまらないことに時間を費やしたり、あるいは「絶えず」生計を立てるために働いたりしています。

無機質な家事という作業に、細かくて形式ばったやり方で取り組むよりも、母親は子どもの教育に力を注ぐほうがよい。子どもたちにキリストについて語り、聖人の伝記を読み聞かせてあげよう。同時に、彼女自身も魂を清めることに努めなければならない——そうして彼女自身も霊的に輝けるように。母親の霊的な生活は、気づかぬうちに、静かに、そして子供たちの魂をも助けてくれるでしょう。そうすれば、子供たちは喜びに満ちた生活を送り、母親自身も、自分の中にキリストを宿しているからこそ、幸せになれるのです。もし母親が「聖なる神よ」と唱える時間さえ確保できないのなら、どうして子供たちが聖化されるというのでしょうか？

— ゲロンダ、もし母親に子供がたくさんいて、仕事もたくさんある場合はどうすればよいのでしょうか？

— でも、家事をしながら同時に祈ることはできないのでしょうか？ 私は母から「イエスの祈り」を教わりました。私たちが子供の頃、何かいたずらをして母が怒りそうになると、母が声に出してこう祈り始めるのが聞こえました。「主イエス・キリストよ、私を憐れんでください。」パンをオーブンに入れる時、母は「キリストと至聖なる聖母マリアの御名によって」と唱えていました。生地をこねたり食事の支度をしたりする時も、母は絶えずイエスの祈りを唱えていました。そうして母自身も、彼女が作ったパンや食事も、そしてそれらを口にするとする人々も、聖別されていたのです。

聖なる生涯を送った母親たちの中には、その子供たちもまた聖化された例がどれほど多いことか！ 例えば、長老ハジ・ゲオルギイの母親を挙げよう。この祝福された母親が、幼いガブリエル——長老ハジ・ゲオルギイの俗名——に与えた母乳さえも、修道的なものであった。この女性は二人の子供を産んだ後、夫と貞潔を保ちながら、兄妹のように互いを愛し合って暮らした。ハジ・ゲオルギイの母は、幼い頃から修道的な精神に恵まれていた。というのも、彼女の姉が修道女であり、修道生活を送っていたからである。彼女は修道女である姉を頻繁に訪ね、結婚した後も子供たちを連れて姉のもとを訪れていた。ガブリエルの父もまた敬虔な人であった。彼は商売を営んでいたため、ほとんどの時間を家の外で過ごしていた。このことが、彼女の母にとって、多くのことを気かけたり慌てたりすることなく質素に暮らす絶好の機会となり、³⁹ 息子と一緒に、他の女性たちと共に、時には洞窟で、時には様々な礼拝堂で行われる徹夜祈祷に参加することができた。それゆえ、後に彼女の息子はこれほどの聖性に達したのである。⁴⁰

³⁹ 参照：ルカ10:41。

⁴⁰ 参照：アトス山のペシオ長老。『アトス山のハジ＝ゲオルギス長老』、出版：聖ヒシカステリオン・福音記者ヨハネス・テオロゴス、テッサロニキ・スローティ、6、2001年。

母親の敬虔さは非常に重要です。母親に謙虚さと神への畏れがあれば、家庭のすべては順調に進みます。私は、どこからも助けを得ていないにもかかわらず、顔が輝いている若い母親たちを知っています。子供たちと接していると、その母親たちがどのような状況にあるのかがわかります。

第3章。 子育てにおける親の責任について

親は子供たちを神に委ねなければならない

神は、最初の人間であるアダムとエバに、神の共同創造者となるという偉大な祝福を与えられました。両親、祖父母、曾祖父母もまた、子供たちに肉体を与えるという点で、神の共同創造者なのです。

神は、そう表現しても差し支えないならば、子供たちの世話をしなければならないのです。子供が聖なる洗礼を受けるとき、神はその子を守るために守護天使を遣わします。このようにして、子供は神、守護天使、そして両親によって守られているのです。

守護天使は常に子どものそばにいて、その子を助けています。子どもが成長すればするほど、両親はその責任から解放されていきます。もし 両親が亡くなったとしても、神は天の上からも、またすぐそばからも、そして守護天使はすぐそばから、絶えずその子を見守り続けています。

親は、子どもがまだ小さいうちに精神的な支えを与えるべきです。なぜなら、幼い頃は欠点も小さく、簡単に取り除くことができるからです。それはまるで新じゃがのようで、こするだけで皮が簡単に剥けるものです。しかし、ジャガイモを放置してしまうと、後で皮をむくにはナイフが必要になります。もしさらに傷んでしまえば、そのナイフでより深く切り込まなければなりません。もし子供たちが幼い頃から助けを受け、キリストに満たされれば、彼らは永遠にキリストのそばに留まるでしょう。たとえ成長する過程で、年齢や悪い仲間たちのせいで少し道を外れてしまったとしても、彼らは再び正気に戻るでしょう。なぜなら、幼い頃に彼らの心に注がれた神への畏れと敬虔さは、二度と彼らの心から消え去ることはないからです。

その後、思春期——最も困難な時期——になると、親の子供への心配はさらに大きくなります。この心配は、親が子供たちに教育を与え、自立した生活へと導くまで続きます。子供たちがこの年齢にある間、親は子供たちを助けるためにあらゆることをしなければなりません。そして、親の力を超えることは、全能の神に委ねるべきです。もし親が子供たちを神に委ねれば、神は人間的な力では成し得ないことにおいて助けてくださるはずです。例えば、子供たちが親の言うことを聞かない場合、親は子供たちを神に委ねるべきであり、子供たちを「屈服させる」ための様々な方法を模索すべきではありません。そのような場合、母親は神に次のように言うべきです。「神様、私の子供たちは私の言うことを聞きません。私にはどうすることもできません。どうか、あなたご自身で子供たちのことをお守りください。」

数日前にここへ徹夜祈祷会にやって来たある母親が、私の心に強く印象を残しました。私はその女性を以前から知っていました。彼女は私に挨拶をしに近づいてきました。彼女と一緒にいるのが年長の子供たちだけだと気づき、私は「小さな子供たちはどこにいるのですか？」と尋ねました。「家にいます、ゲロンダ」と彼女は答えました。「こんな祝日には、夫と二人で徹夜祈祷に行きたいと思ったので、『娯楽ではなく徹夜祈祷に行くなら、神様が天使を遣わして、私たちがいない間、子供たちを見守ってくれるだろう』と決めたんです。」今日、このような信頼に出会うことはめったにありません。というのも、現代では、子供たちの親への信頼も、親の神への信頼も枯渇してしまっているからです。多くの親がこう言うのをよく耳にする。「なぜ、とりわけうちの子供だけが道を踏み外し、悪の道に進んでしまったのか？　だって、私たちは教会に通っているのに！」　そのような親たちは、キリストに「ドライバー」を渡して、子供たちのネジをいくつか締め直してもらうことをしない。彼らはすべてを自分たちだけで解決しようとするのだ。　そのような親たちは、病気になるまで利己的な不安に苛まれます——それにもかかわらず、子供たちを守ってくださる神がおられ、さらに守護天使も常に彼らのそばにいて、彼らを守ってくれているというのに。　こうした人々は——信仰者であるにもかかわらず——まるで神が存在しないかのように、まるで守護天使が存在しないかのように振る舞っています。彼らは神の介入を妨げているのです。しかし、彼らには謙虚になり、神に助けを求める必要があります。そうすれば、慈愛に満ちた神が彼らの子供たちを包み込み、守ってくださるでしょう。

子供たちの霊的再生

—ゲロンダ、子どもの教育に対する責任は親だけが負うものなのでしょうか？

—主に、親です。なぜなら、親が子どもたちにどのような教育を与えるかによって、彼らが立派な司祭や教師などになれるかどうかが決まるからです。そして、その子どもたちは、やがて自分たちの子どもや他の子どもたちを助けるようになるでしょう。また、子どもの教育に対する大きな責任を負っているのは、父親ではなく母親であることも付け加えておかなければなりません。

もし、赤ちゃんがまだ母胎にいる間に、両親が祈りを捧げ、霊的な生活を送っていれば、その子は聖別されて生まれてくるでしょう。そして、両親が霊的にその子を支えてあげれば、その子は聖別された人間となり、今度は社会に貢献するようになるでしょう。教会で奉仕するにせよ、行政機関に入るにせよ、あるいは他の何らかの立場に就くにせよ。私たちは皆、子どもたちが正しい人間になれるよう助け、次の世代にもほんの少しの「種」が残るようにしなければなりません。というのも、今の状況では、その「種」さえも残らない方向に向かっているからです。もしそれが残らなくなったら、一体どのような結果をもたらすのでしょうか？

親は、子供を産み、その肉体を与えるにあたり、可能な限り、子供たちの霊的な再生をも助けるべきです。なぜなら、もし人が霊的に再生しなければ、地獄の苦しみ待ち受けているからです。その後、親は自分たちだけでは子供のためにできないことを、教師に委ねるべきです。だからこそ、私たちの教会は「親と教師のために」と祈るのです。しかし、霊的な父と呼ばれる人々もいます。こうした人々は自分の子供を持たないかもしれませんが、子供たちの霊的な再生に尽力するため、子育てにおける彼らの助けはより実り多いものとなります。

私が言いたいのは、すべての人——それぞれがそれぞれのやり方で、それぞれの模範を通じて——子どもたちが霊的に再生し、この世で平和に生き、天国へ至ることができるよう手助けすべきだということです。もし子供たちが霊的な人間になれば、もはや彼らには「悪を抑制する」法律は必要なくなります。「義人には律法は適用されない。」⁴¹ 律法は不法者たちのためのものです。霊的な権威は、人間の権威よりも高い位置にあります。

親の模範

— ゲロンダ、子どもが言うことを聞かず、反抗的な態度をとる場合、親はどうすればよいのでしょうか？

— 子どもが言うことを聞かず、行儀が悪いのは、それなりの理由があるからです。もしかすると、家の中や外で不適切な場面を目撃したり、不適切な会話を耳にしたりしているのかもしれませんが。いずれにせよ、霊的な面において、私たちは子どもたちを助けるにあたり、強制ではなく、主に自らの模範を示すことで導くのです。

母親は、自らの行動、夫への従順さ、そして夫への敬意を通じて、子供たちに大きな助けを与えていることを述べておく必要がある。もしある問題について、母親の意見が父親の意見と異なる場合、悪意ある者がそれを利用しないよう、決して子供たちの前でその意見を口にしてはならない。母親は決して、子どもたちの父親に対する印象を損なってはなりません。たとえ父親に非があったとしても、母親は父親を擁護すべきです。例えば、父親が不適切な行動をとった場合、母親は子どもたちにこう言うべきです。「パパは疲れているの。急ぎの仕事が終わるように、一晩中働いていたんだから。それに、パパはあなたたちのために頑張っているのよ。」

多くの親は子供たちの目の前で口論をし、それによって子供たちに悪い手本を示してしまいます。かわいそうな子供たちは悲しみ、嘆きます。その後、親たちは子供たちを慰めるために、彼らのわがまを何でも叶えようとします。父親は子供を喜ばせようと、子供を「買収」し始めます。「さあ、愛しい子よ、何が欲しい？」母親もまた、子供のわがまを叶えてしまい、結局、子供たちは気まぐれでわがままな人間に育ってしまう。そして後になって、親が子供たちの望みを叶えてあげられないと、子供たちは「自殺する」と親を脅すようになる。

親の良き手本が、子供たちにどれほど大きな助けになるか、私は実感しています。今日、私のところへお客さんが来ました。3歳と4歳の女の子二人と、そのご両親——とても信心深い方々です。この小さな子たちが、私にどれほどの喜びをもたらしてくれたことでしょう！彼女たちはまるで天使のようでした。隣り合って座り、ドレスの裾で自分の膝を覆っていました。なんと謙虚で、なんと礼儀正しいことでしょう！それはすべて、彼女たちが両親の振る舞いを目の当たりにしてきたからに他なりません。両親が互いに愛と敬意を持ち、分別ある振る舞いをし、祈りを捧げ、そのような行いをしているのを見て、子供たちはそのすべてを心の奥深くに刻み込むのです。だからこそ、私はこう言います。もし両親が子供たちにその敬虔さを伝えれば、それは彼らが子供たちに残せる最高の遺産となるでしょう。

もし、私がオーストラリアで出会ったある少女を、皆さんがご覧になれば！彼女にはなんと高潔な気品があったことか！ 私たちはキャンベラに到着した。私を訪ね

⁴¹ 参照：テモテへの手紙第一1章9節。

てきた最後の2人の来客 に対応した後、私は帰ろうとしていた。すると、車が停まり、そこから夫婦と小さな女の子が降りてきた。「ゲロンダ、なんとかお会いできましたね」と彼らは言いました。「ええ、もう出発しようとしていたところです」と私が答えると、「ゲロンダ」と夫が言いました。「私は構いません。妻だけが、がっかりしないように、少しだけお時間を頂ければ幸いです。だって、彼女はすごく繊細な人なんだから。」私たちは彼の妻と少し離れた場所に移動し、彼女が私に言いたいことを話せるようにした。小さな女の子は彼女の後を追おうとした。「ちょっと待ってごらん」と私は女の子に言った。「お母さんが来るよ、もうすぐ来るから。」「あなたにはお母さんがいるの?」と彼女は私に尋ねた。「いないよ」と私は答えた。見ると、彼女の瞳に涙がきらめいていた。「じゃあ、いい?——と彼女は尋ねた——私のママをあなたにあげようか?」そこで私も彼女に尋ねた。「おじいちゃんはいの?」「いない」と彼女は答えた。「おじいちゃんが欲しい?」「欲しい、欲しい」と彼女は嬉しそうに言った。「君がうちに来る?それとも、私たちが君のところに行く?どっちがいい?」なんて高潔な子なんだろう!小さな子供が自分のママを差し出そうとしている!よく見てください。これは彼女が両親から受け継いだものなのです。彼女の父親は、並外れた高潔さを備えていました。私はその男性を抱きしめ、キスをし、こんなにも素晴らしい娘がいることを祝福しました。私は彼にどれほど多くの祝福を与えたことか!

そのような人々は、たとえ最も冷酷な心を持つ人であっても感動させる——ましてや神のこととなれば言うまでもない!

実家では、子供たちは優しさと愛に満ち溢れているべきです

子どもには、たくさんの愛情と優しさ、そして適切な導きが必要です。子どもは、あなたがそばにいてほしいと願っています。自分の悩みを話したいと思い、優しく撫でてもらったり、キスしてもらったりしたいと願っています。子どもが落ち着きがなく、そわそわしているときは、お母さんはその子を腕に抱き、優しく撫でてキスをして、落ち着かせ、安らぎを与えてあげなければなりません。もし、子供の頃に優しさと愛をたっぷり受けたなら、その人はその後、人生で直面する問題を乗り越える力を身につけることができるのです。

しかし、今日では、ほとんどの子供たちは両親と過ごす時間が非常に短く、夕方のわずかな時間だけであり、愛情を十分に受けられていない。多くの親は、教師や医師として、職場で子供たちと接している。彼らは他人の子供たちに優しさを注ぎ、家に帰ると、自分の子供たちに優しさを注ぐ余裕がなくなっている。彼らは疲れ果てて帰宅する。すでにエネルギーは枯渇している。父親は椅子にどさりと座り込み、新聞を手にとって最近の出来事を読み、子供たちには全く構わない。幼い子が父親に話しかけてもらったり、撫でてもらったりしようとそばにすり寄るが、父親は子供を自分から遠ざけてしまう。一方、母親は夕食の支度をするために台所へ急いでおり、彼女にも子供たちにかまう時間はない。こうして、不幸な子供たちは愛情に飢えたまま育っていく。もう一つの例:一部の軍人は、命令に従わない兵士を厳しく懲罰することに慣れてしまい、家族に対しても軍隊の規律に従って生活するよう強要したがる。彼らは自分の子供に対して残酷であり、些細なことで頭ごなしに叩く。また、司法機関や法執行機関に勤める親の中には、何か悪さをした自分の子供に対して、自宅内でまるで「裁判」のようなものを行う者もいます。こうした親たちは皆、子供に対して優しさや愛情を持って接していないため、結果として子供たちは精神障害を患うようになります。

親のせいで子供たちがどれほど苦しんでいるか

— ゲロンダ、ある母親が私たちに、どうすればよいかと尋ねてきました。彼女の娘が聖母マリアを冒瀆しているのです。

— 彼女には、悪がどこから始まるのかをよく考えてもらいたい。こうしたケースでは、時に親に責任があることもある。親自身が不適切な振る舞いをすることで子供に悪影響を与え、その結果、子供たちは恥知らずな言葉を口にするようになる。やがて彼らは悪魔的な影響を受け始め、[彼らを諭そうとする試みに対して] 実に嫌悪すべき反応を示すようになる。また、親が、暴力的な手段で子供をより良くできると考えている場合もある。そこに利己心が混じり、親は苛立ちや怒りを込めて子供に話しかけるようになるが、本来は常に優しく接すべきなのだ。

今日、ある女性に本当に腹が立って仕方なかった！ 彼女には子供が一人いるのだが、その子を容赦なく殴っている。恐怖のあまり、かわいそうなその子は震え上がり、言葉も出ず、神経がすり減った状態にある。「あの子には悪魔が憑いている」と、その女性は言い張り、悪魔を追い出すためだと称して、自分の子供を空腹のまま放置している。「私はあの子に食べさせないの」と彼女は説明した。「そうすれば、不浄な霊から解放されるから」。「ねえ」と私は言った。「あなた、頭はちゃんとあるの？ あの子に食べさせてあげて。そして、あなた自身の中に潜んでいる不浄な霊を追い出すように努力なさい。あなたの子供がこれほどまでに変形してしまったのは、あなた自身のせいなんだ。子供には悪魔なんていない。震えているのは、あなたを怖がっているからだ。あなたが彼を殴っているからだ！ 定期的に聖体拝領はさせているのか？」「いいえ」と彼女は答えた。一体どうすればいいんだ？ こんな相手と話し合いなんてできるものか！

— ゲロンダ、もしかすると、その子が時々汚い言葉を吐いたり神を冒瀆したりするから、その子には悪霊が憑いていると言っているのでしょうか？

— 「汚い言葉を吐いたり、神を冒瀆したり」だと！ あの母親が暴力を振るって、あの子を窒息させそうになっている時、あの子自身も自分が何をしているのか分かっていないのです。この不幸な子が本当に気の毒です！ 悪霊に取り憑かれているのはあの子の母親であって、あの子ではありません。

いずれにせよ、最後の審判の日には、驚くべき光景を目にすることになるでしょう！ 偶像崇拜が横行していた時代、母親たちはモロクの像の前で自分の子供たちを焼き殺し、⁴² それによって「神」への賛美に加わろうとしていたのです！⁴³ もしこれらの女性たちが真の神を知っていたなら、どれほどの犠牲を神に捧げていたことでしょうか！ 最後の審判の日、これらの女性たちには罪を軽減する事情が認められるでしょう——彼女たちは悪に惑わされていたからです。しかし、自分の子供たちに無関心で冷淡な態度をとる現代の母親たちには、どのような情状酌量の余地があるのでしょうか？ 神は彼女たちにこう言われるでしょう。「あなたたちは真の神を知っていた。聖なる洗礼を受けていたのだ。これほど多くのことを聞き、これほど多くのことを学んだ。神ご自身が、あなたたちを救うために十字架にかかれた。しかし、あなたたちは何をしたのか？ 子供たちを教会に連れて行き、聖体拝領を受けさせることさえ面倒だったではないか！ 偶

⁴² モロクは、旧約聖書に言及されているセム系の神である。通常、モロクの偶像には幼い子供たちが生贄として捧げられ、彼らは殺されて鉄の格子の上で焼かれていた。

⁴³ 参照：レビ記18章21節および20章2～4節；列王記下23章10節および13節。

像崇拝者たちは、モロクこそが真の神だと考え、自分の子供たちさえも彼に生贄として捧げた。それなのに、あなたたちは何をしたのか？」

親の過ちの代償を払わされるのは子供たちだ！ 一部の親は自分の子供を台無しにしてしまう。しかし、神は不公平な方ではない。神は、この世で——親からであれ、他の誰かからであれ——不当な扱いを受けた子供たちに対して、偉大で特別な愛を注いでおられる。もし子供が道を踏み外す原因が親にあるとしても、神はそのような子供を見捨てたりはしません。なぜなら、その子供には神の助けを受ける権利があるからです。神は、その子を助けるためにすべてを整えてくださいます。そして、私たちは、ある若者たち——いや、若者だけでなく、年配の人々までもが——ある瞬間、突然、善へと方向転換する様子を目にします。私はある事例を覚えています。その家族には二人の子供がいました。父、母、そして娘は、信仰や教会に対して無関心でした。息子は当初、あるマルクス主義の組織に身を寄せました。そこが気に入らず、彼はヒンドゥー教に身を寄せた。そこも気に入らなかったため、やがて聖山へとやって来た。彼はよく私のカリヴァを訪れ、他の修道院の部屋にも足を運んでいた。[その頃には両親もすでに自らの罪を自覚していた]そして、その間ずっとこう繰り返していた。「わがキリストよ！ わが至聖なる聖母よ！ どうか私たちの子供をお守りください」と繰り返していた。その青年は修道生活には向いていなかった。アトス山でしばらく過ごし、心を落ち着かせ、霊的に強くなった後、彼は実家に帰り、両親を霊的に支えた。今、私は彼の父親が、最も早い時間から徹夜祈祷にやってくるのを見ている。彼は教区の教会で「献げ物の詩篇」を朗読し、⁴⁴ 自宅で晩課や夜課を捧げ、祈願のカノンを歌っています。神はなんとすべてを適切な場所に配置されたことでしょうか！ 悪魔は悪を働こうとしましたが、神はその悪をあちこちから和らげ、これらの人々を正しい道へと導かれたのです。

— 娘さんはどうですか、ゲロンダ？

— 彼女も少しずつ正しい道へと歩み始めています。神様がそのための好機を与えてくださっています。

— ゲロンダ、年を重ねてから霊的な生活を始めようとする親の中には、子供たちが幼い頃にキリスト教的なしつけをできなかったことを悔やんでいる人もいます。

— もし彼らが心からの悔い改めを持って、神に子供たちを助けてくださるよう願うなら、神はご自身の力できる限り、彼らのために働いてくださるでしょう。神は、子供たちが襲いかかる嵐の中から救い出されるよう、救いの輪を投げかけてくださるのです。たとえ、この不幸な子供たちを助けることのできる人がいなくても、神は、彼らが目にする何かの助けとなり、正しい道へと立ち直れるよう導いてくださるかもしれません。知っておいてください。ここで言及されている親たちは、本来は善意に満ちた人々でしたが、子供の頃、自分の家族から助けを得ることができなかったため、今、神の助けを受ける資格があるのです。

— ゲロンダ、霊的な生活を送る子供たちが、信仰の問題に無関心な両親のせいで、多くの困難に直面することがあります。

— そのような子供たちについて、神は他の子供たち——つまり、霊的な生活を送っている親を持つ子供たち——よりも、さらに深く気遣っておられます。神は、孤児たちを気遣われるのと同じように、彼らを気遣っておられるのです。

⁴⁴ 晩課の冒頭で読まれる第103篇の詩篇。

環境が子どもに与える影響

— ゲロンダ、子供たちは何歳頃から周囲の影響を受けるようになるのでしょうか？

— 子供たちは、まだ揺りかごの中にいる頃からすでに親の「コピー」を取っています。彼らは大人がしていることを見て、「コピー」を取り、自分の真っ白な「カセット」に記録していくのです。だからこそ、親は自分の情欲を断ち切るよう懸命に努力しなければなりません。その情熱の一部が自分の親から受け継いだものであるかどうかは、何の意味也没有。彼らは、その情熱を切り捨てるための努力を怠ったことについて神に答えなければならないだけでなく、その情熱を子供たちに受け継がせてしまったことについても責任を負うことになるのです。

— ゲロンダ、実家で同じしつけを受けた子供たちが、時には互いに全く似ていないことがあるのはなぜでしょうか？

— 子供は周囲から多くの影響を受けることがよくあります。しかし、その子に善意があれば、成長した時に、神は彼にさらなる啓示を与え、自分が受けた悪影響を理解させ、そこから解放されるための努力をさせるでしょう。

今日の世界には悪意がはびこっている。子供たちは生まれたての頃から墮落させられようとしている。子供たちが成人するまで悪から遠ざけるどころか、善を行うことさえ妨げられている。その結果、罪に陥り苦しむようになった不幸な子供たちは、立ち直りたいと思っても、どうすればいいのかわからないのだ。何しろ、罪という滑り台を転がり落ちてしまった以上、立ち止まるのは容易なことではないのだ。私のカリヴァには、25歳から27歳くらいの若者たちがやってくる。彼らは麻薬に手を出し、罪の中に生きており、その不幸な若者たちは助けを求めてくるのだ。

ある時、私はそうした子供たちのうちの一人が正しい道に進めるよう手助けをしたことがありました。そして今、彼らは自分の友達を、さらにはその友達の友達を私のところに連れてきて、彼らも助けを受けられるようにしているのです。こうした若者たちの姿には胸が張り裂けそうです。ある不幸な若者は、強力な麻薬を常用し、すでに死の淵に片足を突っ込んでいた。手には傷だらけ、歯は腐りかけていた……。しかしその後、彼は麻薬をやめ、他の人たちを助けるようになった。彼のグループには15人ほどの若者がいた。そして私のところへやってくると、彼らはこう自己紹介をした。「僕は○○のグループの者です。」彼は彼らにとって……「親分」だったのだ！しかし、こうした不幸な若者たちの多くは奈落の底へと落ちていく。彼らはヘロインに溺れ、[麻薬を買うためのお金を工面するために]自分の血液を売ったりしている……。こうした若者たちは、自分自身だけでなく、両親までも破滅させてしまう。そして後になって、彼らの父親が脳卒中で、母親が心臓病や肝臓病、あるいはその他の病気で亡くなっていくのを目の当たりにするのだ。

兄弟姉妹間の愛

親は子供たちの間に愛を育むべきである。弱い立場の子供を支えたいと願うなら、親はそのための土台を整え、強い立場の子供から「承諾」を得なければならない。つまり、親は強い立場の子供に、自分の兄弟姉妹が助けを必要としていることを理解させる手助けをしなければならない。正義は神の御業であり、それは年上の子と年下の子の間で等しく分けられなければならない。年上の子には敬意をもって正義が与えられ、年下の子には傷つかないよう愛をもって正義が与えられる。これについては『申命記』にも

言及されている。⁴⁵ 例えば、兄に非がある場合、私たちは弟を擁護すべきですが、その際、弟の目の前で兄を傷つけてはいけません。非のある相手とは二人きりで話し合い、その人が自分の過ちを悟れるようにする必要があります。

— ゲロンダ、年上の兄弟姉妹が年下の兄弟姉妹に対して抱くことが多い嫉妬は、どのようにして癒やされるのでしょうか？

— 嫉妬とは情熱の一種です。しかし、3歳の子供が、お母さんが生まれたばかりの弟や妹に母乳をあげているのを見たら、その嫉妬はある程度正当化されます。というのも、つい最近まで自分にも母乳をあげていたからです。今、その子は、お母さんの腕に抱かれた弟を見て、こう思うのです。「昨日まではママが僕を抱っこしてくれていたのに、今は僕を一番後ろに追いやった！」もしその子に祖母がいればまだましだ。慰めてくれる人がいるからだ。しかし、4歳になれば、嫉妬は少なくなってくるはずだ。そして6歳になったら、ママはこう言ってあげるべきだ。「もうすっかり大きくなったね。こんなに大きくなった子を、お母さんが抱っこするなんてありえないでしょ？」と伝えるべきだ。母親が子供の嫉妬心を乗り越える手助けをすれば、子供は本当に深刻な用事がある時だけ、母親の助けを求めるようになるだろう。もし子供が、絶えずお母さんのスカートにしがみつこうとするなら、そこには何か不健全な要素がある。

企業は子供たちに多大な影響を与えています

— ゲロンダ、幼い頃から霊的な生活を送り、敬虔さを備えていた青年が、なぜ完全に道を踏み外してしまうような事態に陥ってしまうのでしょうか？

— 理由はたくさんあります。世俗的で無頓着な生活を送っている子供たちは、貞潔で霊的な生活を送り、自分たちが送っているような生活へと彼らを引き込もうとする他の子供たちを見ることで、自分の過ちに気づかされるのです。ある時、二人の少年が道を歩いていました。突然、一人が滑って、ひどく汚れた水たまりに落ちてしまいました。服は全身泥まみれになってしまった。二人が少し先へ進み、別の水たまりに差し掛かった途端、彼は友人をその水たまりに突き飛ばし、友人も泥まみれにさせた。その少年がそうした理由は、自分だけが汚れていて、友人はきれいなままであることに、居心地の悪さを感じたからだった。

企業は子供たちに多大な影響を与えています。幼い頃、私には生まれつきの愛情がありました。それは私の本性そのものでした。ラバに乗ってどこかへ出かけるときは、同年代の友達を一人ずつラバに乗せようと努め、自分の肩には弟を乗せていました。ある日、兄弟の一人が小鳥を殺してしまったとき、私はとても悲しくなり、彼を叱りつけた。それからその小鳥を手に取り、泣きながら埋葬した。私は自分と同じ年頃の子供たちと仲良くしていた。私たちは森へ出かけ、祈りを捧げ、聖人の伝記を読み、断食をした。その後、その子たちの母親たちが、子供たちに私と付き合うのを禁じるようになった。「あの子と遊んではいけない」と彼女たちは言った。「あの子はあなたたちに結核をうつすわ」。そうして子供たちは私から離れていき、私は孤独を感じた。

それだけでなく、みんなから「お坊さん、お坊さん！」と四方八方からからかわれ、私の生活は苦痛そのものだった。やがて、彼らの嘲笑に耐えられなくなってしまった。そこで私は、「年上の連中と仲良くなって、彼らと同じように振る舞うふりをしよう」と決めた。そうして、私は年上のティーンエイジャーたちとつるむようになった。ゴ

⁴⁵ 申命記1章17節を参照。

ムを手に入れて、パチンコを作った。最初は、撃ちたいふりをしてゴムを張るだけだった。その後、散弾を手に入れ、パチンコで最も的を射抜く名手になった。そしてある日、一羽の小鳥を撃ち、それが死んでいるのを見た瞬間、私ははっと我に返った。ゴムバンドも散弾も捨てて、自分にこう言い聞かせた。「お前の兄が小鳥を殺した時、お前は泣いて、兄のしたことを叱ったじゃないか。だが、自分はどうなってしまったんだ？ 君は鳥を殺している。このままでは、いつの間にか動物まで殺すようになってしまうだろう。」そして実際、もし私がそのような生活を送り続けていたら、スリングショットでの射撃から動物の狩猟へと移り、さらには自分でその皮を剥いでいたに違いない。

もともと繊細で感受性豊かな魂を持っていた人間でさえ、どれほど悪意に満ちた存在にまで堕ちてしまうことか！ それは、注意を怠り、悪しき仲間とつるんでしまう場合に起こり得る。一方、善良な仲間は大きな恩恵をもたらしてくれる。神は人々に多様な才能を授けられました。人が他人の墮落や墮落した姿を見るのと同じように、他人の美德にも気づき、それに倣うことができるのです。

正しい道から外れてしまった子どもたちへの助け

家庭には、愛と平和の雰囲気があるべきです。家族から少しの愛を受け取った子どもは、たとえ突然家出をしたとしても、他の場所では愛ではなく、偽善しか見つからないと気づけば、やはり家に戻ってくるでしょう。しかし、もし子供が家で起きた不適切な場面や、罵り合い、争いを覚えていたとしたら、どうしてその心が家に戻りたいと願うのでしょうか？

—ゲロンダ、もし子供が家を出てしまったら、親はどうすればよいのでしょうか？

— 彼らは彼とのつながりを保つよう努めるべきだ——そうすれば、彼が正気に戻ったとき、彼らのもとに戻ってこられるように。彼らは彼に優しく話しかけ、彼を助けるために、彼に考えさせるようにしなければならない。例えば、子供が夜中にどこへ行くのか分からないまま彷徨っているなら、母親はこう言うべきだ。「こっちへおいで、息子よ。もしあなたが私の立場だったら、自分の子供が真夜中を過ぎてから帰ってきたら、平然としていられるだろうか？」

たとえ子供たちがどんなにひどい転び方をしたとしても、親は絶望してはいけません。なぜなら、私たちの時代では「罪」が流行っているからです。親は常に次のことも心に留めておくべきです。すなわち、現代の子供たちは、自分たちが犯す悪戯について、罪を軽減する事情があるということです。現代において「4」と評価される行動は、私たちが若かった時代の「5プラス」に相当する価値がある。もちろん、親は子供たちを助けるよう努めるべきだが、過度に心配する必要はない。時が来れば、子供たちは分別を身につけるでしょう。今は、彼らの精神がまだ未熟なため、善悪を理解できないのかもしれない。彼らの心は曇っており、自分たちが直面している危険や、自らに与えてしまう取り返しのつかない損害を見分けるだけの明晰な意識を持っていないのです。

親が、子どもの悪ふざけに心を痛めていることを子どもに示すのが良いでしょう。しかし、子どもに圧力をかけすぎず、祈りを捧げるようにしてください。苦しみの中で捧げられる祈りは、良い結果をもたらします。もし子どもが非常に重大な過ちを犯した場合は、親は慎重に介入すべきです。もしその過ちがそれほど重大でないなら、親は少し目をつぶってあげましょう。そうすることで、子どもを苛立たせたり、その子の置かれている状況を悪化させたりしないようにするためです。なぜなら、苛立たせると、子

どもは親から離れていってしまう結果になるからです。[そのような場合]、親はただキリストと聖母マリアに、その子を覆ってくださるよう祈るべきです。

両親、とりわけ母親の祈りは、心から捧げられ、そこに痛みが込められているため、非常に実り多いものです。私がイヴェルスク修道院に住んでいた頃、ある青年が偶然そこを訪れました。この青年は、ハルキディキを旅している最中、聖山へ向かう巡礼者の一行に出会いました。彼らに合流してアフォン山へやって来た彼は、私の修道室を訪ねてきました。うわっ、なんて男だったことでしょう！ 神を信じない者、神を冒瀆する者、これほど恥知らずな者は他にいないほどでした！ しかも、彼にはある種の悪魔的な機転があり、何一つ信じていませんでした。老若男女を問わず、誰に対しても汚い言葉で罵り散らしていました。彼を正気に戻すのに、どれほどの労力を費やしたか、お分かりだろうか？ 彼とは何とか相互理解に至ることができ、私は彼の長い髪を刈り上げることにさえ成功したのだ！ ...「神があなたの母に健康をお与えになりますように」と私は彼に言った。「彼女の祈りが、あなたをここに導いたのです。」「はい、神父様」と彼は答えた。「ハルキディキをぶらぶらしていたら、いつの間にかここに来ていたんです。」「想像してみてください」と私は言った。「君が聖山に来たことを知り、さらに髪を切った姿を見たら、お母さんはどれほど喜ぶことか！」「どうしてそれを当てたんですか、神父様？」と彼は驚いた。「確かに、私が変わった姿を見たら、母はきっと大喜びするでしょう！」ほら、どうですか！ 神はあの若者を「出し抜いて」、彼を「専門家」のもとへ送り込んだのです！ 彼の不幸な母親は、神にどれほどの祈りを捧げてきたことでしょう！

子どもを叱るべき時と褒めるべき時

親は、夕方に子どもを叱らないよう細心の注意を払うべきです。なぜなら、夕方の時間帯には、子どもたちが落ち込んだ気分を晴らす手段がないからです。そして、夜の闇は彼らの心の状態をさらに暗くします。子どもたちは、親にどう抵抗するのが最善か考え始めます。頭の中には様々な「防衛策」が浮かび、そこに悪魔の囁きも混ざり込み、その結果、絶望の淵に追い込まれることさえあります。一方、日中であれば、たとえば子どもたちが親に対して様々な復讐をほのめかしたとしても、外に出れば気が紛れ、気分も晴れ、落ち込んだ気持ちも消えていくものです。

—ゲロンダ、体罰は子供たちが改心するのに役立つのでしょうか？

— 親はできる限り、こうしたことは避けるべきです。親は優しさと忍耐をもって、子どもの行動が間違っていることを理解させようと努めるべきです。子どもがまだ幼く、自分が危険にさらされていることを理解できない場合に限り、おしりが叩かれることは子どものためになります——そうすることで、次回はもっと注意深くなるからです。また一発叩かれるかもしれないという恐怖は、子どもにとってブレーキとなり、危険から身を守る役割を果たします。私が幼かった頃、大きな助けになったのは父ではなく母でした。両親とも私を愛し、私の幸せを願っていました。しかし、両親はそれぞれ独自の 방법으로私を支えてくれました。父は厳しい人だった。私たち子供たちがいたずらをする、父は私たちを平手打ちにした。その痛みのおかげで少しは落ち着くことができたが、痛みが引くと、その痛みも父の忠告も忘れてしまっていた。それは父が私を愛していなかったからではない。いや、父は愛ゆえに私を叩いたのだ。ある時のことを覚えています——私が3歳の時、父が私の後頭部をバシッと叩いたせいで、私は数メートルも

吹き飛ばされてしまったのです！ その理由をご存じですか？ 隣の家には誰も住んでいませんでした。家主はアメリカへ移住してしまい、家は荒れ果てていました。その家の庭にはイチジクの木が生えていて、枝が通りまで伸び、道路の上に垂れ下がっていた。木には実がたわわに実っていた。僕たちが子供たちと外で遊んでいると、ある近所の人が近づいてきて、僕を持ち上げて、枝に手が届かないからと、イチジクをいくつか摘んでほしいと頼んできた。私は5、6個のイチジクを摘み、そのうち2個を彼からもらった。このことを父が知ると、ひどく怒った。そこで、私はあの平手打ちを食らったのだ！ 私は泣き叫んだ。その様子を目の当たりにしていた母は、父の方を向いてこう言った。「どうして子供を叩くの！ まだ小さいんだから、何も分かっていないのよ！ どうしてその泣き声を平然と聞いていられるの！」「もしイチジクを摘みに連れて行かれた時に泣いていたら——」と父は答えた。「今こうして泣いてはいないだろう。だが、どうやら彼自身も他人のイチジクを横取りしたかったらしい！ だから、泣かせておけばいい！」そんなことを言われた後、私がまた同じことを繰り返せるはずがなかった。一方、母は私のいたずらを見ては心を痛めていたが、彼女には気高さがあった。私が悪さをしているのを見ると、私を悲しませないよう、顔を背けて気づかないふりをしていたのだ。しかし、この母の「知恵」に、私の心は文字通り張り裂けそうだった。「ほら、ほら」と私は自分に言い聞かせた。「お前はあんなに悪さをしたのに、母さんは叩くどころか、見ていないふりまでしている！ いや、もう二度とこんなことはしない！ どうしてまた母を悲しませることができるだろうか？」母はそうすることで、私を後頭部を叩いて叱るよりも、はるかに私を助けてくれていた。とはいえ、私自身もそれを悪用したり、「えっ、今、母は私を見ていないんだ。じゃあ、もっと悪さをして、もっとはしゃいでみよう」などとは言わなかった。一方、父はそうではなかった。少しでも何か間違えると、すぐに頭を叩かれた。ご覧の通り、二人とも私を愛してくれていたが、母の気高い振る舞いの方が、私にとってより大きな助けになったのだ。

— ゲロンダ、しかし、子供の中にはとてつもなくやんちゃな子もいます。叫んだり、走り回ったり、いたずらをしたりするのです。そんな子供たちに対して、親は体罰を避けるにはどうすればよいのでしょうか？

— ねえ、子供たちは悪くないんだよ。子供たちが健やかに育つためには、走り回ったり遊んだりできる庭が必要なんだ。なのに今、かわいそうな子供たちは高層マンションに閉じ込められている。自由に走り回れず、遊べず、楽しむこともできない。親たちは、自分の子供が生き生きとしていれば、落ち込む必要はない。生き生きとした子供には内なる力があり、それを正しく活用すれば、人生で大いに成功することができるのだ。

子どもに強制することは、決して良いことではありません

一部の親は、子供に非常に強いプレッシャーをかけている——しかも他人の目の前でだ。まるで自分の子供が荷馬であるかのように、右にも左にも逸れずに進むよう、鞭で叩いて従わせているかのようです。まるで手綱を握りながら、「自由に歩け！」と言っているようなものです。そして、そのような親はついには子供を殴り始めることさえあります。今日、ある母親が息子——ずんぐりした体格の青年——を連れてやって来た。その子は病気だった。「どうすればいいのでしょうか、神父様？」と彼女は尋ねた。「うちの子は何も食べず、私たちに会うことさえ嫌がっているんです。」しかし、私が

どうすべきかを伝えると、彼女はまた最初から同じことを言い始めた。「では、これからどうすればいいのでしょうか？」

— ゲロンダ、もしかすると、彼女はあなたの言ったことを理解できなかったのかもかもしれませんね？

「どうして分からないの！『君と一緒にいるなんて、たった1時間だって無理だ』と私は彼女に言った。『それなのに、君の子供はどうやって君と一緒に暮らしていけるの？君はあの子を追い詰めてしまったじゃないか！』『いいえ』と彼女は答えた。— 私はあの子を愛しているわ。」「あなたのそばにいて居心地が悪がっているのに、どこに愛があるというの？あの子は家から逃げ出したがっている。別の環境に行きたいからよ。だって、あなたのそばにいないときは、とても行儀よくしているじゃない。あの子があなたに会いたがらないということは、つまり、あなたにも責任があるということだ。あの子を苛立たせないで。だって、あなたはあの子を傷つけているんだから。優しく、忍耐強く接してあげて。」私は彼女にそうすべてを話した。彼女は私の話を聞いてくれたが、また最初から同じことを言い始めた。「じゃあ、私はどうすればいいの？あの子は私たちに会いたがらないのよ。」こんな人とどうやって相互理解に至ればいいのか？あの子には何の問題もないのに、彼らはあの子を馬鹿扱いしている。つまり、彼ら自身に何か問題があるということだ。

親による強制は子供たちを助けるどころか、むしろ息苦しさを与えるだけです。「それには触らないで、あそこには行かないで、こうしなさい……」といった言葉が延々と続きます。しかし、手綱を引くときは、切れてしまわないように注意しなければなりません。子供たちが自分の過ちに気づけるよう、配慮を持って指摘しつつ、親子の間に溝が生じないようにする必要があります。親は、小さな木を植える熟練の庭師と同じことをすべきです。庭師は、風が木を右や左に傾けようとしても、木が歪んだり傷ついたりしないよう、柔らかく細い紐で木を杭に優しく結びつけます。その後、庭師は木のために柵を作り、水をやり、世話をし、枝が十分に伸びるまではヤギから守ります。なぜなら、もし小さな木がヤギに食べ尽くされてしまえば、その木は死んだも同然だからです。ヤギに食べ尽くされた木は、実を結ぶことも、木陰を作ることもできなくなります。しかし、枝が伸びてくると、園丁は柵を取り除き、木は実を結び始め、その木陰では、ヤギも羊も、そして人々も休むことができるようになります。

しかし、しばしば親たちは、子供への過度な心配から、子供たちを柔らかい紐ではなく、鋼のワイヤーで縛りつけようとしてしまいます。それに対して、子供たちを縛るなら、傷つけないように優しく行うべきなのです。親は、高潔な心を持って子供たちを助けるよう努めなければなりません。そうすることで、子供たちの心に慈愛が育まれ、やがて彼ら自身が善を行う必要性を感じられるようになるでしょう。親は、できる限り、愛情と痛みを込めて、優しく子供たちに善について説明すべきです。ある母親のことを思い出します。彼女は、息子が悪い行いをしているのを見て、涙を浮かべ、心を痛めながらこう言いました。「そんなことはしないで、私の愛しい子よ。」そして、そのような手本を見て、彼女の子供たちは、人生の誘惑を避け、困難の前でひるむことなく、祈りと神への信頼をもってそれを乗り越えるために、喜びをもって奮闘することを学んだのです。

今日、大人も子供も、まるで精神病院のような世界で暮らしているため、多くの忍耐と祈りが必要です。膨大な数の子供たちが脳卒中を起こすほど追い詰められています

。[まるで]少し壊れかけた時計を、親が限界まで、いや限界を超えて巻き上げ、その結果、時計のバネが切れてしまうようなものです。分別が必要です。ある子供にはもっと「巻き上げる」必要があり、別の子供にはそれほど必要ありません。不運な子供たちは、あらゆる[悪しき]風潮にさらされている。学校や路上で「親を尊重するな！誰をも、何をも尊重するな！」という呼びかけを耳にし、さらに母親までもが「彼らに締め付けを強めよう」とするなら、子供たちはますます反抗的になる。

ですから、私は母親たちに対し、祈りの中で自分自身を律し、子どもたちに無理強いをしないよう勧めます。もし母親が絶えず子どもに「それをやってはいけない、あれに触ってはいけない」と言い続けると——些細なことに対してでさえ、時には不当にさえ——、例えば子どもが火にガソリンを注ごうとするような深刻な危険に直面した際、子どもは言うことを聞かず、それを実行して重傷を負ってしまうでしょう。子どもは、「そんなことするな」という言葉に愛が込められていることを理解できません。しかし、子どもが少し成長すると、自己中心的な考えが芽生え、注意されると、「僕はまだ小さいからって、そんな風に扱われていいの？」と思い、反抗的になります。親は子どもに、幼い頃、火傷をしないように守ってあげたのと同じように、大人になった今も、別の「火」から守ってあげているのだと理解させなければなりません。だからこそ、子どもは注意深くあり、誘惑者である悪魔に隙を与えず、聖なる洗礼の恵みを自分の中に保ち続けなければならないのです。

分別を欠いた過度な親の愛情

— ゲロンダ、母親が分別のない愛情によって、自分の子供に害を及ぼすことはあるのでしょうか？

— もちろん、あり得ます。例えば、母親が自分の赤ちゃんが歩くことを覚えられないのを見て、「かわいそうに、この子、歩けないなんて」と言い、子どもの手を引いて自分で歩けるよう手助けする代わりに、しょっちゅう抱き上げてしまうのです。それでは、その子はいつになったら歩くことを覚えられるのでしょうか？もちろん、そのような母親は愛情に駆られているのですが、過度な世話を焼くことで、かえって自分の子供を害しているのです。私は、息子が兵役を終えたある父親と知り合いでした。ところが、その父親は成人した息子の手を握り、床屋へと連れて行って行ったのです！「息子を連れてきたから、髪を切ってくれ」と父親は言った。「料金はいくらで、いつ迎えに来ればいい？」こうして、この男は[その無分別な過保護によって]息子を台無しにしまったのだ。

愛は理性によって「抑制」されなければならない。真の愛は利己的ではない。そこには利己的な偏りなどなく、分別を備えている。多くの女性の愛には、その愛を無駄にしないためにも、分別が必要である。ある日、両親に腹を立てている青年が私の小屋を訪ねてきた。彼の不運な両親は心根は優しいのだが、彼をどうすればいいのか分からなかったのだ。そして彼は、両親が自分に圧力をかけてくること、自分を愛していないことなどを私に語り始めた。「ねえ、聞いてくれ」と私は彼に言った。「君が小さい頃、お母さんが君を何枚も服で包んでいた時、それは何のためだったんだ？君が風邪を引かないようにするためか、それとも熱中症にさせるためか？君のお母さんのその行動には、たくさんの愛が込められていたんだ。」ついに、両親がどれほど自分を愛していたか

を理解した青年は、泣き出した。彼の母親にはたくさんの愛があった。息子を助けることはできなかったけれど、息子に反発を招くような振る舞いをしてしまったからだ。

必要に応じて、母親は子どもに対して厳しく接すべきです。もし母親が子どもの言いなりになり、何でもかんでも承諾してしまうと、それは子どもにとって良いことではありません。アダナ⁴⁶のある未亡人には、ヤニスという一人息子がいました。その少年が少し成長すると、彼女は彼を靴職人の弟子として預けました。一週間ほど仕事に通った後、少年はこう言いました。「お母さん、もう師匠のところに行く必要はないよ。靴作りの技術は覚えたから。」「いつ覚えたの？」と彼女は尋ねました。「もしよかったら」と彼は答えました。「お母さんにも、靴の作り方を教えてあげられるよ。ほら、見て：こうやって靴底を切り抜き、こうして革を貼り付け、かかとを合わせ、釘で打ち付けるんだ……」ヤニスが弟子入りしていた親方は、とても心優しい人だった。ヤニスは父親なしで育っていたため、彼を気の毒に思い、この子に職人を教え込みたいと思っていた。しかし、一週間経ってもヤニスが現れないのを見て、彼は心配になった。もしかして病気になったのではないかと思い、その子の様子を尋ねるために母親のもとへ向かった。「ヤニスに何かあったのか？　なぜもう仕事に来ないんだ？　病気になったのか？」と、職人は未亡人に尋ねた。「いいえ」と彼女は答えた。「彼は元気よ。」「それなら、なぜ仕事に来ないんだ？」「彼がそこに行く必要なんてあるかしら？」と未亡人は答えた。「ヤニスはもう靴作りの技術を身につけたんだから。」「まさか、たった数日でそんなことができたのか？」と靴職人は驚いた。「とても簡単よ」と母親は答えた。「革を取って、木型に張り、釘を打ち込み、かかとを合わせ、それから木型から靴を外せば、それで完成よ！」靴職人は笑って、彼女に別れを告げて去っていった。彼が工房に戻ると、弟子たちは尋ねた。「師匠、ヤニスはもうどうでしたか？」「元気で無事だ」と彼は答えた。「ヤニスだけでなく、彼の母親も靴職人になったんだ！」

そして、多くの親がこの未亡人のように振る舞っているのを目にします。彼らは自分の子供を愛していると思い込んでいますが、実際には子供たちを傷つけているのです。例えば、ある母親は過度な愛情から、子どもにキスを浴びせ、「この世で私の子どもほど素敵な子はいない！」などと口にする。それによって、彼女は子どもの中に傲慢さと不健全な自信を育んでしまう。その結果、その子どもは自分がすべてを知っていると確信し、親の言うことを聞かなくなってしまうのだ。

親は、幼い頃から子どもが自分自身に責任を持つことを学べるよう手助けすべきです。子どもには、家庭内で自分にできる仕事をこなさせましょう。すべてが準備された状態で、お皿に乗せられて提供されることを要求させてはいけません。そうしなければ、大人になったとき、彼らは大変な目に遭うことになるでしょう。ある職人は休む間もなく働き、子供たちを育て上げました。しかし、彼が働いている間、子供たちは一日中街をぶらついてばかりいました。そして、大人になって自分の家庭を持った後も、相変わらず父親がすべてを用意してくれることを期待し続けていました。そして、父が「そろそろ自分たちで家や家族の面倒を見る時が来た」と言ったとき、子供たちはこう返した。「そんなことあるわけないでしょう、お父さん？　だって、私たちが小さい頃、お父さんは私たちを見捨てたりしなかったじゃない！　それなのに、私たちが成長して家族の責任という重荷を背負っている今、どうして私たちを見捨てられるの？」

⁴⁶ アダナ——小アジアの都市で、地中海北東岸に位置する。——訳者注

遺産の分配

両親に経済的な余裕があるなら、彼らは子供たちの将来に対して責任を負うことになる。もちろん、何よりも大切なのは、子供たちを立派な人間に育て上げ、その後、子供たちが生計を立てられるよう、教育を受けさせたり、職業を習得させたりすることだ。そして、両親は子供たちのために小さな家などを購入してあげるべきである。1924年、当時の人口交換に伴い、⁴⁷ 私たちの家族はカッパドキアのファラスからギリシャへ移住しましたが、村の代表を務めていた父は、村人全員の生活を立て直すよう尽力しました。自分の家族のことには、最後にしか手を付けなかった。その後、兄弟姉妹が成長すると、彼らは不満を漏らすようになった。「父さん、みんなのことは気にかけてくれたのに、僕たちのことは考えてくれなかったじゃないか」と彼らは言いました。もし人が独りであれば、他者にすべてを捧げ、自己犠牲によって自分自身に対して完全な無関心を示すこともできるでしょう。それは高潔な精神に駆られてのことです。しかし、もし人に家族がいるなら、その家族のことにも考えを及ばせなければなりません。

もちろん、親は慌てて子供にすべてを一度に与えてしまってはなりません。若者は経験が浅く、現代の飽くなき生活の中で、収入に見合わない浪費をしてしまう可能性があるからです。そうなると、親は「もう手助けできない」と気づいた時に、心を痛めることになるでしょう。さらに、親は最も弱い子供に細心の注意を払い、物質的なものだけでなく、それ以上に精神的・道徳的な支えを与えてあげなければなりません。そうすることで、失敗へのパニックが、荒れ狂う激流のようにその子を底へと引きずり下ろすことを防げるのです。しかし、親は分別と愛情を持ってすべての子供たちの世話をし、子供たちとの関係に冷たさが生じないようにしなければなりません。

今日では、兄弟姉妹が土地や遺産をめぐる口論したり、裁判所に駆け込んだりするものがない、精神的に充実した仲の良い家族に出会うことはめったにない。私は7人家族を知っていました。両親は金の装飾品を持っていました。両親が亡くなった後、子供たちは、老後の両親の世話をした兄がその金を持ち帰るべきだと決めました。しかし、その兄は、妹には大家族がいるため、彼女の方がその金をより必要としていると考えました。彼はその金を妹に譲りました。その姉は金を三番目の兄に渡し、三番目の兄は四番目の兄に渡し、結局、金は最初の兄のもとに戻ってきたのです！つまり、この人たちに起こったことは、ラヴサイカに記されていることと同じでした。⁴⁸ 結局、最初の兄もその金を自分のものにしておきたくなかったため、彼らはそれを寺院に寄付することに決めました。

第3部。 子供たちとその責任

⁴⁷ 1924年のギリシャとトルコ間の住民交換。トルコに住んでいたギリシャ人はギリシャへ、ギリシャに住んでいたトルコ人はトルコへ移住した。――訳者注

⁴⁸ パラディオス（エレノポリス司教）著『ラヴサイク、あるいは聖人と祝福された教父たちの生涯の叙述』のセラピオンに関する章を参照。キリスト教生活財団刊、クリン、2001年、176—177頁。

「親の祝福は、子どもたちにとって最も偉大な遺産です。ですから、子どもたちは親の祝福を得られるよう努めなければなりません」

第1章。 子どもたち、その喜びと困難について

乳幼児期

— ゲロンダ、聖体礼儀の最中に、乳児たちが微笑むことがあることに気づきました。

— 彼らは聖体礼儀の間だけでなく、いつも微笑んでいる。幼子たちは何の心配事もないからこそ、神と絶えずつながっているのだ。キリストが幼子たちについて何と言われたか、覚えていますか？「天の御父の御顔を、天の御使いたちが彼らに見ているのです。」⁴⁹ 幼子たちは、神と、常に彼らのそばに寄り添っている守護天使とつながりを保っています。眠っている間、乳児たちは笑ったり泣いたりするのは、楽しいことも恐ろしいことも見ているからです。ある時は、自分の守護天使を見て、その天使と遊んでいます。天使は彼らを優しく撫でたり、手を握ったりすると、彼らは笑います。またある時は、誘惑者が恐ろしいものを彼らに見せつけ、彼らは泣いてしまいます。

— なぜ誘惑者は赤ん坊を怖がらせるのですか？

— 彼らが怖がることは、赤ちゃんたちにとっても良いことなのです。恐怖のあまり、母親を呼ぶことを余儀なくされるからです。もしその恐怖がなければ、赤ちゃんたちは母親の腕の中へ駆け寄ることはないでしょう。神は人々のためを思って、あらゆることを許しておられるのです。

— 子どもたちが成長したとき、赤ん坊の頃に見たことを覚えているのでしょうか？

— いいえ、忘れてしまいます。もしその子が、自分の天使を何度見たかを覚えていたら、驕り高ぶってしまうでしょう。ですから、成長するにつれて、すべてを忘れてしまうのです。神の御業は実に賢明です。

— 彼らは洗礼を受けた後に、これらすべてを見るのですか？

— もちろん、洗礼の後です。

— ゲロンダ、洗礼を受けていない赤ん坊を聖遺物に当ててもいいのでしょうか？

— なぜいけないというのですか？ 聖遺物で赤ん坊に十字を切ることもできるのです。今日、私はまるで小さな天使のような赤ちゃんを見かけました。「翼はどこにあるの？」と私は尋ねました。その子は戸惑って、何て答えればいいのか分からなかったようです！... アトス山にある私のカリヴァでは、春、木々が花を咲かせる頃、私のケリアを囲む柵のそばにある低木の枝に、飴をぶら下げています。小さな子供連れの訪問者が来ると、私はこう言います。「みんな、お願いだから、茂みからキャンディを摘んでね。雨が降ったら、溶けてなくなってしまうから！」機転の利く子供たちは、私が枝にキャンディを吊るしたのだと気づいて、笑います。また、キャンディが茂みに自然に生えてい

⁴⁹ マタイによる福音書 18:10。

ると信じている子もいれば、信じるべきか迷っている子もいます……。小さな子どもたちにも、ちょっとした喜びが必要なのです。

— ゲロンダ、お菓子をたくさん飾っているのですか？

— 飾るなら、たくさん飾るわ。おいしいお菓子をもらっても、大人にはあげないの。大人にはルクムを振る舞うわ。素敵なスイーツをもらったら、アフォニアダの子供たちのためにとっておいてあげるの。⁵⁰ ここ、修道院でも、昨日キャラメルやチョコレートを植えてみたら、今日にはもう花を咲かせたわ！ 気づきましたか？ まあ、当然でしょう。天気は晴れ、土も肥沃で、皆さんがよく耕してくれたおかげで、チョコレートがこんなに早く花を咲かせたのです！⁵¹ さあ、私がどんな花畑を作ってあげるか、見てください！ もう子供たちにキャンディやチョコレートを買ってあげる必要はなくなります。どう思いますか？ 自分たちで収穫するようになるのです！

— ゲロンダ、巡礼者たちは、菜園からキャンディやチョコレートが突き出ているのを見て驚きました。「たぶん、子供たちの誰かがやったんだろう」と彼らは言いました。

— それなら、これはある大きな子供がやったことだと、なぜ彼らに言わなかったのですか？

守護天使は小さな子供たちを見守っている

— ゲロンダ、神様はなぜ一人ひとりに守護天使を与えてくださるのですか？ 神様ご自身で私たちを守ってくださらないのですか？

— 守護天使とは、神がご自身の被造物に対して注がれる特別な御守りです。守護天使とは、神の摂理であり、人間に対する神の御計画の現れです。そして、そのことに対して、私たちは神に恩義を負っています。天使たちは特に幼い子供たちを慈しんで守ってくれます。なんと彼らを大切に守ってくれていることでしょう！ ある時、二人の子供が路上で遊んでいました。一人がもう一人の頭に石を投げようとして、すでに狙いを定めていました。もう一人の子供は危険に気づいていませんでした。すると、まさにその最後の瞬間、どうやらその子の守護天使が何かをさせたのか、その子は何かを目にして飛び上がり、石は頭の上をすり抜けていきました。

ある時、ある母親が畑仕事に出かけ、赤ん坊を連れて行った。授乳を終えると、赤ん坊をゆりかごに寝かせ、仕事に向かった。しばらくして赤ん坊の様子を見に行くと、赤ん坊が蛇を手に持ち、好奇心いっぱいにと見つめているのが見えた！ 母親が赤ちゃんに母乳をあげたとき、口元にミルクが残っていた。すると、蛇が赤ちゃんのそばまで這い寄り、その顔からミルクを舐め取っていたのだ。赤ちゃんは蛇をつかんだ。それを見た母親が叫ぶと、赤ちゃんは怖がって手を離し、蛇は這って逃げ去った！ 神様は子供たちを見守ってくださる。

— ゲロンダ、ではなぜ多くの子供たちが病気やその他の不幸に苦しんでいるのでしょうか？

— 神は、一人ひとりの人間にとって何が益となるかをご存知であり、それに応じて必要なものをすべて与えてくださいます。神は、益とならないものを人間に与えること

⁵⁰ アフォニアダ——聖アトス山にある男子校。——訳者注

⁵¹ 前日、長老は、耕したばかりの畝に数個のキャラメルやチョコレートを「植えて」、その上にライラックの小枝を載せて、お菓子が花咲いているように見せた。

はありません。例えば、時には、身体的な欠陥や障害がある方が、もし神がその障害から私たちを守ったり、無傷のままに保ったりした場合よりも、私たちにとってより大きな助けになると神はご覧になることがあります。

聖なる洗礼

— ゲロンダ、北エピル地方の住民たち、⁵² 洗礼を受けずに亡くなる人々は、どうなるのでしょうか？

— えーと、彼らの大半は両親によって「空気洗礼」を受けていました。⁵³ また、それらの国々では、多くの人が産院で保育士や看護師から「空気洗礼」を受けていました。ある看護師が、水を入れた洗面器の中で赤ん坊に洗礼を施したという事例も知っています。神はその女性の心遣いをご覧になっておられました……そして、新しく洗礼を受けた人々はなんと多くの恵みに満ちていることでしょう！ ある時、350人ほどの集団の中に、洗礼を受けた女性がいるのに気づきました。私はそれが誰なのか尋ねると、聖なる洗礼を受けたトルコ人女性だと教えてもらいました。彼女の顔は輝いていました。彼女の隣にいる人たちは、まるで野蛮人のように見えました。

— ゲロンダ、洗礼の際に子供に二つの名前をつけるのは正しいことでしょうか？

— もし夫婦が子供の名前を巡って喧嘩し、離婚してしまうのなら、せめて三つくらい名前をつけてやればいいでしょう！ とはいえ、今では正しいキリスト教の名前さえも、何だか分からないものになってしまっていますね……ヴィッキー、ペッピー、ミミ……

— ゲロンダ、妊娠5ヶ月の女性が赤ちゃんを失ってしまいました。その子は死産となり、彼女は、その子に「空中の洗礼」さえ施せなかったことを悔やんでいます。

— 彼女自身に非がないのなら、神を信頼すればよいのです。神は、そのような子供たちをどうすべきか、どこに置くべきかを御存知なのですから。

— ゲロンダ、母から聞いたのですが、私の兄弟の一人が生まれて数時間後に亡くなり、母は彼に洗礼を授けることができなかったそうです。私は母に、このことを霊的指導者に打ち明けるよう勧めました。

— 彼女が洗礼を授けたかったものの、間に合わなかったのなら、彼女には情状酌量の余地がある。他の女性たちは、そもそも中絶をして、自分の子供を自ら殺しているのだから。神の裁きは我々には計り知れない。もし彼女が不注意のせいで子供に洗礼を授けることができず、その子が洗礼を受けずに亡くなってしまったとしたら、それは重い罪となるだろう。君はこうしたことを常識の立場から判断している。それは合理主義的な神学だ。ある時、巡礼者の一団が私のところへやって来て、私は彼らに次のような出来事を話したのを覚えている。北エピロス出身の赤ん坊が、三度も洗礼を受けたのだ。一度は祖母が、もう一度は祖父が、そして最後に母親が——互いに内緒で——それぞれ洗礼を施した。というのも、彼ら全員がその赤ん坊を未洗礼だと考えていたからだ。私

⁵² 北エピル — バルカン半島の一部で、ギリシャ人が居住している地域。1912年以降、アルバニアの領土となっている。 — 訳者注

⁵³ ギリシャの慣習によれば、洗礼を受けていない新生児の命に差し迫った危険がある場合、その子に対していわゆる「空中洗礼」を行うことができる。いかなるキリスト教徒（男性・女性を問わず）も、その乳児を抱き上げ、空中で三度十字を切って、「神の僕（名前）は、父の名において洗礼を受ける。アーメン。そして御子の名において。アーメン。そして聖霊の名において。アーメン。」と唱えます。もしその乳児が亡くなれば、洗礼を受けたものとみなされますが、もし生き残った場合は、エラダ教会総会の決定に基づき、その子に対して洗礼の秘跡が完全に繰り返されます。 — 訳者注

がこの話をしていると、巡礼者の一人が飛び上がってこう言い放った。「それは正統ではない!」「ねえ、」と私は彼に言った。「君の考えでは、彼らはどこかの教義書で、子供を三回洗礼しなければならないと読んだというのか? だって、この赤ちゃんは三度の祝福を受けたんだぞ!」

— ゲロンダ、時々、人は夢の中で亡くなった親族の姿を見て、彼らと話すことがあります。これは、人々の信仰と悔い改めを助けるために、神が許しておられることなのでしょうか?

— ええ。以前、似たような話をした覚えはありませんか? 聖山のある修道士は、ブルガリアの領内にある村の出身でした。そこには洗礼を受けていない人が大勢いました。その修道士は、まだ一般信徒で洗礼も受けていなかった頃、最近亡くなった幼い甥が夢に現れたと私に話してくれました。その子は美しい庭園の柵の向こう側に立って泣いていました。庭園には、喜びながら遊んでいる小さな子供たちがたくさんいました。「なぜ庭園に入らないの?」と、その夢を見た人は尋ねました。「どうやってそこに行けるの?」と、その子は答えました。「だって、僕は洗礼を受けていないから。」この出来事をきっかけに、その男はすぐに洗礼を受けに行き、その後、夢で見たことを神父に話しました。こうして神は、他の人々にも聖なる洗礼がどれほど尊いものであるかを理解してもらうよう仕組まれたのです。その後、このブルガリアの村の住民たちも、子供たちに洗礼を施すようになりました。

— ゲロンダ、内縁関係にある親の中には、子供に洗礼を受けさせたいと望む人もいます。彼らはそうしてもよいのでしょうか?

— なぜいけないのですか? かわいそうな子供たちに何の罪があるというのですか? 事実婚をしている人々が自分の子供に洗礼を受けさせたいと願うということは、彼らの心の中に何か「善いもの」があり、決して無関心ではないことを示しているのです。どうやら、この人たちはどこかで、何かについて迷っているようです。もし誰かが彼らを助けたいと思うなら、まず、なぜ彼らが教会で結婚式を挙げなかったのかという理由を見極め、その次に、なぜ子供たちに洗礼を受けさせたいのかという理由を確かめる必要があります。

— ゲロンダ、もし修道女が修道院に入る前に誰かの洗礼の代母だった場合、今は自分の代子のために祈るだけでなく、世俗の代母たちがそうするように、彼に贈り物を送るべきなのでしょうか?

— ええと、修道女は現在、そのような義務から解放されています。修道士が祈りによって「自分の洗礼の代父・代母となった人」を助けるでしょう。一方、彼女の両親は——もし望むなら——修道女となった娘の洗礼の代父・代母となった人との間に、そのような関係を保つことは可能です。

— つまり、修道女の両親は、自分たちがそう望めば、娘の洗礼の代父・代母とそのような関係を持つことができるということですか?

— ええ、彼ら自身です。修道女は彼らにそれを強要すべきではありません。神が彼らを啓発してくださるよう、彼女が祈ればいいのです。しかし、いずれにせよ、名付け親には大きな責任が伴います。私がまだ俗世にいた頃、両親はある知人の夫婦に、彼らの子供のうち一人の名付け親を私たちの家族の中から選ぶと約束しました。その夫婦に子供が生まれた時、私の家族は皆、遠方にいたため、その子の名付け親になるよう私に

頼まれたのです。当時、私は十六歳でしたが、大きな責任を負うことになるという気がして、その子の洗礼を執り行うのは嫌でした。そこで、困難な状況に直面した私は祈り始めました。「神様、もしこの赤ちゃんが善良な人間になるなら、私の人生の残りの年月をすべて取り上げて、彼に与えてください。しかし、もし彼が善良でない人間になるなら、彼がまだ小さな天使のような今、彼を御許へお連れください」と。私はその赤ん坊に洗礼を授け、パヴェルという名前をつけた。一週間後、彼は亡くなった。今、彼は天国にいて、そこを失う心配はない。

孤児たち

— ゲロンダ、もし一家の親が亡くなった場合、幼い子供たちは亡くなった父親の遺体を見るべきでしょうか？

— 見せないほうがよいでしょう。大人であっても、身近な人が亡くなる場合、いかにしてそのことをできるだけ優しく、気遣いを持って伝えるか、その方法を探します。ましてや子供たちのこととなれば、言うまでもありません！

— どの年齢まで、子供にとって亡くなった身近な人の姿を見ることは良くないのでしょうか？

— それは子どもの[性格、傾向、気分]によって異なります。

— 子供たちを父の墓に連れて行ってもいいのでしょうか？

— ええ、子供たちを墓に連れて行くことはできますよ。子供たちにはこう言ってあげましょう。「お父さんはここから天国へ移り住んだの。もしあなたがたがいい子であれば、お父さんは天国から遊びに来てくれるよ。」私の祖母が亡くなった時、葬儀を見たり、祖母が亡くなったことを知ったりしないように、知人の家に連れて行かれたのを覚えています。そこで、みんなが私と遊んでくれて、楽しませてくれました。私は笑っていたのに、彼らは泣いていました。家に連れ戻されたとき、私は「おばあちゃんはどこ？」と尋ねました。「来るよ、来るよ」と彼らは言うことができました。私はおばあちゃんの帰りを待っていましたが、しばらくして、おばあちゃんが亡くなったことを知りました。子供たちにとって、愛する人が死んでいる姿を見るのは良いことではありません。

— ゲロンダ、幼い子供たちが母親を亡くすと、その死を深い悲しみとともに受け止めます。

— 子供たちは、父親を失うよりも母親を失うことで孤児になるケースが多い。そのため、母親を失うとき、彼らはより大きな悲しみを味わう。母親を失った子供たちにとって、その後父親が母親の代わりとなるようなことはめったにない。しかし、天国ではそのような子供たちは慰められるだろう。彼らはそこで「欠けていたもの」を得ることになる。孤児は、より低い「合格基準」で楽園に「入ることができる」。これは、海外からのギリシャ人が、関連する法律の規定により、試験なしでわが国の大学に入学できるのと同じようなものだ。つまり、孤児たちには神の法の適用が及んでおり、楽園に入るために必要な労力は少ないのに対し、他の人々にはそれを実現するために少なからぬ偉業を成し遂げなければならない。私は、両親の愛情を奪われた子供たちを、幸せで至福に満ちた存在だと考えています。なぜなら、彼らはこの人生において、神を自分の父とすることができただけでなく、同時に、神の「貯金箱」に、自分たちが奪われた両親の愛情を預けておき、それが今、彼らに「霊的な」利息をもたらしているからです。

しかし、この世においても、慈愛に満ちた神はそうした子供たちを助けてくださいます。なぜなら、神が両親を御許に召されたその瞬間から、神は——そう表現しても差し支えないならば——その子供たちの世話をしなければならないからです。預言者ダビデが何と言っているか、覚えていますか？「孤児と寡婦を御身で受け入れてくださる。」⁵⁴ 神は当然のことながら、そのような子供たちをより深く愛し、より手厚く世話をされます。神は、この世において、そのような子供たちに、他の子供たちよりも多くの「霊的な」権利を与えてくださいます。もし孤児が、この「優しさ」という設定のつまみを回せば、彼は大いに成功するでしょう。しかし、もし彼が「自分が苦しんだのだから、今度は他人を苦しめてやる」と言うなら、彼は自分自身を破滅させてしまうのです。

— ゲロンダ、孤児であることがもたらす悪影響は、その人の一生にわたって続くものなのでしょうか？

— 何を言っているんだ？ 孤児たちは、少しぎこちなかったり、多少の気後れや臆病さを見せたりすることがある——彼らには、愛情をたっぷり注がれて育った子供たちのような喜びや生き生きとした様子がない。しかし、このぎこちなさは、こうした子供たちにとって、人生において助けとなるブレーキとなっている。そして同時に、彼らは来世のために貯えを蓄えているのだ。あなたはと思う？ 神はこのぎこちなさを見ていないとでも？ まさか、神はその後彼らを助けてくれないというのか？ だからこそ、孤児——特に母を亡くした子——を、私たちは痛みと熱い愛を込めて抱きしめなければならない。そうしてまずその子を温め、臆病さが消え、心を開いてくれるようにするためだ。そして、もしその子に熱意があるなら、私たちは彼の大きな熱意をしっかりと抑えなければなりません。そうすることで、彼は自分の大きな感謝を表現しようと努力するあまり、力を消耗してしまうことを防げるのです。聖アルセニオス・カッパドキオスは、母も父も亡くした孤児として育ちました。もし彼がその孤児としての境遇を、霊的に、そして勇気を持って受け止めていなかったなら、彼は苦しみと苛まれた人間となり、精神的な問題を抱えていたことでしょう。しかし、彼がどれほど立派な人物であったか、見てください！ 彼はどのような偉業を成し遂げたことか！ 私が感銘を受けたのは、彼の骨が綿やスポンジのように柔らかかったことです。彼の聖遺骨が発見された際、私が墓から彼の肋骨や脊椎を取り出したところ、触れた途端にそれらは粉々に砕けてしまいました。多少堅かったのは、脊椎のうち2つと、股関節、そして脛骨だけでした。驚くべきことだ。あれほど病弱だった彼が、どうしてこれほど長い距離を徒歩で歩けたのだろうか？ 彼はまるで空を飛ぶかのように歩いていたのだ！ ここには、神が彼に与えた超自然的な力が現れている。それならば、キリストにとって、孤児を育てることなど、果たして不可能なことなのだろうか？

子どもたちが十分な年齢に達するまでは、彼らに制限を設ける必要がある

魂を不安で満たし、永遠に神から遠ざけてしまう「世俗への墮落」という坂道で滑らないようにするためには、子供たちは——とりわけ思春期という重要な時期において——[年長者]の助言がいかに不可欠であるかを常に実感しなければならない。子供たちは「従順」の意味を深く理解しなければなりません。親に従うことの中に、自分自身の益が秘められていることを理解し、喜びをもって親の言うことを聞き、霊的な領域を自由に動き回れるようになるのです。

⁵⁴ 詩編145:9。

小さな子どもの自由がいかに制限されているか、考えたことはありますか？ 9か月間、子どもは母親の胎内に閉じ込められています。生まれたばかりの赤ちゃんは揺りかごに入れます。5～6ヶ月が過ぎると、高い柵の向こう側に置かれます。その後、少し大きくなった子どもには、ぶつかったり階段から落ちたりしないように、一人で家から出ることを許されません。だって、子どもの自由を制限しなければ、転んで大怪我をしてしまうからです。

これらはすべて、子どもが安全に育つために必要なものです。一見すると、こうした措置はすべて子どもの自由を奪っているように見える——しかし、これらすべてがなければ、子どもは生まれてすぐに死の危険にさらされることになるだろう。しかし、子どもたちは——幼い頃は——自分たちに制限が必要であることを理解していない。そして、成長しても、別の種類の制限が必要であることを理解できず、だからこそ自由を求めてしまうのだ。しかし、それは一体どのような自由なのでしょう？ 身体障害者になる自由でしょうか？ そのような自由のせいで、子供たちは命を落としています。子供たちは、学業を終え、卒業証書を手にし、成熟して「正しい人間」になるまでは、制限が必要であることを理解しなければなりません。なぜなら、たった一度でも身体に障害を負えば、命を落とすことになるからです。子供たちは、制限を必要不可欠なものとして感じ取り、それが神の祝福であることを理解しなければならない。彼らは、自分たちを制限してくれる両親に感謝すべきだ。両親が愛ゆえに彼らを制限していることを知らなければならない。どんな父親も母親も、たとえ子供に対して極めて厳しく接したとしても、悪意から子供を制限したことは一度もない。そして、もし親が子供たちへの締め付けを少しきつくしたとしても、そこには多くの愛が隠されている。親は、子供たちがより落ち着き、しっかりし、危険にさらされないようにと、善意からそうしているのだ。何しろ、庭師が木を植える際、より確実に固定するために、必要以上に強くワイヤーで縛り、少し傷つけてしまうこともあるのだから。しかし、慈愛に満ちた神は、やがて木の樹皮の傷を癒やしてくださいます。神が木の傷さえ癒やしてくださるのなら、ご自身の被造物である[人間]を、どれほど深く気遣ってくださっていることでしょうか！ もし親が子供に少しきつめに締め付け、小さな傷を負わせてしまったとしても、神がその傷を癒やしてくださらないはずがありません。

さらに、子どもたちは両親と話し合い、自分の考えを打ち明けるべきです。修道院の修道士が、自分の考えを打ち明け、助言を受ける師匠を持つように、子どももまた両親に心を開くべきなのです。子どもがまず母親に打ち明け、その後に霊的指導者に打ち明けるのが正しい。親として、もし子どもが足を打撲したら、一緒に医者へ連れて行き、打撲が治るために何をすべきか尋ねるように、親は子どもにどのような[精神的な]問題があるのかを知っておくべきである——そうして初めて、子どもを助けることができるのだ。もし子供が自分の悩みを告解司祭にしか話さなければ、親はどうやって子供を助けることができるのでしょうか？ 何しろ、何が子供の心を悩ませているのか、親には分からないのですから。

学習中の子どもたちが直面する困難

判断力と機転に富んだ子供たちは、時に困難に直面し、苦しむことがあります。そのような子供たちは、すべてを自分の頭で整理しようとし、自分の能力を超えることを成し遂げようと努めます。彼らは鋭い知性を持ちながらも、ブレーキをかけることを知らない。まるで自分の耐久力がどこまであるかを試そうとするかのように、自分自身を

実験台にしてしまうのだ！ そのせいで彼らは苦しむことになる。もし謙虚になれば、その判断力が成功へと導いてくれるだろう。そのような判断力や機転に欠ける子供たちは、困難に直面することもないが、その反面、[内面的に]努力することもなく、[人生について]深く考えることもない——良い意味での話だが。

試験の準備を整え、内容をすべて暗記しているにもかかわらず、不合格になることを恐れて試験を受けに行かない学生がどれほどいるか、ご存知ですか？ 学業をこなせる能力があるにもかかわらず、そのような学生たちは自らの臆病さゆえにパニックに陥ってしまいます。しかし、もし彼らが謙虚に「私一人では学業をこなせませんが、皆さんの祈りによって試験にうまく合格できるよう努めますので、どうかお祈りください」とお願いすれば、その謙虚さによって、神の恵みと神からの啓示を受け取ることができるでしょう。さらに、試験を受ける前に、学生たちは自分の守護聖人に祈るべきです。その聖人は、彼らの信仰と敬虔さに応じて、彼らを助けてくださるでしょう。

— ゲロンダ、海外で勉強しているある女性が、私にこう書いてきました。「心の声が、『私は決して霊的に成長することはできない』と言っています。どうやら、私はこれからずっとこのままだようです。」

— なんて変わり者なんだ！ ヨーロッパにいて、そんな結論に至るとは！ 彼女は、精神的に成長するためでも、そこに永遠に留まるためでもなく、自分の専門分野で必要となる知識を得るためにそこへ行ったのだ。今の精神状態を保つよう努め、現地で精神的な成長を求めないようにすればいい。何しろヨーロッパ人は、[世俗的な]科学の分野では成功しているが、精神的な分野ではそうではないのだから。自分に無理をさせず、すべてを深く心に受け止めすぎないようにすればいい。これらすべてを心に深く受け止め、そのせいで苦しむ必要はない。彼女は、そこでの滞在を短期の兵役だと考えればいい。軍隊では、兵士は汗だくになって働き、精力を消耗し、時には周囲から非常に厳しい扱いを受けることもある。一方、ヨーロッパでは、少なくとも表面的な、偽善的なものであっても、ヨーロッパのメンタリティに従って礼儀正しく接してくれます。彼女がこうした困難に直面することは予想されることでした。なぜなら、ギリシャでも同じことが見られるからです。唯一の違いは、ギリシャでは——私たちは正教徒であるため——霊的生活を気にかける人々への霊的な助けもあるという点だ。少しの忍耐 と少しの気配りさえあれば、困難は乗り越えられるだろう。せっかくその環境にいるのですから、余暇を読書と祈りに捧げ、霊的にも養われるようにすべきです。学業で成功するために彼女が注ぐ努力は、学業に没頭する助けとなり、そうすれば、あらゆる邪な考えや若さゆえの誘惑は彼女から遠ざかるでしょう。

第2章。

子どもたちの親への敬意と愛情について

子どもたちの親や年長者への敬意

子供が小さいうちは、何の働きもしません。食事や衣服などは、すべて親が世話をします。親は愛情から子供を助けているのです。子どもは仕事をしません——家事でできるのはちょっとした用事をこなす程度です。しかし、そのわずかな仕事と、親が子ど

ものために費やしている労力や犠牲とを、果たして同列に扱えるでしょうか？大人になって、親が自分に与えてくれたものを理解できないとしたら、それは実に大きな恩知らずです！

かつては、親が子供に体罰を与えると、子供は（恨みなど）抱くことなくそれを受け入れていた。多くの場合、なぜ殴られたのかさえ理解していなかった。しかし、今の子供たちは「なぜ？何のために？」とばかり言い、口論ばかりしている。彼らには純真さが欠けている。起こるすべてのことを、彼らは裁きと評価の対象にしてしまう。しかし、神の恵みは、そのような形では訪れない。もし子供が父親を父親として感じず、父親の懲らしめを受け入れないのであれば、その子は「非嫡出子」である。⁵⁵ 親がほんの少し注意しただけで、すぐに「手首を切る！」と脅し始める子供もいる。親には一体どうすればよいのか？ 彼らは折れてしまうが、結局のところ、子供たちは道を踏み外し、破滅してしまう。

子どもは、たとえ親が時折おしりを叩くことがあっても、それは悪意からではなく、愛ゆえのこと——つまり、子どもが改心し、より良い人間になり、将来幸せになれるようにするためだと理解すべきです。私たちは幼い頃、親の愛情も、平手打ちも、キスも、すべてを受け入れていました。私たちは、親がこれらすべてを私たちのために行っているのだと理解していました。私たちは[両親]を深く信頼していました。時には、あることで一人の兄弟が非があったのに、母親が「審理」をする時間がなかったため、別の兄弟を叱ってしまうこともありました。しかし、悪いことをした子は、自分のせいで無実の兄弟が叱られているのを見ると、良心の呵責に駆られて自分の過ちを認めた。そうして、悪いことをした兄弟や姉妹は許されるのだった。

家族の中では、年下の者は親にも、年上の者（兄弟姉妹）にも敬意を払わなければならない。年下の者は、年上の者に対する敬意、服従、そして感謝の気持ちを当然のこととして抱くべきである。一方、年上の者は年下の者に対して愛情を注ぎ、助け、守ってあげなければならない。年下の者が年上の者を敬い、年上の者が年下の者を愛するとき、素晴らしい家庭の雰囲気生まれる。父は私たちにこう言っていました。「兄に従いなさい。」私たちは父が私たち全員を愛していることを知っていたので、父に対してはごく自然に振る舞っていました。しかし、兄に対しては、父のような愛情を感じられなかったため、より一層従順に接していました。⁵⁶

夫婦が互いを尊重し、子供たちが親を敬うとき、家庭生活は時計のように順調に進みます。そのような家庭では、長男が母親に対して「お母さん、もう二度とそんなことしないでね」とか「どうして全部を裏返しにしてしまったの？」といったことを決して言いません。しかし、そのような家庭では、父親も母親に対してそのような口調で話すことはありません。大人は子供を喜ばせるために冗談を言うことはありますが、子供は大人からの冗談に喜びを感じても、大人に対して無礼に振る舞ったり、親しみを込めすぎたりしてはなりません。私がストミオン修道院にいた頃、時々買い物のために修道院から町へ下りていくと、道沿いに家があるある小さな男の子が、私を見るやいなや駆け寄ってきて、私はその子の手を口づけしていた。やがて彼はそれに慣れ、駆け寄ってくるたびに、自ら手を差し出して、私に口づけしてもらうようになったのだ！ 私は彼の望む通りにした。しかしその後、彼の両親がこう頼んできた。「神父様、彼の手にはキス

⁵⁵ ヘブライ人への手紙 12章6-11節参照。

⁵⁶ 長老パイシオスには、7人の兄弟姉妹がいた。

しないでください。彼は神父さんたちを追いかけては、キスしてもらうために手を差し出し、もしそうしてもらえないと泣き出してしまうのです。」

子どもたちは、自分たちが自分の家庭を築いた後、どのようにして親を愛し続ければよいのでしょうか

慈愛に満ちた神は、夫と妻が互いに深い愛で結ばれ、親さえも離れるほどになるよう定められました。もしこの愛がなければ、人々は自分の家族を築くことはできなかったでしょう。親の役割は、子供たちが自分の家族を築く[あるいは僧侶になる]と、そこで終わりを迎えます。その後、子供たちが親に対して果たすべきことは、ただ[二つのこと]、すなわち、深い敬意と、親に対して抱くべきだけの愛を注ぐことだけです。私は、夫と妻が自分の親を愛してはならないと言いたいわけではありません。いいえ。しかし、まず二人は互いに深い愛を持ち、[それから初めて]親を愛すべきなのです。夫婦は、その愛が溢れんばかりになるほど互いに愛し合わなければならない。そして、その溢れ出る夫婦の愛から、両親に対してあらゆる敬意と感謝を捧げるべきである。夫婦の愛は高潔なものでなければならず、それぞれの配偶者が、相手の両親をできる限り大切にするようにすべきである。

家庭に平和と調和をもたらすためには、次のことが大いに役立ちます。夫は、自分の母親よりも、また親しい人や親族の誰よりも、妻を愛さなければなりません。夫が両親に対して抱く愛情は、妻を通じて表れるべきです。もちろん、妻も同様に振る舞うべきです。

結婚生活のはじめに、夫婦間で問題や意見の相違が生じていた家庭を知っています。その原因は、どちらかの配偶者が母親を過度に愛していたことにありました。この愛は、息子や娘が母親に対して抱く深い感謝の気持ちから生まれる愛情に端を発しています。しかし、夫婦が徐々に互いに愛着を深めていくにつれて、この問題は消えていきます。というのも、結婚直後に、片方の配偶者がもう一方に対して、母親の愛を補うような愛情を注ごうとしたとしたら、それは不自然だからです。

夫が義母や義父を敬うなら、それは夫の誉れとなる。同様に、嫁が義母——夫を産み、育て上げ、今や夫となり、彼女の喜びとなっている女性——を敬い、愛することも、嫁の誉れとなる。夫と妻がこのような気持ちや考えを共有しているなら、それらは静かに二人の子供たちの魂を導いていくのである。

息子が結婚するまで、母親は息子の愛情に少なからぬ慰めを見出していた。しかし、年老いた親は再び赤ん坊のようになるものだ。息子を結婚させた母親は、まるで長子が、母親の腕の中に生まれたばかりの赤ん坊がいるのを見たときのような気持ちになる。お分かりでしょう。若いうちに自分の情欲を断ち切らなければ、年を重ねるにつれて意志の力は弱まり、情欲はますます強くなるのです。

しかし、嫁はそれを気に病む必要はない。ましてや、もし彼女が年老いた義母の世話をしているのなら、その世話に対して与えられる報いを失わないためにも、少しばかり我慢すべきです。今、忍耐強く義母の世話をしていれば、やがてすべての悲しみが過ぎ去った後、自分が施した善行を喜びとして受け取ることができるでしょう。

とはいえ、もちろん、義母も嫁たちを自分の娘のように愛すべきです。私の父方の祖母は、父よりも母の方を深く愛していました。私の兄弟たちが結婚したとき、近所の女性たちは首を横に振りながら、母を脅かすように言いました。「さあ、これから嫁た

ちが次々とやってくるわよ……」すると母はこう答えました。「どうしてそんなことを言うの？ 私の義母は、自分の娘よりも私を愛してくれていたわ。それなら、私が嫁たちを愛さないわけがないでしょう？」そして実際、母も彼女たちを娘のように愛していました。

老いは人を謙虚にする

⁵⁷人は老いていくにつれて、なんと謙虚になることか！老人は徐々に力を失い、年老いたハヤブサのようになる。ハヤブサが年老いると、羽が抜け落ち、翼は折れた櫛のようになる。覚えているのだが、フィロフェイ修道院（⁵⁸）の聖職者会議の一員である は、1914年——まだ平信徒だった頃——、父親を殺害したトルコ人への復讐を果たすため、スミルナからアルバニアへ志願兵として出征した。ある日、彼はトルコ人を捕らえ、その喉を切り裂こうとした。すると、そのトルコ人は懇願した。「我々の信仰は粗野だ。それは我々に切りつけ、殺すことを教える。しかし、あなたの信仰はそうではない。キリストはあなたに殺すことを教えてはいない。」この言葉は彼を深く揺さぶり、彼はライフルを捨てて直ちに聖山へと退いた。彼は修道士となり、聖会の一員となったが、アタマンとしての気質は彼の中から消え去ることはなかった。彼はすべての奉仕業務を統括しており、貯蔵室の鍵はすべて彼のベルトにぶら下がっていた。修道院の兄弟たちの誰も、彼に逆らうようなことを口にする勇氣はなかった。もし修道士のうち誰かが、決まり通り「スピリドン長老」と呼びかけるのを忘れると、彼は激怒した。ある年の大齋期間中、修道院に盗賊の一団が押し入り、修道士たちにチーズを要求した。その時、スピリドン神父が盗賊たちのところへ出て行き、こう「歓迎」した。「おい、この豚どもめ！大齋の期間にチーズをせがみに来たのか？」そう言い放つと、彼らを門の外へ放り出した。またある時、修道士たちはパンニカディラを分解し、⁵⁹ それらを掃除していた。山賊たちは、パンニカディラから落ちた様々な光る装飾を見て、それが金だと思い込んだ。修道院にやって来ると、彼らはそれらの装飾を袋に詰め込み、周辺一帯からラバを集めて、その袋を積もうとした。スピリドン神父は、それを見るやいなや、強盗たちの襟首をつかんで引きずり出し、袋を奪い取り、中身を地面にぶちまけた。「お前たちはクズだ、クズめ！——と彼は言った。「これなんて安っぽい鉄くずじゃないか！お前たちの銅のような額と同じくらい安っぽいぞ！」この男には臆病というものが何たるかを知らなかった。しかし、老いて病に倒れ、彼は謙虚になった。私は彼の介護を任された。ある日、彼は私にこう頼んだ。「アヴェルキー、祈ってくれ。⁶⁰ 、なんだか気分が優れないんだ。」私は立ち上がり、ロザリオを数えながら声に出して祈り始めた。「主イエス・キリストよ、あなたの僕である老僧スピリドンをお憐れみください。」「馬鹿者め」と彼は言った。「『長老スピリドン』じゃなくて、『スピルカ』だ！」病と老いが、彼をいかに謙虚にさせたことか！以前なら、彼を「長老スピリドン」などと呼ぶことなど、到底できなかつただろうに！

そして、私の父も老いてからは、ハエに屈服してしまった。ある日、姉が泣いている父を見つけた。「どうしたの、お父さん？」と彼女は尋ねた。「もしかして、孫の誰

⁵⁷ 聖アトス山にある20の修道院のうちの一つ。長老が記述した当時、ここはまだイドリトミック（共同生活を行わない）修道院であった。——訳者注

⁵⁸ 霊的評議会——イドイリトミック（共同生活を行わない）修道院の選出による統治機関。——訳者注

⁵⁹ 正教会の教会堂にある大きなシャンデリア、あるいは多灯式の燭台。——訳者注

⁶⁰ ラソフォールの修道服を身にまとっていた長老は、アヴェルキーという名を持っていた。

かに何か言われたの?」「いや、いや」と父は答えた。「人間ってやつは……ハエたたきでハエを叩き殺そうとしたのに、どうしてもできなかったんだ。右から叩こうとすれば左へ飛び去り、左から叩こうとすれば右へ飛び去る! 若い頃、私は射撃の腕が抜群で、チェトフ⁶¹ を殺すのではなく、四方八方から撃ちまくって弾丸が密集するようにし、そうして彼らを降伏させたものだ。」「十六歳の時、私はライオンの子を撃ち、傷つけ、その負傷した 獣と格闘した。それなのに今、ハエ一匹も殺せない! ああ、人間とは取るに足らない存在だ。」その不幸な男は、まるで自分の人生で何も成し遂げていないかのように、ただ一つの大きな「無」、ゼロを感じていた。

ところで、スヴェトゴリェの修道院にある高齢の修道士のための養護施設で、年老いた修道士たちがどれほど謙虚な姿勢を見せているか、ご存知ですか! 彼らの頭上では、もう一つの……修道者の剃髪式が行われるのです! 髪を短く刈り上げ、洗いやすくするためです。髭も剃り落とされます。よだれが垂れ、食べ物が口からこぼれ落ちてしまうからです。その後、どうやって掃除すればよいのでしょうか? この剃髪は、最後の剃髪です。謙遜の剃髪なのです!

老人介護の報い

世の中は一体どうなってしまったのか! ファラサスでもエピロスでも、年老いた動物たちさえも大切にされていた。まあ、ラバについてはその理由は明白だ[——その肉は食用にされないからだ]。しかし、肉が食べられる動物たちでさえ、屠殺されることなく、生かされていたのだ。例えば、かつて耕作に使われていた老いた雄牛を、飼い主たちは敬っていた。彼らは老いた牛を世話し、大切にしながら、「これらは私たちが養ってくれた存在なのだから」と言っていた。つまり、畑で働いた労働動物たちは、安らかな老後を送ることができたのだ。しかも当時は、今日のような技術的な手段など人々に存在しなかった。手動の製粉機で飼料用のレンズ豆を挽き、貧しい老牛が噛み砕けるように細かく砕かなければならなかった。しかし、現代の人々はこうしたことを忘れてしまった。彼らは老人さえも顧みないのだから、ましてや老いた動物のことなど言うまでもない!

人生で、ある年老いた修道士のお世話を任されたあの数日間ほど、これほど心地よく感じたことは一度もありませんでした。老人の世話には大きな報いがある。聖山のある見習い修道士が、恐ろしい悪霊に取り憑かれていたという話を聞いたことがある。彼は、修道院の老人ホームで6人の年老いた修道士たちの世話をするという務めを与えられた。当時は厳しい時代で、人々の労苦を和らげるような手段は不足していた。その可哀想な修道見習いは、年老いた修道士たちの下着が入った包みを肩に担ぎ、遠くの池まで運び、そこで苛性ソーダを使ってそれらをすべて洗濯していた……。しばらくして、彼は憑かれていた悪霊から解放され、修道士となった。これは、何よりもまず、彼自身が他者のために身を捧げたからであり、さらに、年老いた修道士たちが彼に祝福を与えてくれたからでもあった。

多くの夫婦は、同居する高齢者の奇行や不機嫌さによって家庭内に生じる困難に対して、不平を言い、憤慨しています。こうした人々は、自分たちが子供の頃に行っていた「悪ふざけ」や、当時他人を悩ませていた泣き言や奇妙な振る舞いを忘れてしまっています。彼らは、泣きわめいたりわがまを言ったりして、自分たちが親を悩ませてい

⁶¹ チェティ — トルコの山賊。

たことを覚えていない。だからこそ、神はそうした人々に、高齢者の介護に伴う困難に耐えることを許されるのだ——かつて他人に与えた苦勞に対して、せめて何らかの形で「償い」をさせるためである。今こそ、彼ら自身が年老いた両親に寄り添い、感謝の気持ちを含めて世話をし、自分が子供だった頃、両親が自分のために払った犠牲を思い出す番なのです。両親に対する義務感を持たない人々は、不義で恩知らずな者として、神によって裁かれることになるでしょう。

多くの世俗的な人々が抱える苦悩の原因は、しばしば両親が彼らに対して恨みを抱いていることにあり、私は見ています。家族は、祖父母の世話をしないために苦しんでいます。不幸な老婦人や哀れな老人を老人ホームに送り込み、心の痛みを抱えたままそこで死を迎えるように放置し、財産を奪い取り、孫たちと喜ぶ喜びさえも与えなかったような家庭で育った子供たちに、いったいどのような祝福があるのでしょうか？ 今日、ある年配の女性が訪ねてきて、彼女には結婚している息子が4人いると私に話してくれました。彼らは皆、同じ街の一角に住んでいるが、彼女は彼らに会うことができない。というのも、ある時、彼女が嫁たちに「互いに愛し合いなさい、教会に通いなさい！」と「図々しくも」助言してしまったからだ。それを聞いた嫁たちは、ただただ激怒した！「二度と私たちの家には足を踏み入れるな！」——彼女たちはそう言い放った。その不幸な女性は、もう5年間も自分の子供たちに会っていない。「神父様、お祈りください」と彼女は涙ながらに懇願した。「私には孫たちもいるのです。せめて夢の中でも彼らに会えるよう、お祈りください。」えー、一体この女性の子供たちは、どんな祝福を受けられるのでしょうか？

家族にとって祖母の存在は大きな恵みですが、そうしたことを理解できない人々もいます。通常、男性は女性より早く年老いるため、妻が介護をします。夫が亡くなると、子供たちは祖母を自分の家に迎え入れ、孫たちの世話をしてもらい、誰にも必要とされていないと感じさせないようにします。子供たちがそうしてくれるなら、それはとても良いことです。そうすることで、高齢の母親も安らぎを見出し、家族も助けを得ることができます。何しろ母親は、やるべきことが山積みで、子供たちに必要な優しさや愛情を十分に注ぐ余裕がないからです。まさにその足りない部分を、おばあちゃんが子供たちに与えてくれるのです。なぜなら、おばあちゃんの年齢こそが、愛と優しさの年齢だからです。考えてみてください。子供がいたずらをすると、母親は叱りますが、祖母は優しく撫でてあげます。子供たちが祖母の世話を受けている間、母親は自分の用事をすべて済ませることができ、子供たちは愛情と優しさに包まれます。そして、祖母自身も孫たちからの愛に温められているのです。

両親の世話をしている人は、神から大きな祝福を受けています。ある若者が結婚した際、私にこう話してくれました。「ゲロンダ、家を建てて、1階に両親と義父母のための小さな部屋を2つ作りたいんです」。それがどれほど私の心を動かしたか、お分かりでしょうか！ 私がこの人にどれほどの祝福を与えたか、ご存じですか！ 驚くべきことに、なぜ多くの夫婦はこれを理解できないのでしょうか？

数日前、ある女性が私のところに来てこう頼んできた。「神父様、私の母は麻痺で動けません。もう本当に疲れ果てました！ 8年間も、母を片方からもう片方へと寝返りをさせてきたんです！」一体どういうことか、お分かりだろうか？ 娘が母親について、そんな口調で話すなんて！「ああ、」と私は言った。「君の問題は、とても簡単に解決できるよ！ 今から祈ります。そうすれば、あなたに8年間、麻痺が襲い、お母さんが回復し

て、あなたを介護してくれるようになるでしょう。」「いいえ、いいえ、神父様！」と彼女は叫びました。「4年間です」と私は言いました。「少なくとも4年間はあなたに必要です！ どうして恥ずかしくないのですか？ どちらが望ましいですか？ 健康で痛みも感じず、病人の世話をしながら神からの報いを受けることか、それとも苦しんで足を動かすこともできず、謙虚になって『アヒルを持ってきてください、体を反対側に向けてください、壁の方にずらしてください...』と頼むことか？」その女性は私の言葉を聞いて、少し恥ずかしそうにした。

子供たちが年老いた親の立場に立って考えたり、嫁が義母の立場に立って「私もいつかは年を取り、ある美しい日に義母になる。そのとき、嫁が私に気を配ってくれなかったら、私はどう思うだろうか」と考えたりすれば、家族の中にそのような問題は生じない。

親の祝福

親の祝福は、親が子供たちに残す最も大きな遺産です。だからこそ、子供たちはその祝福を確実に受け取るよう努めなければなりません。ヤコブは、父の祝福を得るために、いったいどこまでやったか見てください。なんと、羊の皮まで着てしまったのです！⁶²

特に偉大なこと——それは母の祝福です！ ある人はこう言いました。「母の一言一言は、金貨のようなものだ。」最近、ヨハネスブルグからあるギリシャ人が私のところへやって来ました。彼が私にどんな印象を与えたか、ご存知ですか？ 彼は秋に私のカリヴァを訪ねてきました。「ゲロンダ、」と彼は言いました。「母が病気になったので、彼女に会いに来ました。」それから3ヶ月も経たないうちに、クリスマスの時期に彼はまたやって来ました。「また来たのか？」と私は尋ねました。「はい、」と彼は答えました。「母がまた体調を崩していると聞き、彼女の手口づけをしにやって来ました。母はもう高齢で、いつ亡くなってもおかしくないからです。私にとって最大の富は、母の祝福なのです。」六十歳になる男が、ヨハネスブルグからギリシャまで、母の手口づけをするためにやってくるなんて！ そして今、神はこの人に多大な恵みを与え、彼は聖職者のための大きな老人ホームを建設し、それを教会に寄付しようとしている。つまり、彼は恵みに溢れかえっていて、どうすればいいか分からないほどなのだ！ 私にとって、そのような魂はまさに癒しの薬のようなものです。まるでサハラ砂漠を歩いている最中に、思いがけず少しの水を見つけたかのようです。しかし、そのすべては静かに失われ、消えていくのです。

さらに、ある男が涙を流しながら私のカリヴァを訪ねてきた。「神父様」と彼は話し始めた。「母が私を呪ったのです。それ以来、家族は病気やトラブルの連続ですし、仕事もすべてうまくいきません……」「おそらく、君自身も母に何かきっかけを与えてしまったのだろう」と私は答えた。「何の前触れもなく、母があなたを呪うはずがないでしょう。」「はい、」と彼は言った。「私も、あの頃はろくでもない息子でした……」「さあ、」と私は言った。「母に許しを請いに行きなさい。」「行きます、神父様、」と彼は答えた。「あなたの祝福をください。」「私の祝福は与えるよ」と私は彼に言った。「だが、母からも祝福を受けなければならない。」「まさか、母が私に祝福を与えてくれるはずがない」と彼は言った。「行け」と私は言った。「母のもとへ行き、も

⁶² 創世記27章を参照。

し彼女が祝福を与えてくれなければ、こう言いなさい。『ある長老が私にこう言った。『君もいつか、神に魂を委ねるだろう』と。』彼は母親のもとへ行き、母親はこう彼を祝福した。「わが子よ、アブラハムの祝福があなたの上にありますように！」少し時間が経ち、彼は再びアトス山を訪れ、私に贈り物——サ克蘭ボのコンポートとルクム——を持ってきてくれた。彼は喜びに満ち溢れていた。子供たちは健康で、仕事も順調だった。彼の目には涙が浮かび、彼は「神に栄光あれ」と繰り返し口にしていた。この人の人生は一変し、彼は霊的なことばかりを語るようになった。ましてや、最初から両親を敬っている人ならなおさらだ！ そんな人が、どうして神の祝福を受けないことがあるのか？

第4部。 霊的生活

「神を愛し、神の偉大な犠牲と恵みを認め、また理性を働かせて聖人たちに倣うよう自らを奮い立たせることで、人は急速に聖化されていく。人は謙虚になり始め、自らの不品行と、神に対する大きな不感謝を自覚するようになる」

第1章。 家庭における霊的生活について

人は不平を言うほど、自分自身を破壊していく

— ゲロンダ、不平は一体どこから始まるのでしょうか。また、どうすればそれを避けることができるのでしょうか？

— 不平の根源は、自らの不幸という感覚にあるが、それを追いかけるには「神への」賛美が有効である。不平は不平を生み、賛美は賛美を生む。もし人が困難に直面しても不平を言わず、神を賛美するなら、悪魔は（怒りで）破裂し、別の者——不平を言う者——のもとへ行き、その者にさらに大きな不快をもたらそうとする。なぜなら、人が不平を言えば言うほど、自分自身を破壊していくからだ。時には、タンガラシュカが私たちを盗み取り、何に対しても満足しないよう仕向けるが、実際には、私たちに起こるすべての出来事を霊的な喜びと賛美をもって迎え、神の祝福を受けることができるのだ。聖山に住むある修道士を知っている。雨が降り始め、あなたが彼に「また雨が降ってきた」と言うと、彼はこう言い始める。「ああ、ずーっと降り続けている。この湿気で、もうすぐ腐ってしまいそうだ。」もし雨がすぐに止んで、あなたが「雨がやんだね」と言うと、彼はこう答える。「ああ、これって雨と言えるのか？ こんな雨じゃ、すべてが乾いてしまうだろう……」この人が頭がおかしいとは言えない。いいえ。単に、彼は不平を言うことに慣れているだけなのです。その人は正気なのに、まるで狂人のように考えるのです！

不平には呪いが潜んでいる。つまり、不平を言う者は、あたかも自分自身を呪っているようなものであり、その後、神の怒りがその者に降りかかるのだ。エピロスでは、私は二人の農民と知り合いだった。そのうちの一人は家族と二つの小さな畑を持っており、すべてを神に委ねて信頼していた。彼は心の不安に苛まれることなく、できる限り働いていた。「できることはできるだけやるさ」と彼は言っていた。時には干し草を片付けるのが間に合わず、雨で腐ってしまったり、時には風で干し草の山が散らばったりもしたが、それでも彼は「神よ、あなたに栄光あれ」と言い、すべてが順調に進んでいた。もう一人の男は、多くの土地や牛などを所有していた。彼には子供がいなかった。もしあなたがこの男に「調子はどう？」と尋ねると、彼は「調子なんて、聞かないほうがいいよ」と答えた。彼は決して「神よ、あなたに栄光あれ」とは言わず、いつも不平を言い、愚痴をこぼしていた。そして、あなたも見てごらん：ある時は牛が死にかけ、ある時は別の不愉快な出来事が起こり、その次はまた別のことが……この男にはすべてがあったが、彼は成功していなかった。

だからこそ、私は賛美こそが偉大な行いだと申し上げるのです。神は私たちに祝福を与えてくださいますが、それを味わうかどうかは私たち次第です。しかし、例えば神がバナナをくださったのに、私たちが「ある大富豪が食べているもっと美味しいご馳走」のことを考え始めてしまったら、どうやってその祝福を味わえるのでしょうか？ ご存知でしょうか、たった一枚の乾いたパンを食べながら、昼夜を問わず神を賛美し、天の甘美さを味わっている人々がどれほどいるか！ こうした人々は霊的な感受性を身につけ、神の御手がいつ自分たちを優しく撫で始められるかを理解しています。しかし、私たちはそれを理解できません。なぜなら、私たちの心は塩辛くなってしまう、何にも満足できなくなっているからです。私たちは、幸福とは、この世の虚栄ではなく、永遠に関わるものにあるということを理解していないのです。

神に私たちの人生を委ねましょう

— ゲロンダ、なぜ福音書では、神の国がからしの種に例えられているのでしょうか。「…それは、地に蒔かれるとき、地にある種の中で最も小さいが、蒔かれた後は成長して、すべての草よりも大きくなる…」⁶³

— からしの種はとても小さいですが、植物に育つと大きな低木になります。その枝には鳥さえも止まることができます。神の言葉はからしの種に例えられます。なぜなら、たった一つの小さな福音の言葉から、人は成長し、神の御国を理解するようになるからです。

— ゲロンダ、聖書が語っている「神の御国はあなたがたの内にある」ということを、どうすれば実感できるのでしょうか？⁶⁴

— 聞いてください、祝福された魂よ。私たちが心の中に天国の喜びの一部を宿しているとき、そのときこそ、私たちの内には神の御国があるのです。逆に、心に不安や良心の呵責を抱いているときは、私たちは心の中に地獄の苦しみの一部を宿しているのです。人がこの世のうちに、すでに天国の喜びの一部を感じ始めることは、実に素晴らしいことだ。そして、これを達成することは難しくない。しかし、残念ながら、私たちの利己心が、この霊的な偉大さを達成することを妨げているのだ。

⁶³ マルコ 4:31-32。参照：マタイ 13:32、ルカ 13:19。

⁶⁴ ルカ 17:21。

人は、神が慈愛に満ちた父として自分を導いてくださることを受け入れることで、自分の人生を楽園のようなものにすることができ、神を信頼し、何をするにしてもすべてにおいて神に希望を置き、あらゆることに感謝して神を賛美しなければならない。心に不安を抱く必要はない。心の不安は精神的な崩壊を招き、魂を麻痺させてしまいます。もし人が天の御国を求めるなら、それ以外のすべては与えられます。福音書にはこうあります。「まず神の御国を求めなさい」⁶⁵ また、「神の御国は貧しい人々に与えられる」ともあります。⁶⁶

今日、人々は小さなことに満足せず、絶えず物質的な豊かさを追い求めているため、自ら生活を複雑にしています。しかし、真に純粋な精神的生活を送りたいと願う者は、何よりもまず、小さなことに満足することを学ばなければなりません。もし人々が生活を簡素化し、多くの煩わしさに縛られなくなれば、それは彼らを世俗的な精神から解放し、精神的な活動に費やす自由な時間を与えてくれるでしょう。そうでなければ、流行に追いつこうと努力するあまり、人々は疲れ果て、安らぎと静けさを失い、大きな心の不安を抱えることになるでしょう。

人々が自ら自分の人生を苦行のようなものにしてしまうのを、私は時々目にします！ 今日、私がアフォン山を出ようとしたとき、ウラノポリス出身のある男性が自分の車で私をここ、修道院まで送ってくれ、途中で少しの間だけ彼の家に立ち寄ってほしいと頼んできた。彼が強く勧めてきたので、私は彼の期待を裏切りたくなかった。彼の家の玄関に近づくと、彼が靴を脱ぎ、つま先立ちで廊下を歩いているのが見えました。「どうしたんですか、どうしてそんな風に奇妙に歩いているんですか？」と私は尋ねた。「大したことじゃないですよ、ゲロンダ」と彼は答えた。「ただ、寄木張りの床を傷つけないように、慎重に歩こうとしているだけです。」これには何と言ったらいだろう。人々は理由もなく自らを苦しめているのだ。

隣人の苦しみに心を痛めることが、家族を支える

今日、人々が[物質的な]富を多く手に入れば手に入れるほど、抱える問題も増えていく。彼らは神の恵みに感謝することもなければ、隣人の不幸にも目を向けない。そして、隣人の不幸に気づかないがゆえに、彼らに施しをすることもない。人々は目的もなくお金を浪費し、食べるものもない隣人のことを考えようもしない。そんな状況で、どうして神の恵みが彼らに降りるだろうか。たとえ家族がいたとしても、他者に施しをするためには、何かを節約して金を貯めなければならない。妻や子供たちに、どこかに誰からも見捨てられた病人や、極度の困窮にある貧しい家族が暮らしていることを説明すべきだ。もし、不幸な人々を助けるお金がないなら、彼は身近な人たちにこう言うべきです。「せめて、何かキリスト教の本をその不幸な人たちに贈りましょう。私たちにはたくさんあるのですから。」困窮している人々に施しをすることで、人は自分自身と自分の家族をも助けているのです。

ロシアの不幸な信者たちがどれほど困っているか、ご存知ですか！ ある時、私はあるロシア人の司祭に小さな箱に入ったお香を贈り、「このささやかな贈り物を受け取ってください」と言いました。「これってささやかな贈り物ですか？——と彼は答えました。「だって、私たちロシアでは、これほど質の良いお香は手に入らないんですから。」

⁶⁵ マタイ 6:33。

⁶⁶ マタイ 11:12を参照。

」ところで、ここギリシャで、ロシアや他の国々からの難民たちがどれほど苦しんでいるか、ご存知ですか？ ハルキディキで、私はロシアから来た男性と知り合いました。彼は石板を敷く仕事をしており、1平方メートルあたり300ドラクマ⁶⁷ をもらって、「神様、私たちにパンがあることを感謝します」と言っていました。そこで、ある請負業者が、仕事中に罪の重荷に「押しつぶされそう」だと私に愚痴をこぼしたとき、私はこう答えました。「もしあなたがこれらの難民たちに仕事を任せて彼らを助ければ、自分の罪の重荷を軽くできるでしょう。だって、この不幸な人たちは住む場所がないのですから。彼らと比べれば、あなたはオナシスのようなものです。」⁶⁸

私たちが美德を培うことを願って、神は病氣や貧困などを許しておられる。なぜなら、神は病人を癒やし、貧しい者を豊かにすることもできたし、すべての人を幸せにすることもできたはずだからだ。しかし、そうなれば、私たちは自分たちが美德を備えているという誤った感覚を抱いてしまうだろう。例えば、実際にはそうではないのに、自分たちを「慈悲深い」などと呼んでしまうでしょう。しかし今、私たちの美德は行いから見て取れるのです。神に感謝します。隣人のために自らを犠牲にする人々がいます。私は、軍から除隊した直後に不当にも長期の懲役刑を宣告された人物を知っている。彼は、ある一家を救うために、意識的にその道を選んだのだ。この人物は、自分の評判を傷つけることなど、また将来のキャリアのことなど、一切考えなかった。

神様は、どの家庭にも少なくとも一人、信仰と敬虔さを持つ人がいられるよう導いておられるのだと私は感じます。そうすることで、その家族の他のメンバーも助けを受けられるようになるのです！ コニツァでは、ある家族と知り合いましたが、その家族は一人の娘を除いて、全員が教会に対して無関心でした。その娘は、鐘の音を聞くやいなや、エプロンを脱ぎ、手元の仕事をすべて中途半端なままにして、急いで教会へと駆け出しました。ドイツ軍が村にやって来て、教会の係の人が鐘を鳴らして人々にそのことを知らせたときでさえ、この娘は晩課のために教会へと駆け出したのです！ 彼女の両親は極めて倹約家だったが、彼女自身は心優しい人だった。この娘の父親は、倹約のあまり、まともな食事ではなく、水に浸した乾いたパンを食べていた。母親もまた、非常に倹約家だった！ 子供たちは重要な役職に就き、裕福だったにもかかわらず、彼女はマッチ一本も無駄にしないために、灰の中をほじくり回してまだ消えていない炭を探し出し、干し草の切れ端で火を点けていた。コーヒーポットを買わずに済むように、彼らは缶詰の空き缶でコーヒーを淹れていたのだ！

しかし、彼女の母親は私を愛してくれていた。当時、私はストミオン修道院に住んでいた。さて、この娘が、けちな両親の家から何かを持ち出して、貧しい人に施しをしようとしたとき、こっそり持ち出すことができないと、母親にこう言った。「お母さん、この物は修道士に必要なのよ。」「彼にあげなさい、あげなさい」と、母親は答えた。このけちな女性は、修道士にだけ何かを与えることに同意していたのだ。以前、占領下でも、その娘はこっそりと貧しい人々を助けていた。彼女は納屋から小麦を人目につかないように持ち出し、肩に担いで製粉所へ運び、粉に挽いて貧しい家庭に配っていた。ある日、母親が彼女を「現場」で捕まえてしまった。娘はひどく叱られた！ その時、彼女は神に誓いを立てた。「神様、」と彼女は言った。「私に何か仕事を見つけてくだ

⁶⁷ 1992年に発表された。およそ1米ドル。

⁶⁸ アリストテレス・オナシス（1900–1975）——ギリシャの億万長者、最大手の船主であり、世界でも最も裕福な人物の一人であった。

さい。そうすれば、給料のすべてを施しに捧げます。」そして翌日、彼女はある慈善団体から仕事の誘いを受けた。 ああ、彼女はどれほど喜んだことか！彼女は約束を守りました。稼いだお金で自分用にストッキング一足さえ買わず、すべてを施しに捧げたのです。今、どれほど多くの人々が彼女に「神のご加護がありますように。ご両親の御霊に祝福がありますように！」と言っているか、ご存じでしょうか。こうして、彼女の施しのおかげで、神は後に彼女の母親をも憐れんでくださったのです。

家庭における美德の涵養

— ゲロンダ、家族を持つ人は、どのようにして自分の中に美德を育むことができるのでしょうか？

— 神は、そのための好機を与えてくださいます。しかし、多くの人は、徳を養うための好機を神に求めていながらも、何らかの困難に直面すると、不平を言い始めます。例えば、時に、慈愛に満ちた神は、ご自身の限りない愛から、夫に謙遜と忍耐を養ってほしいと願って、妻から神の恵みを取り去ることがあります。すると、妻は「わがまま」な振る舞いをし始め、夫に粗暴に接するようになります。 この場合、夫は不平を言うのではなく、神が自分に与えてくださったこの試練という好機を喜び、神に感謝すべきです。あるいは、例えば、ある母親が神に忍耐を授けてくださるよう祈ります。その後、彼女が食卓を準備すると、子供がテーブルに近づき、テーブルクロスを引っ張ったため、食器がすべて床に散らばってしまいます。 その子はまるで母親にこう言っているかのようです。「お母さん、我慢して！」

そもそも、今日の世界に存在する困難は、少しでも霊的に生きたいと願う人々に、気を緩めず、眠らずにいなければならない状況に追い込んでいます。もし、神よ、どうかお守りください、 戦争が始まれば、人々は気を緩めず、目も閉じることができません。私の見るところ、今まさに、霊的に生きようと努めている人々に、同様のことが起きているのです。 例えば、教会生活を送っている若者たちだけでも考えてみてほしい。彼ら、かわいそうな若者たちは、いったいどれほどの困難に直面していることか！しかし、彼らが暮らすこの汚れた世界から受ける攻撃は、ある意味で、彼らが気を緩めないよう支えているのだ。 一方、困難のない平穏な時代には、大多数の人々が信仰や道德の問題に対して無関心であることが見て取れます。しかし、この平穏な時代こそ、人々は霊的な成長のために活用すべきなのです。彼らは自らの欠点を断ち切り、美德を育むよう努めなければならないのです。

霊的生活において、沈黙は大きな助けとなります。一日のスケジュールを立てる際には、沈黙の時間を明確に設けるのが良いでしょう。その時間には、人は自分自身を深く見つめ、自らの情欲を自覚し、それらを切り捨てて心を清めるための奮闘をすべきです。 また、家の中に、修道院の独房のような雰囲気を持つ静かな部屋があれば、なお良いでしょう。そこで、「ひそかに」⁶⁹、霊的な務めを果たし、霊的な書物を読み、祈りを捧げることができます。 祈りの前に短い霊的な読書をすれば、それは祈りに大いに役立ちます。なぜなら、そのような読書によって魂が温められ、心も霊的な領域へと運ばれるからです。 したがって、日中に多くのことに気を取られてしまう人が、祈りのために10分間の時間がある場合、そのうちの2分間を、気が散るのを追い払うために、心に響く何かを読むことに充てるのが望ましい。

⁶⁹ マタイによる福音書6章4節を参照。

— ゲロンダ、あなたが語っているような生き方を、今の世俗社会で送るのは、それほど簡単ではないと思いませんか？

— いいえ、非常に霊的な生活を送っている信徒もいます。彼らは修道者のように生きています。断食を守り、礼拝を行い、数珠を数えながら祈り、頭を下げて礼拝します——子供や孫がいるにもかかわらずです。日曜日になると、そうした人々は教会へ行き、聖体拝領を受け、再び自分の「小部屋」へと戻ります。それはまるで、日曜日に修道院の大聖堂を訪れ、その後また自分の小屋で沈黙を守る隠者たちのようです。神に感謝して、世の中にはそのような魂が数多くいる。具体的に言えば、私はある一家の家長を知っているが、彼はどこにいても絶えず「イエスの祈り」を捧げている。この人の祈りには常に涙が伴う。彼の祈りは自発的なものとなり、その涙は甘美で、神聖な喜びの涙である。聖山で働いていたある労働者のことも覚えている。彼の名前はヤニスだった。彼は非常に過酷な労働に従事し、二人の分の仕事をこなしていた。私は彼に、仕事にイエスの祈りを唱えるよう教えたところ、徐々にそれに慣れていった。ある日、彼は私のところに来て、イエスの祈りを唱えていると大きな喜びを感じる、と言った。「夜明けの光が差し始めたのだ」と私は彼に答えました。しばらくして、この男が二人の酔っ払ったチンピラに殺されたことを知りました。私はどれほど悲しんだことか！ さらに数日後、ある修道士が、ヤニスがどこかに置いたまま見つけれない道具を探していた。すると、ヤニスが彼の夢に現れ、その道具をどこに置いたかを教えてくれた。この人は霊的な境地に達しており、あの世からでも他人を助けることができたのだ。

霊的な生活とは、なんと単純なものであろうか！ 神を愛し、神の偉大な犠牲と恵みを認め、理性を働かせて聖人たちに倣うよう自らを奮い立たせれば、人はすぐに聖化される。ただ、謙虚になり、自らの罪深さと、神に対する大きな不感謝さを感じさえすればよいのだ。

家庭での祈り

— ゲロンダ、家族全員で晩課を唱えるべきでしょうか？

— 大人はこの点において高潔な態度を示すべきです。彼らは晩課を唱えながら、幼い子供たちに「もしよければ、私たちと一緒に少しお祈りしましょう」と声をかけるべきです。子どもたちが少し大きくなったら、祈りに関して一定の「慣例」を設けることができます。例えば、大人が15分間祈るなら、子どもたちは2分か5分、もしもっと長く祈りたいなら、好きなだけ祈らせればよいのです。もし親が無理やり子どもたちに、晩課の全時間を自分たちと一緒に立ち続けて祈らせようとすれば、やがて子どもたちは「反抗し始める」でしょう。」子どもたちにプレッシャーをかけてはいけません。なぜなら、彼らはまだ祈りの力や価値を理解していないからです。例えば、親は豆も肉も、その他どんな固い食べ物でも食べることができます。しかし、まだ母乳だけで育っている赤ちゃんに、親が「肉の方がカロリーが高いから」という理由で、無理に肉を食べさせたりするのでしょうか？ 確かに肉は高カロリーですが、乳児にはまだ消化できません。そのため、最初は赤ちゃんに肉を食べる習慣を身につけさせるために、親は少しずつ与えます——肉スープのスプーン一杯に小さな一片を添えるなどして、やがて子供自身がそのような食べ物を欲しがようになるのです。

— ゲロンダ、時には子供だけでなく、大人も夕方になるとひどく疲れてしまい、晩課さえ読めなくなってしまうことがあります。

— もし彼らがひどく疲れていたり、病気だったりするなら、晩課を全部ではなく半分だけ読めばよい。あるいは、せめて「主の祈り」を一度だけ読んでほしい。祈りを完全にやめてはならない。まるで戦時中、高台で敵に包囲された兵士が、敵を恐れさせ、攻撃を仕掛けさせないために時折ライフルを撃つように、十分な祈りを捧げる力が残っていない人々もまた、タンガラシュカを恐れさせ、逃げ去らせるために「霊的な」一発を放つ必要があるのです。

家族での祈りには大きな力があります。私は、祈りによって仲違いしていた両親の離婚を食い止め、それだけでなく、以前よりもさらに強い絆で両親を結びつけることに成功した二人の兄弟を知っています。父は私たちにこう言っていました。「何をしても、1日に2回は神様に報告をしなければならない。そうすることで、神様があなたがたどこにいるかを知ることができるからだ。」毎朝と毎晩、私たち全員——父、母、そして兄弟姉妹——はイコノスタスの前で祈りを捧げ、祈りの終わりにはキリストのイコンの前に頭を下げました。そして、家族の中に試練や困難が訪れたときは、それが解決されるよう祈りました。ある時、末の弟が病気になった時のことを覚えています。父はこう言いました。「さあ、神様に、彼を癒してくださるよう、あるいは苦しませないよう、御許へお連れくださるよう、お願いに行こう。」家族全員で祈ると、弟は回復しました。食事の際も、私たちは皆で一緒に食卓につきました。まず祈りを捧げてから、食事を始めました。もし誰かが食事の祝福の前に食べ始めたら、私たちは「彼は不貞を犯した」と言いました。自制心の欠如を、私たちは不貞と見なしていたのです。もし家族の一人一人が、理由もなく自分の都合で帰宅し、一人で食卓につくようになれば、それは家族の崩壊につながります。

夫婦の霊的生活

— ゲロンダ、もし夫が霊的な生活を送っていない場合、妻はどうすればよいのでしょうか？

— 彼女は夫をキリストに委ね、夫の心が少しでも和らぐよう祈りましょう。時が経つにつれ、キリストが静かに夫の心に「部隊」を送り込み、夫は[本当に大切なこと]について考え始めるでしょう。そして、夫の心が少し和らいだところで、妻は例えば、車で教会まで送ってほしいと頼んでみればいいのです。「どうして教会に行かないの」と説得する必要はなく、ただこう頼めばいいのです。「もしお手数でなければ、教会まで車で送ってくれない？」と頼むだけでいいのです。そして、妻を教会まで送った後、夫はこう言うかもしれません。「まあ、せっかくここに来たんだから、僕も神の御殿に立ち寄って、ろうそくを灯してこよう」。そうして、その後、彼が少しずつ霊的な道を歩み始める可能性も否定できません。

— ゲロンダ、妻の霊的指導者は、何らかの形で夫の助けにもなるのでしょうか？

— 時には、夫を助けるために、霊的指導者が妻に対して霊的な働きかけを行う必要があります。そうすれば、妻の持つ良い部分が夫にも伝わるでしょう。もし夫の心が善良であれば、神が彼が変わるよう助けてくださいます。

女性には本来、畏敬の念が備わっています。しかし、当初は教会に無関心だった男性が、後に霊的に目覚めた場合、その男性は霊的な面で確固として前進していく一方で、妻は彼についていけなくなります。さらには、妻自身が霊的に足踏み状態にあるため、夫を羨ましく思うようになることさえあり得ます。そのため、このような場合、私は

夫たちに注意を払うよう勧めています。一体何が起きているのでしょうか？ 夫が霊的に前進すればするほど、妻は——もし彼女が霊的な生活を送っていなければ——ますます夫に逆らうようになるのです。例えば、夫が「遅刻しそうだ、起きて教会に行こう」と言うと、彼女はこう答えます。「じゃあ、あなた一人で行って！ いいえ、あなたは私のことが分かっていないわ。私にはやることが山ほどあるんだから……」あるいは、例えば夫が「ねえ、どうしてあなたのランプが灯っていないの？」と言ったり、消えたランプを自分で灯そうとしたりすると、夫は彼女のエゴを傷つけてしまい、彼女は「あなた、神父になるつもり？ それとも修道士になるつもり？」と叫ぶ。彼女はこう反論することさえある。「そもそも、なんでこのランプに火をつけるの？ その油を、貧しい人にでもあげたほうがましだわ」と。そう、彼女はそこまで行ってしまうこともある。プロテスタント的な愚かさまで。もちろん、その後、妻は自分が口にした数々の言い訳のせいで自ら落ち込んでしまうが、同時に、夫に見られる霊的な成長のせいで、さらに落ち込み続けるのだ。だからこそ、こうした場合、夫がランプに火をつけるよりは、消したままにしておくほうが千倍もましなのです。そこで、家族が崩壊するのを防ぐために、私は夫たちにこうアドバイスしています。「奥さんが穏やかな気分になっている時に、こう言ってください：『ねえ、僕が教会に行ったり、祈ったり、お供え物をしたり、霊的な本を読んだりするのは、決して深い信仰心からじゃないんだ。そうではなく、これらすべてが僕をブレーキにかけ、抑え込み、僕たちが住んでいるこの恐ろしい社会の流れに、引きずり込まれないようにしてくれるからだ。そうでなければ、君も知っているだろう？ 僕がああ酒場や仲間たちの輪に巻き込まれてしまうんだから……』」と。夫がこのように切り出せば、妻は喜び、彼女もまた変わって、霊的な面で夫を追い越すことさえある。しかし、別の言い方をすれば、彼は彼女をひどく苛立たせ、立ち直れない状態に追い込んでしまう。二人は離婚にまで至る可能性さえある。もし夫が妻を霊的に助けたいのなら、母や妻が敬虔な生活を送っているような、霊的な生活を送る家族と彼女をつなぐよう努めるべきだ。そうすれば、彼女も彼らに倣いたいと思うようになるだろう。

子供と霊的生活

— ゲロンダ、ある母親が自分の子供に聖水を飲ませようとしたところ、その子はそれを吐き出してしまいました。この場合、どうすればよいのでしょうか？

— 彼女は子どものために祈るべきです。おそらく、彼女が子どもに聖水を飲ませる方法が、子どもに抵抗感を抱かせているのかもしれないかもしれません。子どもたちが神の道を歩むためには、親もまた正しい霊的生活を送らなければなりません。教会に通う親の中には、子供たちが良い子になるよう助けようとする人もいますが、それは子供たちの魂の救いを気にかけているからではなく、単に「良い子供」を育てたいからに過ぎません。つまり、子供たちが永遠の苦しみを受けるかもしれないことよりも、他人が自分の子供について何と言うかを、より心配しているのです。しかし、そのような場合、神はどのように助けてくださるのでしょうか。重要なのは、子供たちが強制されて教会に行くのではなく、教会を愛するようになることです。子供たちは強制されて善を行うのではなく、それを必然として感じるべきなのです。親の聖なる生活は子供たちの魂に響き、そうして子供たちは[父と母に]素直に従うようになります。そうして子供たちは、敬虔さと二重の健康を保ち、心の傷を負うことなく成長していく。もし親が、神への畏れに駆られて子供たちに厳しく接するなら、神は助けを与え、子供も助けを受ける。しかし、

もし彼らが利己心からそうするならば、神は助けてはくれない。子供たちは、親の傲慢さによって苦しむことがよくある。

— ゲロンダ、時々、母親たちから「3～4歳の子供は、どのように、どれくらいの時間、祈るべきでしょうか？」と尋ねられることがあります。

— それなら、こう伝えてください。「あなたは母親です。さあ、あなたの小さな子がどれだけの力を持ちこたえられるか、よく見ていてください。」ここには決まり事など必要ありません。

— ゲロンダ、私たちの修道院では、徹夜祈祷の際、親たちが小さな子供たちを連れてきます。子供たちにとっては、疲れることではないでしょうか？

— 朝の礼拝の間は、子供たちに少し休ませてあげてください。そして、聖体礼儀の時には、また子供たちを教会に連れてきてください。

母親たちは、子供たちに無理強いすることなく、幼い頃から祈りを教えるべきである。カップドキアの村々の住民たちは、禁欲的な伝統を熱心に守り続けていた。彼らは子供たちを洞窟や教会、礼拝堂に連れて行き、そこでひれ伏して涙ながらに祈りを捧げた。そうして、子供たちもまた祈りを学ぶようになった。夜、強盗団が略奪にやってくると、これらの小さな教会を通り過ぎる際、泣き声を耳にして驚いた。「一体何が起きているのか？」と彼らは尋ねた。「この人々は一体何者なのか？ なぜ昼は笑い、夜は泣くのか？」強盗たちは、何が起きているのか理解できなかった。

幼い子供たちの祈りは、奇跡を起こすことがあります。神様は、子供たちが願うことを叶えてくださいます。子供たちは純粋で汚れがないからこそ、神様は彼らの清らかな祈りを聞いてくださるのです。ある時、両親が畑仕事に出かけ、私と二人の弟が家に残されたことを覚えています。突然、空が暗くなり、激しい雨が降り出しました。「ああ、今、両親はどうしているんだろう！」と私たちは心配になりました。「どうやって家に帰れるんだろう？」と。幼い兄弟たちは泣き出しました。「こっちへおいで」と私は彼らを呼びました。「キリスト様に、雨を止めてくださるようお願いしよう。」三人でイコノスタスの前にひざまずき、祈り始めました。数分後、雨は止みました。

分別ある親は、子供たちが幼い頃からキリストに近づき、ごく早い時期から最高の霊的な喜びを体験できるよう手助けすべきです。子どもたちが学校に通い始めると、親は少しずつ霊的な本を読むことを教え、霊的な生活を送れるよう手助けすべきです。そうすれば、彼らはまるで小さな天使のようになり、祈りの中で神に対して大きな大胆さを持つようになるでしょう。そのような子どもたちは、家族にとって真の霊的な財産です。霊的な生活において、聖人の伝記は彼らにとって特に大きな助けとなります。私が幼かった頃、当時出版されていた聖人の伝記が載った小さな本を持って、森へ出かけていました。そこで本を読み、祈り、ただ喜びに満ちて浮き立つような気分でした。10歳から16歳まで（ギリシャ・イタリア戦争が始まるまで⁷⁰）、世間の心配事に縛られることなく、私は霊的な生活を送っていました。子供の頃の喜びは純粋です。それは人の心に深く刻まれ、大人になったとき、その心を深く揺さぶります。もし子供たちが霊的な生活を送るなら、この世でも喜びに満ち、来世ではキリストのそばで永遠に喜びを分かち合うことになるでしょう。

⁷⁰ 1940年のギリシャとファシスト・イタリアとの間の戦争。——訳者注

家族や友人との関係

— ゲロンダ、ある女性が、長年自分の負担になっている二人のいところをどうすべきか、私たちに相談してきました。

— 彼女は一体何を望んでいるのですか？ 新しい福音書でも書くというのですか？ 神は彼女に、彼女たちの世話をすることを求めておられます。そして、彼女たちの魂にとって有益なことは、神ご自身がなさるのです。

— ゲロンダ、親族の間で誤解が生じた場合、彼らを助けるために何か言葉をかけなければならないのでしょうか？

— ええ、彼らと話をする必要がありますが、慎重に。何しろ、黙ってしまえば、悪い結果を招く恐れがある。もし、仲違いした親族に善意の助言をした人が、誤解され 怒られてしまったなら、その人にはこう言うべきだ。「気分を害させてしまって申し訳ありません」と。そしてその後は、彼らを放っておき、彼らのために祈るのだ。

平和に生きたいと願う人は、家族や友人との関係において特に注意を払わなければならない。他者に見られるかもしれない礼儀正しさや良いマナーに惑わされてはならない。世俗的な礼儀や良いマナーは、そこに偽善が潜んでいるため、少なからぬ悪をもたらす可能性がある。人の外見上の振る舞いは、他人の目には完璧な聖人のように映るかもしれない。しかし、その内面が他人に明らかになったとき、実際には全く逆だったことが判明するだろう。

— ゲロンダ、もし人が、隣人が自分に親切に接してくれていると感じ、理解しているなら、そのことに対して感謝の意を表すのは正しいことでしょうか？

— もしその人が非常に親しい間柄であれば、感謝を口にする必要はありません。なぜなら、第一に、その人もかつて相手に助けや恩恵を与えていたからです。第二に、相手自身が、相手が自分に対して抱いている内なる感謝の気持ちを感じ取っているからです。しかし、自分に恩恵を与えてくれたり親切にしてくれたりした相手がそれほど親しい関係でない場合は、その人はできる限り感謝の気持ちを表すべきです。見知らぬ人に対しては、「ありがとう」と言います。そして、例えば子供が両親に感謝の気持ちを伝えたいと思った場合、両親が自分のためにしてくれることすべてに対して、昼夜を問わず絶え間なく「ありがとう」と言い続ける以外に、他にできることはありません。

他者との関係において気取らず、常に相手に対して善意を持ち、すべての人を深刻に受け止めすぎないことは、大いに有益です。一見、霊的な益のためであるかのように見えても、実際には頭痛の種になりがちな議論や会話は避けるべきです。神を信じない人々に、霊的な理解を期待してはいけません。むしろ、そのような人々のために、神が彼らを赦し、啓発してくださるよう祈るほうがよい。一人ひとりには、その人が理解できる言葉で話すべきであり、[信者である人は]、自分自身が信じ、体験している偉大な真理を他人の前で明かすべきではありません。なぜなら、他人はそれを理解できないからです。その人は異なる周波数で語り、異なる長さの[霊的な]波長に乗っているからです。

「私もキリストを知ったように、他の人々にもキリストを知ってほしい」と言う人々がいます。そして、そうした人々は他者に対して教師のような振る舞いを始めます。しかし、彼らの生き方は、彼らが教えていることと一致していなければなりません。自らの生き方を通じて他者に「キリスト」を教えながら、自分自身がその言葉にふさわしくない状態では、彼らはキリストを知ったとは言えないのです。（霊的な）生活の経験を持たない人は、現実からかけ離れており、遅かれ早かれ、その内なる人が他者にその

人を「裏切る」ことになる。痛みと真の愛をもって隣人に近づくと、その真のキリストの愛が隣人を変えていく。聖性を備えた人は、どこにしようとも、いわばある種の霊的な電磁場を自身の周りに作り出し、その場に入る人々に影響を与える。もちろん、私たちは注意深くあり、愛を無駄にしたり、安易に他者に心を明け渡したりしてはなりません。なぜなら、しばしばある人々は私たちの心を自分の手中に収め、その後、その心は[無意味に]血に染まってしまうからです。あるいは、彼らは私たちを理解できず、私たちに対して恨みを抱くこともあります。

祝日の誘惑

— ゲロンダ、なぜ祝日にはたいてい何らかの誘惑が起こるのでしょうか？

— あなた自身、知らないの？ 祝日には、キリストや聖母マリア、聖人たちが喜び、他の人々に[霊的な]もてなしをするのよ。彼らは人々に祝福を与え、霊的な贈り物を授けるの。何しろ、親もまた子供の名前の日に祝宴を開くし、王たちは王子が生まれた時に恩赦を出す。それなら、なぜ聖人たちが自分たちの祝日に人々に[霊的な何かで]もてなしてはいけないというのか？ そして言うておくが、聖人たちが与える喜びは長く続き、人々の魂はその喜びから多大な恩恵を受けるのだ。それゆえ、悪魔はこれを承知の上で、人々が受けた神からの賜物を失うよう誘惑を仕掛け、祝日 が彼らに喜びも益ももたらさないようにするのです。ご覧の通り、家族全員が聖体拝領の準備をしている時、悪魔が彼らを煽って口論させ、その結果、聖体拝領はもとより、教会へさえ行かなくなってしまうことがよくあります。タンガラシュカは、人々が神の助けを失うようにあらゆる手段を講じているのです。

私たちの修道生活においても、同様のことが見受けられます。しばしば、タンガラシュカは、祝日には霊的な恵みを得られることを経験から知っており、その日、あるいは多くの場合その前日に、何らかの誘惑を仕掛けてきます。そう、彼こそがまさに誘惑者なのです[——他に何を仕掛けられるというのでしょうか？]。そしてこのようにして、彼は私たちの内なる心構えを台無しにします。例えば、彼は私たちをある兄弟との論争や口論へと駆り立て、その後、私たちに悲しみをもたらし、心身ともに打ちのめすのです。こうしたことをすべて行うことで、彼は私たちが祝日から恩恵を受け、神を賛美する喜びの中で[祝日を過ごす]ことを妨げます。しかし、もし慈愛に満ちた神が、私たち自身が悪魔に誘惑の口実を与えたわけではなく、それが単に悪魔の嫉妬によって起こっただけであると見抜かれたなら、神は私たちを助けてくださいます。さらに、もし私たちが謙虚に、起こった誘惑の責任を自ら引き受け、兄弟を非難しないばかりか、善を憎む悪魔さえも非難しないならば、神は私たちがより大きな恵みを得られるよう助けてくださいます。何しろ、誘惑を仕掛け、悪意を広めることこそが、悪魔の仕事なのですから。一方、神の像である人間は、平和と善を広めるべきなのです。

第2章。 仕事と精神生活

労働は祝福である

— ゲロンダ、昔は「布団を拭くより、靴底を拭くほうがましだ」と言われていました。この言葉にはどのような意味が込められていたのでしょうか？

— つまり、「ベッドに横になって怠けて過ごすより、働いて靴底をすり減らすほうがましだ」と言いたかったのです。労働は祝福であり、神からの賜物です。それは体を活気づけ、心をリフレッシュさせてくれます。もし神が人間に労働を与えなかったなら、人間はカビが生えてしまうでしょう。勤勉な人々は、老いてからも働き続ける。まだ力があるうちに働きをやめてしまえば、彼らは落ち込んでしまうだろう。そのような人々にとって、仕事をやめることは死と同義である。コニツァで、ある90歳の老人が休むことなく働いていたのを覚えている。結局、彼は家から徒歩2時間のところにある畑で、そのまま息を引き取った。

しかし、一部の人が求める「肉体の安らぎ」は、決して安定した状態ではないという点についても言及しておく必要がある。肉体の安らぎの中にいるとき、人々は心の不安を一時的に忘れられるだけである。彼らには、昼食、デザート、シャワー、休息……すべてが揃っている。しかし、これらすべてが終わるとすぐに、彼らはさらに大きな安らぎを求めてしまう。このように、人々は常に何かが足りないと感じており、それゆえに絶えず落ち込んでいる。彼らは空虚さを感じ、その魂はその空虚さを埋めようとしている。一方、労働に疲れ果てた者は、絶え間ない喜び——すなわち霊的な喜び——を持っている。

— ゲロンダ、でも、例えば腰に問題があるなら、どんな仕事もできないでしょう。

— じゃあ、君は腰を鍛える必要はないと思うの？ 腰にとってトレーニングになるような運動は、役に立たないの？ こう言うておこう。もし人が食べて、飲んで、寝て、働かなければ、体内のすべての「歯車」が「緩んで」しまい、常に眠たくなってしまう。なぜなら、体も神経もリラックスし、だらしなくなってしまうからだ。そうして、その人は徐々に何もできなくなってしまう。少し歩いただけで息切れし始める。しかし、少しずつ働き、体を動かすようになれば、足も手も強くなる。見てごらん：労働を愛する人々は、長時間眠らないか、あるいは疲れのせいで全く眠れないことさえあるが、それにもかかわらず、彼らには力がある。それは、労働を通じて、彼らが鍛えられ、肉体が強靱になるからである。

仕事は健康の源であり、特に若者にとってはなおさらだ。私は、一部の「ママっ子」たちが軍隊に入ること、大人になり、鍛えられていくことに気づいた。軍隊は、そうした若者たちにとって非常に大きな利益をもたらす。もちろん、私が言っていることは、主に過去の話だ。今日の軍隊では、兵士を煩わせたり、何かを強制したりすることを恐れている。なぜなら、少しでも「煩わせ」と、彼らは手首を切ったり、「神経衰弱に陥ったり」するからだ……。子供たちが健康でいられるように、私は親たちに、子供を誰かのところへ働きに行かせ、その人に報酬を支払うことさえ勧めている。子供たちがこれから行う仕事を好きになってくれさえすればよいのだ。なぜなら、体力と知力があるにもかかわらず、若者が働かなければ、彼は怠けてしまい、無気力でだらしなくなるからだ。さらに、その上、他人が成功しているのを見れば、彼は自分の利己主義に迷い込み、何にも喜びを見出せなくなる。彼は常に邪な考えを抱き、その頭はまるで藁で詰まっているかのようだ。すると悪魔が彼のもとへやって来て、こう囁き始める。「哀れな者よ、お前はなんて無能なんだ！ 同年代のひとり教師になり、もうひとり自

分のビジネスを立ち上げてお金を稼いでいるのに、お前は一体どこまで行けるというのだ？」こうして悪魔はその人を絶望の淵へと突き落とす。しかし、もしその若者が働き始めれば、自分自身への信頼——その言葉の本来の意味での——を築くことができるだろう。彼もまた困難を乗り越えられることに気づくだけでなく、仕事によって頭が占められ、余計な考えにふける暇もなくなる。つまり、二重の利益が得られるのだ。

職業選び

— ゲロンダ、一部の親は子供たちに自分と同じ職業を選ぶよう促し、しばしば非常に執拗にそうします。

— いいえ、彼らのやり方は間違っています。子供自身が望んでいないのに、親の好みに合わせて行動するよう子供に圧力をかけるべきではありません。私は、神学部に入學して司祭になりたいと願っていた青年を知っていました。しかし、彼の母親は反対し、医学部に進むよう強く迫りました。その青年はビザンチン聖歌を習得し、教会で歌っていた。彼は自ら楽器を作り、それで教会の聖歌を奏でていた。多くの教会聖歌を暗唱していた。彼には並外れた才能があり、トロパリを書き、礼拝の式次第を編んでいた。高校を卒業後、その青年は神学部に入學した。母親はショックで神経衰弱に陥ってしまった。その後、彼女は私のところに来て、「神父様、私が元気になるようお祈りください。そうすれば、私の子供は自分の好きなことをさせてあげられますから」と頼んできた。しかし、回復すると、彼女は再び息子が神学を学ぶことを妨げ始めた。そして結局、彼は神学部を中退し、聖歌も放棄して、無駄に自らを台無しにしてしまった。

若者たちが専攻選びに悩んでいるのを見ると、私は次のようにアドバイスしています。「自分がどの職業や学問に興味を持っているか、よく考えてみてください。生まれつきの適性がある分野に取り組むべきです。」もし若者たちが、自分には向いていない道を選ぶようとしているなら、私は彼らに、自分の心に傾きを感じるものに心を注ぐよう勧めます。そうすることで、それが彼らのためになるからです。つまり、私は彼らが好きな仕事を選び、自分の能力に合った職業を選ぶよう手助けしているのです。彼らが神にかなうことを行えば、それで十分です。音楽への適性がある人は？ 例えば、優れた音楽家や教会聖歌隊員となり、その歌声で聴く人々が教会や祈りを愛するようになるよう助けましょう。絵画への召命がある人は？ その人は画家やイコン画家となり、敬虔な心でイコンを描き、それが奇跡を起こすようにしましょう。科学への召命がある人は？ その人は科学に身を捧げ、熱意を持って研究に励むようにしましょう。

そして、ごらんなさい。幼い頃から、その人が何に天職を持っているかははっきりと見て取れるものです。ある日、ストミオン修道院に、2人の幼い子供——自分の甥たち——を連れた男性がやってきました。そのうちの1人は6、7歳くらいで、私たちの隣に座ると、絶え間なく様々な質問を投げかけてきました。「大きくなったら何になりたい？」と私が尋ねると、「弁護士！」と彼は答えました。もう一人の子供はどこかへ消えてしまいました。「あの子はどこ？」と私はその叔父に尋ねました。「崖から落ちたりしてないか？」私たちは彼を探しに出かけ、大工の工房からハンマーの音が聞こえてくるのに気づいた。工房に入ると、その子が鑿で作業台の滑らかに削られた天板を、見事に削りすぎてしまい、もはやストーブの燃料にしか使えない状態になっていたのだ！「大きくなったら何になるの？」と私は彼に尋ねた。「大工、特に細工師になるよ！」と少

年は答えた。「なるよ、なるよ。板を台無しにしたっていいんだ！ 大したことじゃないさ。」

仕事への愛

— ゲロンダ、なぜ工作中に退屈に襲われる人がいるのでしょうか？

— もしかすると、彼らは自分の仕事が好きではないのでしょうか？あるいは、工作中ずっと同じ作業ばかり繰り返しているからでしょうか？例えば、窓やドアを製造する工場など、一部の生産現場では、ある職人は朝から晩まで板同士を接着し続け、別の職人はひたすらそこにガラスをはめ込み、また別の職人は毎日パテで仕上げる、といったことがよくあります。こうした人々は常に単調な作業を繰り返しており、経営者はその様子を見回っている。そして、この状態は一日や二日では終わらない。もし常に同じことを繰り返していれば、人はそれに飽きてしまうものだ。昔はそうではなかった。大工は建設業者から四つの壁を受け取り、完成した家を「引き渡し済み」の状態で施主に引き渡さなければならなかった。床を張り、窓やドアを取り付け、ガラスにパテを塗るなど、あらゆる作業をこなす必要があった。その後、様々な螺旋階段や彫刻を施した手すりの製作に取りかかり、それらを塗装し、続いて戸棚や棚の製作へと移り……最後に家具の製作に取りかかった。たとえ一人の職人がこれらすべてを手がけることはなかったとしても、彼はそれぞれの作り方を熟知していた。必要とあれば、大工は屋根に瓦を葺くことさえできたのだ。

今日、多くの人々は自分の仕事が好きではないために疲れ切っています。彼らは時計を見つめ、家に帰れる時間を心待ちにしています。しかし、もしその人に責任感があり、仕事への情熱があり、自分のやっていることに無関心ではないなら、働けば働くほど、その情熱はさらに燃え上がる。そうして人は仕事に没頭し、帰る時間になると驚いて「いつの間に時間が過ぎたんだろう？」と尋ねる。食事や睡眠も、すべてを忘れてしまうのだ。たとえ何も食べていなくても空腹を感じず、眠っていなくても眠気を感じない。それどころか、眠らないことを喜んでいるのだ！ 空腹や睡眠不足に苦しむことはない。そのような人にとって、仕事は祝祭であり、祝賀の場なのだ。

— ゲロンダ、例えば、二人の人が同じ仕事をしているとします。なぜ、その仕事から一人は霊的な益を得られるのに、もう一人は霊的な害を受けるのでしょうか？

— すべては、彼らがその仕事をどのように行い、自分の中に何を持っているかによって決まります。もし人が謙虚さと愛を持って働くならば、その人が行うすべてのことは、啓発され、清められ、喜びと恵みに満ちたものとなり、その人自身も内なる活力の回復を感じるでしょう。一方、自分が他者よりも優れた仕事をしているという高慢な考えを抱くと、人はある種の満足感を覚えるかもしれませんが、その満足感は心を満たすことはありません。なぜなら、魂は〔霊的な〕啓示を受けず、安らぎを得られないからです。

さらに、愛を込めて仕事をしなければ、人は疲れてしまう。例えば、ある人がその仕事を好きではなく、仕事を終わらせるために山を登らなければならない場合、その山を見るだけで体力が奪われてしまう。一方、同じことを心から楽しんでいる人は、気づかないうちに山を登り、軽やかに駆け上がっていく。例えば、人が心から畑を耕したり、野菜畑の雑草を抜いたりしているなら、炎天下であっても数時間働き続けても疲れを

感じないでしょう。一方、心からではなく働いている人は、しょっちゅう立ち止まり、あくびをし、暑さを嘆き、苦しむことになります。

— ゲロンダ、仕事や学問に没頭しすぎて、家族やその他の義務に対して無関心になってしまうことはあるのでしょうか？

— 仕事は単純に愛せばよい。それに夢中になる必要はない。もし人が自分の仕事を愛さなければ、肉体的にも精神的にも、二倍の疲れを感じるだろう。そして、精神が疲れてしまえば、肉体の休息でも力を回復することはできない。精神的な疲れこそが、人を疲れ果てさせるのだ。心から働き、喜びを感じている人は、精神的な力を消耗することではなく、身体の疲れも消えていく。私は、兵士の仕事さえも自らこなすある将軍を知っている。彼が兵士たちをどれほど応援しているか、ご存知だろうか？まるで父親のようにだ。そして、彼がどのような喜びを感じているか、ご存知だろうか？この人は自分の義務を果たし、それを喜んでいるのだ。ある夜、彼はエウロスを出発し、⁷¹ 聖アキリウスの記念日⁷² に間に合うよう、ラリサへ向かいました。神聖な典礼に間に合うためです。もっと遅く到着して、祈りの儀式だけに参加することもできたはずですが、彼は聖人を敬うために、あえて早く出発することを決めたのです。この人が行うすべてのことは、心から行われているのです。

自分の仕事を誠実にこなす人が感じる喜びは、良き喜びである。この喜びは、神がご自身の被造物が疲れ果てないように与えてくださったものである。これは、疲れを通じて力を回復することである。

誰もが、自分に与えられた賜物を霊的に活用すべきである

人は皆、自分に与えられた才能を善のために用いるべきである。なぜなら、神は人に何らかの才能を授けた以上、そのことについて問うからである。例えば、人間の知性は[与えられた]力ですが、その知性をどのように使うかによって、善を行うこともあれば悪を行うこともあります。もし、非常に知的な人がその能力を正しく使えば、人々を助ける発明をすることができるでしょう。しかし、与えられた能力を誤って用いれば、例えば、隣人を略奪する方法を考案してしまうかもしれない。あるいは、新聞や雑誌に自分の絵を掲載する芸術家たちを例に挙げよう。一枚の風刺画や一枚の絵には、一つの出来事全体が隠されていることがある。つまり、もしこれらの画家がその柔軟な思考を有益なことに活用していたなら、彼らはそれを高尚なものへと昇華させ、自分自身にも他者にも役立てることができたはずだ。それなのに、現在、そうした人々の多くは不善な行いをしている。恥知らずな者ならさらに恥知らずなことをし、滑稽な者ならさらに滑稽なことをしているのだ。

つまり、才能に恵まれ、特別な能力を持つ人々は、他者に利益をもたらすか、あるいは他者を破滅させるかのどちらかである。一方、特別な能力を持たない人々は、もちろん大きな善を行うことはできないが、少なくとも大きな悪を行うこともできない。

仕事と心の不安

— ゲロンダ、多くの人は仕事から帰宅すると、神経が張り詰めてしまいます。

⁷¹ エウロス川——ギリシャ北東部、トルコとの国境を流れる川。——訳者注

⁷² 聖アキリウス・ラリシウス（†330年頃）の記念日は5月15日である。—訳者注

— 私は男性たちに、仕事の帰りにどこかの教会に立ち寄り、ろうそくを灯し、礼拝に10分から15分ほど立ち会ったり、公園のどこかで座って福音書の一節を読んだりして、心を落ち着かせることをお勧めします。その後、心を落ち着かせ、笑顔を浮かべて家に帰ってほしい。そうでなければ、イライラしたまま帰宅し、身近な人と口論を始めてしまうだろう。仕事で直面した問題を家に持ち帰る必要はない。そうした問題は、家のドアの外に置いてくるべきだ。

— ゲロンダ、しかし、一部の人々は、仕事上の責任が精神的な不安をもたらしていることを理由に、自分の興奮や神経質さを正当化しています。

— 彼女たちは、自分の行いにおいて神を助け手とすることを忘れてしまうため、人々の心に不安を植え付けてしまうのだ。常に「大丈夫、神は見捨てない……」と口癖にしている怠け者の方が、そんな人たちよりはましだ。私としては、企業のオーナーになって「ああ、どうすればいいんだ？」と何度も繰り返すよりは、普通の社員として、正しく誠実に仕事をこなし、生活を簡素にし、必要なものにだけ留まり、心を穏やかに保つほうがましだと思う。たいてい、そんな大物たちは多額の借金を抱えているものだ。そして、そこに傲慢さが混じってくる。「もう一つ大きな融資を受けられれば、あれを建て、これを整えて、のうのうと暮らせる……」と、そうした人々は言うが、結局は計算を誤り、破産し、その財産は競売にかけられてしまうのだ。

さらに、多くの人は仕事において頭を使っていません。彼らは無駄に疲れ果ててしまい、任された仕事をこなすことができません。その結果、周囲からの評価が下がり、心は不安で満たされてしまいます。例えば、ある人が芸術や工芸を習得しようと、何年も師匠のもとや教育機関に通い続けるが、注意力を欠いているため、頭を使っていないせいで上達できない。人は、仕事に必要なものが何かを理解し、足りない部分を補わなければならない。例えば、私が世間において大工として働いていた時、自分が作っている家具には旋盤が必要だと気づいた。さて、どうすべきだったのか？ 旋盤工を探して、手伝ってほしいと頼むべきだったのだろうか？

いいえ。私は旋盤を購入し、自分でその使い方を覚えました。それからしばらくして、らせん階段を作る必要があることに気づきました。少し時間をかけて、幾何学と算数を思い出し、そのような階段の作り方を習得しました。頭を使って考えなければ、苦勞することになります。私が言いたいのは、人は頭を使って働かなければならないということです。なぜなら、仕事をしていると、しばしば多くの問題や複雑な事態が生じるからです。頭を使って働くことで、人は優れた職人となり、それぞれの具体的な状況でどう行動すべきかを知り、前進していけるのです。これこそがすべての基礎です。頭はあらゆる面で生産的な力であるべきです。そうでなければ、人は未熟なままであり、時間を無駄にしてしまうことになります。

労働の聖化

一人ひとは、自らの祈りや[キリスト教的な]生活を通じて、自分の仕事を聖別し、自分自身も聖別されなければならない。もし仕事で部下がいて、その責任を負っているならば、その部下たちにも霊的な助けを与えなければならない。内面が健全な状態にある人は、その仕事もまた聖別することになる。例えば、若者が職人のもとを訪れ、その仕事を教わる場合、職人は同時に、彼らが霊的に生きることを学ぶ手助けもしなければ

ならない。そのような姿勢は、上司自身にも、部下にも、そして顧客にも役立つだろう。なぜなら、神がその労働を祝福してくださるからである。

どのような職業であれ、神聖なものとなり得る。⁷³ 例えば、医師は忘れてはならない。医学において主に助けとなるのは、神の恵みである。それゆえ、医師は神の恵みの器となるよう努めなければならない。医師は、善良で慈愛に満ちたキリスト教徒であると同時に優れた専門家として、その優しさと信仰によって患者を助ける。なぜなら、医師は患者に、病気に対して勇気と信仰を持って向き合うよう促すからである。重篤な病気の場合、そのような医師は患者にこう言うことができるでしょう。「医学という科学は、ここまで進歩しました。しかし、人間の知識が及ばないところには、奇跡を起こされる神がおられます。」

そして、教師は喜びをもってその務めを果たし、子供たちの霊的な再生を助けるよう努めなければならない。なぜなら、たとえ親が善意を持っていても、子供たちの霊的な再生を成し遂げられる親は限られているからだ。子供たちに知識を教える一方で、教師は彼らが真の人間となるよう努めなければならない。そうでなければ、学んだ知識が彼らに何の益をもたらすというのか。社会には、どのような仕事に就いていようとも、それをしっかりと全うする正しい人々が必要です。教師は、授業の内容がしっかりと身についているかだけでなく、敬虔さ、優しさ、勤勉さといった、生徒たちの他の美德や良い面にも目を向けるべきです。神が子供たちに付ける評価は、必ずしも教師が付ける評価と一致するとは限りません。ある人にとっての「2」が、神にとっては「5プラス」であり、ある人にとっての「5プラス」が、神にとっては「2」であることもあるのです。

職業が人を人たらしめるわけではない

— ゲロンダ、仕事に人が不安を感じる場合、その原因は何でしょうか？

— もしかすると、その人は自分の仕事に対して善意を持って接していないのではないのでしょうか？ もし自分の仕事に対して正しい姿勢で臨むならば、どんな仕事であっても、その人にとっては祝日であり、祝祭となるでしょう。

— ゲロンダ、もし人が、重労働や汚い仕事をしていることを理由に落ち込んでしまったらどうでしょうか？ 例えば、建設現場で働いたり、食堂でボイラーを洗ったり、あるいはそれに類する仕事をしている場合です。その人はどのような心構えを持つべきでしょうか？

— もし彼が、キリストが弟子たちの足を洗われたことを思い起こせば、⁷⁴、もう落ち込むことはなくなるだろう。キリストは、あたかも私たちに「あなたたちも同じようにすべきだ」と語りかけるかのように、その行いを行われたのだ。人がどんな仕事をしていても——釜を洗おうが、鍋を磨こうが、土を掘ろうが——喜びを持たなければならない。何しろ、他の仕事が見つからないがゆえに、下水道の掃除をしている人もいるのだ。その可哀想な人は一日中、泥や細菌の中にいる。しかし、彼も人間ではないのか？ 神の御姿ではないのか？ ある一家の主人は下水道の清掃員として働き、高い霊的境地に

⁷³ もちろん、キリスト教徒という身分と相容れない職業は別である。現代ではそうした職業が特に多くなっている——例えば、ギャング、泥棒、不道德を広める者、高利貸し、呪術師、中絶を行う医師、写真モデル、道化師などである。そのような職業は、聖別されるどころか、悔い改めによって癒やされる必要がある。——訳者注

⁷⁴ ヨハネの手紙一 13章4-14節を参照。

達しました。彼は結核にかかりましたが、その仕事を辞めることもできたにもかかわらず、自分の代わりに他の誰かが苦しむことを望まなかったのです。この人は、他者から軽蔑されるような卑しい仕事を愛し、そのために神は彼に恵みを注がれたのです。

職業が人を人たらしめるわけではない。私は、死者を蘇らせた港の荷役作業員を知っていた。私がイヴェルスクのスキートでディケオス⁷⁵を務めていた頃、ある時、55歳ほどの男が私のところへやって来た。夜遅くに到着した彼は、修道士たちを邪魔しなくなかったため、ドアをノックすることなく、路上で寝入ってしまった。スキートの兄弟たちがそれを見つけると、彼を中へ連れ込み、私にそのことを知らせた。「なぜベルを鳴らさなかったのですか？」と私が尋ねると、「そうすれば、私たちが扉を開けて、宿舎の部屋を用意したでしょう」と彼は答えました。「何をおっしゃるのですか、神父様？」と彼は答えました。「どうして私が兄弟たちを煩わせるようなことをできるのでしょうか？」彼の顔に輝きを見て、私は彼が非常に霊的な生活を送っていることを悟りました。その後、その男性は、幼い頃に父を亡くしたため、結婚してからは義父を深く慕っていたと私に話してくれた。仕事が終わると、彼はまず義父と義母の家に立ち寄り、それから自分の家へ帰っていた。しかし、義父がひどく口が悪い人だったため、彼はいつも心を痛めていた。彼は何度も義父に悪口を言うのをやめるよう頼んだが、義父は収まる気配を見せなかった。ある日、義父は重病にかかった。病院に運ばれ、数日後に亡くなった。義父が息を引き取る時、その荷役作業員はそばにいなかった。その時は港で船の荷下ろしをしていたからだ。彼が病院に到着し、義父が亡くなったと告げられると、彼は遺体安置所へ向かい、深い悲しみの中でこう祈り始めた。「神様、どうか彼を蘇らせてください。そうして彼が悔い改めた後、再びお連れください。」すると、その瞬間、亡くなった義父が目を開き、手を動かし始めた。その光景を目にした遺体安置所の職員たちは、恐怖のあまり逃げ出しました。荷役夫は義父を家に連れ帰り、義父は完全に回復しました。その後、彼は悔い改めの生活を送りながら、さらに5年間生き続けました。「父よ」と、その荷役夫は私に語りました。「神様が私にこの恵みを与えてくださったことに感謝しています。私のような者が、どうして神からそのような恵みを受けられるのでしょうか？」この男には素朴さが溢れていた。そして、彼は非常に謙虚で、自分が死者を蘇らせたなどとは、微塵も思い至らなかった。神が自分のためにしてくださったことへの感謝から、彼は文字通り、塵と化してしまったほどだった。

多くの人は、虚しい名声を得られなかったり、虚しい富を築けなかったりすることに苦悩している。彼らは、こうした名声や富のすべてが、あの世——つまり、真の世——では何の役にも立たないということに、思いを巡らせていない。そもそも、それらをあの世、すなわち真の世へと持ち越すことなどできないのだから。

私たちは、この地上において、これから待ち受ける偉大で永遠の旅に向けた「海外渡航用パスポート」を手に入れるために役立つ行いだけを、あの世へと持ち越すことになる。

⁷⁵ディケオス——聖山（スィアゴロス）のスキタにおいて、スキタの住人たちの生活を調整するために、1年間、選出または任命される修道士。——訳者注

第3章。 日常生活における節制について

禁欲によって、人は無形の天使たちのようになる

— ゲロンダ、以前、あなたは私たちにこうおっしゃいました。「霊的な戦いにおいては、[敵]を封じ込める必要がある。」それはどういう意味だったのでしょうか？

— 戦争中、敵を封じ込めようとします。敵を包囲し、城壁の内側に追い込み、飢えさせます。そして、水も断ち切ります。なぜなら、敵が水や食料、弾薬の備蓄を持たなければ、降伏せざるを得なくなるからです。私が言いたいのは、もし私たちが断食や徹夜祈祷といった方法で悪魔と戦うならば、悪魔は武器を捨てて退却するということです。「断食と徹夜祈祷と祈りによって、天の賜物を受けよう……」⁷⁶——と、聖歌作家は歌っています。

苦行や功德によって、人間は非物質的な力に似通った存在となる。もちろん、節制を行う際には、より高い精神的な目的を念頭に置く必要がある。もし人が、健康に有害な脂肪を取り除くために 節制を行うのであれば、その人は[ただ]自分の肉体の利益ばかりを気にかけていることになる。その場合、その人の苦行は、ヨガを実践する人々の苦行に似ている。

残念ながら、禁欲や苦行という問題は、教会に属する人々でさえも後回しにされてしまっています。「まあ、仕方ないさ」と、そうした人々は言います。「だって、食事もすれば、あれやこれやを楽しむ必要もあるだろう……神は私たちのためにすべてを創造してくださったのだから。」私たちを祝うために開かれた昼食会で、あるアルヒマンドリットが私に何と言ったか、ご存知ですか？ 私が普段より多く食べる気になれないことに気づいたそのアルヒマンドリットは、こう言いました。「もし誰かが神の神殿を損なうなら、神はその者を損なうであろう！」⁷⁷ 「ところで、もしかして——」と私は彼に尋ねました。「何か勘違いしていませんか？ この聖書の箇所は、一体何を指しているのですか？ 禁欲についてか、それとも淫らで放蕩な生活についてか？」聖書が指しているのは、淫行や放蕩によって[自らの体という]神の神殿を貶め、すなわち破壊する者たちのことだ。聖書は、キリストへの愛から禁欲を実践する者たちを指しているわけではない。」ところが彼は、ご覧の通り、自分の考えをなだめながらこう言った。「私たちはきちんと食べなければならない。そうしてこそ、[禁欲によって]神の宮[——自分の体]を『墮落』させないためだ！」また、ある人が修道院を訪れた際、私に次のような感想を語ってくれました。「私はある修道院に行きましたが、そこで修道士たちは断食をしすぎて病気になっていました。油の入った皮袋は全く手つかずのままでした。父よ、断食と徹夜祈祷とは、なんとひどい結果を招くことでしょうか！」これに対して、何と云えようか。そのような人々は、何も犠牲にしたいくないのだ。彼らは自分の昼食も、果物も、ケーキも平らげておきながら、その後、自分を正当化しようと、禁欲的な修行に励む人々を非難し始める。そのような人々は、禁欲や節制がもたらす霊的な喜びを[一度も]味わったことがないのだ。「私はこれだけのコップの牛乳を飲まなければならない」と、そのような性質の人間は言う。「いや、断食中はもちろん控えるつもりだ。しかしそ

⁷⁶ 聖人への共通トロパリオより：「荒野の住人、肉体のうちにあってなお天使……」

⁷⁷ コリントの信徒への手紙一 3章17節。

の後、断食中に私の体が奪われた分、足りない牛乳を補うつもりだ！　だって、私はこれだけのタンパク質を摂取しなければならないのだから。」そして、問題は彼の体が本当にタンパク質を必要としているかどうかではない。　いいえ、彼は[その牛乳を飲む]権利があると主張し、自分には何の問題もないこと、それが罪ではないことを自分に言い聞かせて、その考えをなだめているのです。しかし、たとえ人が単にそのような考えを抱くだけでも、それはすでに罪となります。人間の論理とは、いったいどこまで行き着くのでしょうか！　人は、教会が定めた断食を[なんとか]守りつつも、その断食の間に失ったものを手放すことなく済ませようとする。えーと、そんな[人間の中に]、聖霊がどうして留まっていられるというのか？

さて、ある既婚者たちがどれほど貪欲であるか、見てごらん！　ある時、9人の子供を持つごく平凡な男が告解に訪れ、司祭は彼に聖体拝領を許可した。「ああ、神父様」と彼は答えた。「私が聖体拝領なんてできるわけがありません！　だって、私たちはバターを添えて食事をしているんですから。　だって、僕は働いているし、子供たちも働いているんです。」「子供は何人いるのですか？」と司祭が尋ねた。「九人です。」「食事に油をどれくらい加えていますか？」——「植物油をスプーン二杯です。」「それじゃ、君に回ってくる油なんて、ほんのわずかじゃないか、かわいそうな人よ！」と司祭は叫んだ。「さあ、行って聖体拝領しなさい！」11人家族で、植物油はたったの2スプーン。それなのに、彼はなおも罪悪感に苛まれていたのだ！

私は、自ら実践した苦行によって聖化された信徒たちを知っていました。　つい数年前、聖山で一人の信徒が息子と共に働いていた。彼らはアトス山で長い間働いた。その後、故郷で良い仕事が見つかり、父親は家族全員と一緒に暮らせるよう、子供を連れて聖山を去ることを決めた。　しかし、息子は修道士たちの禁欲的な生活に心を動かされ、世俗の生活における心の不安を思い出し、戻ることを拒んだ。「父さん、あなたには他にも子供たちがいるでしょう。一人だけでも、至聖なる聖母の園に残しておいてください」と彼は言った。　彼は父の説得に耳を貸さず、父は彼を聖山に残さざるを得なかった。この青年は読み書きができなかったが、非常に感受性が豊かで、愛に満ち、素朴な人柄だった。彼は、修道規則などを守ることは自分には無理だと考えていたため、修道の剃髪を受けるには全くふさわしくないと感じていた。　そこで彼は、かつて荷役動物の馬小屋として使われていたごく小さなカリヴァを見つけ、ドアと窓を石やシダの枝で塞ぎ、住居に出入りするための小さな丸い隙間——穴——だけを残した。　内部からは、どこかで拾った古くて破れたコートをその穴に被せて塞いでいた。彼は火さえも灯さなかった。鳥の巣でさえ、彼の「巣」よりも良い住まいであり、獣の巣穴でさえ、彼が住んでいたその家よりも良い住まいだった。　しかし、この魂が感じていた喜びは、豊かな宮殿に住む者たちでさえも味わうことはできない。なぜなら、この人はキリストのために奮闘しており、キリストは彼のそばにいたからだ——彼の小屋の中だけでなく、彼の霊的な家、すなわち彼の体や心の中にも。それゆえ、彼は楽園に暮らしていたのだ。　時折、彼は自分の隠れ家から出て、兄弟たちが菜園で作業をしている修道院の部屋へと向かった。彼は兄弟たちの労働を手伝い、その見返りとして少量の乾パンとオリーブをもらった。もし作業をさせてもらえなければ、乾パンもオリーブも受け取らなかった。　彼が受けた祝福に対して、彼は自分の労働で二倍の代償を払うことが必要だと考えていた。もちろん、彼の霊的生活を知っていたのは唯一の神だけであった。なぜなら、彼は人知れず、質素に、ひっそりと暮らしていたからだ。しかし、後に知られるようになったある出来事から、多くのことがうかがえる。　ある日、彼はある修道院に立ち寄り、大斎期が

いつ始まるのかと尋ねた。とはいえ、この男にとって大齋期はほぼ一年中続いていたのだが。その後、彼は自分の「隠れ家」に戻り、内側から扉を閉ざした。3ヶ月近くが過ぎたが、彼はそれにさえ気づかなかった。ある日、彼は自分のカリヴァから出て、ある修道院へ向かい、復活祭がもうすぐかどうか尋ねた。彼は礼拝に立ち会い、聖体礼儀で聖体を受け、その後、修道士たちと共に食事の席についた。食卓で、彼は赤い卵を見た。その日は復活祭の「オッドアニエ」の日だった。⁷⁸ 彼は驚き、ある修道士に尋ねた。「ねえ、まさかもう復活祭なのか?」「復活祭なんてとんでもない」と相手は答えた。「明日ですでに昇天祭だぞ!」つまり、この男は四旬節の間ずっと断食し、さらに昇天祭までの40日間も断食を続けていたのだ! このようにして、彼は最期の瞬間まで修行に励んでいた。彼が亡くなってから2ヶ月後、ある猟師が彼を発見し、その出来事を警察と医師に報告した。「彼からは死臭がしなかったばかりか、——医師が私に語ったところによると——それどころか、その遺体からは芳しい香りが漂っていたそうだ。」

子どもの断食

— ゲロンダ、5～6歳の子供たちは聖体拝領の前に断食すべきでしょうか?

— 少なくとも、聖体拝領を行う前日の夕方には、油を使った断食食を食べさせる必要があります。しかし、この問題は担当の司祭の判断に委ねられています。子供には健康上の問題があり、例えば牛乳を飲む必要がある場合もあるため、母親が担当の司祭に、子供にどのように断食をさせるべきか尋ねるのが良いでしょう。

— ゲロンダ、小さな子供はどれくらい断食すべきでしょうか?

— 子供が丈夫で健康であれば、断食をしても問題ありません。それに、今では断食用の食品が数多く販売されています。昔は、子供たちも断食をしながら、一日中走り回って遊んでいました。ファラサでは、大齋の間、子供も大人も皆、午前9時まで断食していました。⁷⁹ 親たちは子供たちを要塞に集め、遊べるようおもちゃを残しておき、午後3時、教会の鐘が「聖体礼儀」を告げる頃になると、教会へ行き、聖体拝領をしていました。聖アルセニオス・カッパドキアスはこう語った。「子供たちは、一日中遊んでいると、食事のことなど全く気にも留めない。それなのに、断食の期間にはキリストさえも彼らを助けてくれているというのに、果たして今、断食に耐えられないというのだろうか?」

また、断食をしていない大人たちも、子供たちが断食している姿を見ると、良心の呵責に苛まれるようになります。私が幼い頃、師匠と同じ家で働いていたことを覚えています。そこで昼食もとっていました。水曜日と金曜日には、昼食をとらずにその場を離れ、実家に帰って食事をとっていました。なぜなら、その人たちは断食をしていなかったからです。ある水曜日のことだったと記憶しているが、彼らがケーキを持ってきて、私に食べさせようとした。「ありがとう」と私は言った。「でも、僕は断食しているんだ。」「まあ、見てごらん」と彼らは驚いた。「この少年は断食しているのに、僕たち大人の男たちは何でもかんでも食べているんだ。」

⁷⁸ 復活祭の39日目。この日、教会で「キリストは復活された」やその他の復活祭の聖歌が最後に歌われる日である。
——訳者注

⁷⁹ すなわち、午後3時——ビザンティン時間では9時——までは何も食わず、飲まなかった。

好奇心あふれる投稿

人は断食を通じて自らの意志を示す。愛から、人は偉業や苦行に取り組み、神はそれを助けてくださる。しかし、もし人が無理に自分を追い込み、「どうしようもない。また金曜日が来た——断食しなきゃ」と言うなら、彼は自分を苦しめていることになる。しかし、[断食の]真意を理解し、キリストへの愛から断食を行うならば、彼は喜びを感じるだろう。「この日——」と、そのような人は考えるだろう。「キリストは十字架にかけられた。キリストには水さえ飲ませてもらえず、酢を飲まされた。⁸⁰ だから私も今日は一日中、水を飲まない。」そうすることで、人は、最高級の清涼飲料を飲む人よりも大きな喜びを自分の中に感じるだろう。

そして見てごらん、多くの世俗的な人々は、聖金曜日の断食に耐えられない。ところが、どこかの省庁の向かい側の歩道では、何かを勝ち取るために——頑固さやしつこさから——抗議のハンガーストライキを宣言して座り込むことができる。そのための力を、悪魔が彼らに与えているのだ。彼らのやっていることは、自殺に等しい。一方、イースターが訪れると、他の人々は「キリストは復活された」と喜びながら大声で歌い、その一方で、これからいかに美味しく食事ができるかを考えている。そのような人々は、荒野でキリストに食事を与えられたからといって、キリストを王にしようとしたユダヤ人たちに似ている。⁸¹

ところで、預言者がこう言っていることを覚えていますか？「主の御業を怠慢に行う者は呪われる。」⁸² 断食に対する善意はあるものの、食べないと足が震えたり、倒れてしまったりするなどして断食ができないという場合は別ですが。

つまり、その人の体力や健康状態が、断食を行うのに適していないということだ。しかし、体力があるにもかかわらず断食をしないのはまた別の話である。そこに、どうして善意を見いだせるだろうか？しかし、断食したいのにそれができないという人の動揺や悲しみは、多くの善行に匹敵し、その人自身は、体力があり断食を実践している人よりも大きな報いを受けるのです。というのも、体力があり断食を実践している人は、ある種の満足感も感じているからです。今日、ある不幸な55歳の女性が訪ねてきた。彼女は断食ができないと泣き崩れていた。夫とは離婚していた。一人いた子供は事故に遭って亡くなり、彼女は一人きりになってしまった。母親も亡くなっており、住む家も食べるパンもない。知人のうち、ある時はこの女性をある人の家に、またある時は別の人の家に預かり、そこで彼女は何かしらの仕事をしている。「神父様、私の良心には重い負担がのしかかっています」と、その不幸な女性は私に言った。「私は何もしていないからです。そして何より辛いのは、断食ができないことです。与えられるものを食べるしかありません。時々、水曜日や金曜日には断食用の食事が出ますが、多くの場合は肉料理が出ます。そして、食べなければ体力が尽きて立ち上がれなくなってしまうので、仕方なく肉料理を食べざるを得ないのです。」「食べなさい」と私は彼女に言いました。「あなたには体力がありませんから。」人は自分自身を律しなければなりません。もし力が足りないと感じたら、もっとたくさん食べるべきだ。「自分なりの節度を見極めなさい」と、聖ニール・断食者は言っている。⁸³

⁸⁰ マタイ27:34、マルコ15:36、ルカ23:36、ヨハネ19:29を参照。

⁸¹ ヨハネ6:5-15を参照。

⁸² エレミヤ書48章10節。

⁸³ 『シナイの聖ニコス師の著作集』（モスクワ、2000年、130頁）を参照。

— ゲロンダ、昔、村の女性たちの中には、清めの月曜日から聖フェオドロス・ティロンの土曜日まで何も食べなかった人がいたそうですが、⁸⁴ 家事をこなし、家事や子育て、家畜の世話、菜園の手入れなど、あれほど多くの仕事がある中で、彼女たちはどうやってそんな断食を乗り切れたのでしょうか？

— これらの女性たちは心の中でこう考えていた。「もし私たちが本当に断食をするなら、聖土曜日までは何も食べてはいけないはずだ」。まあいいや、と彼女たちは思った。せめて第一週の土曜日までは断食しよう——その土曜日はもうすぐ来るのだから。あるいは、もしかすると彼女たちはこう考えていたのかもしれない。「キリストは四十日間断食された。⁸⁵ それなら、私だってたった一週間くらい断食できないはずがない。」さらに、これらの女性たちは純朴さを備えていたため、そのような断食に耐えることができたのだ。人に純朴さと謙虚さがあれば、神の恵みを受け入れ、謙虚に断食し、神聖な糧を摂ることができる。そうすれば、その人は神聖な力を持ち、長期の断食の際にも大きな「持久力の蓄え」を持つことになる。オーストラリアでは、ある二十七歳の青年が、二十八日間何も食べずに過ごすことができるほどになった。彼の告解司祭が、そのことを私に話してもらうために彼を私のところへ送ってきた。この青年は非常に敬虔で、修道的な精神を持っていた。彼は告解をし、教会に通い、教父たちの書物を読み、とりわけ新約聖書を熱心に読んでいた。ある日、福音書の中でキリストが40日間断食されたという箇所を読んだとき、青年は心を打たれ、こう考えた。「主は、神であり、人間としては罪なき方であるにもかかわらず、40日間断食されたのだから、⁸⁶ 私のような大罪人である私は、一体どうすればよいのだろうか？」そこで彼は、断食の許可を霊的指導者に求めたが、その際、40日間は一切何も食べず、飲まずに過ごしたいという自分の考えを、指導者に打ち明けることなど微塵も考えていなかった。こうして、彼は四旬節の第一週の月曜日から断食を始め、十字架礼拝の週まで、水さえ口にせず断食を続けた。彼は工場で働いており、その仕事は過酷だった——箱を積み重ねて倉庫に収納する作業だった。断食の28日目、彼は仕事中に軽いめまいを感じ、そのためしばらく腰を下ろした。その後、お茶を少し飲み、小さなクラッカーを一つ食べた。もし倒れて病院に運ばれたら、そこで断食のせいで体力が尽きたと悟られ、「ほら、このキリスト教徒たちは断食で死んでしまうんだ」と言われるだろう、と彼は考えた。「ゲロンダ、」と彼は私に言った。「これほど長く断食を続けたせいで、食べ物に嫌気がさしています。しかし、そうしなければ仕事ができないので、無理に何かを食べているのです。」しかし、この青年は、自分が始めた四十日間の断食を完遂できなかったという思いに悩まされており、その思いを霊的指導者に打ち明けた。霊的指導者は理路整然とこう答えた。「あなたが断食した日数だけでも十分だったのです。そんな思いで自分を苦しめないでください。」その後、霊的指導者は彼を私のところへ送ってきた。もしそれでも彼を苦しめる思いが残っているなら、私がそれを追い払う手助けをするためだった。その若者の動機が純粹であることを確かめたくて、私は彼に尋ねた。「君は、40日間断食するという誓いを立てたのか？」「いいえ」と彼は答えた。「告解司祭から断食の祝福を受けた際、40日間何も食べず飲まないという自分の思いを彼に打ち明けることを単に考えなかったのか、それとも、自らの意志で40日間断食を行うために、この——一見善意に見え

⁸⁴ すなわち、5日間、飲食を絶った。

⁸⁵ マタイ4:2およびルカ4:2を参照。

⁸⁶ 同上。

る——思いを意図的に彼から隠したのか？」と、私は再び尋ねた。「いいえ、神父様」と、彼は再び答えた。そこで私は言った。「もちろん、私もあなたの気持ちは理解していた。しかし、私がこのことを尋ねたのは、あなたが断食した日数に対して天の報いがあるということ、あなた自身に理解してもらうためだった。その日数は十分だった。そして、四十日間の断食をやり遂げられなかったという考えで自分を苦しめないでください。ただし、次回、あなたが抱えている善意や、心に秘めている善きことを、霊的指導者に話してください。そして、霊的指導者が、あなたにそのような修行やそれに類することを引き受ける必要があるかどうかを判断するでしょう。」この青年は、自ら育んできた謙遜な思いのおかげで、多くの謙遜さを備えていました。そして、彼はキリストへの（愛）のために、多くの愛をもってこの断食に取り組みました。そして当然のことながら、キリストは御自身の神聖な恵みによって彼を強めてくださいました。しかし、もし[そのような謙虚さを持ち合わせておらず]、「他人ができたのなら、なぜ私にもできないのか」と利己的に語る誰かが、このような断食をしようとしたとしたら——その人はせいぜい一、二日しか断食を続けられず、その後は挫折してしまうだろう。そして、神の恵みが彼から離れるため、彼の心も曇ってしまうだろう。そのような人は、かろうじて耐え抜いたその断食に費やした努力さえも、無駄だったと後悔するようになるだろう。さらには、「この断食で、私に何があったというのか？」とまで言うようになるかもしれない。

断食によって、人は子羊へと変容する。もし人が獣へと変貌してしまうなら、それは二つのうちのいずれかを意味する。すなわち、取り組んだ苦行がその人の力量を超えているか、あるいは利己心から苦行に励んでいるため、神の助けを得られていないかのどちらかである。野生の動物でさえ、断食によって時に飼いならされ、謙虚になることがある。考えてみてほしい。動物は空腹になると、人間に近づいてくるものだ。動物は本能的に、空腹のままだと死んでしまうことを理解しており、人間に近づけば餌を見つけ、生き延びることができるを知っているのだ。かつて私は、空腹のあまり子羊のようになってしまった狼を目撃したことがある。冬、大雪が降った時、そのオオカミは山から下りてきて、私たちの庭に入ってきた。兄と私は家畜に餌をやるために外に出ていて、私は手にランプを持っていた。オオカミを見ると、兄は火ばさみを掴んでそれを叩き始めた。しかし、オオカミはそれに対して全く反応しなかった。

もし人が、神への愛や、隣人である同胞への愛から行動する段階に至らないならば、その人は自分の力を無駄に浪費していることになる。もし断食をしながらも、「自分は重要なことをしている」という高慢な思いを抱いているなら、その断食はすべて無駄になってしまう。そうして、そのような人は、何も留めておけない穴の開いたバケツのようになってしまう。穴の開いたバケツに水を注いでみてほしい——水はゆっくりとすべて漏れ出てしまうだろう。

お腹がすっきりする喜び

節制を怠ると、人は体内に[脂肪]を大量に蓄えてしまう。しかし、節制して必要な分だけを食べれば、体は摂取したものを燃焼させ、体内に蓄積されることはない。

料理の多様性は胃を拡張させ、食欲をそそりますが、それだけでなく、人をだらしなくし、肉体の熱を帯びさせる原因にもなります。食事で出される料理がたった一品だけで、しかもあまり美味しくない場合、人はそれを食べきれないかもしれないし、ある

いは、もし美味しくて食欲に夢中になってしまえば、少し多めに食べてしまうかもしれない。しかし、目の前に魚、スープ、ジャガイモ、チーズ、卵、サラダ、果物、そしてお菓子があると、それらをすべて食べたくなくなるだけでなく、おかわりまで求めてしまう。食欲は次から次へと湧き上がり、あるものを食べると、隣にある別のものも食べなくなるのだ。考えてみてほしい。人間は、身近な人からかけられるたった一言さえも耐えられない。あれも消化できない、これも消化できない……それなのに、かわいそうな胃は、私たちが放り込むものすべてに耐え、受け入れている。それなのに、私たちは胃に「これを消化できるか？」と尋ねてしまうのだ。つまり、理性を持たない胃は、徳において私たちを上回っているのです！ 胃は、すべてを消化しようと努力しているのです！ もし私たちが食べたある食べ物が別の食べ物と相性が悪ければ、胃の中に入ると、それらは互いに「喧嘩」を始めます。そうなると、胃にはどうすればいいのでしょうか？ 胃は消化不良を起こしてしまうのです。

—ゲロンダ、たくさん食べてしまう癖はどうやって断ち切れればよいのでしょうか？

— 少し自分を抑える必要がある。食欲を刺激しないよう、好きなものを食べ過ぎないこと。そうしないと、少しずつ、少しずつ、腹がどんどん大きくなっていくからだ。そうすると、アッバ・マカリオが言うように、胃という邪悪な「徴税人」が、絶えず「もっと、もっと」とせがんでくるのだ。何かを味わうと快楽を得るが、その後眠くなってしまい、仕事さえできなくなってしまう。一方、一種類の食べ物だけを食べれば、食欲を抑えるのに役立つ。

— ゲロンダ、もし食卓に様々な料理が並んでいても、量が少なければ、人は同じ困難に直面するのでしょうか？

— ええと、困難は同じです。ただ、政党の派閥が小さいため、政府を樹立できないだけです。料理の種類が豊富にあるというのは、まるで胃の中にたくさんの政党が集まっているようなものです。ある政党が別の政党を苛立たせ、互いに絡み合い、争い始めると——胃もたれが始まってしまうのです…

控えめな食事から得られる喜びは、最も美味しい料理がもたらす喜びよりも大きい。子供の頃、私は森へ出かけては、一日中ベーグルをほんのひと切れしか食べなかった。ああ、そう、私は他に何も欲しくなかったのだ！ 最も美味しい料理でさえ、私が感じていたあの精神的な喜びに代わることはできなかった。しかし、私はそれを喜んでやっていた。ところが、多くの人々は、胃が軽やかな喜びを一度も味わったことがない。最初は美味しいものを食べて喜びを感じるが、やがて食欲が暴走し、過食に陥り、たくさん食べてしまい——特に高齢になると——胃もたれを感じるようになる。そうして彼らは、胃が軽やかな喜びを自ら奪ってしまうのだ。

第5部。

人生における試練について

「甘い楽園へ行くためには、この人生で多くの苦味を味わい、試練を乗り越えた後にパスポートを手に入れなければならない」

第1章。 「火と水をくぐり抜けて……」⁸⁷

試練の十字架

— ゲロンダ、私はあなたが祝福してくださった十字架を常に身につけています。この十字架は、困難な時に私を支えてくれます。

— ねえ、私たち一人ひとりの十字架って、実は小さな十字架のようなものなんだ。それは、私たちが首にかけていて、人生の中で私たちを守ってくれる小さな十字架に似ている。まさか、私たちが何か偉大な十字架を背負っているなんて思ってるの？ キリストの十字架だけが非常に重かったのです。なぜなら、キリストは私たち人間への愛ゆえに、ご自身の神聖な力をご自身のために用いることを望まなかったからです。そして、十字架刑の後、キリストは一人ひとりの人の十字架の重荷を背負い、今も背負い、これからも背負い続け、その神聖な助けと優しい慰めによって、試練の痛みから私たちを和らげてくださるのです。

慈愛に満ちた神は、各人の力に応じて十字架をお与えになります。神が人に十字架をお与えになるのは、その人が苦しむためではなく、十字架から天へと昇るためなのです。何しろ、本質的に十字架とは天への梯子なのですから。試練の痛みを耐え忍びながら、私たちが[天の]宝庫にどのような富を蓄えているかを理解すれば、不平を言うことはなく、神が私たちに授けてくださったその小さな十字架を背負いながら、神を賛美するようになるでしょう。そうすることで、私たちはすでにこの世で喜びを得ることができ、来世では、[霊的な]「年金」と「一時金」の両方を受け取ることになるでしょう。天国では、神が私たちのために用意してくださった所有地と分け前が保証されています。しかし、もし私たちが神に試練を取り除いてくださるよう願うならば、神はそれらの所有地や分与を他の人々に与え、私たちはそれらを失うことになります。もし私たちが耐え忍ぶならば、神はさらに霊的な利息も与えてくださるでしょう。

ここで苦しんでいる人は幸いである。なぜなら、この世で苦しめば苦しむほど、来世においてより大きな益を得るからである。これは、その人が自らの罪の代償を払っているからである。試練という十字架は、神が私たちに授けてくださる才能や賜物よりも尊いものです。一つの十字架ではなく、五つの十字架を持つ人は幸いである。苦しみや殉教の死は、清らかな報いをもたらします。ですから、あらゆる試練において、こう言いましょう。「わが神よ、感謝します。これは私の救いのために必要だったからです。」

試練は、人が立ち直る助けとなる

— ゲロンダ、私の身内の苦しみが一向に終わらないという知らせを受けました。彼らの悲しみには、いつか終わりが来るのでしょうか？

— 耐え忍びなさい、姉妹よ。そして、神への希望を失わないでください。あなたの家族を襲った数々の試練を見れば、神があなた方を愛しておられ、家族全員が霊的に清

⁸⁷ 詩篇65篇12節。

められるために試練を許しておられることがわかります。もし、あなたの家族を襲った試練を世俗的な視点で見れば、あなた方は不幸に見えるでしょう。しかし、霊的な視点でそれらを見つめれば、あなたがたは幸せであり、来世では、この世で幸せだと見なされている者たちから羨ましがられることになるでしょう。これらすべての試練に耐えることで、あなたの両親は、いわば「修業」に励んでいるのです。なぜなら、彼らには、もう一つの——高貴で霊的な「修業」のあり方 [すなわち、自らの意志による修行]。しかし、何と言っても、あなたの家族や他のいくつかの家族を襲った試練の中には、何らかの秘密が隠されているのです。だって、あなたの家族のために、これほど多くの祈りが捧げられているのですから！ 誰が神の裁きを知り得ましょうか。どうか神が御手を伸ばし、この試練に終止符を打たれますように。

— ゲロンダ、人々が悲しみや試練を経ずに、別の方法で自分を取り戻すことはできないのでしょうか？

— 試練を許すたびに、神はまず優しく[人を正そうと]試みておられました。しかし、人々は神の意図を理解しなかったため、神は試練を許されたのです。考えてみてください。不従順な子供が父親の言うことを聞かない場合、最初は父親が優しく諭そうとし、子供がやりたいことを許します。しかし、子供が改めないなら、父親は子供を正すために、優しさから厳しさへと態度を変えます。神も同様です。時には、人が優しい言葉では理解しない場合、その人が正気に戻るよう、試練を与えます。もし人々が少しの痛みや病気などを経験しなければ、彼らは獣と化してしまい、神に全く近づくなくなってしまおうでしょう。

この人生は虚しく、短い。しかし、短いのは良いことだ。なぜなら、苦い薬のように私たちの魂を癒やすあの苦い悲しみは、すぐに過ぎ去るからだ。考えてみてほしい。医師も、患者が苦しんでいる時には苦い薬を処方する。なぜなら、患者は甘いものではなく、苦いものによって癒やされるからだ。私が言いたいのは、苦いものは身体の健康と魂の救いの両方を伴う、ということだ。

私たちが苦しんでいるとき、キリストが私たちを訪ねてくださるのです

試練を経験せず、痛みを味わいたくなく、悲しみに耐えたくなく、落胆させられたり注意されたりすることを望まず、ただ気楽に過ごそうとする人は、現実からかけ離れている。「我らは火と水の中を通り抜け、あなたは我らを安息へと導かれた」⁸⁸ ——と、詩篇の作者は語っている。

考えてみてください。私たちの主である至聖なる聖母マリアも苦しみを感じられましたし、私たちの教会の聖人たちもまた苦しみを感じました。ですから、私たちもまた苦しみを感じなければならないのです。何しろ、私たちは彼らと同じ道を歩んでいるのです。ただ、この世でわずかな苦しみや悲しみを味わうことで、私たちは[自らの罪の]負債を清算し、救いに至るという点だけが異なるのです。しかし、キリストもまた、痛みを伴ってこの地上に来られました。キリストは天から降りてこられ、受肉し、苦しみを受け、十字架の刑に処されました。そして今、キリスト教徒は、まさにこの痛みを通して、キリストが自分のもとを訪ねてくださることを理解しているのです。

人が苦しみを受ける時——その時こそ、キリストがその人を訪ねておられるのです。しかし、人が何の苦しみも味わわない時——それはまるで、神がその人を見捨てたか

⁸⁸ 詩編65篇12節。

のようです。そのような人は、罪の代償を支払うこともなければ、霊的な蓄えを積むこともありません。もちろん、私が言っているのは、キリストへの愛のために自ら苦しむことを望まない人のことです。「私は元気だ」と、そのような人は言う。「食欲も旺盛だ。思う存分食べて、のんびりと平穩に暮らしている。」そして、そのような人は、その一方で「神よ、あなたに栄光あれ！」とは口にしない。もし彼が、少なくとも神が与えてくださるすべての祝福を「感謝の念を持って」認めていれば、まだましだっただろう。「私はこれを受けるに値しない」——そう、そのような人には言うべきでしょう。「しかし、私が弱いゆえに、神は私に寛大に接してくださるのです。」聖アンブロシウスの伝記には、ある時、聖人とその同行者たちが、ある金持ちの家には一夜の宿を借りたという話が記されている。そこで数え切れないほどの富を目にした聖アンブロシウスは、この男が人生で一度でも悲しみを味わったことがあるかと尋ねた。「いいえ、一度もありません」と金持ちは答えた。「私の富は絶えず増え続け、畑は豊かな実りを結び、私は何の痛みも感じず、病気とは何かさえ知りません。」すると聖アンブロシウスは涙を流し、同行者たちにこう言いました。「荷車を用意し、一刻も早くここを離れましょう。この人には、神が一度も訪れていないからです！」そして、聖人とその一行が通りに出た途端、金持ちの家は崩れ落ちた！この男が送っていた、心配事や悲しみとは無縁のあの平穩な生活は、実は神に見捨てられていたのだ。⁸⁹

「主は愛する者を懲らしめられる……」⁹⁰

— ゲロンダ、なぜ今日、人々はこれほど多くの苦しみを味わっているのでしょうか？

— 神の愛によるものです。あなたは修道女として、早朝に起き、修道規則を遵守し、数珠を数えながら祈り、礼拝を行うなどしています。世俗の人々にとって、彼らが経験する困難こそが、彼らの規則であり、規範なのです。こうした困難や苦しみを通じて、人々は清められていくのです。これらの苦しみは、神に近づくことも、天の口座に霊的な貯蓄を積み立てることもできない、世俗の気楽な生活よりも、はるかに大きな益をもたらします。だからこそ、人々は苦難や誘惑を、神からの贈り物として受け入れるべきなのです。

慈愛に満ちた神は、御自身の子供たちが御自身のもとに戻ってくることを願って、慈愛に満ちた父として試練を通じて彼らを育てられます。神がそうされるのは、愛と神聖な慈愛からであり、悪意や世俗的な律法主義的な正義からではありません。つまり、御自身の被造物を救い、彼らに御自身の天の御国を相続させたいと願って、神は彼らに試練を許されるのです。神が試練を許されるのは、人が闘いを挑み、偉業を成し遂げ、苦痛の中で忍耐の試練に合格するようにするためであり、そうすることで、悪魔がこう言えないようにするためです。「なぜ彼に報いを与えるのか、あるいはどうやって彼を救うのか？ 彼は何の労苦もしていないではないか。」神は地上の生活には関心がなく、来世の生活にこそ関心をお持ちです。何よりもまず、神は私たちの来世を気遣い、その次に地上の生活を気遣われるのです。

— ゲロンダ、しかし、なぜ神は、ある人々には多くの試練を与え、他の人々には全く与えないのでしょうか？

⁸⁹ 『正教会の大聖人暦』第12巻、243～244ページを参照。

⁹⁰ 箴言 3:12。

— 聖書には何と書かれていますか？「主は愛する者を懲らしめられる……」⁹¹ 例えば、ある父親には8人の子供がいます。そのうち5人は父親と一緒に家に住んでいます。3人は家を出て、父親のことを忘れてしまいます。父親と一緒に住んでいる子供たちが何か悪いことをすれば、父親は彼らの耳を引っ張ったり、頭をポンと叩いたりするかもしれません。あるいは、彼らが分別があれば、優しく抱きしめたり、チョコレートをあげたりするでしょう。しかし、父から離れて暮らしている子供たちは、愛情も、頭をはたかれることもありません。神も同様に振る舞われます。神と共に暮らす人々や、神に好意を抱いている人々が過ちを犯したとき、神は「頭をはたいて」罰し、彼らは自分の罪の代償を払うことになります。あるいは、もし神が彼らにさらに多くの「お仕置き」を与えるならば、彼らは天の報いを蓄えることになる。そして、神から遠く離れて暮らす者たちには、悔い改めるための長い寿命が与えられる。それゆえ、世俗的な人々が重大な罪を犯しているにもかかわらず、物質的な恵みに満ち溢れ、苦しみを知らずに長生きしているのを目にするのです。これは神の摂理によるものであり、そうした人々が悔い改めるためなのです。もし彼らが悔い改めなければ、来世において弁明の余地はなくなるでしょう。

神は、人々が味わっている苦しみを見て心を痛めている

人々はなんと大きな苦しみを味わっていることか！ どれほど多くの問題を抱えていることか！ 中には、2分ほど立ち止まって、自分の苦しみを私に話し、少しの慰めを得ようとしてここに来る人もいます。ある疲れ果てた母親が私にこう言いました。「ゲロンダ、もう耐えられないという瞬間があります。そんな時、私はこう祈ります。『私のキリストよ、少しの間だけ休ませて、それからまた苦しみが訪れてもいいから』と。」人々はどれほど祈りを必要としていることか！ しかし、それだけでなく、あらゆる試練は神からの賜物でもあるのです。それは、来世へと進むための、もう一つの「加点」なのです。この来世における報いへの希望が、私に喜びと慰めと力を与えてくれるので、私は多くの人々を苦しめているその悲しみによる痛みにも耐えることができるのです。

私たちの神はバアルではなく、愛の神です。神は、さまざまな誘惑や試練に苛まれる御子たちの苦しみを御覧になる父です。そして、私たちに降りかかったこの試練——いや、むしろ私たちに与えられた祝福——というささやかな苦難を耐え忍ぶならば、神は私たちに報いてくださるのです。

— ゲロンダ、ある人々はこう尋ねます。「しかし、神が許されたことは残酷ではないのでしょうか？ 神も心を痛めておられるのではないのでしょうか？」

— 病気や悪霊、野蛮人などに苦しむ人々のために神が抱く痛みには、神が彼らのために用意された天の報いに対する喜びも込められている。つまり、神は、試練に直面している人が天国で受ける報いを念頭に置いているのである。神は、そのような人が来世で何を待ち受けているかを知っておられ、それこそが神にこの痛みを「耐え忍ぶ力」を与えているのです。何しろ、神はヘロデがこれほど多くの罪を犯すことを許されたのですから！⁹² ヘロデは、兵士たちに自分の子供を殺させまいとした多くの親たちとともに、一万四千人の乳児を虐殺したのだ！ 何しろ、それらの親たちもまた殺されたのである。野蛮な兵士たちは、上司に気に入られようと、乳児たちを細かく切り刻んだ。そし

⁹¹ 箴言 3:12。

⁹² マタイによる福音書 2章16節を参照。

て、これらの乳児たちが大きな苦しみを受けるほど、神もまた大きな痛みを感じられた。しかし、それと同じくらい大きな喜びも感じていたのです。神は、彼らが天国で受けようとしていたあの至高の栄光を喜び、天使の殉教者の列に加わることになるこれらの小さな天使たちを喜ばれたのです。殉教者たちからなる天使たち！

悲しみの時、神は人々に真の慰めを与えてくださる

神は私たちのそばにいて、御自身の子供たちの苦しみを見守り、慈愛に満ちた父として私たちに慰めてくださいます。さて、あなたは どう思いますか。まさか神は、御自身の子供が苦しむ姿を見たいと願っておられるのでしょうか。神は、その人のすべての苦しみ、すべての涙を心に留め、やがてそれに見合う報いを与えてくださいます。苦しみの中で真の慰めを与えてくださる方は、神だけなのです。それゆえ、真の命を信じず、神を信じず、魂を苛む試練の中で神の憐れみを求めない人は、完全な絶望の中に留まることになります。そのような人の人生には意味がありません。その人はこの世において常に無力であり、慰められず、苦しめられ続けるだけでなく、さらにその魂を永遠に裁くことになってしまうのです。

しかし、霊的な人々には、自分自身の悲しみなどありません。なぜなら、彼らに降りかかるあらゆる試練を、キリストの御許に身を置いて乗り越えるからです。そのような人々は、他者の悲しみから多くの苦しみを受け止めますが、同時に、神の多くの愛も受け止めているのです。私が「全聖なる御母よ、人を介した執り成しを私に信じさせないでください」と歌うとき、時折、「……しかし、あなたのしもべの祈りをお受けください……」という言葉で立ち止まることがあります。もし私に悲しみがないなら、どうして「……『悲しみは私を締め付け、耐えられない……』』という言葉、どうして口にできるだろうか？」⁹³ どうして嘘を言えるだろうか？ 試練に対する霊的な態度において、悲しみなどない。なぜなら、人が正しく、霊的に自分自身を位置づければ、すべてが変わるからだ。もし人が、その痛みの苦しみをもって甘きイエスに触れれば、そのすべての苦しみと苦難は蜜へと変わるのだ。

霊的生活の神秘と、神が働かれるその神秘的な方法を悟った人は、自分に起こる出来事によって動揺することをやめる。その人は、魂の健康のために神が与えてくださる苦い薬を喜んで受け入れる。そのような人は、自分に起こるすべてのことを、自分の祈りの結果だと考える。なぜなら、彼は絶えず神に、自分の魂を清めてくださるよう願っているからだ。しかし、世俗的な視点で試練に向き合う人々は、苦しむことになる。しかし、神が私たち一人ひとりを見守っておられるのなら、私たち一人ひとは、自分自身を余すところなく神に委ねなければなりません。そうでなければ、人の人生は苦しみへと変わってしまいます。人は、自分の人生のすべてが自分の望む通りに進むことを望みます。しかし、物事は必ずしも自分の望むようには進まず、そのため、その人の魂は安らぎを見出せないのです。

人が満腹であろうと空腹であろうと、称賛されようと不当な扱いを受けようと、喜び、すべてに謙虚さと忍耐をもって臨まなければならない。そうすれば、神はその人に祝福を与えてくださる——その人の魂が、もはやそれらの祝福を受け入れきれないほどに高まるまで。神の祝福は、そのような魂にはもはや耐えきれないほどになるだろう。

⁹³ 『時課書』参照。モスクワ、1990年。288頁。

そして、人が霊的に成長すればするほど、神の愛をより深く見出し、その愛に心を溶かされていくのである。

神の御許しによる試練と苦難

時に、私たちに降りかかる試練は、神が私たちの魂の病を癒やすために与えてくださる「抗生物質」のようなものです。こうした試練は、私たちに大きな霊的な助けをもたらします。人は神から軽く「後頭部を叩かれる」ような体験をすることで、心が和らぐのです。もちろん、神は「私たちを試すことなく」一人ひとりの状態を御存知ですが、私たちにはそれが分からないため、神は私たちに試練を経させるのです。それは、私たちが自分自身を知り、内に潜む情欲を見出し、最後の審判の日に過度な主張をしないようにするためです。なぜなら、たとえ神が私たちの情欲に目をつぶり、ありのままの私たちを樂園に迎え入れたとしても、樂園においても私たちは混乱や不満の波を巻き起こしてしまうだろうからである。それゆえ、神は悪魔がここで誘惑を生み出すことを許しておられる。その誘惑によって、私たちから[情欲という]塵が払い落とされ、苦難を通じて私たちの魂が謙虚になり、清められるためである。そしてその後、神は私たちを御自身の恵みで満たしてくださる。

真の喜びは、キリストのために人が喜んで味わうその苦しみから生まれる——私たちを救うために、その苦しみをご自身で味わわれたキリストのために。クリスチャンは、自分には何の非もないにもかかわらず試練に直面したとき、とりわけ喜びを感じなければならない。

時々、私たちは神にこう言います。「神よ、あなたが何をするのは分かりませんが、私を人間にしてくださるなら、私は自分のすべてを余すところなくあなたに委ねます。」そして、この言葉を聞いた神は、私を単なる人間にするだけでなく、人間以上の何かにしたいと願っておられます。だからこそ、神は悪魔が来て、私を誘惑し、苦しめることを許されるのです。今、がんを患っている私は、悪魔の悪巧みを見て、思わず笑ってしまう。ほら、悪魔ってこういうものなんだ！神様が、人が試練を乗り越えられるよう、悪魔に人を誘惑することを許されたとき、悪魔はどんな石鹸で人を洗うか、ご存知ですか？悪魔は、自分の悪意の泡で人を洗うのです。なんて素晴らしい石鹸でしょう！怒りに任せて泡を吹いて唾を吐くラクダのように、悪魔もこうした場面では同じように振る舞う。そして、人間をこすり始める。もちろん、それは人間の汚れを落とし、より清潔にするためではない。いいえ、彼は悪意からそうしているのです。しかし、神は、人間の汚れたシミが洗い流され、清くなるまで、悪魔が人間をこすり続けることを許しておられます。もし神が、洗濯で衣服をこするように悪魔に人間をこすり続けることを許していたら、悪魔は人間をぼろきれにしてしまっていたでしょうから。

— ゲロンダ、私たちの人生で起こるさまざまな誘惑は、神の御心によって私たちに降りかかるものだと考えてよいのでしょうか？

— いいえ、神の御心と、誘惑者がもたらすあらゆるものを混同してはなりません。神は、ある時点までは悪魔に人間を誘惑する自由を与えています。また、人間に対しても、善を行うか悪を行うかの自由を認めています。しかし、人間が行う悪について、神に責任があるわけではありません。例えば、ユダはキリストの弟子でした。しかし、彼が裏切り者になることが神の御心だったなどと言えるのでしょうか？いいえ、ユダ自身が悪魔を自分の中に入らせることを許したのです。ある人が司祭にこう頼みました。「お

願いです、神父様、ユダのために追悼の礼拝を執り行ってください。」それはまるで、「キリストよ、あなたは不公正だ。ユダがあなたを裏切ったのは、あなたの御心だった。だから今、彼を助けてください」と言っているのと同じことです。

神が、不品行な生活を送っている者が正気に戻り、悔い改めるために、敬虔な人々の一部に試練を許されることは、めったにありません。試練に直面する中で、自分の人生の罪の代償を払わされる人々もいますが、その一方で、不当にも不平を漏らす者もいます。神は、罪のないのに苦しみながらも不平を言わない人々の忍耐の模範を見ることで、彼らが助けを得られる機会を与えておられる。そのような敬虔な人々は、二重の報いを受ける。例えば、非常に善良で敬虔な一家の主が、妻や子供たちと一緒に自宅で過ごしているとしよう。突然、地震が起こり、家が崩れ落ち、家族全員が瓦礫の下敷きになり、恐ろしい苦しみを経て全員が亡くなってしまったとしよう。なぜ神はこれを許されたのか？それは、罪を犯し、罰を受けている者たちが不平を言わないようにするためである。

それゆえ、義人たちが背負った偉大な十字架について思いを巡らせる者は、自分自身のささやかな試練によって決して落胆することはない。そのような人々は、自分たちが人生でさまざまな罪を犯したにもかかわらず、義人たちほど苦しまないことを悟り、それゆえ、賢明な強盗のようにこう告白するのだ。「⁹⁴」 「これらの人々は、何の罪も犯していないのに、これほどの苦しみを味わった。 私たちには、いったいどのような苦しみがふさわしいのだろうか？」しかし、残念ながら、キリストの左側に十字架につけられたあの強盗に似た人々もいる。⁹⁵ そのような人々は、苦しみを耐え抜いた義人たちについてこう言う。「ほら、生涯、十字架から手を離すことも許されなかったのに、彼らにどんな不幸が降りかかったことか！」

また、ごくごく稀ではありますが、神が愛ゆえに、選ばれた一部の修行者たちに大きな試練に耐えることを許される場合もあります。神は、彼らを栄光に導くためにそうされるのです。そのような人々は、キリストに倣う者たちです。 ご注目ください。聖シンクリティキアは、その論しによって多くの人々を霊的に支えていましたが、悪魔は彼女のこの働きを妨げようと企み、その結果、聖女は病気のため3年半もの間、沈黙を余儀なくされました。⁹⁶

一方、他の場合には、真のキリストの模範者は、神に、隣人の罪を赦し、彼らを神の義なる怒りにさらさないよう憐れみを求めています。そのような人は、自分には何の罪もないにもかかわらず、罪を犯した人々の代わりに、神が自分を罰してくださるようお願いののです。そのような人は神と深い絆で結ばれており、神の子の持つ偉大で高潔な愛に、神は深く心を動かされ、感動される。神は、そのような人が求める憐れみを施すだけでなく、すなわち他者の罪を赦すだけでなく、その熱心な願いに応じて、その人に殉教的な最期を迎えることを許される。同時に、神はそのような人のために、さらに大きな栄光に満ちた、最高の天国の王宮を用意しておられる。なぜなら、多くの人々が表面的な判断でこの人を不当に裁き、神があたかも彼自身の罪のために彼を罰しているのだと考えたからである。

⁹⁴ ルカによる福音書23章39節以下を参照。

⁹⁵ 同上。

⁹⁶ 聖シンクリティキアの記念日は1月5日である。『ロシア語版聖人伝』1月編（モスクワ、1904年）189頁を参照。

神の愛に対する恩知らず

— ゲロンダ、試練は常に人にとって有益なものなののでしょうか？

— それは、その人が試練をどう受け止めるかによります。心構えができていない人は、自分に降りかかる試練に直面すると、神を非難し始めます。「なぜ私だけにこんなことが起こるのか？」と、そのような人々は不平を漏らします。「ほら、あの人にはすべてがうまくいっているじゃないか！　こんなことを許すなんて、一体どんな神なんだ？」　そのような人々は「罪を犯しました」とは言わないが、苦しんでいる。一方、敬虔な人々はこう神に感謝する。「神に栄光あれ！　この試練が私を神のもとへと導いてくれた。神は私の益のためにこれを許されたのだ。」以前は教会に全く通っていなかったような人々も、試練を経て教会に通い始め、懺悔をし、聖体拝領をするようになる。また、しばしば、非常に頑なな人々を、神はある時点で試練を通じて、深い悔恨の状態へと導かれます。その結果、彼ら自身が180度態度を改め、自分たちが犯したすべての行いに対する痛みに打ちひしがれ、塵のように崩れ落ちてしまうのです。

— ゲロンダ、物事が順調に進んでいるときは、「神よ、あなたに栄光あれ」と言うべきでしょうか？

— そうだな、もし喜びの時に「神よ、あなたに栄光あれ」と言わないのなら、悲しみの時にどうしてそれを言えるというのか？　まさか、悲しみの時には神に感謝しながら、喜びの時には感謝しようとはしないというのか？　しかし、もちろん、人が恩知らずであれば、神の愛を知ることはできない。恩知らずであることは大きな罪だ。私にとって、それは死に至る罪である。恩知らずな人は何にも満足せず、何ものも彼に喜びをもたらさない。どんなことでも不平を言う。彼の目の前では、すべてが、誰もが悪いのだ。私の故郷であるファラスでは、甘いものとしてブドウの果汁が大変好まれていた。ある夜、ある少女がブドウの果汁が飲みたくなくて泣き出した。どうしようもない。母親は隣家に頼みに行くしかなかった。少量の果汁を飲んだ後、その娘はまた泣き出し、床を足で踏み鳴らしながら「ママ、サワークリームも欲しい！」と叫びました。「お嬢ちゃん、こんな時間にどこでサワークリームを手に入ればいいの？」と母親は尋ねました。いや、「サワークリームが食べたい」と言うだけで、それきりだ。どうしよう？　かわいそうな母親は隣人のところへ足を引きずって行き、サワークリームも借りてきた。サワークリームを口にした娘は、また泣き出した。「えっ、今度は何で泣いているの？」と母親が尋ねると、「ママ、それを混ぜてほしいの！」　仕方なく、母はソースとサワークリームを取り出し、混ぜ合わせた。しかし、娘は相変わらず泣き止まない。「ママ、一緒に食べられないよ！　分けてほしいの！」　そこで母には、娘の頬を思い切り叩くしかなかった！　そうして、ソースとサワークリームは分かれたのである。

私が言いたいのは、この娘のように振る舞う人々もおり、そうすると彼らには神の懲罰が下るということです。私たちには、少なくとも自分の恩知らずさを認め、神が与えてくださる祝福に対して昼夜を問わず感謝し続けなければなりません。　そうすることで、私たちは臆病な悪魔の足元を揺るがすことになるでしょう。悪魔は手下の連中をすべて集めて、黒い煙のように消え去ってしまうでしょう。なぜなら、[自分の恩知らずさを認め、神の祝福に感謝することで]、私たちは悪魔の急所を突くことになるからです。

私たち自身の小さな試練と、身近な人々が直面する大きな試練

私たちを襲うあらゆる誘惑に対して、最良の薬となるのは、私たちの隣人が直面している、さらに過酷な試練です。ただ、それを私たち自身が直面した試練と比較し、その間に大きな違いがあること、そして、私たちには小さな試練しか与えなかったという神の偉大な愛を見出すだけでよいのです。そうすることで、私たちは神に感謝するようになり、私たちよりも深く苦しんでいる隣人のために心を痛め、神がその人に助けを与えてくださるよう、心の底から祈るようになるでしょう。例えば、私の足が切断されたとします。「神よ、あなたに栄光あれ」と私は言うでしょう。「少なくとも片方の足が残っているのですから。だって、他の人には両足を切断されたのですから。たとえ私が手足のない身になっても、手も足も切断されてしまったとしても、それでも私はこう言うでしょう。「神よ、あなたに栄光あれ。私はこれほど長い間、自分の足で歩けたのですから。他の人たちは、生まれつき動くことのできない身体障害者としてこの世に生まれてきたのですから。」」

ある一家の主が11年間も出血に苦しんでいると聞き、私はこう言った。「私には彼には到底及ばない！ 世俗の人間は11年間も出血に苦しんでおり、しかも子供もいて、朝起きて仕事に行かなければならない。それなのに、私はこの出血に7年も苦しんでいないのだ！」⁹⁷ そのような苦しみを味わっている他人のことを考えると、自分を正当化することはできない。しかし、自分が苦しんでいる一方で、他の人たちはのんびりと暮らしていること、腸の不調で夜中に30分おきに起きざるを得ず眠れない一方で、他の人たちは安らかな眠りにについていることを考え始めると、たとえ不平を言っても、自分を正当化してしまうのです。ねえ、お姉さん、ヘルペスに悩まされてどれくらいになるの？⁹⁸

— 8ヶ月です、ゲロンダ。

— わかるか？ ある人にはこの病気で2ヶ月間苦しむように神が定め、別の人には10ヶ月、また別の人には15ヶ月と定められているのだ。君の気持ちはわかるよ。とても辛いだろう。この病気で絶望に陥る人もいる。しかし、もし世俗的な人が、ヘルペスで一、二ヶ月苦しんで激しい痛みに耐えかねて絶望したとき、霊的な人が同じ病気で丸一年も苦しんでいるにもかかわらず、耐え忍んで不平を言わないことを知れば、その人はすぐに慰めを得るだろう。「ほら見てごらん」と、その患者は言います。「私は2ヶ月前に病気になるって、もう絶望の淵に立っているのに、あの可哀想な人は丸一年も苦しんでいるのに、平気なんだ！ それに、私は罪を犯しているのに、彼は霊的に生きているんだ。」このように、この人はまだ誰からも諭されたり指導されたりしていないのに、すでに助けを得ているのです！

人々から受ける苦しみ

— ゲロンダ、もし人が神に従って、人々からの苦しみや不当な扱いを受け入れるならば、その忍耐は彼を情欲から清めるものなのでしょうか？

— まだそんなことを聞くのか！ いや、それは単に彼を清めるだけでなく、蒸留しているんだ！ これ以上の忍耐があるだろうか？ このようにして、人は自分の罪を償うことができるのだ。見てごらん：捕まった犯罪者は殴られ、刑務所に収監され、そこ

⁹⁷ 1988年以降、長老は絶え間ない腸出血に悩まされていた。

⁹⁸ 帯状疱疹は、紅斑を伴う浮腫性の基底上に水疱が群生して現れる皮膚発疹を特徴とするウイルス性疾患である。激しい痛みや、体内にさまざまな合併症を引き起こす。——訳者注

で彼は 自分のささやかな「贖罪」を果たす。そして、もしそのような人が心から悔い改めれば、永遠の暗黒から救われるのだ。この世の苦しみを通じて、人が永遠における自分の罪の代償を支払うことなど、取るに足らないことだろうか？

どんな苦しみも喜んで耐え忍びなさい。人々から与えられる苦しみは、私たちを愛する人々が与えてくれるあの甘い「シロップ」よりも、はるかに甘美なものです。考えてみてください。キリストは「八福」の中で、「あなたがたが称賛されるとき、幸いである」とはおっしゃらず、「あなたがたがののしられるとき、幸いである……」⁹⁹ と、さらに「あなたがたについて偽りを語る者たちによって」ともおっしゃっている。人が不当にののしられるとき、その人は天の宝庫に霊的な貯蓄を積み立てているのである。もし受けた中傷が自業自得であるならば、それは自分の罪の代償を支払っていることになる。それゆえ、私たちは自分を試す者をただ黙って耐えるだけでなく、その人に対して感謝の念を抱くべきである。なぜなら、その人は私たちに、愛と謙遜と忍耐をもって努力する絶好の機会を与えてくれているからである。

もちろん、中傷者たちはタンガラシュカと結託して活動している。しかし、通常、強い風は根が浅い弱々しい木々を折ったり、根こそぎにしたりする。一方、根が深い木々にとっては、強い風が根をさらに深く張る助けとなるのだ。

私たちを中傷するすべての人々のために祈り、神に彼らに悔い改めと啓発、そして健康を授けてくださるよう願い求めなければなりません。こうした人々に対する憎しみの痕跡を、自分の中に一切残してはなりません。 私たちに降りかかった試練から得た教訓だけを心に留め、すべての苦々しさ〔侮辱や敵意〕を捨て去り、聖エフREM・シリンの言葉を心に留めましょう。「もしあなたが中傷に耐え、その後、あなたの良心の清さが明らかになったならば、高慢になってはならない。むしろ、謙遜の心をもって、あなたを人間の中傷から救い出し、あなたが哀れな犠牲者とならないようにしてくださった主に仕えなさい。」¹⁰⁰

第2章。 病気について

病気は人々を助ける

— ゲロンダ、「天国で安らかでありますように」という言葉はどういう意味ですか？

— 「天国への道が穏やかでありますように」という意味です。

— ゲロンダ、もしかすると、この言葉は「あなたが素晴らしい楽園に行けますように」という意味なのでしょうか？

— 誰かが楽園について悪く言うのを聞いたことがある？ とはいえ、あの甘美な楽園にたどり着くためには、人はこの人生で多くの苦難を味わわなければならない。そう

⁹⁹ マタイによる福音書 5, 11.

¹⁰⁰ オシオス・エフライム・トゥ・シロス。『著作集』。第A巻。テッサロニキ、1988年。253頁。

して初めて、乗り越えた試練の「パスポート」を手に入れるのだ。病院では一体何が起きていることか！　なんと悲劇的なことか！　人々の痛みはなんと深いことか！　手術を受ける際、自分の子供たちのことを思い、家族への心配で心を苛まれる不幸な母親がどれほど多いことか！　がんを患い、放射線治療を受ける父親がどれほど多く、彼らがどれほど苦しんでいることか！　こうした人々は働けないのに、家賃を払わなければならないし、出費も山ほどあるのだ！　一方で、あちらには、健康そのものであるにもかかわらず、それでも出費を賄いきれない人たちがいる。ましてや、病気でありながら、家族の生活費を何とか賄おうと、精一杯働いて疲れ果てている人たちのことは言うまでもない。人間の悲しみが私の胸を締め付ける。毎日、どれほど多くの話を耳にすることか！　果てしない苦しみ、困難！　…一日中、人々の悲しみによって私の口は苦味に満ちており、夜には空腹のまま、少し休むために寢床につく。私は肉体的には極度の疲労を感じているが、それと同時に内面的な安らぎも得ている。

—ゲロンダ、病気は常に人にとって有益なものなののでしょうか？

— ええ、病気は常に計り知れない恩恵をもたらします。病気は、美德を持たない人々が神の御心を和らげる助けとなります。¹⁰¹ 健康は大切なものですが、病気が人にもたらす善きものは、健康では決して与えることのできないものです！　病気は人に霊的な善をもたらします。病気とは、実に偉大なる、偉大なる恩恵なのです。それは人を罪から清め、時にはその人に「天の」報いを「保証」することさえあります。人の魂は金に似ており、病気はその金を精錬する火に似ています。　考えてみてください。キリストも使徒パウロにこう言われたではありませんか。「わたしの力は、弱さの中でこそ完全に現れる。」¹⁰² 人が病気によって苦しむほど、その人はより清く、より聖なる存在になっていくのです——ただ、その人が忍耐し、喜びをもって病を受け入れる限りにおいてです。

ある病気において必要なのは、ほんの少しの忍耐だけである。　神は、人がささやかな報いを得られるように病を許され、その病を通じて、人の抱える欠点を清めてくださるのです。なぜなら、肉体の病は、心の病を癒す助けとなるからです。肉体の病は人に謙虚さをもたらし、それによって心の病を中和するのです。神はあらゆるものから、人の益となるものを引き出されるのです！　神が許されるすべてのことは、私たちに霊的な益をもたらします。神は私たち一人ひとりに何が必要かを御存知であり、それに応じて病を与えてくださいます——それは、私たちがその病を通じて報いを受けるためか、あるいは何らかの罪の代償を支払うためなのです。

病気に対する天の報い

「お母さんはお元気ですか？」

—　あまり良くありません、ゲロンダ。時々、熱がすごく高くなり、それが耐え難いほどの痛みをもたらしています。皮膚がひび割れて傷だらけになり、夜も眠れないのです。

—　知っていますか、そういう人たちは殉教者なのです。完全な殉教者ではないとしても、半分は間違いなく殉教者です。

¹⁰¹ 正教会の神学における「神の贖罪」という概念は、西洋神学のような法的な性格を持つものではなく、罪を犯した人間の救いのために、神が人間愛に満ちた懲罰を下すことを表している。

¹⁰² 1コリント12:9。

—でも、ゲロンダ、彼女にとって、人生そのものが絶え間ない苦しみなのです。

—それなら、彼女が受ける報いも格別なものになるだろう。彼女がどれほどの報いを受けることになるか、知っているか？ 天国は彼女に保証されている。人が重い病に耐えられるのを見て、キリストはその人にその病を与える。そうすることで、この世でのわずかな苦しみに対して、人は天国の永遠の命において多くの報いを受けるのだ。彼はこの世で苦しむが、あの世、すなわち別の命において報いを受ける。なぜなら、天国があり、[苦しみに対する]報いがあるからだ。

今日、腎臓を患っている女性が訪ねてきました。彼女はもう何年も血液透析を受けています。¹⁰³ 「神父様」と彼女は私に頼みました。「どうか、私の手に十字を切ってください。私の静脈にはまともな場所がどこにもなく、まともに血液透析さえできないのです。」 「あなたの手にあるこれらの傷や潰瘍は、」と私は言いました。「来世では、この世のダイヤモンドよりも価値のあるダイヤモンドに変わるでしょう。何年間、血液透析を受けているのですか？」 「12年です」と彼女は答えました。「それなら」と私は答えた。「君には[精神的]『一時金』と『最低年金』を受ける権利があるよ。」それから彼女はもう片方の手の傷を見せて、こう言った。「神父様、この傷は治りません。そこから骨が見えているの」と彼女は言った。「ええ、」と私は答えた。「でも、そこから天も見えているのです。耐えてください。あなたに深い忍耐がありますように。心から祈ります。キリストがあなたの中に御自身の愛を増し加え、あなたが痛みを忘れられますように。もちろん、別のことを願うこともできます。あなたの痛みが和らぐことを。しかし、そうなれば多くの報いも失われてしまいます。したがって、私が最初に願ったことの方が良いのです。」この言葉に、その不幸な女性は慰めを得た。

肉体が試練にさらされるとき、魂は聖化される。病気で苦しむのは肉体、すなわち私たちの土壁の小屋であるが、それによって、その小屋の主である私たちの魂は、キリストが私たちのために用意してくださる天の宮殿において、永遠に喜びを覚えることになる。この霊的な論理——この世の人々にとっては非論理的なものですが——に従い、私もまた、自分にある肉体の病気や欠点を喜び、誇りに思っています。ただ一つ、私が考えないのは、自分が天の報いを受けることになるということだけです。私は[自分の痛み]を、[それを通じて]神への不感謝を償っているのだと理解しています。なぜなら、私は神の偉大な賜物や恩恵にふさわしい形で応えてこなかったからです。何しろ、私の人生におけるすべて——修道生活も、病気も——は、まさに絶え間ない[霊的な]祝宴そのものなのです。神はあらゆる面で私に慈愛を注ぎ、あらゆる面で私に寛容であられる。しかし、どうか神がこれらすべてを[ただ]この世の帳簿に計上されないようお祈りください。そうでなければ——ああ、私は悲惨だ、悲惨だ！ もしキリストの愛のために、私がさらに多くの苦しみを味わうことになれば、それはキリストが私に与えてくださる大きな栄誉となるでしょう。ただ、私が[その痛み]に耐えられるよう、主が私を強めてくださることを願うばかりです。そして、報いは必要ありません。

人が健康面で何の問題もないとき、それはまさに、その人に何かが欠けていることを意味する。むしろ、何か病気になったほうがましだ。私は自分の病気から、病気になる前に実践していたあらゆる苦行からは得られなかったような恩恵を受けた。だからこそ私はこう言うのだ。もし人に（他者に対する）義務がないのなら、健康であるよりも病気を好むほうがよいと。健康である限り、人は借りを抱えたままであるが、病気を忍

¹⁰³ 血液透析——「人工腎臓」装置による血液の透析および限外ろ過。——訳者注

耐強く受け入れるならば、その見返りを得ることができるのだ。私が共同生活の修道院に住んでいた頃、¹⁰⁴ ある日、イエロフェイという名の、非常に高齢の聖なる司教がそこを訪れました。彼は引退しており、聖アンナのスキートで修行に励んでいました。帰路につき、馬に乗ろうとしたとき、ズボンがずり上がり、皆は彼のひどく腫れ上がった足を見てしまいました。彼を馬に乗せるのを手伝っていた修道士たちは、ぞっとした。司教はそれに気づき、こう言った。「これこそが、神が私に授けてくださった最高の賜物なのです。どうか神が、これらを私から取り去らないよう、お願いしています。」

苦痛に耐えること

何か病気ににかかったときは、自分自身をキリストに全身全霊で委ねるのが最善です。私たちは、苦痛のさなかにあって、私たちの魂が「鋼のような」肉体——それによって偉大な肉体的偉業を成し遂げることができるような——よりも、はるかに忍耐と賛美を必要としていることを心に留めるべきです。なぜなら、そうした偉業によって、私たちは気づかぬうちに虚栄や自慢の危険にさらされてしまうからです。まるで、自分自身の「騎兵隊の突撃」によって楽園を勝ち取ることができるかのように思えてしまうからです。

私がどれほど長い間、痛みに苦しんできたかご存知ですか？時には耐えられることもあります、時には耐え難いこともあります。耐えられる痛みというのは、安定した状態のことです。気管支拡張症¹⁰⁵ や、受けた手術のせいで、私がどれほど苦しんできたかご存知ですか！その後、腸に関する一連のトラブルが始まりました。それから半年間、椎間板ヘルニアに苦しみ、激しい痛みに苛まれました。以前ほど深くお辞儀をすることもできず、自分の身の回りの世話をするのも困難だったにもかかわらず、私を訪ねてくる人々を手助けしなければならませんでした。その後、お腹に硬いしこりができ、それはヘルニアだと言われました。疲れると痛み出し、ひどく腫れ上がりました。ある時、聖大殉教者パンテレイモンの祝日の前夜、ヘルニアが腫れ上がり、痛みを伴っていました。しかし、私はパンテレイモン修道院のスキートで行われる徹夜祈祷会に行かなければならませんでした。「行こう、何があっても構わない」と私は決心した。なぜなら、この祝祭にはどうしても出席しなければならなかったからだ。徹夜祈祷の最中、少し腰を下ろしたくなったが、もし私がスタシディオの座を下げて座れば、他の皆も座してしまうだろうと思った。そこで、私は全く座らずに立ち続けることにした。12時間に及ぶ徹夜祈祷の後、自分の体調はひどく悪化するだろうと思っていた。自分の独房に戻った途端、誰かが門のそばにある鉄のノックを叩いた。「開けてください、神父様！」——誰かの声が聞こえた。私は笑ってしまった。「もうおしまいだ」と心の中で思った。「これから次から次へと来客が押し寄せるだろう。」そして案の定、間もなく他の訪問者がやってきて、その後も次々と訪れた。夕方、最後の訪問者を見送ったとき、私のヘルニアが……完全に消えていたことに気づいたのだ！しかし翌日、休息をとった後、それはまた現れた！その後、それは私の邪魔になり、痛みも伴ったが、同時に喜びももたらしてくれた。なぜなら、キリストは私の状態を知っておられ、何が私にとって有益かもご存知だったからだ。だからこそ、キリストはこのヘルニアを5年間、私に残しておかれたのだ。私がどれほどそれに苦しめられたか、わかるだろうか？

¹⁰⁴ 1953年から1955年にかけて、エスフィグメン修道院にて。

¹⁰⁵ 気管支拡張症——長期にわたる炎症や細気管支の閉塞に起因する気管支および細気管支の拡張——訳者注。

— ゲロンダ、以前、足に不調があった時のことを覚えていらっしゃいますか？

— それはまた別の話です。私は立ち上がることもできませんでした。人が訪ねてくると、とてもつらかったのです。その後、足の痛みは治まりましたが、出血が始まりました。医師によると、それは潰瘍性大腸炎だったそうです。新たな一章が始まりました……7年間にわたる出血と痛み……しかし、がっかりしないでください。ただ、私の魂の平安のために祈ってください。神様が私を尊び、この賜物を授けてくださったことを喜び、神様にそれを取り上げられたくはありません。神様に栄光あれ、神様は私が病気から益を得られるよう許してくださっています。こうして私たちは忍耐の試練に耐えているのです。今日はこれ、明日はあれ……「あなたがたには忍耐が必要なのです。」¹⁰⁶ 何しろ、私たちのように、少しでも神を畏れる心があれば、もし私たちが耐え忍ばなければ、世俗の人々には一体何が残されるというのでしょうか？しかし、多くの一般信徒が、私たち修道士よりも徳において優れているのを見ます。私の両親は、ファラシオの人々が何か病気にかかっても、すぐにハジェフェンディのもとへ駆けつけて癒やしてもらうようなことはしなかったと語ってくれました。彼らはまず、痛みを耐え忍んだのです。彼らは、自分の愛徳と忍耐力に応じて、できる限り耐え忍びました。なぜなら、彼らは苦しむことを祝福だと考えていたからです。「さあ、」と彼らは言った。「キリストが私を救うために大きな苦しみを受けられたのだから、私もキリストのために、自分の魂を少しばかり苦しめてみよう。」彼らがハジェフェンディ¹⁰⁷に癒やしを求めて向かったのは、病気が仕事に支障をきたし、家族が苦しむようになったと気づいた時だけだった。ほら、彼らにはどれほどの信仰心があったことか！一般信徒であるこれらの人々がこのように考え、耐え忍んでいたのなら、私のような修道士はどのように考えるべきだろうか？キリストはこう言われました。「あなたがたの忍耐によって、あなたがたの魂を勝ち取れ。」¹⁰⁸ ごらんなさい。ヨブがすべての恵みを持っていた頃の施しは、彼を襲った試練のさなかの忍耐ほど、神に喜ばれるものではなかったのです。¹⁰⁹

— ゲロンダ、人が「痛みを耐えている」とおっしゃる時、それはその人が痛がっている様子を全く見せない、という意味でしょうか？

— どうしてもという場合は、周囲に「痛い」ということを少しばかり伝えることもできる。痛みがあることは伝えても、その痛みがどれほど激しいかまでは話さないようにする。というのも、もし痛みを他人に完全に隠してしまうと、自分の行動から誤解を招く恐れがあるからだ。例えば、僧侶が痛みで苦しみ、法要に出席できない場合、自分の状態を他人に伝えなければ、悪意のある誰かが誤解してしまうかもしれない。

痛みに対する態度

— ゲロンダ、どのような痛みを「耐え難い」とおっしゃいますか？

— 涙がこぼれるような痛みです。それは悔い改めの涙でも、喜びの涙でもありません。この涙は、どのカテゴリーに当てはまると思いますか？

— もしかすると、ゲロンダ、殉教の部類でしょうか？

— もちろん、殉教の部類です。

¹⁰⁶ ヘブライ人への手紙 10章36節。

¹⁰⁷ ファラスの住民たちは、カッパドキアのアルセニオス聖人をこのように呼んでいた。——訳者注

¹⁰⁸ ルカによる福音書 21章19節。

¹⁰⁹ 『ヨブ記』を参照。

— ゲロンダ、私が激しい痛みを感じているときは、「神よ、あなたに栄光あれ」という言葉を発するのが難しいのです。

— なぜそれを口にするのが難しいのですか？ キリストが耐え抜かれたことを考えてみてください。殴打、屈辱、鞭打ち、十字架刑！¹¹⁰ キリストは、私たちを救うために、これらすべてを「罪なき御子」として耐え抜かれたのです。¹¹¹ ですから、あなたが痛みを感じる時は、「あなたの愛のために、私のキリストよ、私は耐え忍びます」と言ってください。

— ゲロンダ、痛みを乗り越えるためには何が必要でしょうか？

— 勇気と努力が必要です。

— では、人はどうすれば耐え難い痛みを乗り越えられるのでしょうか？

— 世俗的な人なら世俗的な歌を、霊的な人なら霊的な賛美歌を……ある時、私の父は高熱を出し、ひどい頭痛に襲われました。彼が何をしたか、ご存知ですか？ 塩漬けのニシンを腹いっぱい食べ、ワインを一杯飲み干して、こう歌い出したのです。「目覚めよ、わが不幸で、権利なき民よ」。それからさらに数曲のパルチザンの歌を歌い、頭痛は治まってしまいました！ そう、痛みを和らげるために、私たちも霊的な賛美歌を歌おうではありませんか！ 以前、風邪をひいて、頭が割れるようなひどい頭痛に襲われたことを覚えています。そこで、あるとても美しい賛美歌を歌い始めたところ、頭痛が消えてしまいました。確かに、詩篇の詠唱とイエスの祈りは、このような場合に大いに役立ちます。それは魂を優しくし、慰めてくれる。なぜなら、絶え間ない悲しみや痛みは魂を圧迫し、魂を冷めさせてしまうからだ。昨夜も、私は痛みのせいで眠れなかった。もし夜明け前に死んでしまえば、その後には私にとって一つの長い一日が訪れるだろう、とさえ考えた。何しろ、あの世には夕焼けも夜明けもないのだから……。しかしその後、私は……痛みを和らげる「錠剤」を服用した——トロパールを歌ったのだ。「聖人たちの病、すなわちあなたのために苦しんだ者たちによって、主よ、懇願いたします。私たちのすべての病を癒してください……」¹¹² この錠剤の効果は長く続き、一晩中持ちこたえた！ 医師たちは、このような錠剤を持っているのでしょうか？

— ゲロンダ、夜になると痛みが強くなるそうです。

— ええ、夜になると人の体調は悪くなります。でも、それだけでなく、日中に人々と交流したり話したりすることで、患者たちは自分の痛みを忘れてしまうのです。夜になると、患者は自分一人きりになり、意識が痛みに向かい、その痛みが増しているように感じてしまうのです。病気の間の痛みから逃れることはできませんが、重要なのは、その痛みを忘れるために、[精神的な]調整のダイヤルを別の周波数に合わせ直すことです。なぜなら、痛みに対して間違った向き合い方をすれば、痛みは倍増してしまうからです。痛みのことを考えれば、痛みは増幅される。しかし、善意の思いを抱くようにすれば——例えば、自分よりもさらに辛い思いをしている人々のことを思い出したり、教会で歌われる賛美歌を口ずさんだりすれば——痛みは忘れ去られるのだ。

— ゲロンダ、痛みは通常、体の中に何か異常があることを知らせるものです。それゆえ、痛みにはどのような注意を払うべきでしょうか？

¹¹⁰ マタイによる福音書 27:26-44、マルコによる福音書 15:15-32、ルカによる福音書 23:23-43、ヨハネによる福音書 19:1-23を参照。

¹¹¹ イザヤ書 53章9節を参照。

¹¹² セバスティアの四十人の殉教者たちのトロパリオ；記念日は3月9日。

— 自分の体力がどこまで持つかを試してみて、それに応じて注意を払う必要があります。特に高齢者の場合はなおさらだ。ここには注意が必要だ。なぜなら、古い車を新車の頃と同じ速度で走り続けると、車は粉々に砕けてしまうからだ。車輪は一方へ、キャブレターは別の方向へ飛んでいってしまう…… 腰が痛かった頃、私は立ったまま数珠を数えて祈ることができませんでした。少し状態が良くなったのを見て、立ち上がってみました。立ったまま数珠を数えて祈り、地面に頭をついて礼をしました。すると、また腰が痛くなりました。私は少し腰をかがめました。それから自分にこう言いました。「さあ、もう一度試してみよう」。同じことが繰り返されました。腰がまた痛くなりました。その後、私は立ち続けることや礼をするのを控えるようになりましたが、心は穏やかでした。

— ゲロンダ、もし自分の痛みが体に他の副作用を一切及ぼさないことを知っていれば、その痛みは気になりません。しかし、その痛みが深刻な病気の兆候であることを知っていれば、気になってしまいます。

— 例えば、腰痛は身体に深刻な影響を及ぼさないかもしれないが、その痛みは人を動きにくくし、「麻痺」させ、身動きが取れなくしてしまう。一方、別の種類の痛みなら、体は耐えられるものだ。

— ゲロンダ、痛みは人を苛立たせるものなのでしょうか？

— もし人が苦痛を霊的な視点から捉えなければ、その苦痛は人を苛立たせることになるかもしれない。しかし、霊的な視点から捉えるならば、人は平安を得て、神からの慰めを受ける。そうして、病は祝祭となり、喜びの場となる。人は、殉教者や殉教者の仲間入りを果たすことになるから、喜びを感じるのです。聖なる殉教者たちは、キリストへの愛が痛みよりも強く、その痛みを打ち消していたため、痛みを忘れていたのです。

— 痛みを感じながらも、それを精神的な観点から捉えない人は、清められないのでしょうか？

— 世俗の人間は清められるが、僧侶は清められない。

他者の苦しみへの共感を示すこと

人が隣人の苦しみを自分のことのように感じる時、それはある意味で神の心を和ませる。神は喜びを覚える。なぜなら、そのような人はその愛によって、自分と神との間に親密な絆があることを示しており、それによって神からの慰めを受けるからである。[もしこの神からの慰めがなかったなら]、人は隣人の苦しみに耐えられないだろう。

— ゲロンダ、他人の痛みをどのように感じるのでしょうか？

— もしあなた自身も痛みを感じているなら、他人の痛みについて考え、その人の立場に立って、自分自身のためではなく、その人のために大きな痛みを感じるようになる。つまり、自分の痛みこそが、他人の痛みを理解する助けとなるのだ。そして、自分の痛みを喜んで受け入れるとき、あなたは苦しんでいる人々を慰めることができる。しかし、もちろん、誰かが病気になったと単に知ると、自分が病気になるのでは話が別だ。そうして初めて、病人の気持ち理解できるのだ。以前、「化学療法」という言葉を聞いた時、¹¹³、私はそれを「キモセラピー」だと思っていた。つまり、がん患者には

¹¹³ ギリシャ語の「χυμός」（ジュース）に由来する。——訳者注

薬としてジュースや自然食品が与えられるのだと思っていたのだ。「化学療法」が何なのか、私にどうして分かるはずがあったらどうか？しかし今、それがどれほどの苦しみなのかを理解した。

—ゲロンダ、化学療法と放射線治療、どちらの方がつらいですか？

—どちらが辛い？ どちらも同じくらい辛いよ——放射線治療も化学療法も……。そして何より辛いのは、これらの治療のせいで食欲が失せてしまうことだ。しっかり食べなきゃいけないのに、何も食べられない。なのに医師たちは「しっかり食べなきゃだめだ」と強く言うんだ。食べるべきなのは分かっているけど、化学療法や放射線治療のせいで食欲が失せて、まるで死人のように衰弱してしまうのに、どうやって食べればいいんだ！放射線治療を受けていた時、体が火照っていたにもかかわらず、水を全く飲むことができなかった。水さえも嫌悪感を催した。水を飲むと吐き気がしてきた。¹¹⁴

—ゲロンダ、もしもう少し早く手術に同意してくださっていたら……

—「以前」なんてことじゃない！私が自分の回復を祈らないのは、がんを患っているからこそ、苦しんでいる人々と共に苦しんでいるからだ。私は苦しんでいる人々の気持ちをより深く理解し、その痛みに寄り添うことができるのです。しかし、それだけでなく、この病気は私自身の精神的な成長にも役立っています。私が願うのは、自分で身の回りの世話をし、他の人を助けることができるようになることだけです。とはいえ、神の御心に従うことにしましょう。

もしあなたに病気があり、それを気にしていない（つまり、それに注意を払っていない）のであれば、そう表現しても差し支えないなら、あなたは神に、他の人々の健康状態を改善してくださるよう願う権利がある。しかし、何の痛みも感じていない人であっても、痛みを感じている人々のために、せめて少しは苦しんでみてほしい。ファラシオの人々が言ったように、「私はあなたの荷物を背負おう」、つまり、私はあなたの痛み、苦しみ、悲しみを引き受けよう、ということです。

—ゲロンダ、彼らは一体どうやってそれを引き受けたのですか？

—愛によってです。もし人が愛を込めて誰かに「あなたの痛みを引き受けます」と言うなら、その人はその痛みを引き受けることになります。しかし、一度引き受けたら、それを背負い続けるためには、多くの忍耐と、多くの勇気、そして多くの力が必要となります。時々、人が私のところにやって来て、「ゲロンダ、あなたの痛みを引き受けてほしい」と言う。中には本当に勇気を持ってそう言う人もいるが、中には臆病者で、自分が何をべらべら言っているのかさえ分かっていない者もいる。彼らは些細なことでもすぐに医者のところへ駆け込み、あっという間に絶望に陥ってしまう。自分自身のささやかな痛みさえ耐えられないくせに、私の痛みを引き受けるとまで言うのです！それならば、むしろ自分自身の痛みを耐え、神が許される苦難を喜んで受け入れ、愛の名のもとに他人の病を引き受けてほしいと願うようなことはしないほうがよいでしょう。なぜなら、もし神様が突然彼らの願いを叶えてくださったとしても、その頃には彼ら自身が何を願ったのか忘れてしまい、不平を言い始めたら、もしかすると、自分たちに起きたことを神様のせいにするくらいかもしれないからだ。

¹¹⁴ 1994年6月、逝去の1ヶ月前に述べられた。

患者のケア

昨日の夕方、徹夜祈祷のために教会へ向かう途中、ある片隅で、車いすに乗った小さな子供を抱いた父親の姿を見かけました。私は彼らのところへ近づき、その子を抱きしめてキスをしました。「君は、自分が天使だってこと、知ってる？」と私はその子に尋ねました。そして、そのお父さんにはこう言いました。「天使の世話をできるなんて、あなたにとってこの上ない名誉ですよ。喜んでください。お二人はきっと天国へ行けるのですから。」二人は神からの慰めを感じたのか、喜びで顔が輝いていました。

病気の人や身体が不自由な人などを、愛と忍耐をもって世話する人々は、その犠牲によって自らの罪を洗い流す。もし彼らに罪がないならば、彼らは聖化される。ある時、ある女性が自分の人生における奇跡的な出来事について私に話してくれた。私は驚いた。というのも、彼女が語ったような境遇は聖人の伝記にこそ見られるものであり、彼女はごく普通の、素朴な女性だったからだ。しかし、彼女が人生の大部分をどのように過ごしてきたかを聞かされると、彼女の人生そのものが、まさに絶え間ない犠牲の連続であったことがわかった。彼女はまだ少女の頃から、病気の人の世話をし始めました。というのも、実家には病気の祖父と祖母が住んでいたからです。結婚すると、義父と義母も一緒に住むことになりましたが、彼らもまた病気でした。その後、夫も病気になりました。夫は寝たきりとなり、彼女は彼の介護に専念しました。つまり、この女性は生涯を病人の介護に費やしたのです。長年にわたり、彼女は霊的な本を読んだり、教会で徹夜の祈りに参加したりすることを切望していましたが、そのための時間は全くありませんでした。しかし、彼女にはそれ相応の理由があったため、神は集められた御恵みのすべてを彼女に与えてくださったのです。

— ゲロンダ、ご存知でしょうか、病気になると、奇妙な行動を取り始める人もいます。

— ええ、確かにそういうことはあります。しかし、健康な人も、病気の人の不安や不満、不平、不機嫌、あるいは奇妙な振る舞いを、せめて少しは理解してあげなければなりません。なぜなら、彼らにとってはそれが自然なことだからです。特に、自分自身が病気になったことがない人は、病気の人を理解することができません。自分自身が病気になった経験がないため、その人の心は少し硬くなってしまっているのです。

病気の人や寝たきりの人の介護をする者は、細心の注意を払い、介護対象者が不平を漏らさないよう努めなければならない。たとえ何年も介護を続けてきたとしても、最期にたった一度でも不平を漏らさせてしまったら、すべてを失うことになる。もし人の魂が不満を抱いたままこの世を去るならば、その不満の原因となった者たちは重い罪を犯すことになる。その後、悪霊は彼らの良心を「研ぎ澄ます」かのように（彼らがその人を不満にさせ、死に至らしめたという記憶を蘇らせることで）、彼らを苦しめるだろう。

— ゲロンダ、病人の介護をしていると、疲れだけでなく、愛する人が少しずつ息を引き取っていく姿を見ていることによる心の負担も、あなたの体力を奪ってしまうのです。

— ほら、家族の一人が病気になると、家族全員がその人のために心を痛めるものだ。もし病気になったのが父親で、彼が働けなくなれば、家族全員が苦しむだけでなく、生活も困窮してしまう。家族全員が不安になり、父親が生き延びられるかどうかを案じる。本人が苦しむだけでなく、身近な人々も苦しむ。本人が衰えていくにつれ、そばに

いる人々もまた衰えていく。そして、母親にはさらに大きな負担がのしかかる。彼女は子供たちの世話をし、病人の介護のために病院に通わなければならない。私が言いたいのは、人が重い病気にかかると、本人が苦しんで力尽き、死にたいと願うだけでなく、その世話をしている家族も気力を失い、苦しみ、疲れ果ててしまうということです。そして、身近な人々の絆が深ければ深いほど、互いに愛し合っていればいるほど、神は病気の終盤において、患者本人だけでなく、その介護をする人々もまた、大きな苦しみと深い痛みを経験することを許されるのです。彼らはつい、「神様、彼を連れて行って、安らかにさせてください」と言うほどになりますが、彼らが亡くなった後、彼ら自身も安らぎを得るのです。考えてみてください。とても仲の良い家族の中で、両親が病気の兆候もなく突然亡くなり、両親自身も子供たちも介護による苦しみを味わうことがなかった場合、子供たちにとって、喪失の痛み、両親との別れの痛みは極めて大きいのです。

— ゲロンダ、人の精神状態は、その人の身体の健康にどの程度影響を与えるのでしょうか？

— 人が精神的に安定した状態にあると、身体の痛みも和らぎます。逆に、精神状態が悪ければ、その悪影響が身体の健康を損ないます。例えば、医師に見放されたがん患者を例に挙げましょう。神を信じ、喜びに満ちた精神的な環境に身を置けば、その人はより長く生きられる可能性があります。それとは逆に、精神的な動揺によって、数週間で息を引き取ってしまうこともある。時には、医学的な観点からは健康と見なされ、検査結果も良好であっても、心に傷を抱えている場合、実際には不健康である。というのも、病気の多くは精神的な動揺から始まるからだ。誰にでも、どこか弱点があります。ある人には精神的な不調が胃に「打撃」を与え、別の人には頭に「打撃」を与えるのです。

病気に対する最良の薬とは、神の恵みが魂に注ぎ込む霊的な喜びである。霊的な喜びには、あらゆる病気に対して最も偉大な治癒の力が宿っている。それは傷を癒やす神聖な軟膏であるが、一方、動揺はそれらの傷を刺激してしまう。

病人の苦しみと神への信頼

— ゲロンダ、重病にかかり、自らを完全に神に委ねようと決心した人は、正しいことをしているのでしょうか？

— もし彼に（他人に対する）義務がないのなら、好きなようにすればよい。しかし、もし他人に対する義務があるのなら、医師の助けを求めるべきか、それとも神の御手に身を委ねるべきかは、もはや他人に委ねられることになる。だって、私も自分の意志で医者に行ったわけじゃない……もしあの時、医者が言った「単なる検査」に行かなかったら、腫瘍が腸を完全に塞いでいたでしょう。ほんの少しの水分しか摂れなくなり、それで終わりだったかもしれません……ほら、見てください。「単なる検査」に行っただけなのに、こんな厄介な事態に巻き込まれてしまったのです…… CT検査だの、循環器科だの、血中のタンパク質値は下がったり上がったり。切開して、縫合して、パッチを当てたり……結局、これらすべてで何が分かったというのか？ 事態は、私がここに永遠に留まることになりそうな方向に向かっている……

通常、私たちはこう言います。「まず患者は、人間的な助けを得ようと努力すべきであり、人間的な助けが得られない状況になって初めて、神が助けてくださるのだ。」

しかし、人間的な助けを得ようとしても、重い病に苦しむ人々が大きな苦しみを感じているという事実も忘れてはなりません。

彼らはまさに苦難の道を歩まざるを得ない。数多くの検査、手術、臓器移植、化学療法、放射線治療に耐えなければならない……。点滴を打つために腕に穴を開けられ、不憫なことに静脈が破裂し、鼻からチューブで栄養を摂取させられ、眠ることさえできない……。そして、これらすべては、人間としてできる限りのことをするために行われているのです。わかりますか？ これは決して単純な話ではありません。例えば、傷口に膿が溜まってしまった場合、その膿を取り除くためには傷口を切開しなければなりません——そうすれば、最終的にはすべてうまくいくのです。いいえ、ここでは人はまさに「メリーゴーランド」に巻き込まれているのです。だからこそ、私たちは「大丈夫、この患者は優秀な医師たちの手に委ねられている」と言って、それで自分を安心させてはいけません。いいえ、私たちは次のことを心に留めておくべきです。患者が医師の助けを受けるためには、まさに試練や苦しみを乗り越えなければならないのです。私たちは、キリストがその患者に忍耐を与え、医師たちを導いてくださるよう、痛みを込めて祈らなければなりません。なぜなら、医師たちは——特に謙虚さを欠いている場合——過ちを犯す可能性があるからです。

考えてみてほしい。家が崩れ落ちれば、その主人はそこに留まることはできない。それと同じように、体の主人である魂も、その家——つまり体——が崩れ落ちれば、そこに留まることはできないのだ。そして今、人々は鉄や鋼、あるいはビタミンA、B、Cなどを用いて、その「主人」を「家」に留めようと努めている……。つまり、科学の力を借りて病人を助けようとしているのだ。しかし、すべての病人が助けを受けられるわけではない。そして、そのような助けによって、彼らの痛みを伴う生活が単に続くだけ、あるいは、むしろ、その痛みそのものが続くだけなのである。何しろ、科学だけでは不十分だからだ。さらに信仰と祈りも必要なのである。時には、ここ修道院でさえ、世俗では医師だったシスターたちが、神への信頼や祈りよりも、医学を通じて患者をもっと助けたいと願っているのを見かける。しかし、心からの祈りは、これらのシスターたちを最高の医学の学位の保持者にするだろう。なぜなら、それを得ることで、彼女たちは人間の科学への依存を捨て去るからだ。もし人の内に、すべての人々に対する深い愛と苦しみとが育まれるならば、神の力が働き始める。ただ、魂の中に深い謙虚さが存在し、その力が自分のものだと考えて高慢になり、神を冒瀆することのないようにしなければならない。

私たちは、キリストが医師でも治せないような病気さえも癒やすことができるということを忘れてはなりません。しかし、キリストが介入するためには重大な理由が必要であり、病人のために祈る者は、深い信仰を持ち、キリストに深く献身している人でなければなりません。

— ゲロンダ、つまり、人々が苦しんでいる場合、医療の助けを求める必要はないということですか？

— いや、そんな意味じゃないんだ、兄弟よ！例えば、患者に酸素を与えず、窒息死させてしまえと言っているわけじゃない。私が強調したいのは、患者が人からの助けを受けながらどれほど苦しんでいるかということ、そして、患者たちが苦しむことがないように、キリストに助けてくださるよう祈らなければならないということだ。病気が重いなら、キリストに、その慈しみだけでこの病を取り除いてくださるようお願いしよう

。だって、キリストが患者の手をほんの少し撫でてくださるだけで、彼らの病気はすべて消え去り、彼らは回復するのですから！ そうなれば、薬も毒も一切必要なくなります。

もし神様が優しく人の顔を撫でてくださるなら、それはさらに良いことです。ましてや、神様がその人を抱きしめてくださるなら、人の心は和らぎます。お分かりになりますか？ しかし、それには強い信仰が必要です。患者自身に信仰がなければ、回復することはありません。

病気の子供たち

— ゲロンダ、今日両親に連れてこられたあの病気の子供は、とても苦しんでいます。

— 大丈夫、少しずつ病気は治っていくでしょう。しかし、彼には一生、その繊細さが残り、自分の病気のことを覚えているでしょう。その繊細さは、彼の精神的な支えとなるでしょう。

— ゲロンダ、白血病を患っている子供たちも、とても苦しんでいます。

— そのような子供たちには、聖体拝領が大きな助けとなります。多くの子供たちが、聖体拝領によって病から癒やされてきました。出血に苦しむ人々の出血を止めてくださるよう神に願う第145篇の詩篇を読みながら、¹¹⁵、白血病に苦しむ子供たちを神が助けてくださるよう、また、地中海貧血に苦しむ子供たちのために病院に十分な血液が確保されるよう祈りましょう。¹¹⁶ これらの子供たちは、ヘロデ王によって虐殺された乳児たちよりもさらに大きな苦しみを味わっています。¹¹⁷ 病に苦しむ幼い子供たちは、罪がないため、清らかな報いを受けるのです。来世では、ベツレヘムの乳児たちのように殉教者であり天使のような姿をした、どれほど多くの幼子たちと再会することになるだろう！ 生後2ヶ月の赤ちゃんに手術や注射、点滴が行われている！ あんなに小さな手から、どうやって静脈を見つけるといえるのか！ それでも彼らは針を刺し、刺し続ける……。脳腫瘍を患った乳児には放射線治療が行われ、その小さな頭は太い電線の間に置かれている……。大人ですら耐えられないようなことを、ましてや乳児にどうして耐えさせられるというのか！

— ゲロンダ、これらの赤ちゃんは、結局は回復するのでしょうか、それとも亡くなってしまうのでしょうか？

— ええ、もちろん多くの子は亡くなりますが、その親たちは……医療の助けなしに、どうして子供たちを置いておけるのでしょうか？

— ゲロンダ、小児科医たちが早産児の命を救おうと努力することには、何か意味があるのでしょうか？

— 医師たちは、できる限りのことをしつつ、同時にこれらの乳児たちのために祈らなければならない。「神よ」と医師たちは言うべきです。「もしこの子が生き延びて、残りの人生を苦しみながら過ごすことになるのなら、どうかこの子を御許へお迎えください」。しかし同時に、彼らは赤ん坊たちが聖なる洗礼を受けるよう配慮しなければな

¹¹⁵ 聖アルセニオス・カッパドキアスは、このような際に第145篇の詩篇を朗読していた。

¹¹⁶ サラセミア——グロビンタンパク質の合成障害を伴う遺伝性溶血性貧血で、地中海沿岸諸国に広く見られる。この病気は、進行性の貧血、肝臓や脾臓の肥大、黄疸などを引き起こす。——訳者注

¹¹⁷ マタイによる福音書2章16節を参照。

りません。そうすれば、これらの赤ん坊たちは、天国で灯されたろうそくを手に、医師たちを出迎えることになるでしょう。

そして、子どもたちが物事を理解できる年齢になったら、医師は診断結果を伝える際に、子どもたちにトラウマを与えないよう細心の注意を払わなければなりません。ある8歳の子どもに、医師が「君は目が見えなくなるよ」と言ったことがありました。その子の父親が、その子を連れて私のところに来て、子の目の前でこう話しました。「海外に連れて行って検査を受けたんです。そこで『この子は目が見えなくなる』と言われたんです。」これでは、たとえ健康な子どもであっても、そんなことを聞けば、心の傷が痛むかもしれません。ましてや病気の子どもならなおさらです！

病人が健康になるためには、ある程度の犠牲を払わなければならない

もし私たちが神に何かを願いながら、自分では何の犠牲も払わないなら、その願いは安っぽいものになってしまいます。もし私が手をこまねいて、「神様、どうかこの病人を癒してください」と言いながら、自分では何の犠牲も払わないなら、それは単に美しい言葉を口にしていただけ——風に向かって言葉を投げているようなものです。しかし、もし私に愛があり、犠牲があるならば、キリストはそれを見て、私の願いを叶えてくださるでしょう——もちろん、それが他者のためになる場合に限りませんが。ですから、人々が病気の人のために祈ってほしいと頼んできたときは、彼ら自身も祈るように、あるいは少なくとも自分の欠点を改めようと努めるように、伝えてください。

私のもとには、ある人々がやって来て、「私を癒してください。あなたが私を助けてくれると聞いたので」と頼んでくる。しかし、こうした人々は、何の努力もせずに助けを得ようとしているのだ。例えば、ある人に「甘いものを食べないで、神様に助けてもらえるようにこの犠牲を払いなさい」と言うと、彼らはこう返答します。「なぜ？ 神様は、この犠牲なしでも私を助けてくれないのですか？」 そんな人たちは、自分自身のためでさえ何かを犠牲にすることなどできません。ましてや、他人のために自分を犠牲にすることなどあり得ないでしょう！ しかし、糖尿病に苦しむ人々のためにキリストが助けてくださるよう、甘いものを食べない人や、不眠症に苦しむ人々にキリストが少しでも眠りを与えてくださるよう、眠らない人もいる。そうすることで、人は神と親密な関係に入る。そしてその時、神は人々に御自身の恵みを与えてくださるのだ。

誰かが、病気の家族のために祈ることができないと私に言うとき、私はその人に、その患者のために犠牲を払い、自分の健康を害するようなことを犠牲にするよう勧めます。

ある時、ドイツから一人の男性が私のカリヴァを訪ねてきました。彼には麻痺した娘がいました。医師たちはその少女の治療を断っていました。その不幸な父親は、完全に絶望していました。「子どもの健康のために、あなたも何か犠牲を払ってみてはどうですか」と私は彼に助言しました。「お辞儀もできないし、祈ることもできない。まあ、それはいいとして。ところで、一日にタバコを何本吸っている？」「4箱半です」と彼は答えた。「1箱だけにしておきなさい」と私は彼に言った。「残りの3箱半に費やすはずだったお金を、貧しい人への施しとして差し出しましょう。」「神父様」と彼は私に言った。「もし私の子供が元気になれば、タバコを完全にやめます。」「いや」と私は言った。「子供が治った時には、もう手遅れだ。今すぐタバコをやめなければならない。タバコをやめなさい。まさか、自分の子供を愛していないというのか？」「自分の子

供を愛していない？ いや、あの子のためなら6階から飛び降りるさ」と彼は答えた。「6階から飛び降りろなんて言ってるんじゃない。タバコをやめろって言ってるんだ。もしそんな無謀なことをして6階から飛び降りたら、子供を置き去りにすることになるし、君自身も魂を失うことになる。私はもっと簡単なことを勧めているんだ。タバコをやめることだよ。今すぐやめて！」しかし、彼はどうしてもタバコをやめようとはせず、結局、涙を流しながら私の元を去ってしまった！ こんな人をどうやって助ければいいのかだろう？ でも、あなたの話に耳を傾けてくれる人たちは、助けを得ているのだ。

別の時、徒歩での道のりで息を切らしてやって来た男がいた。私は彼がヘビースモーカーだと気づき、こう言った。「おかしい人だ、どうしてそんなにタバコを吸うんだ？ 病気になってしまうぞ。」少し息を整えると、彼は言った。「妻が重病で、死ぬかもしれないんだ。どうか、奇跡が起こるように祈ってほしい。医者たちも手も足も出ず、諦めてしまったんだ」と。私は彼に尋ねた。「奥さんを愛しているのか？」「愛しているよ」「それなら、なぜ自分から彼女を助けようとしらないんだ？ 彼女自身もできる限りのことはしたし、医者たちも可能な限りのことはした。あなたは今ここに来て、私にもできることをしてほしいと頼んでいる。つまり、神様が彼女を助けてくださるよう、私が祈ってほしいということだ。しかし、あなたの妻が助けを得られるように、あなた自身は何をしたのか？」「私になにができるというのですか、ゲロンダ？」と彼は驚いた。「もし——」と私は彼に言った。「あなたがタバコをやめれば、奥さんは回復するでしょう。」私はこう考えた。もし神様が、回復してもそれが奥さんの霊的な助けにならないと見なされたとしても、タバコをやめることで、この人は少なくとも、喫煙がもたらす悪から自分自身を解放できるだろう、と。一ヶ月が過ぎ、彼は嬉しそうに私のところへ来て、感謝を述べた。「ゲロンダ、」と彼は私に言った。「私はタバコをやめました。そして、妻は回復しました。」しばらくして、彼は再び私のところへやって来た。とても落ち込んだ様子で、がこっそりとまたタバコを吸い始め、妻が再び重病になったと語った。「さて」と私は彼に言いました。「今や、あなた自身もその治療法を知っているでしょう。タバコをやめてください。」

病人のための祈り

— ゲロンダ、病気の子供のために祈ってほしいと頼みに来た人たちがいます。それに、その子は回復するかどうかとも尋ねてきました。彼らには何と答えればよいのでしょうか？

— 彼らにはこう答えてください。「長老は祈ります。キリストはこの子を愛しておられ、その子のためになることは何でもなさいます。もし、その子が成長してより良くなるのをご覧になれば、キリストは長老の祈りを聞き入れてくださるでしょう。しかし、もしキリストが、その子が大人になっても霊的に良い状態にないのをご覧になれば、今すぐその子を御自身のもとへお連れになるでしょう。それは、キリストがその子を愛しておられるからです。」「求めなさい、と主は言われます。そうすれば、私があなたに与えましょう。」¹¹⁸ しかし、神が私の願いを叶えてくださるためには、私自身が神に身を委ねている必要があります。そうでなければ、なぜ神は私に命を与えてくださるのでしょうか？ 私が神から離れていくためでしょうか？ もし私が病人のために祈るなら、その人が回復した時も、亡くなった時も、私は喜びます。

¹¹⁸ マタイ7:7、マルコ11:24、ルカ11:10、ヨハネ16:24を参照。

— ゲロンダ、自分の健康のために祈るのは、正しいことでしょうか？

— むしろ、私たちの情欲から解放されるよう神に願うほうがよいでしょう。つまり、まず神の御国を求め、それを願うべきなのです。神に病の癒やしを願うことは、私たちの天の財産を浪費することになります。しかし、もし病がもたらす苦しみに耐えられないのであれば、神に癒やしを願い求めましょう。そうすれば、神は[私たちにとってより有益な]ようにしてくれます。

— ゲロンダ、もし患者自身が神に別のことを願っている場合、私たちの祈りはその患者の助けになるのでしょうか？

— もし病人が、自分だけが回復するようにと神に願い、他の病人たちの癒やしについては祈らないのであれば、それは間違った行いです。あなたも、修道女になる前は病院で働いていましたね。病人が「イエスの祈り」を唱えることができなかった時、あなたはどのようにしていましたか？

— 私が代わりに唱えていました、ゲロンダ。

— もちろん、あなたの行動は正しかったけれど、患者本人も祈るべきだったのです。

— 彼も祈っていました。「至聖なる聖母マリア、わが主よ、私を救ってください」と言っていました。でも、ゲロンダ、痛みを耐えること——それ自体が祈りではないのでしょうか？

— よくやった！ そう、もちろん、それも祈りです！ もし誰かが、「あの日に手術が予定されているから、自分のために祈ってほしい」と頼んできたなら、その頼みを聞いたその瞬間から、すぐに祈り始めなさい。その人が手術室に運ばれる日や時刻を待ってから、その時に初めて祈り始めるようなことはしないでください。また、礼拝の際、司祭が「病に伏す者たちよ」と唱える時には、心を込めて「主よ、憐れみたまえ」と歌ってください。もし、より音楽的に「主よ、憐れみたまえ」を歌うために、深く息を吸い込んで音叉に合わせて「ウー、ウー、ウー」と唸り始めたら、あなたの心もその「ウー、ウー、ウー……」や様々なつまらないことにふけってしまうでしょう。その一方で、不幸な病人たちは、苦しみ、もがきながら、あなたからのわずかな助けを待っているのです！ 何しろ、病人は痛みを苦しんでいるのです。あなたには痛みはありません。ですから、彼らが助けを得られるよう、彼らのために祈ってください。もしあなたが痛みでため息をついたり、病床で身もだえしながらうめいたりしないのなら、せめて病人のための祈りの中でため息をついてください。もし健康な人たちが、病人のために少しでも祈らないなら、まもなくキリストは彼らにこう言われるでしょう。「あなたがたは健康だったのに、苦しむ人々のために祈らなかったのか？ 『私はあなたがたを知らない...』」
/ 119

もし病人のために祈らなければ、病気は自然な経過をたどることになります。一方、その人のために祈れば、病気の自然な経過が変わる可能性があります。ですから、常に病人のために祈りましょう。

¹¹⁹ マタイ 25:12を参照。

第3章。 身体障害は神の祝福であること

身体障害に対する正しい態度

— ゲロンダ、身体的な障害は人に劣等感を抱かせることになるのでしょうか？

— ああ、なんて馬鹿げた話でしょう！

— しかし、ゲロンダ、障害者にはまさにそのようなことが起こることもあります。

— それは、彼らが自分自身を誤った位置づけをしているからなのです。身体的な障害が神からの祝福であることを理解すれば、人々は自分自身を正しく位置づけ、劣等感から解放されるのです。霊的な助けを得られず、その障害を喜びとして受け入れることができなかった幼い子が身体的な障害を抱えている場合、その子が劣等感に苦しむことには情状酌量の余地がある。しかし、その子が成長してもなお劣等感が残っているなら、それはその子が人生の最も深い意味を理解できていないことを意味する。ある9歳の少女の目に腫瘍ができ、医師たちはその目を摘出した。学校の子供たちはその不幸な少女をからかい、彼女は苦しんでいた。彼女の父親が私のカリヴァを訪れ、何が起きたかを話してくれた。「ゲロンダ」と彼は私に言った。「娘が私に求めるものは何でも買ってあげれば、彼女を助けることになると思ったんです。そうすれば、彼女は喜び、自分の障害による落ち込みを忘れるだろうから。そう考えたのは事実ですが、どうすればいいのでしょうか？ 私には他にも5人の幼い子供たちがいて、彼らはまだ何も理解していないため、彼女を羨ましがっているのです。」「一体、何を言っているのですか？」と私は彼に答えました。「あなたが話しているその慰めは、偽りの慰めです。それは問題を解決しません。もし今、彼女が頼むどんなドレスでも買ってあげたら、あと数年もすれば、今度は『メルセデス』を買ってほしいと言い出すだろう。そんな大金、どこから工面するつもりだ？そして、ある牧場主が自家用飛行機を持っていると耳にすれば、今度は飛行機を買ってほしいと要求してくるだろう。その時はどうするつもりだ？むしろ、あなたの子供が片目しかないことを喜びとして受け止められるよう、手助けをしてあげてください。彼女に、自分は殉教者だと考えさせてあげてください。多くの聖なる殉教者たちは、目をえぐり出され、耳や鼻を切り落とされ、世の人々から嘲笑されました。しかし、聖人たちは、病気や人々の嘲笑に苦しみながらも、屈することなく、不屈の精神で苦難に耐え抜いたのです。もしその少女がこれを理解し、自分の障害を神を賛美しながら受け入れるなら、神は彼女を殉教者の列に加えられるでしょう。考えてみてください。神は、その子が痛みを感じないように、目を取り除くように仕組まれたのです。そして、さらにその子を殉教者の列に加えられるのです！あなたにとって、これは些細なことでしょうか？何しろ、その少女には、その障害で償わなければならないような罪などないのです。そして、この障害によって、彼女は清らかな報いを受けることになるのです。」悲嘆に暮れていた父親は私に感謝し、心穏やかにその場を去りました。そして彼は、娘に、その障害が神からの祝福であることを理解させることに、実際に成功したのです。彼は、娘が神を賛美できるよう手助けしたのです。

そうしてその少女は、何の問題もなく成長し、大学の文学部に入学して卒業し、現在は教師として働いている。そして、すべてを手に入れているにもかかわらず、人生の

最も深い意味を理解できていないために苦しんでいる他の女性たちよりも、はるかに幸せに満ち溢れている。

もし人々が人生の最も深い意味を理解していなければ、神が彼らの救いのために与えてくださる祝福や好機でさえも、苦しみとなる。しかし、正しい心構えを持つ者は、あらゆることに喜びを見出す。足が不自由なのか？ それでも彼はそれを喜ぶ！ あまり賢くないのか？ それでも彼はそれを喜ぶ！ ハヤブサのように痩せている？ それでも彼はそれを喜ぶ。

もちろん、私は障害を持つ人々がどのような困難に直面しているかを理解しており、彼らのため、特に女性たちのために心から祈っています。というのも、若い男性にとって、障害や身体的な不自由はそれほど重くのしかからないからです。しかし、結婚を望む女性にとって、身体的な不自由は耐え難いものです。

そして、視覚障害のある方々の苦しみはどれほどでしょうか！ かわいそうな方々は、自分自身の身の回りの世話をすることができません。歩こうとすれば、つまずいて転んでしまいます……。私は祈りの中で、視覚障害のある方々が、せめて自分の身の回りの世話を少しでもできるよう、神様に少なくとも少しの光を与えてくださるようお願いしています。

— ゲロンダ、私も視力がとても悪くて、福音書からたった一章すら読めないことに落ち込んでいます。でも、あなたは「毎日福音書を一章ずつ読めば、人は聖化される」とおっしゃっていましたよね。

— なぜそんなことで落ち込んでいるの？ もしあなたが、福音書の章全体ではなく、ほんの数節だけを読んだり、その中からたった一つの言葉だけを読んだり、あるいは単にこの聖なる書物に敬虔に口づけをしたとしても、聖化されないというの？ それに、あなたがキリストのもとに来たのは、昨日ではないでしょう。それなら、今日までに読んで聞いたことについて、なぜ深く考えないのですか？ 大切なのは、正しい心構えを持つことです。こう自分に言い聞かせてください。「今、神は私がこのような状態であることを望んでおられる。数年前、神は私が別の状態であることを望んでおられたのだ」と。ある敬虔な弁護士が、年老いて視力を失いました。ある日、彼は私にこう言いました。「聖なる長老よ、私がせめて少しだけでも読めるようになり、愛する人たちの顔を見分けられるようになるよう、お祈りください。」「愛する人たちの顔なら、声で判別できるでしょう。読書に関しては……あなたは長年、本を読んできたではありませんか！ これからはイエスの祈りを捧げなさい。おそらく今、神はあなたにまさにそれを求めておられるのです。」この会話の後、その不幸な人は、目が見えていた頃よりも大きな喜びを感じるようになった。

身体障害に対する天の報い

もし、身体に障害があっても、耐え忍び、不平を言わなければ、私たちは大きな報いを受けることになる。なぜなら、すべての障害を持つ人々は、自分の中に何らかの「精神的な」貯蓄を積み立てているからだ。例えば、天国の貯蓄銀行には、耳の聞こえない人に対しては聞こえない方の耳、目の見えない人に対しては見えない方の目、足の不自由な人に対しては不自由な方の足のために、それぞれ口座が開かれている。これは実に素晴らしいことだ！ もしこうした人々が、心の情欲に対して、たとえ小さな功績であ

っても成し遂げれば、神から冠を授かることになる。考えてみてほしい——戦争の障害者たちは特別な年金を受け取っているし、さらに勲章も授与されているではないか。

もし人が美しさ、勇猛さ、健康を備えながら、それを行使せず、自らの欠点を断ち切ろうと努力しないならば、神は彼にこう言われるだろう。「この地上での人生において、お前は与えられた恵み——勇猛さなど——を存分に享受した！他に、私があなたに何をすべきというのか？何もない。」しかし、身体に障害を持つ人——生まれつきのものであれ、両親から受け継いだものであれ、あるいは後天的に得たものであれ——は、喜ぶべきである。なぜなら、来世において報いを受けるからである。特に、その障害が本人の過失によるものではない場合はなおさらだ。その場合、彼は「控除」や「差し引き」のない、純粋な報いを受けることになる。なぜなら、例えば、一生涯、足を伸ばすことも、座ることも、お辞儀をすることもできないなどという状態にあるなら、それは決して小さな[試練]ではないからだ。来世において、神はそのような人にこう言われるでしょう。「ここへ来なさい、わが子よ。そして、この玉座に永遠に座りなさい。」だからこそ、私はこう言うのです。もし私が知的障害者、盲人、あるいは聾者として生まれていたら、千倍も良かっただろう、と。なぜなら、その場合には、神からの報いが待っていたはずだからです。

もし、身体に障害のある人々が不平を言わず、謙虚に神を賛美し、神と共に生きるならば、彼らは楽園で最高の場所を占めることになるでしょう。神は彼らを、キリストの愛のために手足を捧げた殉教者や懲戒者たちと共に置かれるでしょう。そして今、楽園において、彼らは畏敬の念をもってキリストの手と足に口づけをしているのです。

— ゲロンダ、例えば、耳が聞こえない人がいて、その上、自分の境遇について愚痴をこぼしたり、不平を言ったりする場合はどうでしょうか？

— 小さな子供たちもぐずることがあります。神様は多くのことを大したことは考えません。考えてみてください。良い親は、すべての子供を等しく愛しつつも、特に弱々しい子供や障害のある子供を特別に気遣います。同様に、私たちの慈愛に満ちた父である神も、肉体的あるいは精神的に弱い子供たちに対して、彼らが神に好意を持ち、神が彼らの人生に介入する権利を認める限り、そのような配慮をなさるのです。

知的障害のある子どもたち

知的障害のある子供を持つ不幸な母親たちは、どれほど苦しんでいることか。こうした子供たちは絶えず騒ぎを起こし、あちこちを汚し……まさに苦行そのものだ！私は、知的障害のある子供を持つ母親と知り合いだった。その子はもう成長して健康な青年になったが、彼は想像を絶するようなことをするせいで、彼女は彼を手にも負えなくなっているのだ！。彼は排泄物で壁や家具、シーツをべとべとにしてしまう……。母親が家の中を片付け、掃除し、洗い、すべてを所定の位置に整えても、彼はすべてをひっくり返し、排泄物で汚してしまう。その不幸な女性は洗剤を彼から隠すが、彼はそれを見つけて飲み干してしまうのだ！ タンスごとバルコニーから投げ落とすことさえある。神の御加護のおかげで、今のところまだ誰も殺してはいない。そして、これは一日や二日の話ではない。何年も続いているのだ。

— ゲロンダ、知的障害のある人でも、謙虚さと優しさを持つことはできるのでしょうか？

— そんなはずがない！ 例えば、両親によくこの修道院に連れてこられる、あの知的障害のある子供を見てごらん。彼のような優しさを持つ、まともな人間がどこにいるのか？ 彼がどれほど熱心に祈り、どれほど深く頭を下げていることか！ 私がヘルニアで苦しんでお辞儀ができなかった時、両親が彼に「神父さんが病気で、お辞儀ができないんだ」と言った。すると、「僕が代わりにするよ！」と少年は言い、私の代わりにお辞儀をし始めたのだ！そして、汗だくになりながら、私の代わりにそのお辞儀を続けた。彼にはどれほどの愛と寛大さがあったことか！ある時、近所の子供の一人に殴られたが、彼はその暴行に対して手を差し伸べ、「元気でね」と言ったのだ。どうだ？たとえ福音書や山ほどの霊的な本を読んでいたとしても、「賢い」人の中で、誰がそんなことをするだろうか？数日前、この少年の家族全員が、彼が私と会うためにここを訪れました。彼らが到着すると、彼は私の隣に座り、妹は少し離れたところに座りました。妹が私から離れて座っているのを見て、彼は「お父さんの隣に座りなさい」と言い、自分の席に妹を座らせました。この子の姿に私は心を打たれ、エルサレムから持ち帰った大きなフィニフトの十字架を、祝福として彼に贈りました。十字架を手にとると、彼は「おばあちゃん、おばあちゃん！」と言いながら、この十字架を自分の祖母のお墓に置く様子を身振りで示したのです！想像してみてください！この小さな子は自分のために何も望まず、すべてを他人のために願っているのです！彼自身も「試験なし」で天国へ行くだけでなく、両親をも天国へと導いてくれるでしょう。

ああ、あの子の立場になれたらどんなにいいだろう！たとえ何も理解できなくても、たとえ話すことができなくても！神は私にすべての恵みを与えてくださったのに、それにもかかわらず、私はその恵みを恩知らずにも浪費してしまった。この小さな子と比べれば、神学者たちでさえも影が薄くなってしまいうだろう。私の思いは、天国において、聖なる神学者たちでさえ、神を知るという点で、このような子供たちよりも優れた立場にあるわけではないと告げている。そして、おそらく、義なる神は、このような子供たちにさらに大きなものを与えてくださるだろう。なぜなら、この地上の生活において、彼らは多くのものを奪われてきたからだ。

精神疾患

— ゲロンダ、もし人が憂鬱に陥ってしまったら、それを乗り越えるために何をすべきでしょうか？

— 神からの慰めが必要です。

— では、その慰めはどのようにして得られるのでしょうか？

— 人はキリストに「すがりつく」べきであり、そうすればキリストがその慰めを与えてくださる。というのも、愛欲はしばしば利己主義と絡み合っているからだ。統合失調症患者の多くは、感受性の強い人々である。彼らには些細な出来事が起きたり、何らかの困難を乗り越えられなくなったりするだけで、ひどく苦しむ。一方で、人を殺しておきながら、まるで何事もなかったかのように振る舞う者もいる。それに対して、感受性の強い人は、うっかり子猫の足を踏んでしまっただけで心を痛め、動揺のあまり眠れなくなってしまう。そして、二、三晩も眠れなくなれば、当然、医者のところへ駆け込むことになるだろう。

— ゲロンダ、心理学者たちは、精神疾患を患う人は、その原因を取り除けば助けられると言っています。

— ええ、しかし、その理由が実際に存在する限りでの話です。というのも、時には人々は思考に迷い込み、たとえ起こっていることが自然なことであり、あえて言えば正当なことであっても、気が狂いそうになってしまうことがあるからです。「もしかして、私には遺伝性の精神疾患があるのだろうか？　もしかして、私は病気ののだろうか？」——そうした人々はそう自問自答して苦しむのです。私は、学生時代、1日11時間も本を読んでいた青年を知っていた。彼は奨学金を受け取り、父親が病気だったため、家族の支えになっていた。学業の終盤、彼は繊細で感受性の強い人間だったため、疲れ果ててしまった。常に頭痛に悩まされ、卒業論文の発表も大変な苦勞の末にようやく終えた。その後、彼は「遺伝性の精神疾患を患っているのではないか」という考えに苛まれるようになった。遺伝などという話ではない。そもそも、1日11時間も読書をすれば、誰だって体力を消耗してしまうものだ。ましてや、勉強に励み、両親を支え、その上、繊細な心を持っている人ならなおさらのことだ！...

— ゲロンダ、ある子供が、父親が自殺した後、憂鬱や落胆に陥り始めました。もしかすると、これは遺伝的なものなのでしょうか？

— おそらく、その子は精神的なトラウマを負ったのでしょう。原因が遺伝にあると断定することはできません。さらに、父親がどのような状態にあったのか、何が自殺の原因となったのかも分かりません。もちろん、父親が内向的な人であれば、その子には支援が必要です。というのも、もしその子も内向的になり、さらに「自分は遺伝的に弱い」という考えを抱いてしまうと、実際に病気を発症してしまう可能性があるからです。

神は常に、人間が耐えられる範囲の試練を経ることを許しておられる。しかし、試練の重さに加えて、人々からの嘲笑という重荷も加わるため、魂はこの余分な重みに押しつぶされ、不平を言い始める。人々は嘲笑によって、狂人をさらに狂わせているのだ。というのも、狂気は初期段階であれば、一定の範囲内に抑えることができるからだ。昔は精神病院などなく、人が正気を失うと、鉄の門で部屋に閉じ込められていました。ペリステラという名の、ある狂った女性のことを覚えています。彼女は家に閉じ込められていました。子供たちは窓に石を投げつけ、彼女をからかった。その不幸な女性は激怒し、錠をガタガタと鳴らし、叫びながら、手近にあるものを何でも家から投げ捨てた。しかし、別の側面から見れば、ペリステラは多くの「賢い人」や「分別のある人」よりも優れていることがわかるだろう。

もう一つ、ある出来事を覚えています。ある家庭の長女は、少し知的障害がありました。しかし、彼女にはとても優しい心がありました。40歳でしたが、まるで5歳の子どものように振る舞っていました。大人にも子どもにも、彼女はいかに多くの誘惑にさらされていたことか！　ある日、両親は彼女に食事の支度を任せて、自分たちは畑仕事に出かけた。この娘の兄は畑から戻り、トウモロコシを運んできて、出来上がった昼食を畑へ持っていくことになっていた。そうすれば、両親も労働者たちも昼食をとれるからだ。かわいそうな彼女は菜園でズッキーニ、ナス、インゲンを摘み、それらを茹でる準備をしていた。ところが、彼女の妹——少女というより、まさに誘惑そのもの——がロバの耳をつかんで、摘んだ野菜のそばまで連れて行くと、ロバはそれをすべて食べてしまった。かわいそうな彼女は誰にも何も言わず、再び野菜を取りに畑へ向かった。彼女が再び野菜を摘んでいると、畑から兄が帰ってきたが、彼女はちょうど料理を火にかけているところだった。兄はラバから荷を下ろし、料理がまだできていないのを見て、彼女を殴

り始めた！　なんと悲慘な日々が、彼女に降りかかっていたことか！彼女の不幸な母は、娘の面倒を見る人がいなくなってしまうと考え、まず娘が死に、その後に自分が死ぬようにと神に祈った。そして実際、まず娘が死に、その後に母が亡くなった。

とはいえ、知的障害のある人々は、他の人々よりも恵まれた立場にある。こうした人々には何の要求も課されることはなく、それゆえ試験を受けることなく、あの世へと旅立つのだ。

子どもの障害に対する親の正しい姿勢

妊娠中に、子供が身体障害者や知的障害者として生まれることを知ると、中絶をして自分の子供を殺してしまう母親たちがいます。彼女たちは、その子供にも魂があるとは考えないのです。多くの父親が私のところにやって来てこう言います。「私の子供は障害を持つことになるのですか？　なぜ神はそんなことをなさるのですか？　私には耐えられません。」このような態度には、神に対するなんと厚顔無恥なことか、なんと頑固なことか、なんと利己的なことか！　そのような人々は、もし神が彼らを助けても、さらに悪くなるでしょう。ある日、ある学生が父親と共に私のカリヴァを訪ねてきた。彼は妄想によって正気を失っていた。この青年は電気ショック療法を受けていた。この不幸な青年は、自宅で少なからぬ苦難に耐えていた。彼は敬虔な人柄だった。地面にひれ伏して、頭を地面に打ち付けていた。「もしかすると、神は大地を憐れんでくださるかもしれない——」と彼は言った。「そして、大地を打った私をも憐れんでくださるかもしれない。」つまり、彼は、自分の打撃で傷ついた大地を神が憐れんでくださるなら、自分も憐れんでくださるだろうと考えていたのだ！　これは私に強い印象を与えた！　この青年は、自分自身を不適格だと考えていた。彼の状態が悪くなると、聖山を訪ねてきた。私は彼の考えを正し、一、二ヶ月ほどは彼もまああの生活を送っていたが、その後またすべてが最初から繰り返された。彼の父親は、知人に息子を見られることを望んでいなかった。それは彼の自尊心を傷つけるからだだった。彼は自身の利己心に苦しんでいた。「息子が人々の前で私の面目を失わせている」と彼は私に言った。それを聞いた息子は彼にこう言った。「ねえ、もう諦めたほうがいいよ！　僕は頭がおかしいんだから、自然体で振る舞うんだ！　まさか、俺を礼儀作法の狭い枠に押し込めようってのか？　お前には頭のおかしい子供が一人いるってことを自覚して、自然体で振る舞えよ。頭のおかしい子供がいるのはお前だけか？」——「おやまあ！——と私は思った。——この二人、一体どちらが狂っているのだろうか？」

ほら、利己主義がどれほどひどい結果を招くか、お分かりでしょうか？　父親でさえ、自分の子供の死を願うことさえあるのです！　私が世俗の世に暮らしていた頃、ある知的障害のある子供と知り合いでした。その子の両親は、誰かの家を訪ねる際、その子のせいで恥ずかしい思いをするのを避けるため、彼を連れて行かなかったのです！　そして、私がその子と話をしていたからといって、人々は私を嘲笑いました。しかし、私の心の中では、その子が、彼を嘲笑った人たちよりもずっと大切な存在だったのです。

第4章。 靈的法則について

靈的法則はどのように作用するのか

— ゲロンダ、どのような法則が「靈的な法則」と呼ばれるのですか？

— 説明しよう。自然界に自然の法則が存在するように、靈的な世界にも靈的な法則が存在する。例えば、人が重い物を上へ投げ上げるとしよう。力を込めて高く投げ上げれば上げるほど、その物はより強い勢いで落下し、粉々に砕けてしまう。これが自然の法則だ。そして靈的な世界においても、人が自分の高慢からより高く昇れば昇るほど、その靈的な転落はより激しくなり、その高慢の高さに応じて、彼は（靈的に）打ち砕かれることになる。なぜなら、高慢な者はある限界まで上昇するが、その後、転落して完全な失敗を味わうからだ。「高ぶる者は謙虚になれ。」¹²⁰ これは靈的な法則である。

しかし、自然の法則と靈的な法則の間には大きな違いがある。自然の法則は「無情」であり、人間はそれを変えることはできない。一方、靈的な法則は「情に富んでいる」ものであり、人間はそれを変えることができる。なぜなら[靈的な法則の場合]、人間は自らの創造主であり造り主である——慈悲深き神——と向き合っているからである。つまり、自分の高慢さによってどれほど「高く」飛び上がってしまったかをすぐに悟った人は、こう言うだろう。「ああ、神よ、私には自分のものは何一つないのに、それでもなお誇り高ぶっているとは?! お赦してください!」と言うでしょう。すると、すぐに神の慈愛に満ちた御手がその人を抱き上げ、優しく下へと降ろしてくれるので、その転落は誰にも気づかれることはありません。このように、人は転落によって打ちひしがれることはありません。なぜなら、その前に心の砕けと内なる悔い改めがあったからです。

福音の律法についても同じことが言えます。「剣を取る者は、剣によって滅びる。」¹²¹ つまり、もし私が誰かを剣で斬れば、靈的な律法によれば、私自身も剣で斬られるという代償を払わなければならないのです。しかし、もし私が自分の罪を自覚し、自らの良心が「剣で私を打つ」ように感じ、神に赦しを請うならば、靈的な法則は効力を失い、私は癒しの香油のように、神からの愛を受け入れることになる。

つまり、神の裁きの深み——その裁きは底知れぬ深淵である——において、私たちは、人が変わるときに神も「変わられる」ことを目の当たりにする。もし、言うことを聞かない子供が分別を身につけ、悔い改め、良心の呵責に苛まれているなら、父親は愛を込めてその子を優しく抱きしめ、慰めてくれる。人間は神の決定を変えることができるのだ! これは決して冗談ではない。あなたは悪を行っているか? 神はあなたの後頭部を軽く叩かれる。「罪を犯しました」と言うか? 神はあなたに御自身の祝福を与えてくださる。

神の尊い子供たち

ある人々は自分の罪を悔い改め、神は彼らを赦された。靈的な法則はもはや効力を失ったが、それにもかかわらず、人々は自分の罪を忘れられない。彼らは、この世で自

¹²⁰ ルカ18:14。マタイ23:12も参照。

¹²¹ マタイによる福音書26章52節を参照。

分の罪の報いを受けること——つまり、その罪の代償を支払うことを——神に切に願う。そして、彼らがそう強く望むゆえに、慈愛に満ちた神は彼らの誠実な願いを叶えてくださる。しかし、神は天の貯蓄庫である樂園に、彼らへの報いと、それに伴って蓄積される霊的な利息を蓄えておられる。そのような人々は、神の気高い子供たちであり、神にとって最も誠実な子供たちなのである。

『霊の牧場』¹²² という本には、羊飼いをしていたアッバ・ピメンについて記されている。ある日、ある男が彼を訪ねてきて、アッバに自分の小部屋で一晩泊めてほしいと頼んだ。客を泊めるための特別な場所がなかったため、アッバはその訪問者を自分が夜を過ごす場所に寝かせ、自分は洞窟の一つで夜を明かすことにした。朝、彼が小部屋に戻ると、訪問者はこう尋ねました。「アバ、昨夜はどのように過ごされましたか？ 寒くはなかったでしょうか？」 「いいえ」とアバ・ピメンは答えました。「私は快適に夜を過ごしました。ある洞窟に入ってみると、そこで眠っているライオンがいた。私も横になり、背中を そのたてがみに寄りかかった。ライオンの息で洞窟の中はストーブのように暑く、寒くはなかった。」「ライオンに食べられてしまうのではないかと怖くなかったのか？」 「いいえ」とアッバは答えた。「怖くはなかったが、野獣に食い殺されることは分かっている。」「どうしてそれを知っているのですか？」 「世俗では羊飼いだっただけです」とアッバは答えた。「ある時、私が羊の群れを放牧していると、通りかかった一人の男を私の犬たちが引き裂いてしまった。私はその人を救うこともできたが、無関心でいた。それ以来、私は絶えず神に、野獣に食い殺されるよう願っている。そして、神が私にその慈悲を授けてくださると信じている。」 実際、このアッバは野獣に食い殺された。しかし、来世において、そのような人々は最も選ばれた場所に置かれることになるだろう。

— ゲロンダ、ある教父の著書の注釈で、人は罪を犯したとき、その悪行の代償を払うために罰を受けなければならない、と読んだことがあります。

— いいえ、そうではありません。人が悔い改めれば、罰せられることはありません。キリストが彼を赦してくださるからです。教父たちの著作に対する注釈については、非常に注意深く読む必要があります。なぜなら、ある「注釈者」は善良な人物であっても、その解釈が間違っている可能性があるからです。注釈の著者がすべてを正しく解釈しているかどうか確信が持てないなら、教父たちの著作そのものを読むほうがよいでしょう。ある人が私に、預言者イザヤは木製ののこぎりで切り裂かれたと語りました。¹²³ それは、彼が人々の罪のために切り裂かれるべきだったからです。しかし実際には、預言者自身が、民の罪のために自分を切り裂いてくれるよう神に願い、この預言者の人々への偉大な愛が、神をその願いを聞き入れるように導いたのです。しかし、預言者の体にのこぎりがかけられた回数だけ、神は彼に冠を授けられた。ある事柄を理解するためには、一定の前提条件を持ち、何かを知っている必要がある。私が話したアッバ・ピメンは、預言者イザヤを理解できたでしょう。彼らに起こったことは同じではありませんでしたが、預言者イザヤの場合には、人々のための犠牲があったからです。

— ゲロンダ、現代でもそのような事例はありますか？

¹²² 参照：至福のヨハネ・モスクス『霊の牧場』。セルギエフ・ボサド、1915年。197頁。

¹²³ 『聖イザヤの生涯』を参照。『ロシア語による聖人伝』所収。5月。モスクワ、1907年。287頁。

— ええ、もちろんです。私がフィロフェイ修道院に住んでいた頃に起きたある出来事を覚えています。ある男が、自分の父親を殺したトルコ人を炉で焼き殺しました。その後、彼は悔い改め、聖山に来て修道士となり、熱心に修道生活の修行に励みました。しかし、彼は昼夜を問わず、神に自分を焼き尽くしてくださるよう祈り続けていました。ある日、修道院で火災が発生しました。当時、私はケラー（物資管理係）を務めていた。私はバケツやその他の容器に水を満たし、私たち全員で消火に向かった。そして火を消し止めたとき、その修道士が焼死しているのを発見した。その光景は今でも私の目に焼き付いている……一体何が起きたのだろうか？ 話しているその修道士は、当時八十五歳になっていた。彼の世話をしていたのは、75歳の別の僧侶でした。その日、病人の世話をしていた僧侶は、リウマチの痛みを少しでも和らげようと、彼の足に灯油を塗り、毛布で包んでから、燃えている暖炉のそばに寝かせました。栗の薪から燃えさかる炭が飛び出した。それが毛布に包まれた修道士の足に当たり、足が燃え上がり、彼自身も焼死し、修道院で火災が発生した。私はこの出来事にひどく動揺し、落ち着くことができませんでした！ その後、告解司祭が私にこう言いました。「動揺しないでください。彼自身が、自分の罪を償うために、神にそうなるよう願ったのです。起きたことは、神からの賜物でした。」

霊的な法則と神の愛

— ゲロンダ、霊的な法則は常に即座に作用するのでしょうか？

— 様々なことが起こります。しばしば、ただ驚くばかりです！ ある人は、ほんの少しばかり驕った途端、すぐに完全な失敗に終わります。つまり、霊的な法則は電光石火の速さで作用するのです。例えば、ある修道女が窓ガラスを拭いているとき、他の修道女よりも上手に拭いているという驕り高ぶった考えが頭をよぎります。するとすぐに、何かに気を取られて〔—不注意な動き〕——ガラスが割れてしまいます。一方、他のケースでは、霊的な法則はすぐには作用しないこともあります。

— ゲロンダ、霊的な法則が即座に作用する場合、それはどういう意味なのでしょう？

— それは良い兆候です。そのような場合、人は、神の愛が自分をおおっていることを理解すべきです。なぜなら、人は〔自分の過ちの一つひとつ〕を個別に償うのであって、〔後になって〕すべてをまとめて償うわけではないからです。しかし、もしその人に対して霊的な法則が働かないのであれば、それは危険なことです。それは、その人が父である神から離れてしまった子供であり、神の家に住んでいないことを示しています。常に高慢な態度をとっているのに、何事も起こらない人々がいます。それは、彼らの高慢さがあまりにも大きく、もはや人間的なものではなくなってしまったことを意味します。その高慢は極限に達し、悪魔的な高慢、すなわち[サタンの]驕りへと至っている。そのような人間もまた堕ちるが、それは頂点の反対側からである。地獄へとまっすぐに堕ちていく。彼はルシファー的な堕落を遂げるが、頂点のこちら側にいる者たちは、その堕落を目にすることはない。つまり、ここで言及されている人々は、現世において霊的な法則の適用対象とはならないが、彼らに対しては使徒の言葉が当てはまる。「*悪意ある者や魔術師たちは、より悪い方向へと進み、人を惑わし、また自らも惑わされる*」。¹²⁴

¹²⁴ テモテへの手紙第二3章13節。

— ゲロンダ、人の手によって作られたものが、それを生み出した者によって鑑賞されることで、傷んでしまうことはあるのでしょうか？

— はい、それは霊的な法則が働くからです。神が誰かから御自身の恵みを取り去ると、その人はその物、芸術作品などを台無しにしてしまいます。これは、自分の手による作品に驕り高ぶった者が、正気を取り戻し、分別を持つようになるためなのです。

— ゲロンダ、つまり、誰かが他人が作ったものを台無しにするということは、霊的な法則が働いたということなののでしょうか？

— ええ、もちろんです。

— でも、単に不注意や不器用さのために、人が何かを台無しにしてしまうこともあるのではないのでしょうか？

— そのようなケースは稀です。ですから、できる限り謙虚に生きてください。私たちには自分自身のものは何一つないということを心に留めておいてください。私たちが持っているものはすべて、神から与えられたものです。私たちが持っているものはすべて、神のものです。 私たちに属しているのは、罪だけなのです。もし私たちが謙虚にならなければ、私たちの利己心が打ち碎かれるまで、霊的な法則が絶えず私たちに対して働き続けるでしょう。そして、たとえそうであっても——たとえ神がすべてをそのように整え、私たちが死を迎えるまで私たちが謙虚にさせ続けるとしても、それでよいのです。

— ゲロンダ、人は、自分に対して霊的な法則が働き始めていることを理解できないことがあるのでしょうか？

— もし人が自分自身を省みなければ、何も理解できず、何からも助けを得られません。何一つその人のためになることはありません。

— ゲロンダ、つまり、霊的な法則が作用しなくなるのは、人が謙虚になった場合だけということですか？

— ええ、主に、謙虚さから、あるいはその人に尋ねるべきことが何もない場合に、それらは作用しなくなるのです。例を挙げましょう。ある女性が夫を絶えず殴っていましたが、夫は教師であり、評判を落とすことを恐れて、誰にも何も話さなかったのです。しかし、彼の場合、霊的な法則が働き始めました。彼は幼い頃に父親を亡くし、未亡人となった母親はわずかな年金で、彼を教師に育てようと懸命に努力した。ところが彼は、感謝の気持ちどころか、母親を殴っていたのだ。この不幸な母親は、一体どれほどの苦しみを耐え忍んだことか！ そして、彼が成長して結婚すると、神は妻に彼を殴らせることを許された。神は、彼が自分の罪の報いを受けるために、これを許されたのです。しかし、その後何が起きたかご存知ですか？ この男が亡くなると、彼の息子が未亡人である自分の母親を殴り始めました。こうして彼女もまた、自分の罪の報いを受けたのです。その後、彼らの息子も成長して結婚しました。彼が結婚した女性は、精神的に少し問題を抱えていました。彼女は単に彼を殴るだけでなく、その上「キリストは死からよみがえり、死をもって死を打ち破られた」と歌っていたのです！ 神が、この男にも自分の罪の代償を払わせるために、いかにすべてを仕組まれたかお分かりでしょうか？ しかし、彼の不運な〔狂った〕妻には問うべきことが何もなく、霊的な法則の働きはそこで終わりました。

— ゲロンダ、もし人が過ちを犯し、それを悔いているとしたら、その人はそのようにして自分の霊的な負債を償っているのでしょうか？

— 彼は（神に対する）自分の義務を自覚しているのか、それとも利己的に嘆いているのか。もし義務を自覚しているなら、もはや自分の過ちの代償を払うことはないだろう。しかし、もし義務を自覚していないなら、神はその報いも許されるだろう。例えば、キリスト教徒は他者に施しをすべきである。もし冷酷な人が施しをせず、ただひたすらお金を貯め続けるなら、強盗に襲われ、殴られ、お金を奪われることになる。こうして彼は自分の過ちの代償を払うことになる。もし私たちに〔霊的な〕負債があり、この世でそれを清算しないなら、それは非常に悪い兆候である。それは、神が私たちを見捨てたことを意味する。一方、もし人が何の罰も受けず、祝福だけを受けているなら、おそらくその人は何か善行を成し遂げ、その善行に対してキリストがこの世で二倍、三倍の報いを与えているのだろう。しかし、そのような人は自分の過ちの代償を払っていない。これもまた良くないことだ。仮に、私が10パーセントの善行を行い、キリストがそれに対して20パーセントの報いを与えてくださり、私に悲しみも動揺もないとしましょう。しかし、その場合、私は自分の罪の代償を払っていないことになります。

聖イサク・シリシが言うように、この世での不幸は地獄の苦しみ軽減する。¹²⁵ つまり、そのような場合、その人に対して霊的な法則が働き、地獄の苦しみのうちの一部が消え去るのである。

第6部。 死と来世について

「神様が私たち人間のためにこれほど多くのことをしてくださったのに、もし私たちが地獄に落ちて神様を悲しませてしまうとしたら、それは実に恩知らずなことです。神様よ、人間はおろか、一羽の小鳥でさえも地獄に落ちるなどという事態が起きませんように」

第1章。 死に対する態度について

死すべき記憶

— ゲロンダ、人は自分の誕生日に何を考えるべきでしょうか？

— 人は、将来訪れる死の日について考え、その偉大な旅に備えるべきです。

— ゲロンダ、もし墓から遺体を取り出した際に、故人の遺体が腐敗していなかった場合、その原因は、その人が悔い改めなかった罪にあるのでしょうか？

— いいえ、必ずしもそうとは限りません。原因は、彼が服用していた薬や、墓地の土壌の成分にある可能性もあります。しかし、いずれにせよ、遺骨を墓から掘り出した

¹²⁵ S. I. ソボレフスキーによるロシア語訳：「ここでその恥のために罰せられる者は、自らのゲヘナを味わう」。『聖人イサク・シリシの言葉』。モスクワ、1993年。365頁。

際に、故人の遺体が腐敗していなければ、それは彼が自分の罪の一部を償っていることになります。これは、死後も彼が他者から嘲笑の的になってしまうからです。

— ゲロンダ、死とは、人間に起こる中で最も疑いようのない出来事です。それなのに、なぜ私たちはそれを忘れてしまうのでしょうか？

— 知ってるか、昔、共同生活の修道院では、ある修道士に、他の修道士たちに死を思い起こさせるという務めが与えられていたんだ。他の兄弟たちが務めをこなしている時、その修道士は彼らのところへ近づき、一人ひとりにこう言った。「兄弟たちよ、私たちには死が待っている。」私たちの命は、死すべき肉体に包まれている。この偉大な神秘は、ただ肉体だけで成り立っているため、死にたくない、死の話すら聞きたくないという人々には、そう簡単に理解できるものではない。そのような人々にとって、死は二重の死であり、二重の悲しみとなる。しかし幸いなことに、慈愛に満ちた神は、少なくとも年配の人々が、自分たちに迫り来る老いの兆しから何らかの益を得られるように、すべてを定められた。何しろ、高齢者は当然ながら若者よりも死に近づいているからだ。髪は白くなり、かつてのような活気はなく、力は徐々に衰え、よだれが垂れ始める。こうして彼らは謙虚になり、この世の儚さについて深く思索せざるを得なくなるのである。たとえ高齢者が「はしゃぎたい」と思っても、自分たちに起きているあらゆる出来事がそれを妨げるため、そうすることはできない。あるいは、自分と同じ年齢、あるいはそれより若い高齢者が亡くなったという話を耳にすると、彼らもまた死について思い巡らすのだ。村で葬儀の鐘が鳴ると、喫茶店に座っていた年配者たちが立ち上がり、十字を切って、「誰が亡くなったのか、いつ生まれたのか」と尋ねる様子を見たことがあるだろうか？「ああ」と彼らは言う。「ほら、見てごらん、ついに私たちの番が来た！ 私たちも皆、この世を去るのだ！」彼らは、自分の年月は過ぎ去り、人生の糸は終わりに近づき、死が迫っていることを理解している。そうして、年配の人々は常に死について考えている。試しに小さな子供に「死を心に留めておきなさい」と言ってみてください。その子は「トゥー・ラ・ラ」と答えて、またボールで遊びに行くでしょう。もし神様が小さな子供に、自分が死ぬということを理解させてしまったら、そのかわいそうな子は人生に失望し、何も魅力的ではなくなってしまうため、完全に無気力になってしまうでしょう。だからこそ、神は慈愛に満ちた父として、子供が「死」とは何かを理解できないようにすべてを整え、子供が気楽に、そして楽しそうにボールで遊べるようにしてくださるのです。しかし、子供が年を重ねるにつれて、死とは何かを徐々に理解していくようになります。

考えてみてください。修道院に入ったばかりの修道士、特に若い者は、死を心に留めることなどできません。彼は自分の前に長い人生が広がっていると信じ、死という問題には関心を寄せません。使徒ペトロが「若者たちを呼び、死んだアナニアとサフィラを運び出させなさい」と言ったことを覚えていますか？¹²⁶ 修道院では、通常、若き修道士たちが死者を埋葬する。物思いにふける年配の修道士たちは、故人の遺体に少量の土を撒く。彼らは敬虔な気持ちで、一握りの土を遺体のみに撒き、決して故人の頭には撒かない。ある修道院での葬儀に立ち会った際、私は不快な光景を目撃した。故人が埋葬され、土がかけられる際、司祭は「土より出で、土に帰る」と唱えていた。その間、すべての修道士たちは慣習に従い、深い敬意と謙虚さをもって、亡くなった兄弟の遺体に

¹²⁶ 使徒行伝5章6～10節を参照。

一握りの土を投げかけていたが、一人の若い修道士は修道服をまとい直し、シャベルを握むと、まるで機械のように無造作に、シャベルに乗ったあらゆるものを故人の上に投げつけ始めた：土、石、木の破片……彼は、自分がどれほど立派かを示すためにそうしていたのだ！まさに、自分の力と働きぶりを示す絶好の機会を選んだのである！もし修道院で木を植えたり、溝を埋めたりする作業があり、彼が親切さと献身的な姿勢を示して、「他の修道士たちは年寄りだ。彼らにどんな仕事が期待できるのか？私がやってみよう」と言ったなら話は別だ。その場合、彼は少しばかり疲れはするだろうが、他の修道士たちの負担を軽減できたはずだ。いや、ここでは死んだ動物を見かけただけでも、その姿に哀れみを覚えるものだ。ましてや、自分の兄弟が墓の中に横たわっているのを見たら……それなのに、あなたはまるで土すくいのように、無関心なまま彼を土や石で埋めてしまう……これらすべてが、この若い僧には死の意識が全く欠けていたことを示している。

死にたいと思っても、死ねないものだ

— ゲロンダ、最終的な診断が出ました。あなたの腫瘍は悪性です。これは最も悪性度の高いがんの一つです。

— ハンカチでも持ってきてくれ。そうしたら踊り出してしまおうぞ！「健やかであれ、さようなら、この惨めな世界よ！」という踊りを踊るんだ。人生で一度も踊ったことはないが、死が近づいているという喜びで、今まさに踊り出してしまおうだろう。

— ゲロンダ、医師によると、まずは腫瘍を縮小させるために放射線治療を受け、その後、手術を行うとのことでした。

— なるほど。まずは空軍が爆撃を行い、その後、地上部隊が攻撃に突入するわけですね！それなら、私が[すぐに]上に行って、そこで何が起きているかお伝えしましょう！……中には、高齢者であっても、医師から「あなたは死にます」とか「生き残る可能性は50%です」と言われると、落ち込んでしまう人がいます。彼らは生きたいのです。一体何のために？不思議な話です！若い人が生きたいと思うなら、まだしも、それにはある程度の正当性があります。しかし、高齢者が生き延びようと努力するのは、私には理解できません。痛みを何とか耐えられるように治療を受けるのであれば、それは理解できます。つまり、その人は寿命を延ばしたいわけではなく、死ぬまで少しでも痛みを耐え、自分の身の回りの世話をできる状態でありたいだけなのです。そのような治療には意味があります。

— ゲロンダ、私たちは神に、あなたの寿命を延ばしてくださるようお祈りしています。

— なぜですか？詩篇には、私たちの寿命は七十歳だと書かれていますよね？¹²⁷

— しかし、詩篇の作者はこう付け加えています。「もし力があれば、八十歳まで」と……

— ええ、でもその後、彼はこうも言っています。「……労苦と病を彼らに増し加える。」¹²⁸ですから、来世での安息の方が良いのです！

— ゲロンダ、人は謙遜の心から、霊的に来世への準備ができていないと感じ、準備を整えるためにあと少し生きたいと願うことはあるのでしょうか？

¹²⁷ 詩篇89篇10節。

¹²⁸ 同上。

— それはもちろん良いことです。しかし、そのような人はどうして分かるのでしょうか。もしかすると、もっと長く生きれば、さらに悪くなるかもしれないのに？

— ゲロンダ、人はいつ、死と親しくなり、和解するのでしょうか？

— いつ？ もし人の内にキリストが宿っているなら、死は彼にとって喜びである。しかし、人生に疲れたからといって死ぬことを喜ぶのは、正しいことではない。人が死を喜ぶとき——その言葉の善き意味において——死はその人から遠ざかり、どこかの臆病者のところへやってくるのだ！ 死にたいと思っても、死ぬことはできない。 のんきに暮らしている人は、死を恐れる。なぜなら、この世の生活が彼に喜びをもたらし、死にたくないからだ。 もし誰かがそのような人に死について話しかけると、その人は「木を三回叩いてくれ！」と答えるだろう。一方、苦しんだり痛みを感じたりしている人は、死を救いだと考え、「私を迎えに来てくれる死がまだ来てくれないなんて、残念だ……どうやら、途中で何かの障害に遭遇したようだ」と言うのだ。

死を望む者はほとんどいない。大多数の人々は、この人生で何かを成し遂げたいと願っており、それゆえに死にたくないのだ。しかし、慈愛に満ちた神は、人が成熟したとき、に死ぬよう定められている。とはいえ、霊的な人は、若かろうが年老いていようが、生きていることにも、やがて死ぬことにも喜びを見出さなければならない。ただ、自ら死を求めようとしてはならない。それは自殺になってしまうからだ。

この世に死に、霊的によみがえった人にとって、死に関して不安や恐れ、心配はまったくありません。なぜなら、その人は喜びをもって死を待ち望んでいるからです。それは、その人がキリストのもとへ行き、キリストのそばで喜びを分かち合うことになるからである。しかし、この世に生きている間も、その人は喜びを感じている。なぜなら、この世においてもキリストと共に生き、まだ地上に生きているうちに、天国の喜びの一端を味わっているからである。そのような人は、天国には、自分が地上に生きている間に経験している喜びよりも、さらに高い喜びが存在するのかと自問する。 ここで言及されている人々は、愛と自己犠牲の精神をもって精進している。死を目前に控え、日々それについて思索を重ねることで、彼らはより霊的に死に備え、大きな大胆さをもって精進し、虚栄に打ち勝っている。

死の床にある患者たち

— ゲロンダ、数日間、生死の境をさまよっていたが、魂が抜け出せずにいる人のために祈ってほしいと頼まれました。

— なぜ魂が抜け出さなかったのですか？ 彼は懺悔をしましたか？

— いいえ、彼は懺悔をしたがりません。つまり、ゲロンダ、魂が旅立つ際の人の苦しみは、その人の罪深さに原因があるのでしょうか？

— いいえ、それは必ずしもそうとは限りません。また、人の魂が静かに穏やかにその人から離れていくからといって、その人が良い状態にあったとも限りません。たとえ人が人生の最期の瞬間に苦しみや苦痛に苛まれていても、必ずしもその人に多くの罪があるとは限りません。 ある人々は、深い謙虚さから、神に「不名誉な最期を遂げさせてほしい」と切に願い求めます——死後、誰にも知られずにいられるようにと。あるいは、誰かが不名誉な最期を遂げるのは、[霊的に]わずかな負債を清算するためかもしれません。 例えば、ある人は生前、実力以上に称賛されていたため、神は死の瞬間にその人が奇妙な振る舞いをすることを許し、人々の目からその評価を落とすようにした。また別

のケースでは、神は死の瞬間に苦しむことを許すことで、傍にいる人々に、この世で心を正さなければ、あの世の地獄で魂がいかに辛い目に遭うかを理解させるのです。さて、もしあなたの「霊的な」書類が整っているなら（つまり、あなたが良好な霊的な状態にあるなら）、あなたは地上の人生から永遠の命へと移行行く際、タンガラシュキたちはあなたに近づくことさえできないのです。

— ゲロンダ、人が死の床にある場合や重い病気にかかっている場合、その人に真実を伝えるのは正しいことでしょうか？

— それはその人がどのような人間かによって異なります。時々、がんを患っている人が私にこう尋ねてきます。「ゲロンダ、私は生き残れると思いますか、それとも死ぬと思いますか？」もし「死ぬ」と告げれば、その人はその場で、あなたの目の前で——動揺のあまり——死んでしまうでしょう。もしそれを告げなければ、その人は勇気づけられ、病気を恐れることなく向き合うことができるのです。「成熟した」患者は、自らその十字架を背負い、その後自分に降りかかるあらゆる困難を乗り越える力を見出します。つまり、その人はあと数年生き延び、家族を支え、自ら死への準備を整えるだけでなく、愛する人たちがその死に備えるための機会も与えることができるのです。もちろん、私はそのような人々に「千年生ける」とか「あなたの病気など大したことではない」などとは言いませんが、こう伝えます。「人間としてあなたを助けるのは難しい。もちろん、神にとって不可能なことなど何もないが、精神的に自分自身を整えるよう努めてほしい。」

— ゲロンダ、重病の人の家族は、その人が「自分は死ぬかもしれない」という考えを抱かないようにと、聖体拝領をさせることを恐れることがあります。

— つまり、その人は、自分が死にかけていることに気づかず、動揺しないようにするために、聖体拝領を受けずに死ぬべきだということになるのでしょうか？ そのような人の家族が、彼にこう言ってあげればいいのです。「神の聖体拝領は葉のようなものです。それはあなたを助けてくれます。聖体拝領を受けたほうがよいでしょう。」そうしてその人は聖体拝領を受け、助けを得ると同時に、来世への準備も整えるのです。

— ゲロンダ、この世を去ろうとしている人々に、聖体拝領の秘跡を授けるべきでしょうか？

— 神に魂を捧げることができない人に対しては、「魂が肉体から離れる際の儀式」が執り行われます。聖体拝領の秘跡は、臨終を迎えている人だけでなく、すべての病人に施されます。

— ゲロンダ、臨終にある人が口にする言葉は、その人の霊的な状態と関係があるのでしょうか？

— 安易に結論を出さないようにしましょう。魂が肉体から抜け出す瞬間、痛みや重苦しさを感じ、顔に苦痛の表情を浮かべることがあり、周囲の人々は、その人が霊的に良くない状態にあると誤解してしまうことがあります。しかし、顔に浮かぶ苦痛の表情は、怒りや恐怖の表情とは異なります。人が苦しみ、痛み、苛まれている時、周囲の人々はそれを「魂を奪いに來た悪霊と戦っているのだ」と解釈してしまうことがあるのです！

— ゲロンダ、この世を去る際、霊的に整った状態にある魂は、試練を経るのでしょうか？

— 精神的に整った人の魂が天に昇るなら、タンガラシュキはその魂に害を及ぼすことはできない。しかし、もしその魂が精神的に整っていなければ、タンガラシュキはその魂を苦しめる。時には、次のようなこともある。神は、人の魂が肉体から離れるその瞬間に、苦難の光景を見ることを許される。それは、まだ生きている私たちを助けるためであり、私たちがこの世のうちに善行を積み、自らの罪を償うように促すためである。「至福のテオドラの生涯」を覚えていますか？¹²⁹ つまり、神は、他の人々が助けを受け、悔い改めることができるように、一部の人々に煉獄の苦しみを目撃させるのです。「聖エウフロシノスの生涯」¹³⁰ には、修道院の修道院長がある幻視を見た後、他の修士たちがそれを見て助けを得られるようにと、手にリングを持ったまま目覚めたという記述があります。

また、時には神は、死にかけている人の魂が誰かと語り合うことを許されることがあります。それは、その死にゆく人自身、あるいはその言葉を聞く人々が悔い改めるためです。ご覧の通り、神には人を救うための多くの方法があります。ある場合には天使を通じて人を助け、またある場合には試練や様々なしるしを通じて助けるのです。私は、夫や義母に対して野蛮で非人道的な扱いをする女性を知っていました。彼女は二人を殴っていました。彼女自身は近所を回って悪口を言いふらし、年老いた義母を畑で働かせるように命じていました。不憫な老婦人は毎日、足を引きずりながら2時間も歩いて畑へ行き、朝から晩まで誰にも文句を言わずに畑仕事をしていた。そしてある日、疲れ果てて帰宅した彼女は床に倒れ込み、嫁にこう言った。「大天使ミカエルが私の魂を迎えに来たわ。血を拭いてくれ、娘よ。」「どんな血ですか？」——嫁は恐怖に駆られて尋ねた。なぜなら、血などどこにも見当たらなかったからだ。「ほら、娘よ、血よ、血が流れている！拭いて、拭いて！」嫁が辺りを見回して血を探している間に、老婆は神のもとへ旅立った。

この出来事をきっかけに、嫁は分別を身につけ、生き方を改めた。野獣のような女から、羊のような優しい女性へと変わったのだ。彼女が、義母がこれらの言葉を残して息を引き取るのを目の当たりにし、大天使ミカエルが剣を抜き放ってその魂を連れ去ると信じたことは、神の摂理によるものでした——彼女が恐怖を感じ、悔い改めるためです。つまり、神は彼女が正気に戻るよう、彼女が理解できる言葉で彼女に語りかけたのです。おそらく、この女性は善良な心を持っていたのだろう。

— ゲロンダ、もし死の床にある人が、亡くなった親族を呼び寄せようとしたら、それはどういう意味なのでしょう？

— 多くの場合、それは死にゆく人のそばにいる他の人たちに手本を示すために行われます。私はある裕福な女性を知っていました。彼女は聖人のような女性でした。彼女は結婚せず、姉と暮らしており、自分の全財産を姉に譲り渡していました。彼女の義兄、つまり姉の夫は、彼女より後に亡くなりました。最期の時、彼は彼女を呼びかけました。「こっちへおいで、デスピナ。お互いに許し合おう。許してくれ……私は君をどれほど苦しめたことか、許してくれ！」「どこにデスピナがいるというのか？」と周囲の人々は尋ねました。「ほら、あそこにいるじゃないか。見えないのか、あそこに！」と彼は答え、そして神のもとへ旅立ちました。

¹²⁹ 『棺の前の裁き、あるいは聖テオドラの試練』を参照。サンクトペテルブルク、1995年。

¹³⁰ 聖エウフロシノスの記念日は9月11日である。『ロシア語版聖人伝』9月編（モスクワ、1902年）257-260頁を参照。

— ゲロンダ、人は死ぬ間際に、すでに亡くなった人に対して許しを請えば、許されるのでしょうか？

— 神は、人々がせめてそのような形ででも赦しを得られるように、これを許しておられるのです。なぜなら、人は死の床において悔い改め、傷つけた人々から許しを請う必要性を感じるからです。

自殺

— ゲロンダ、人生で困難に直面すると、すぐに自殺を考え始める人もいます。

— そこには利己心が絡んでいる。自ら命を絶つ人々の大半は、悪魔の囁きに耳を傾けている。悪魔は彼らに、「自ら命を絶てば、今感じている内なる苦しみから逃れられる」と囁くのだ。こうした人々は、利己心から自ら命を絶つのである。例えば、ある人が窃盗を犯し、その後その窃盗が発覚して明らかになったとき、その泥棒は「もうだめだ、これで自分の評判を台無しにしてしまった」と言い、悔い改め、謙虚になり、懺悔して自分の魂を永遠の苦しみから解放する代わりに、自ら命を絶ってしまう。またある人は、自分の子供が麻痺しているという理由で自ら命を絶つ。「どうしてこんなことが？ 私のような者が、麻痺した子供を持つなんて？」と、そのような人は言い、絶望に陥る。しかし、もし自分の子供が麻痺していることへの責任が自分自身にあり、その過ちを認めるのであれば、悔い改めるべきだ。どうして自ら命を絶ち、自分の子供を路頭に迷わせるなどということができるだろうか？ そうすれば、その罪はさらに重くなるのではないだろうか？

— ゲロンダ、精神疾患を患っていたために自殺したという話をよく耳にします。

— 精神疾患を抱える人々が自殺によって命を絶つ場合、その精神状態が正常ではないため、罪を軽減する事情が認められます。たとえ空にただ雲が集まっているのを見ただけでも、そのような人はすでに心の重さを感じ始めます。もしそこに何らかの精神的な不調が加われば、その重苦しさはさらに増すことになります。しかし、精神疾患を患っていないにもかかわらず自殺によって命を絶った人々については、教会は祈りを捧げない。これは、教会が亡くなった異端者たちのために祈りを捧げないのと同じである。こうした人々を、教会は神の裁きと慈悲に委ねる。司祭は、そのような人々の名前を聖体礼儀で唱えず、彼らのために聖体の断片を取り出さない。なぜなら、自殺によってそのような人々は命を拒絶し、それを軽蔑しているからである。しかし、命とは神からの賜物である。それにもかかわらず、自殺によって命を絶つことは、まるでその賜物を神の顔に投げつけるようなものである。

しかし、私たちは自殺によってこの世を去った人々のために、慈愛に満ちた神が彼らのためにも何かをしてくださるよう、熱心に祈らなければなりません。なぜなら、彼らがなぜ自ら命を絶ったのか、また、最期の瞬間にどのような心境にあったのか、私たちには分からないからです。もしかすると、彼らの魂が肉体から離れようとしたその瞬間、彼らは悔い改め、神に許しを請い、その悔い改めが受け入れられたのかもしれませんが。そして、おそらく、主の天使が彼らの魂を迎え入れたのかもしれませんが。

ある村に住んでいて、ヤギの世話をしていた少女の話聞いたことがある。彼女は牧草地にヤギを繋いでおき、その近くで遊んでいた。ある日、彼女が夢中になって遊んでいる間に、ヤギが紐をほどいて逃げ出してしまった。少女はヤギを探したが、見つからず、ヤギを連れて帰ることなく家に戻った。父親はひどく怒り、彼女を殴り、家から追

い出した。「行ってヤギを探してこい！——と彼は言った。「もし見つからなければ、首を吊ったほうがまだ。」不幸な少女はヤギを探しに出かけた。夜になっても、彼女はまだ家に帰ってこなかった。両親は心配になり、彼女を探しに出かけ、木にぶら下がっている彼女を見つけた。彼女は、ヤギが縛られていたロープで首吊りの輪を作り、首を吊っていたのだ。不運な少女は純真すぎて、父親の言葉を文字通りに受け取ってしまったのだ。彼女は墓地の塀の外に埋葬された。

もちろん、教会が彼女を教会の敷地内に埋葬したのは正しい判断だった。教会は、些細なことで自ら命を絶とうとする人々を思いとどまらせるためにそうしたのだ。しかし、キリストがこの少女を天国に迎え入れても、それは正しいことだろう。

第2章。

「他の希望を持たない者たちのように、悲しむな」¹³¹

子供たちの死

— ゲロンダ、ある母親が9年前に子供を亡くしました。今、彼女は、せめて夢の中でもその子に会って慰めを得られるよう、あなたに祈ってほしいと頼んでいます。

— その子は何歳でしたか？ まだ小さかったのですか？ それは重要なことです。もしその子が小さかった場合、そして母親が、その子が現れても心の平安を失わないような状態にあるならば、その子は彼女のもとに現れるでしょう。その子が現れない理由は、彼女自身の中にあるのです。

— ゲロンダ、もし子供が、そう頼んでいる実の母親ではなく、他の誰かのところに現れることはあり得るのでしょうか？

— そんなはずがない！ 神はすべてを「私たちの益となるように」整えてくださるのだから。ある若者が亡くなったと聞かされると、私は悲しむが、それは人間としての悲しみだ。なぜなら、物事をより深く考察すれば、人は大人になるほど、より多くの闘いを強いられ、より多くの罪を積み重ねていくことがわかるからだ。とりわけこの世の人々は、長く生きれば生きるほど、自分の心配事や不正などによって、自分の状態を改善するどころか、かえって悪化させてしまう。だからこそ、神が幼少期や青年期にこの世から連れ去る人は、失うものよりも得るものの方が大きいのだ。

— ゲロンダ、なぜ神様はこれほど多くの若者が死ぬことを許されるのでしょうか？

— まだ誰も、いつ死ぬかについて神と契約を結んだことはありません。神は、一人ひとりをその人生において最もふさわしい瞬間に、その人だけにふさわしい特別な方法で、つまりその人の魂を救うために連れ去られます。もし神が、その人がより良くなると見れば、その人を生き続けさせます。しかし、その人が悪くなるだろうと見極めた場合、神はその人を救うために連れ去る。そして、罪深い生活を送っているものの、善を行う気がある人々については、彼らが実際に善を行う前に、神は彼らを御許へ連れ去る

¹³¹ 1テサロニケ4:13。

。神がこのように振る舞うのは、もし好機が巡ってくれば、そうした人々も善を行うだろうと知っているからだ。つまり、神は彼らに「苦勞する必要はない。あなたがたが持っているその善意の心だけで十分だ」と告げているようなものです。また、非常に善良な人々については、樂園には花のつぼみも必要だからという理由で、神は彼らを御許へ連れ去るのです。

もちろん、亡くなった子どもの両親や親族にとって、これらすべてを理解するのは容易なことではありません。考えてみてください。小さな子が亡くなると、キリストはその子をまるで小さな天使のように御許へ迎え入れてくださるのに、両親は泣きじゃくり、胸を叩いて嘆き悲しんでいます。本来なら喜ぶべきなのに。だって、その子が成長したらどんな人になっていたか、彼らにどうしてわかるのでしょうか？ 彼は救われたでしょうか？ 1924年に私たちが小アジアから船で脱出する時、私はまだ赤ん坊だった。船は難民で溢れかえっていた。私は甲板に横たわり、母にオムツで包まれていた。ある船員がうっかり私の上を踏んでしまった。母は私が死んだと思い込み、泣き出した。同じ村出身の女性が布をほどいて、私に何事もなかったことを確認してくれました。でも、もしあの時私が死んでいたら、間違いなく天国に行っていたでしょう。今ではもうこれだけの歳になり、これだけのことを成し遂げてきましたが、それでも自分が天国に行けるかどうか、まだ確信が持てません。

しかし、それだけでなく、子供たちの死は親たちにとっても助けとなります。親たちは、自分の子供が亡くなったその瞬間から、天国に自分たちのために祈ってくれる存在が現れることを知っておくべきです。親たちが亡くなったとき、子供たちはリピダたちと共に天国の門へとやって来て、父と母の魂を出迎えてくれるのです。これは実に大きな喜びです！ さらに、病気や障害に苦しめられていた幼い子供たちに対して、キリストはこう言われるでしょう。「天国へ来て、そこで一番良い場所を選んでください。」すると子供たちはキリストにこう答えます。「ここは素晴らしいですが、キリスト様、私たちと一緒にママもいてほしいのです。」そしてキリストは、子供たちの願いを聞き入れ、彼らの母親を救う方法を見つけ出すのです。

もちろん、母親たちはもう一方の極端に走ってはいけません。亡くなった子どもが聖人になったと信じ、そのせいで錯覚に陥ってしまう母親もいる。ある母親は、亡くなった息子が聖人になったと信じていたため、祝福として息子の遺品を私に渡そうとした。「祝福してください」と彼女は私に尋ねました。「人々に彼の遺品を祝福として渡してもいいのでしょうか？」——「いいえ」と私は答えました。「やめたほうがいいでしょう。」また、別の母親は聖木曜日に、教会の真ん中に立てかけられた十字架に、ドイツ軍に殺された自分の子供の写真を貼り付けました。彼女はこう言っていた。「私の息子も、キリストと同じように苦しんだのです。」十字架の前の夜、教会に泊まり込んだ女性たちは、彼女を傷つけないよう、邪魔をせず、そっとしておいた。彼女に何を言えるのか？ 彼女の魂は深く傷ついていたのだから。

悲しむ者への慰め

— ゲロンダ、人々が突然の死を恐れないためには、どれほど大きな力が必要なのでしょう！

— もし人々が人生の最も深い意味を理解していれば、死に対して正しい向き合い方をする力を見出すでしょう。なぜなら、人生の意味を理解した人は、死を精神的な観点

から捉えるからです。原付バイクで事故に遭うティーンエイジャーがどれほど多いか、ご存知ですか！ バイクで事故に遭う若者がどれほど多いか、ご存知ですか！ 若者たちはバイクを後輪だけで立たせますが、その姿勢では転倒しやすく、頭をアスファルトに打ち付けて頭部を損傷してしまうのです。彼らは、他の人より高くバイクを立てられる者をヒーローだと思い込んでいます。「俺は」と、そんなティーンエイジャーたちは自慢する。「バイクを後ろ足で立つように後輪だけで走らせたんだ。でも、その後、転んでしまった。」ほら、悪魔が彼らに何を教えているか分かるか？ 彼らに頭を打ち碎かせたいと願っているのだ。だって、もし彼らが普通に二輪で走っていたら、たとえ事故に遭ったとしても、頭を打つのではなく、体の他の部分を打って、生き延びることができたはずだ。しかし、もし神が悪魔が悪を行うことを許したり、誰かが不注意になることを許したりするならば、それは悪魔の悪や人間の不注意から、何か良いことが生まれるということなのだ。

— ゲロンダ、ではなぜ私たちの教会は、突然の死から「私たちを守ってくださいますように」と祈るのでしょうか？

— それは別の話です。教会は、死が私たちを準備ができていない状態で襲わないよう、神に願っているのです。

— ゲロンダ、ある母親がここに来て、悲しみに打ちひしがれています。彼女は用事を済ませるために子供を送り出したのですが、その子が車に轢かれて亡くなってしまったのです。

— 彼女にこう言ってやってください。「運転手が悪意であなたの子供を轢いたのか？ いいえ。あなたが用事を頼んで外に出させたのは、車に轢かれるためだったのか？ いいえ。それなら、『神よ、あなたに栄光あれ』と言うべきです。なぜなら、もし車に轢かれていなかったら、彼は道を踏み外していたかもしれないからです。そして今、神は最もふさわしいタイミングで彼をお連れになった。今、彼は天国にいて、失われる危険はない。なぜ泣いているのか？ あなたの泣き声が、その子を苦しめていることを知らないのか？ あなたは、その子が苦しむことを望むのか、それとも喜ぶことを望むのか？ 神から遠く離れて生きている他の子供たちを助けることに心を配りなさい。泣くべきなのは、亡くなった子のことではなく、あの子たちのことだ。」そう、昨日もここに、涙に暮れた母親が一人やって来た。「神様が私のたった一人の息子を連れて行ってしまった」と彼女は泣きながら、そのことを神のせいにしていた。「あなたに起こったことをよく考えてみれば」と私は彼女に言った。「神様があなたに名誉を与えてくださったと気づくはずです。神様は小さな天使を御許へお連れになり、洗礼を受けた子供を、罪や情欲を犯すことなくお連れになったのです。神は天使を御許に召されたのに、あなたはそれに対して神を責めるのですか？ もうすぐ、亡くなった息子があなたのために神に祈っているのを感じるでしょう。」その後、その女性は自分の人生について私に話してくれた。彼女は、若い頃はたくさんの子供を持つことができたが、当時はそれを望まなかったと語った。

どれほど多くの母親が、自分の子どもが神のもとで生きられるよう祈り、願っているか、ご存知ですか！ 「神様、あなたが何をしてくださるのか私にはわかりません」と、こうした女性たちは言います。「ただ、私の子供が救われ、あなたのもとにいられることを願っています」。しかし、もし神様が、その子が正しい道から外れ、破滅へと突き進み、他に救う方法がないと見抜かれたなら、神様はその子を予期せぬ死によって御

自身のもとへお迎えになります。例えば、神は酔っ払った運転手に子供を轢かせることを許し、そのようにしてその子を御許へ連れ去られる。もしその子に改心する機会があったなら、神はその事故が起こるのを防がれたらう。その後、子供を轢いた人の頭からも酔いが醒める。その人は正気を取り戻し、その後の人生を通じて良心の呵責に苛まれることになる。「私は罪を犯してしまった」と、その人は言い、絶えず神に赦しを請う。こうして、その人もまた救われるのである。そして、亡くなった子供の母親は、心の痛みを苛まれながらも、より節度ある生活を送り始め、死について考え、あの世への備えをする。そうして彼女もまた救われるのである。ご覧の通り、神は母親の祈りによって、人々の魂が救われるよう導いておられるのです。しかし、もし母親たちがこれを理解しなければ、神を非難し始めるのです！神は私たちから、一体どんなことを聞かされることか！

もし人が世俗的な視点で物事を見るのをやめたなら、その魂は安らぎを見出す。なぜなら、神や真の命——死後の命、永遠の命——を信じない人間が、どうして真の慰めを得ることができるだろうか？ 私がストミオン修道院にいた頃、[その近くの]コニツアには、いつも墓地に通い、そこで何時間も泣きじゃくっていた未亡人が住んでいた。彼女は墓石に頭を打ちつけ、その叫び声で近隣一帯を騒がせていたのだ！彼女は墓地で、自分の抱えるすべての痛みを吐き出していた。人々がそこへやって来て彼女を連れ帰っても、彼女はまた戻って来てしまう。この状態は何年も続いた。この女性の夫はドイツ軍に殺され、娘は父の死から数年後、19歳になったばかりの頃に心臓病で亡くなった。こうして、この不幸な女性は一人きりになってしまった。もし誰かが彼女の身に起きたことを表面的にだけ見ていれば、こう言うだろう。「なぜ神はこんなことを許されたのか？」と。そして、彼女自身も、自分に起きた出来事をまさにそのように——表面的に——捉えていたため、慰めを見出すことができませんでした。ある日、私も何が起きているのか見ようと墓地を訪れたとき、彼女は私にこう語り始めました。「なぜ神はこんなことをしたの？ 私の夫は戦争で殺された。私には一人娘がいた。神様は彼女までも私から奪ってしまった……」彼女は延々と話し続け、神を責め立てた。少し話を聞かせてから、私はこう言った。「私もあなたに一つ言わせてほしい。あなたの夫のことは知っていた。彼はとても善良な人だった。彼は祖国のために戦争で命を落とし、神聖な義務を果たしたのだ。神様は彼に不当な扱いをすることはない。それから、あなたの夫が亡くなった後、神は数年間、あなたに娘を残してくださった。彼女はあなたと一緒に暮らしており、あなたにはある種の慰めがあった。しかしその後、神は、その娘が（間もなく）正しい道から外れてしまうかもしれないと見て、彼女が置かれていたその恵まれた環境のまま、彼女を天に召された。神は彼女を救うためにそうされたのです。」この未亡人は、夫が非常に物静かな人だったにもかかわらず、彼女自身は少し世俗的でした。もちろん、私はそれを彼女に直接言ったり、「あなたは世俗的な人だった」とは言いませんでしたが、こう尋ねました。「今、あなた自身は何を考えていますか？ この世が好きですか？」と尋ねました。「誰にも、何にも会いたくない」と彼女は答えました。「ほら、見てください」と私は彼女に言いました。「この世は死んでしまったのです。あなたにとっても同じです。痛みがあなたを支えてくれており、世俗的なことには何の興味もありません。そうして、間もなくあなたたちは皆、天国に集うことになるでしょう。神があなたのように、これほどの栄誉を授けた人が他にいるだろうか？ あなたはそれを理解しているか？」この会話の後、その不幸な女性は墓地へ行くのをやめた。他人

の助けを借りて、人生の最も深い意味を捉えることができた途端、彼女はすぐに落ち着きを取り戻した。

— ゲロンダ、人が不慮の死を遂げた場合、その人の罪は殺人犯が引き受けることになるため、その人は自分の罪の代償を払うことになる、と聞いたのですが。

— 殺された人間には、そう表現してもよければ、罪を軽減する事情がある。彼は神に対してこう言うことができるだろう。「私は悔い改めようとしたが、あいつが私を殺したのだ」と。こうして、[彼の罪の]重みは殺人者にのしかかることになる。しかし、分別に欠ける一部の人々はこう言う。「もし神が存在するなら、これほど多くの犯罪が起きることを許したりはしないはずだ。神は犯罪者を罰するはずだ」と言う。そのような人々は、神が犯罪者を生かしておかれるのは、審判の日に、神が悔い改めるための年月を与えたにもかかわらず、彼らが悔い改めなかったことについて、言い訳の余地がないようにするためであることを理解していない。そして、犯罪者に殺された人々についても、神は決して見捨てない。

死——ほんの数年の別れ

私たちは、実際には人は死なないということを理解しなければなりません。死とは、ある人生から別の人生への移行に過ぎません。それは、ほんの短い間の別れにすぎないのです。例えば、ある人が1年間海外へ行く場合、家族は1年間離れることになるので悲しみますし、10年間行ってしまうなら、その10年間の別れを悲しむでしょう。これと同じように、人々は死がもたらす愛する人との別れも捉えるべきなのです。例えば、高齢者が身近な人を亡くしたときは、「15年後にはまた会える」と言うべきです。もし、大切な人を亡くした人々がまだ若いのであれば、「50年後にはまた会える」と言ってください。もちろん、人は身近な人の死によって痛みを感じますが、死に対しては霊的な態度で臨むべきです。使徒パウロが何と言っているか覚えていますか？「希望を持たない人々のように嘆いてはなりません。」¹³² 例えば、もし亡くなった親戚が生き続けていたら、私はどれくらいの頻度で彼に会えたでしょうか？月に一度でしょうか？そう考えると、あの世、つまり永遠の命の中で、私は彼に絶えず会えるのだと考えるべきです。私たちの不安が正当化されるのは、亡くなった人が[キリスト教徒らしくない]悪い生き方をしていた場合だけです。例えば、その人が残酷な人だったなら、私たちが本当にその人を愛し、来世で再会したいと願うのであれば、その人のために熱心に祈らなければなりません。

第3章。 死後の世界について

裁きを受けた死者たち

— ゲロンダ、人は死ぬとき、自分がどのような状態にあるかをすぐに理解するのでしょうか？

¹³² 1テサロニケ4:13。

— そう、彼は正気に戻り、「一体何をしてしまったんだ？」と自問する。しかし、「ファイダ・ヨク（¹³³）」——つまり、彼がそのような問いを自分に投げかけても、もはや何の役にも立たないのだ。例えば、酔っ払いが母親を殺しても、自分が何をしたのか理解できていないため、笑ったり歌を口ずさんだりする。しかし、酔いが覚めると、泣き出し、すすり泣きながら、「一体、何をしてしまったんだ？」と自問し始める。罪深い生活を送っている人々にも、同じことが起こる。こうした人々は酔っ払いに似ています。彼らは自分が何をしているのか理解しておらず、罪悪感も感じていません。しかし、彼らが死ぬと、頭から「この世の」酔いが醒め、正気に戻ります。彼らの魂の目が開かれ、自分の罪を自覚するのです。なぜなら、魂は肉体から抜け出すと、計り知れない速さで動き、すべてを見、感じ取るからです。

再臨がいつ起こるのかと心配する人もいます。しかし、死の床にある人にとっては、そう表現しても差し支えないなら、再臨はすでに訪れているのです。なぜなら、人は死が訪れたその時の状態に応じて裁かれるからです。

— ゲロンダ、今、地獄の苦しみの中にいる人々は、どのような思いを抱いているのでしょうか？

— これらの人々は裁きを受けています。牢獄に囚われている間、彼らはこの世で犯した罪に応じた苦しみを受けています。これらの人々は、最終的な審判——来るべきキリストの審判——を待っています。しかし、その中には厳しい特別処遇を科された者もいれば、より軽い刑罰を科された者もいます。

— では、聖人たちと「賢明な強盗」は今どこにいますのでしょうか？¹³⁴

— 聖人たちと賢明な強盗は今、楽園にいますが、彼らはまだ究極の栄光を受け入れてはいません。それは、地獄で裁かれている者たちがまだ究極の裁きを受け入れていないのと同じです。神は、何世紀も前にこう言われました。「悔い改めよ。天の御国は近づいている。」¹³⁵ しかし、それにもかかわらず、神は私たちの改心を待ち望んでおられるため、その期間を延ばし続けているのです。¹³⁶ しかし、私たちが依然として情欲や罪の中に留まり続けることは、聖人たちに対して不義を働いていることになります。なぜなら、彼ら（私たちのために）は、来るべき最後の審判の後に受けることになる究極の栄光を、まだ受け取ることができないからです。

故人のための祈りと追悼の礼拝

— ゲロンダ、罪を犯して亡くなった人々も祈ることができるのでしょうか？

— 彼らは正気を取り戻し、助けを求めてきますが、もはや自分たちではどうすることもできません。地獄にいる者たちは、キリストにただ一つだけ願っています。それは、悔い改めるために、この世での5分間を与えてほしいということです。地上に生きる私たちには悔い改めるための時間が残されていますが、不幸な死者はもはや自らの力で状況を好転させることはできず、私たちからの助けを待っているのです。だからこそ、私たちは祈りによって彼らを助ける義務があるのです。

¹³³ トルコ語の表現で、「意味がない」、「無意味」を意味する。

¹³⁴ ルカによる福音書23章32～33節および39～43節を参照。

¹³⁵ マタイによる福音書3章2節。

¹³⁶ 「私たち」と言うとき、長老は全人類を指していた。

私の考えでは、裁きを受けた死者のうち、悪魔のような状態にあり、地獄で悪魔たちと同じように神を冒瀆しているのは、わずか10パーセントに過ぎない。これらの魂は、助けを求めるところか、助けを受け入れることさえしない。そもそも、彼らに助けなど必要だろうか？ 神が彼らのために何ができるというのか？ ある子供が父親の家を飛び出し、父親の全財産を浪費し、さらにその上、最期の言葉で父親を罵倒したと想像してみてください。えーと、そんな時、父親に何ができるというのでしょうか？ しかし、地獄にいる他の罪人——わずかながらも愛の心を持つ者たちは、自分の罪を自覚し、悔い改め、その罪のために苦しんでいます。彼らは助けを求め、信者たちの祈りによって実質的な助けを得ています。つまり、今、神はこれらの裁かれた人々に、再臨が訪れるまでの間、助けを受けることができる好機を与えているのです。この世の生活において、王の友人は、ある裁かれた者を助けるために王に請願することができます。これと同様に、もし人が神の「友人」であるならば、その人は祈りによって神に執り成し、裁きを受けた故人たちが、ある「牢獄」から別の、より良い「牢獄」へ、ある「独房」から別の、より快適な「独房」へと移されるよう取り成すことができる。さらには、彼らを「独房」から、ある「部屋」や「住居」へと移すよう取り成すことさえできる。

囚人を訪ねて清涼飲料などを差し入れ、それによって彼らの苦しみを和らげるのと同様に、私たちは、故人の魂の安息を祈る祈りや施しによって、故人の苦しみを和らげるのです。生者が故人のために捧げる祈りや、その安息を願って執り行われる礼拝は、再臨までの間、神が故人に与える助けを得るための最後の機会です。最後の審判の後には、彼らが助けを得る機会はありません。

神は、故人たちのことを思いやり、彼らを助けたいと願っておられます。しかし、神には高潔さがあるため、そうはなさらないのです。神は、悪魔に「この罪人をどうして救うのか。彼は全く努力しなかったではないか」と言う口実を与えたくないのです。しかし、故人のために祈ることで、私たちは神に介入する「権利」を与えることになります。また、生者に対する祈りよりも、故人に対する私たちの祈りの方が、神の心をより深く「動か」すとも言及しておくべきでしょう。

それゆえ、私たちの教会は、故人のためのコリヴォの聖別、追悼礼拝、追悼式を定めたのです。追悼礼拝は、故人の魂にとって最高の弁護者です。追悼礼拝には、魂を地獄からさえも救い出すことのできるほどの力があります。ですから、皆さんは毎回の神聖な典礼の後、故人のためにコリヴォを聖別してください。小麦には、「朽ちるものの中に蒔かれ、朽ちないもののの中に甦る」という意味があります。「¹³⁷」と聖書は述べています。世俗の世界では、小麦を少し茹でるのが面倒だと感じる人々もおり、レーズンやクッキー、ビスケットを教会に持ち込み、司祭にこれらすべてに対して故人の安息を祈る祈りを唱えてもらうのです。しかし、聖山では、年老いた修道士たちが、毎回の神聖な典礼において、故人のため、そして祝われる聖人のためにコリヴォを聖別し、その聖人の祝福を受けるようにしている。

—ゲロンダ、最近亡くなった人々は、祈りを特に必要としているのでしょうか？

— そりゃあそうですよ！ 人が刑務所に入ったばかりの頃、最初は特に辛いものじゃないですか？ 神に喜ばれる生き方をしなかった故人のために祈り、神が彼らにも何らかの助けを与えてくださるようお願いしましょう。特に、その人が冷酷だったり残酷だったりしたと知っている場合——より正確には、残酷に見えた場合です。なぜなら、時に私た

¹³⁷ 1コリント15:42。

ちは人を残酷だと見なすものの、実際にはそうではないこともあるからです。もしそのような人がさらに罪深い生活を送っていたのなら、私たちはその人のために多く祈り、神聖な典礼での追悼にその名前を挙げ、40日間の追悼祈願にその名を記し、その魂の救いのために貧しい人々に施しをすべきです。そうすれば、貧しい人々の「その遺骨が祝福されますように」という祈りを聞き、神が憐れみに心を動かされ、その人を赦してくださるよう願うのです。このように、その人が自ら行わなかったことを、私たちが代わりに成し遂げるのです。一方、たとえその人が善く生きていなかったとしても、心に善意を持っていたのであれば、わずかな祈りからも大きな恩恵を受けることになります。それは、その人が善意を持っていたからに他なりません。

私は、霊的な人々の祈りによって故人が恩恵を受けるという事例を知っています。ある人が私のカリヴァを訪れ、泣きながらこう言いました。「ゲロンダ、私はある亡くなった知人のために祈るのをやめてしまったところ、その人が夢に現れたのです。『君は』と彼は言いました、『もう二十日間も私を助けてくれていない。』『私を忘れてしまった。私は苦しんでいる』と。確かに、私は多くの心配事でちょうど二十日前から彼のことを忘れており、その間、自分自身のためでさえ祈っていなかったのです。」

— ゲロンダ、誰かが亡くなり、その人のために祈ってほしいと頼まれた場合、亡くなってから最初の40日間、その人の安息を祈ってロザリオを一周唱えるのは正しいことでしょうか？

— もし数珠を数えながら故人のために祈るなら、その故人とともに他の故人たちのためにも祈ってください。列車がたった一人の乗客だけを乗せて、わざわざそんな遠くまで行く必要があるのでしょうか？他にも乗客を乗せることができるのですから。どれほど多くの故人が祈りを必要としているか、ご存知ですか？哀れな人々は助けを求めているのに、彼らのために祈ってくれる人が誰もいないのです！ある人々は、亡くなった親族の一人のために頻繁に追悼の祈りを捧げます。しかし、それによって、祈りの対象となっているその人さえも助けを得られないのです。なぜなら、そのような祈りは神にあまり喜ばれないからです。その故人のためにこれほど多くの追悼の礼拝を捧げるのなら、同時に他の故人のためにも祈ってほしいものです。

— ゲロンダ、父は教会とは全く縁がなかったため、時々、父の救いのことが気になってしまいます。

— 神の裁きがどうなるか、最後の瞬間まで誰にも分かりません。それが気になるときはいつですか？毎週土曜日ですか？

— 数えてはいませんでした、なぜ毎週土曜日なのですか？

— なぜなら、土曜日は故人の日であり、故人たちはその日に対する権利を持っているからです。

— ゲロンダ、では、誰にも祈ってもらえない故人たちはどうなのでしょう？具体的な名前を挙げずに、単に故人のために祈っている人々の祈りから、彼らは助けを得ることができるのでしょうか？

— もちろんです。私はすべての故人のために祈る際、夢の中で自分の両親の姿も見ます。なぜなら、彼らは私が捧げる祈りを喜んでくれているからです。私の修道室で聖体礼儀が執り行われるたびに、私はすべての故人のための共同追悼礼拝を行い、亡くなった王や司教などのために祈ります。そして最後に、「また、彼らの名も唱えませんでした」と言います。しかし、たまに故人への祈りを省略すると、亡くなった知人たちが

私の前に現れるのです。ある親戚が戦争で戦死しましたが、私はその名前を追悼の礼拝で記念するために書き留めませんでした。なぜなら、その名前は他の勇敢な死を遂げた者たちと共に、プロスコミディアでの記念のためにすでに書き留められていたからです。すると、追悼の礼拝の最中、その人が私の目の前に全身を現して立っているのを見ました。ですから、プロスコミディアでの追悼には、病人の名前だけでなく、故人の名前も提出してください。なぜなら、故人たちは祈りを最も必要としているからです。

故人を偲ぶ最善の方法

故人のために私たちが行うことのできるあらゆる追悼や追悼礼拝よりも、私たちの真摯な生き方、すなわち自らの欠点を断ち切り、魂を清めるために行う闘いの方が、はるかに有益です。なぜなら、物質的なものや心の情欲から解放される結果、私たち自身が安らぎを感じるだけでなく、私たちの家系全体の故人となった先祖たちもまた、安らぎを得るのです。故人たちは、その子孫が神と共に生きているのを見て喜びを感じます。もし私たちが霊的に良い状態にないならば、亡くなった両親、祖父、曾祖父、そしてすべての先祖たちは苦しむことになります。「ほら、私たちの子孫がどんな生き方をしているか見てごらん!」と彼らは言い、落胆します。しかし、もし私たちが霊的に健全な状態にあるならば、彼らは喜びます。なぜなら、彼らは私たちの誕生において神の協力者であり、神はある意味で彼らを助ける義務を負っているからです。つまり、私たちが勇気を奮い起こし、自分の人生を通じて神に喜ばれるよう努めれば、それは亡くなった人々にとって喜びとなるのです。そうすることで、私たちは楽園で亡くなった人々と再会し、皆で永遠の命を共に生きることになるのです。

このことから、私たちの古びた「人間」と戦い、努力を重ねる価値があることがわかります。そうして新しい人間となることで、もはや自分自身にも他者にも害を及ぼすことなく、生きている人であろうと亡くなった人であろうと、自分自身にも他者にも助けとなるようになるからです。

義人たちの神への大胆な祈り

— ゲロンダ、修道生活を始めたばかりの修道士たちへの手紙の中で、あなたは次のように書いています：「真の修道士たちは、この世で得られるものは天国の喜びの一部に過ぎず、天国ではそれ以上の喜びがあることを理解しています。しかし、隣人への深い愛ゆえに、祈りを通じて人々を助け、神がこの世の事柄に介入し、世界が救われるよう、さらにこの地上に留まりたいと願っているのです。」¹³⁸

— こう読んでください。「修道士たちは、人々と共に苦しみ、祈りによって彼らを助けるために、この世で生きようとするのです。」

— ゲロンダ、あの世でも、真の修道士は自分の祈りによって人々を助けるのでしょうか？

— 彼は来世においても祈りによって彼らを助け続けるだろうが、その時にはもはや苦しみは味わわない。それに対し、今は彼らに共感して苦しんでいるのだ。彼は「幸せな瞳と輝く顔」で、この世をのんびりと過ごしているわけではない！しかし、修道士が隣人のために味わう苦しみが大きければ大きいほど、彼にはそれに見合う大きな神から

¹³⁸ 長老パイシイ・スヴィャトグレッツ。『書簡集』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年。44頁。

の慰めが与えられ、その報いはある意味で、その隣人が恩恵を受けたことを修道士に知らせるものである。この天国の喜びこそが、彼が兄弟のために味わう苦しみに対する神からの報いなのである。

— ゲロンダ、つまり、私たちが助けを求めている聖人たちは、私たちと共に苦しんでくださらないのでしょうか？

— そうだよ、兄弟よ、— だって、そこには痛みなんてないんだから！ 彼らがどこで苦しむというのか？ 楽園でか？ 「そこには病気も、悲しみも、嘆きもない。」¹³⁹ 楽園についてはそう言われているのではないだろうか？ さらに、聖人たちは、この世で苦しんでいる人々が受ける神からの報いについて〔実体験から〕知っており、その知識が彼らに喜びをもたらしているのだ。 そうでなければ、これほど多くの愛と憐れみをお持ちの神ご自身が、どうしてこの大きな人間の苦痛に耐えることができようか。神がそれを耐え忍ばれるのは、苦しむ人々を待ち受ける神聖な報いを知っておられるからだ。つまり、人々がこの世で苦しめば苦しむほど、神は天国で彼らに与える天の報いをより多く蓄えておられるのである。 しかし、私たちにはそのすべてが見えないため、苦しんでいる人々に同情するのです。しかし、もし人が、苦しむ者たちを来世で何が待っているかを少しでも見通し、彼らが受ける神からの報いを知っているならば、その人の苦しみはそれほど大きなものではなくなるでしょう。

— ゲロンダ、もし、その助けを必要としない故人のために、神に助けを求めたらどうなるのでしょうか？ その場合、私たちの祈りは無駄になってしまうのでしょうか？

— どうしてそれが無駄になるというのでしょうか？ 私たちが「御自分のしもべ（名前）／を安らかにしてください」と祈るとき、その人があの世で神の御許にいるなら、彼は私たちを恨んだりしません。それどころか、私たちの祈りは彼を感動させるのです。『ほら見てごらん』と彼は言う。『私は天国で、神のそばにいるのに、彼らは心配しているんだ』。こうして私たちの祈りは、その人の慈愛の心に響き、神に私たちのために祈ることで、彼はさらに私たちを助けてくれるのです。 しかし、それ以外にも、あなたは、あの故人やこの故人がどのような状態にあるのか、どうして分かるのでしょうか？ もちろん、まず第一に、この世での生活で神を悲しませたことが分かっている人々のために祈らなければなりません。次に、その人と同じような他の故人のために祈り、その後、すべての故人のために祈るのです。

来るべき最後の審判

— ゲロンダ、魂はどのように清められるのでしょうか？

— もし人が、神の戒めを守り、実践することに努め、自己研鑽に励み、情欲から身を清めるならば、その心は啓発される。人は観想の高みへと昇り、その魂は、原初の人類が墮落する前の魂のような状態となる。死者の復活の後、人はこのような状態にあることになる。 しかし、情欲から完全に清められた人は、普遍的な復活の前に、自らの魂の復活を目撃することがある。もしそうなれば、その人の体は天使のような無形の体となり、物質的な食物を気にする必要はなくなるだろう。

— ゲロンダ、最後の審判はどのように行われるのでしょうか？

¹³⁹ 追悼コンダク「聖人らと共に安らかに眠らせたまえ…」より

— 最後の審判の際、一瞬にして、一人ひとりの実態が明らかにされる。誰もが、自分にふさわしい場所へと自ら向かうことになる。誰もが、まるでテレビを見るかのように、自身の不品行と他者の霊的な状態を目の当たりにするだろう。人はまるで鏡を見るかのように隣人をじっと見つめ、頭を垂れて自分の行くべき場所へと向かうだろう。例えば、ある嫁は地上の生活において、義母の前で足を組んで座っていたが、足を骨折していた義母は、その嫁の息子——つまり自分の孫——の世話をしていた。もし最後の審判で、この嫁が、キリストが義母を樂園に導く一方で、自分だけはそこへ受け入れられないのを見たら、彼女は反論することも、キリストに「なぜそうするのか」と問うこともできないだろう。何しろ、あの地上の光景が彼女の目の前に浮かび上がるからだ。彼女は、足を骨折した義母が孫の世話をしていたことを思い出し、天国へ行くことをためらうだろう。そもそも彼女自身、天国に入る余地などないのだ。一方、例えば修道士たちは、世俗の人々が経験した困難や試練、そして彼らがそれらをどのように乗り越えてきたかを目の当たりにするだろう。もし修道士たちが正しく生きていなかったなら、彼らはうつむきながら、自らふさわしい場所へと向かうことになる。神に喜ばれなかった尼僧たちは、最後の審判の場で、修道誓願を立てず、尼僧たちが持つような祝福や恵まれた機会もなかったにもかかわらず、偉業を成し遂げ、高い霊的境地に達した英雄的な母たちを目にするだろう。これを見て、修道女たちは、自分たちが没頭し、それゆえに自らも苦しんでいたような、ささいで卑しい行いにどれほど恥じ入ることでしょう！そう、——私の思いはこう告げる——最後の審判はこうして行われるのです。つまり、最後の審判において、キリストはこうは言わないでしょう：「おい、こっちへ来い。そこで何をしたんだ？」とか、「お前は地獄へ行き、お前は天国へ行く」などとは言わないだろう。いいえ、一人ひとりが他人と自分を比較し、自らふさわしい場所へと向かうのだ。

来世

「ゲロンダ、姉妹たちにお配りいただくお菓子を持ってきました。」

— ほら、彼女たちがどれほど喜んでるか見てごらん！来世では、私たちはこう言うでしょう。「なんて私たちはつまらないことに喜んでいたことか！あの頃、私たちはそんなつまらないことにどれほど心を動かされていたことか！」と。でも今は、うーうー、私たちの心はこうした喜びで飛び跳ねているのです。

— ゲロンダ、では、私たちは今、[こうした喜びの儚さ]をどのように理解すればよいのでしょうか？

— もし今これを理解できれば、来世ではそんなことは言わなくなるでしょう。何と言っても、天国で暮らす人々は、幸せな生活を送っているのです。天国では、どのような「手仕事」をしているか知っていますか？それは、絶え間ない神への賛美なのです。

— ゲロンダ、なぜ亡くなった人の遺体は「遺骸」と呼ばれるのですか？

— なぜなら、肉体とは、人が死んだ後、この地上に残されるものだからです。人の本質である魂は天へと旅立ちます。来るべき最後の審判において、神は人の肉体をもよみがえらせ、魂と共に裁きを受けるようにされます。なぜなら、人は魂と共に生き、共に罪を犯してきたからです。来世では、誰もが同じ肉体——霊的な肉体——を持ち、背の高さも皆同じになります。背の低い人も高い人も、年齢も皆同じになります。若者も

、老人も、赤ん坊も——なぜなら、すべての人間の魂は同じだからです。つまり、来世では、すべての人間が同じ天使のような年齢になるのです。

— ゲロンダ、来世において、地獄にいる人々は、天国にいる人々を見ることができるのでしょうか？

— 夜、部屋の中で火が灯っているところを想像してみてください。通りに立っている人たちは、その明るい部屋の中にいる人たちを見ることができる。同じように、地獄にいる者たちは、樂園にいる者たちを見ることがになるだろう。そして、それは彼らにとってさらに大きな苦しみとなる。また、こう想像してみてほしい。夜、光の中にいる人たちは、暗闇の通りに立っている人たちを見ることができない。同様に、樂園にいる者たちは、地獄にいる者たちを見ることができない。なぜなら、もし樂園にいる者たちが苦しむ罪人たちを見てしまったら、彼らは心を痛め、彼らの悲惨な境遇を嘆き、樂園を楽しむことができなくなってしまうからだ。しかし、樂園には「病いはない……」。樂園にいる者たちは、地獄にいる者たちを見ることができないだけでなく、もし兄弟や父、あるいは母が自分たちと一緒に樂園にいないのであれば、彼らにそのような存在がいたことさえ思い出さないだろう。「その日、彼のすべての思いは滅びる」¹⁴⁰——と詩篇の作者は語っている。なぜなら、もし樂園にいる者たちが、地獄で苦しんでいる親族のことを覚えていたとしたら、それでは彼らにとって、一体どのような樂園になるというのだろうか。それだけでなく、樂園にいる者たちは、[樂園にいる者たち以外の]他の人間は存在しないのだと考えるようになるだろう。同様に、彼らは地上の生活で犯した罪についても思い出すことはないだろう。もし彼らが自分の罪を思い出せば、愛欲のゆえに、神を悲しませたという考えに耐えられなくなるからだ。

また、樂園で各人が感じる喜びの量は、人によって異なるという点についても触れておく必要がある。ある人には指先ほどの喜びがあり、別の人にはカップ一杯の喜びがあり、また別の人には喜びの湖全体があるだろう。しかし、誰もが満たされた気持ちになり、他者がどれほどの喜びや神聖な歓びを感じているか、誰も知ることはない。慈愛に満ちた神がこのように定められたのは、もしある人が、他者が自分よりも大きな喜びを感じていることを知ってしまったら、樂園はもはや樂園ではなくなってしまうからです。なぜなら、そうなれば樂園においても、[この世のような]「なぜ彼は大きな喜びを感じているのに、私はそれより少ないのか？」という嫉妬が生まれてしまうからです。つまり、樂園にいる者は皆、自分の心の目の清らかさに応じて、神の栄光を見るのです。しかし、この霊的な視力[神の栄光を見る能力]の鋭さは、神によって定められるものではありません。それは、一人ひとりの人間の心の清らかさに依存するのです。

— しかし、ゲロンダ、地獄や天国が存在することを信じない人もいます。

— 地獄や天国があることを信じていないのですか？ しかし、もし天国も地獄も存在しないのなら、死者はどうやって「無」の中に存在できるのでしょうか？ 彼らは魂なのですから！ 神は（本質的に）不死であり、人間は神の恵みによって不死である。したがって、地獄においても人間は不死のままである。さらに、この地上の生活においてさえ、私たちの魂は、その時の状態に応じて、ある程度、天国や地獄を体験しているのだ。もし人が良心の呵責に苛まれ、恐怖や困惑、心の不安、絶望を感じたり、あるいは憎しみや嫉妬などに囚われているなら、その人は「まだこの世に生きているうちに」地獄の苦しみの中で生きていることになる。一方、もしその人に愛、喜び、平安、柔和

¹⁴⁰ 詩編145篇4節。

さ、優しさなどがあれば、その人は樂園で生きていることになる。すべての根底にあるのは魂だ。喜びも痛みも感じるのは魂だからだ。試しに、亡くなった人のところへ行って、その人にとって最も嬉しいことを話してみしてほしい。例えば、「アメリカから君の兄がやって来たよ」とか、それに類する言葉を。その人は何も理解できないだろう。もしあなたがその人に襲いかかって、手足を折ったとしても、やはり何も理解できないはずだ。このことから、人間の中で感じているのは、他ならぬ魂に他ならないということがわかる。これらは、地獄や天国の存在を疑っている人々に、考えさせられることではないだろうか？あるいは、あなたが素晴らしく心地よい夢を見ているとしよう。あなたは喜び、心臓は甘美に鼓動し、この夢が終わってほしくないと思う。目が覚めると、目が覚めてしまったことを残念に思う。あるいは、悪い夢を見ることもある。例えば、転んで足を骨折した夢を見て、夢の中で苦しみ、泣いている。恐怖のあまり、涙で目を潤ませながら目を覚まし、自分に何も起きていないことに気づいて、「神に感謝、あれは夢だった！」と嬉しそうに叫ぶ。つまり、これには魂が関与しているのです。悪い夢を見る時、人は現実で苦しむよりもさらに深く苦しむものです。それは、病人が昼間よりも夜間にひどく苦しむものと同じです。同様に、人が死んで地獄の苦しみを受ける時、彼にとってそれは「この世で経験したかもしれない地獄の苦しみよりも」さらに悲惨なものとなるでしょう。人が永遠に悪夢を見続け、永遠に苦しんでいると想像してみてください。ここでは、ほんの数分間でも悪夢に耐えられないのに。ましてや——神よ、どうかお守りください！——[永遠に]悲しみに苛まれる状態を想像してみてください。だからこそ、地獄には落ちないほうがよいのです。これについて、あなたはどのようにお考えですか？

— ゲロンダ、私たちは地獄に行かないようにと、これほど長い間奮闘してきました。では、結局のところ、私たちは地獄に行ってしまうのでしょうか？

— もし我々に分別がなければ、痛い目を見るだろう。私が願うのはこうだ。もし天国に行くなら全員で、もし地獄に行くなら誰一人として行かないように……私の言うことは正しいだろうか？神が私たち人間のためにしてくださったすべてのことを考えれば、もし私たちが地獄の苦しみを受け、神を悲しませてしまうとしたら、それは実に恩知らずなことだ。神よ、どうか人間だけでなく、小鳥一羽たりとも地獄に落ちることのないよう、お守りください。

慈愛に満ちた神が、私たちに真摯な悔い改めをお与えくださり、死が訪れる時、私たちが霊的に整った状態で迎えられ、再び神の天の御国へと帰ることができますように。アーメン。